

アルティメットスペちゃん爆誕【実況プレイ風動画】

サイリウム

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

皇帝、シンボリルドルフ

史上最強の7冠ウマ娘という壁はあまりにも高かった名だたる英雄たちが挑み、不可能だと諦めてしまったしかし「本当の敵は諦めだ」そうあざ笑うように軽々と越えてしまったウマ娘がいる

スペシャルウィーク

その肉体は努力の塊

周りはただ、異常だと評した

皐月賞、日本ダービー、菊花賞

大阪杯、天皇賞（春）、宝塚記念

天皇賞（秋）、ジャパンカップ、有馬記念

挑まれた勝負、そのすべてを制し

史上初の9冠を制した彼女は

新たな敵を求めて世界へ遠征し

KGV I & QES、凱旋門賞

芝の頂点を取った

ただ一度の敗走はなく、ただ、得るのは勝利のみ人は彼女を、無敗の総大将と呼んだ

目次

キャラ紹介(トレーナー編)	1
オリジナルスキル紹介	4
エイプリルフール	7
祝・水着スペちゃん!!	10
シニア期、スタート前に(PART87.5)	15
過去編	
二度目の同じ日	21
羞恥の味と再定義	29
既知のまだ見ぬ好敵手	35
本編	
PART1	42
PART2	47
PART3	51
PART4	55
PART5	62
PART6	67
PART7	74
PART8	79
PART9	86
PART10	92
PART11	101
PART12	108
PART13	115

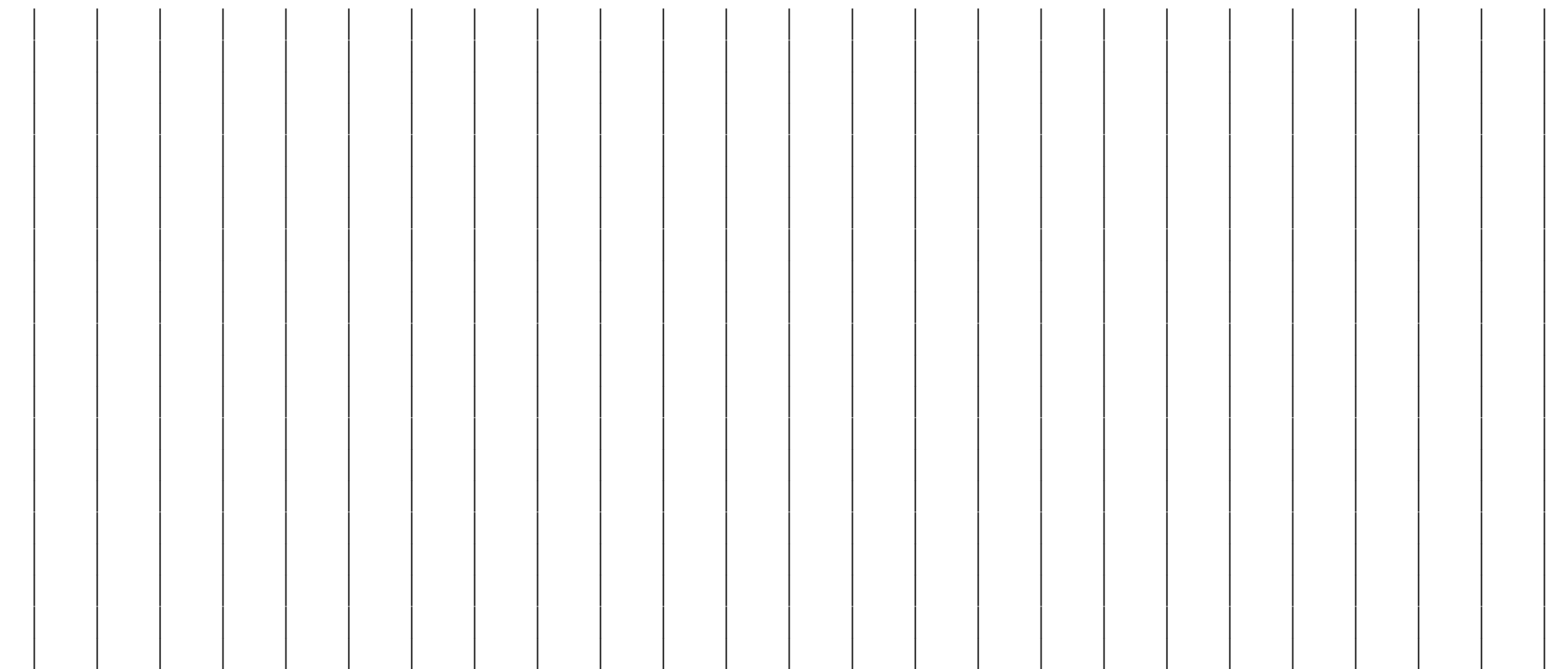
PART 38
PART 37
PART 36
PART 35
PART 34
PART 33
PART 32
PART 31
PART 30
PART 29
PART 28
PART 27
PART 26
PART 25
PART 24
PART 23
PART 22
PART 21
PART 20
PART 19
PART 18
PART 17
PART 16
PART 15
PART 14

256 249 242 236 230 220 215 209 205 197 193 188 182 176 171 166 162 156 151 146 141 136 130 125 120

PART 63
PART 62
PART 61
PART 60
PART 59
PART 58
PART 57
PART 56
PART 55
PART 54
PART 53
PART 52
PART 51
PART 50
PART 49
PART 48
PART 47
PART 46
PART 45
PART 44
PART 43
PART 42
PART 41
PART 40
PART 39

438 433 426 419 408 403 391 380 373 368 363 357 343 337 325 315 311 299 294 289 283 279 274 269 263

PART 88
PART 87
PART 86
PART 85
PART 84
PART 83
PART 82
PART 81
PART 80
PART 79
PART 78
PART 77
PART 76
PART 75
PART 74
PART 73
PART 72
PART 71
PART 70
PART 69
PART 68
PART 67
PART 66
PART 65
PART 64



656 650 640 631 621 609 601 594 569 564 555 545 539 528 512 506 498 485 480 472 468 463 457 448 443

Re : P A R T 3	「会話」	720
Re : P A R T 2	「怪鳥」	709
Re : P A R T 1	「目標」	700
P A R T 9 1		686
P A R T 9 0		675
P A R T 8 9		668

キャラ紹介（トレーナー編）

NAME : 不明

TEAM : 個人

MAIN PARTNER : ハルウララ

アプリ版トレーナーである俺らの集合体みたいなもの。

いつも黄色い被り物をしていて、素顔を知ってるのはごく一部。最近
はTやトがお気に入りに入り。

育成能力は異端の一言。どこに見聞きしたものをすべてをトレーニング
に変換できる奴がいるんだ。

例の構文を使いこなす化け物と考えていただいてよい。

最近は理事長秘書のたづなさんと同期の桐生院トレーナーと仲が
いいらしい。

こいつらうまぴよいしたんだ！

「その時、ふと閃いた！

このアイディアは、ハルウララとの

トレーニングに活かせるかもしれない！」

○現在、ハルウララを決戦の地、有馬記念に連れていくため奮闘中。
彼が頑張れば頑張るほど走者のチャートが崩壊して、血を吐くことにな
る。感想欄で投稿者が表記していないはずなのに勝手に閃きだす
から厄介。いいぞもつとやれ。

NAME : 赤田

TEAM : 個人

MAIN PARTNER : キングヘイロー

過去の育成ウマ娘にはシンザンが挙げられる。

リギルがトップになる前の世代、日本のウマ娘界を引っ張り続けた

英雄。

寄る年波には勝てず、チームの運営はできないと考えて個人に移行。

個人になってからも関わったウマ娘はスターと呼ばれるまで成長している。

その経験と知識からどのトレーナーからも先生呼びされるが本人はちよつと嫌。

服装は赤い帽子がトレードマーク。

「追いつけるまでは仕上げてやる、そっからはお前さんの仕事だ。」

○キングヘイローをどこかのチームに所属させる気も起こらず、またハルウララと同室であるためだけあの黄色い奴に影響を与えないで済むように、と考えてできたキャラクター。最初は名がなかったが、感想欄の例のポツケにモンスターを入れるゲームの初代主人公みたい、というコメントから赤をつけたお名前に。

NAME : 緑川

TEAM : アークトウルス

MAIN PARTNER : セイウンスカイ

過去の育成ウマ娘にはギャロップダイナが挙げられる。

いつもは細目だが切れると開眼する。

自分で考えて実行、を信条に育成を行うが、それは莫大なデータを渡し、

考えさせることで初めて意味を成す。データの収集、整理にかけてはトップ。

色が似ているせいかたづなさんと仲が悪い。

服装は緑の上着を愛用、ゆったりとしたワンピースをよく着ている。

「情報を集め、思考し、実行する。これでできないことはまあないでしょうね。」

○赤が来たなら、緑だろう。と思いきちらを作成。セイウンスカイのトレーナーに落ち着いたが、今後の活躍や登場は不明。出来れば赤田さん同様出してあげたいがメインはウマ娘、見失ってはいけない。

NAME : Coming Soon
TEAM : Coming Soon
MAIN PARTNER : Coming Soon
Coming Soon

NAME : Coming Soon
TEAM : Coming Soon
MAIN PARTNER : Coming Soon
Coming Soon

オリジナルスキル紹介

【空駆ける英雄】

分類：固有スキル

効果：最終直線で後方に位置しているほど速度が上がる

説明：ディープリンパクトの固有スキル。一番最初の継承枠として出したもの。もう片方はルドルフ会長のスキルだったが、何故ここでオリジナルを出したかという単純に他の継承ウマ娘が思い浮かばなかったから。

【ゲートの支配者】

分類：赤スキル（改は金枠赤スキル）

効果：自分以外に出遅れを発生させやすくする

説明：ゲートでプレッシャーを放ち、スタートを鈍らせる技。進化前は全員がゲートに収まったときにプレッシャーを掛け始め、スタート前には自身のプレッシャーでゲートを塗りつぶすもの。進化後、【改】になった後はプレッシャーを掛け始める動作を短縮し、ゲートが開く瞬間にすべてを塗り潰すものになっている。スキルとして強力過ぎるため、プレッシャー耐性を持っている場合、対抗しやすい。持っていないと盛大な出遅れをしてしまう。最悪ゲートから出れない。お姉ちゃんが考案しスぺに教えた。

【プレッシャー耐性】

分類：緑スキル

効果：プレッシャー関連の赤スキルの効果を弱める

説明：効果そのままの意味。【ゲート】が強すぎるため対抗として作成。○、◎と進化する。なんでも欧州、特にイギリスウマ娘がよく持っているらしい。なお、セクさんにスぺの初期【ゲート】が通用しなかったのは実力差が離れていたことと、単にセクさんの防御力が高かったせい。

【逢魔時】

分類：赤スキル

効果：中盤を過ぎたところに全体を掛かりやすくする

説明：感想欄からアイデアを頂いたスキル。中盤を過ぎたところに全体にプレッシャーを掛けることで全体を掛かり状態に、つまり強制的にレースペースを上げてスタミナを削るスキル。スタミナ減少量はそこまで多くなく、またプレッシャー耐性を持っているとはじかれるので持っけていてもいいが、進んで取ろうとはしないスキル。スペちゃんはお姉ちゃんの指示で走ってたらなんかできて覚えた。

【Je suis les circonstances】

分類：固有スキル

効果：最終直線で大幅に速度が上がる

説明：ブロワイエの固有スキル。アニメで出て来たけどゲームで出たないので考えた。元ネタはナポレオンの名言から頂きました。たぶんクラシック級ジャパンカップでしか出で来ないスキル。

【あなた《ワタシ》のためだけに】

分類：金棒赤青スキル（パワプロのポーカーフェイス、悪球打ち棒）

効果：全体に与える効果を一点に集中させる

説明：グラスワンダーがスぺに見られたいというドロドロした思いがスキルになった。誰かに強い執着を見せると習得できる可能性があるスキル。分散するはずの効果が一点に集中するためこれを使用したスキルの効果は絶大になる（本来10人以上に分散するスキルが一点に集まるため効果は単純に考えても10倍以上、さすがのスぺでも影響を受けた）。

【灰かぶりのサルビア】

分類：不明

効果：不明

説明：スペシャルウィークが姉を失った時の情景を思い浮かべ、自

身の原点と走る意味を再確認することで発動するスキル。単純に速度、加速力が上がる以外の効果がありそうだが詳細は今のところ不明である。何らかの代償を払い、発動するスキルのためその効果は絶大であるが代償の詳細がはっきりしていないので多用は控えた方がよさそうである。

エイプリルフール

私は一緒に戦い抜いてきたスペちゃんと共にあの子の前に立つ。あの子は隣にいるスペちゃんとは違うスペちゃんとかわかっていても、やはり戦う気にはなれない。

世界を滅ぼそうとして、他のウマ娘たちを消してきたヒドイ人、つていうのはわかるけど、それを食い止めるために一緒に戦ってきた隣にいるスペちゃんと全く同じ顔にふいんき。

私は戦えないかもしれない、隣にいるスペちゃんも同じみたいだ。

「私は、全てのウマ娘を消し、すべてを正常に戻す。そうすればこの忌々しい世界がリセットされる。素晴らしいとは思わないのか？」

その言葉に思わず叫んでしまう。

「思わないよ！ スペちゃん！ 何でこんなことするの！」

「……貴様にはわからないだろうな。私の時代には現れず、ただ走ることしか考えられなかったお前には。」

とつても苦しそうな顔。タキオン博士に聞いたけど、あのスペちゃんのことには私はいなかったらしい。

スペちゃんと一緒に競い合う友達はいなかったらしい。

「なんで、なんでですか！ あなたも私なら気持ちは同じだったはず！」

隣にいるスペちゃんは私たちの時代のスペちゃん、私たちと競い合って走ることが好きだったスペちゃん。

このスペちゃんが目の前にいる絶望に呑まれた顔をするなんて信じられない。

「過去の私か、お前はよかつただろうな、競い合う友がいて。敗北は知らずとも違う道があったことは驚嘆に値する、だが私は変わらん。おとなしく消されるがいい。」

「……戦わない道はないんですか？」

「ない、それが定めだ。」

戦えない、だけど止めないといけない。これまでに消えてしまった仲間のためにも。私を戦えるようにしてくれたトレーナーさんのためにも！

「わたし、ハルウララはあなたを！ スペちゃんを助けます！」

「私も、自分を止めるために戦います。 走者さん、ラストランです、付き合ってください！」

『OK！ YOUR ENGINE FULL THROTTLE
!!』

「いくよ！ スペちゃん！」

これが最後の变身、最後の戦いだ！

『『变身!!』』

「魔石の戦士に、異世界の力か……、いいだろう私に見せてみるがいい!!」

「ライダーキック！」

……あれ、ここは？

「ウララさん、大丈夫ですか！　すごくうなされていたみたいですが？」

気が付いた場所は自分が昔住んでいた寮の部屋。
それよりも、この声は！

「キングちゃん!?　死んじやつたはずじゃ！」

「死んでませんわよ!?　どんな夢見たんですか……。」

ゆめ、夢かあ。あれはほんとに夢だったのかなあ？

祝・水着スペちゃん!!

「夏だ！ 海だ！ 浜辺だ！ 水着だ！ そう、スペちゃん！ 水着の時間だあ!!!」

「お、お〜???」

え、なして???

昨日まで有馬前の冬だったよね？

そろそろ雪が降りそうなんて言ってたよね??

それがなんで夏？ 蝉が鳴いてるし外は暑いし、本当になして???

「どうしたスペの字！ そんな調子じゃこの夏乗り切れないZOI！」

「え、えつと……、昨日まで冬だったよね？ なんで夏？」

「……………更新が思いっきり夏なのに冬の時期にやる有馬をやってるこの作品に言っちゃおう？」

あ、これメタ視点だ。

たぶんこの回終わったら全部記憶消えちゃうやつ。ギャグ時空だな、これ。

「と、いうわけで水着買いにイクゾイクゾイクゾ！」

「お、お〜！」

「ってなわけでやってきました近場のショッピングモール！ だいたい前にスペちゃんがみんなと遊びに行ったところですか？」

「うん、結局ボウリングに行ったけど……、そういえばボウリング場の人たちどうしてるんだろ。結局途中でやめちゃったしなあ。」

「レースや練習あったから致し方なし、あとたしかアイネスフウジンちゃんに勧められていったんですよねえ。なんやかんやよくしてもらいましたし、こんどあったらお礼言いましうね。」

「は〜い。」

そんなことを姉と話しながら移動する。

いつもなら周りを気にしてこんな人がいっぱいいるところで話したりなんかしないが、今はメタ時空だから大丈夫なようだ。普通、周りから見れば虚空に向かって話している人がいれば距離を取るぐらいいしそうだけどそんなことはない。

いつも結構頑張って隠してるので、ちょっとフクザツ。

「お、着きましたねえ！ ……お姉ちゃんからしたらどれも過激で自分なら着ないようなものばかりなんですがこれが今の普通なんですかい？」

「？ 普通だと思っけど？」

「う〜んジェネレーションギャップ！ そりゃ8年、10年近く時間が空けばそうなるか！ まあ私ら北の出身で余裕もなかったから海

なんて行く機会ほとんどなかったですけど。」

「だよねえ……、でもお姉ちゃん着れるサイズあるの？　だってB7
1でしょ？　あ、72だっけ？」

「グボアア（致命傷）……ス、スペちゃん成長期でよく育ったから80
近くあるもんね……、しかもまだ大きくなるんでしょ？」

項垂れる姉に向かって胸を張る。

まな板とは違うのだよ、まな板とは！

「……………燃え尽きたぜえ、真っ白にな。血は同じはずなのに妹に大
差で負けるとは…………。」

近くに置いてあった椅子に座り込んで真っ白になっている姉を
ほっといて水着を見る。胸のことで落ち込んでいる姉はほっときや
治るので大丈夫だ。

「へー、最近はこんなのあるんだ。……あ、オレンジの奴かわいい。」

様々な種類、色の中から目についたオレンジの水着を手に取り、胸
元で合わせてみる。サイズも合ってるし買ってもいいかも。

「お、いいの選んだわねー！」

水着を試着しようか悩んでいると後ろから誰かが声をかけてきた。
なんか聞いたことある気がする？

「たしか、初対面だよね？　どうもー！　私、マルゼンスキー。よろし
くね、スペシャルウィーク！」

「あ、初めまして！ スペシャルウィークです。ご活躍はかねがね……」

「いいのいいのそんな堅苦しいの！ 息詰つまっちゃうじゃない！ にしてもいいの選んだわね！ バッチグーよ！ 早速試着しちやいましよ！」

どうしてだろ、なんかおばあちゃんって呼んでしまいそう。
絶対キレるから口が裂けても言えないけど。

—————

そんなこんなで試着室で着替えさせられた私はさつき見てた水着を身にまとっている。あとマルゼンスキーさんもいつの間にか着替えてた。そのハート形のサングラス、ここに置いてあったのかな？

「うーん、イケイケね！ マブイわ！ スペちゃんも私もいい感じ！ チョベリグね！」

なんだろ、確かに似合ってるんだけどセンスが古いというか、遅れてるといふか、尖ってるというか。

滅茶苦茶似合ってはいるんだけど時代が違うというか。

え、この人まだトレセン学園に在籍してたはずだから高校生だよね？

なんでこんなセンス古いの？

なんか70、80年代の人が無理やり今風にしようとしてる感じが凄ainだけど。と、とりあえずお礼言っとこ。

「ありがとうございます、マルゼンスキー先輩。試着も手伝ってもらって。」

「いいのよ、あとマルゼンって呼んで頂戴！ 硬いのはナツシング、よー！」

その後、店員さんにわざわざチェキってもらって水着を買って帰った。

「んで、これがその写真、と。」

「うん、マルゼン先輩とのツーショット写真。なんか大事な気がしたから枠に入れて飾ってるの。」

「あ、大事にしたらいいと思うよ。にしてもなんだろ。おばあちゃんや孫のために無理やり若い文化に手を出したという感じがしますね。史実血縁のせい、何ですかねえ？」

世の中解らないことばかり。

明日はもつといい日になるよね、ハムタロ。

へケツ！（迫真）

シニア期、スタート前に (PART 87. 5)

『ではでは、結構時間空いちゃいましたし、現状の把握という意味を込めて、振り返りしちゃいましょう！ 進行はわたくしお姉ちゃんことオースミキャンディと！』

「補佐を担当させていただくエアグルーヴだ。…………正直なんで呼ばれたんだ私。」

『なんでも作者にとってネタはゴルシ、真面目はグルーヴみたいな感じで使い勝手のいいキャラになってしまっているとのこと。まあここにゴルシぶつこんだらただのカオスになるから致し方ないね！』

「…………そうか。いつか地獄を見せてやるとしよう。」

『南無南無く、つてなことでも早速やっていきましようか！ まずは主人公、我らがスペちゃん現状から見ていきましよう。』

【スペシャルウィーク】

＜スピード：A

スタミナ：A

パワー：A+

根性：B+

賢さ：B

＜スキル

【シューティングスター】 Lv. 4

【汝、皇帝の神威を見よ】 Lv. 4

【空駆ける英雄】 Lv. 3

【不沈艦、抜錨オツ！】 Lv. 3

【灰かぶりのサルビア】

【ゲートの支配者：改】

【食いしん坊】

【逢魔時】

【プレッシャー耐性○】

【全身全霊】

【率いるもの】

戦績：7戦7勝

ホープフルS 無敗三冠 ジャパンC 有馬記念

負けたレース：セクさんとの模擬レース

現状：現在北海道に帰省中。ちゃんと自分と周りに向き合うため、お姉ちゃん病院に搬入されています。

『つてな感じですね。』

「見てて思うのだが……、かなり化け物になってきたな。いや会長に勝つたのだしこれぐらいあつてしかるべきなのだろうが、いやでもこれアプリの方の育成だと下手したらSクラス行きそうなステータスだぞ。」

『ま、物語進行上の致し方のないインフレというやつですな。』

「これとやりあわないといけない同期+αの奴らには同情しざるをえん状況になつてきたな。」

『周りもその分強くなるから大丈夫だぜい！ あ、あと君もその+αに入ってるから他人事じゃないよ。』

「……………死力を尽くそう。」

『んじや、次に同期組が今何をしているか見ていきましよう！ 一応これで確定なんでよろしく！ あ、あと投稿者が前回の応募企画でいろいろご意見いただけて非常に助かったと言っていたゾ！』

「あのように反応していただけることや、感想やコメント付きの評価、本当に助かっているそうさ。続けてほしかったらもつとよこせ！
と言っていたが傲慢が過ぎるな。あとで締めておく。」

○エルコンドルパサー

現在世界に向けて練習中。次走は大阪杯。このレースでスペちゃんに勝って世界に羽ばたくつもり。負けても武者修行として世界に出る。再会はスペが世界に出てくるまで！

○グラスワンダー

現在ジャパンCでのけがを療養中。復帰後は宝塚記念に出走し、スぺについていく形で世界に出る予定。目標はスペちゃんに完膚なきまでの勝利をすることでその目に自身を焼き付けさせること。ただ、前みたいに狂わず、ケガをしないで。

○キングヘイロー

グローバルSCに挑戦するためオーストラリアに飛んだ。高松宮記念やスプリンターズステークスで国内に帰ってくる時はあるが11月後半あたりまでは海外で走り抜ける。たぶん向かった各国で強豪たちに野良レースを仕掛けるため中長距離でも覚醒して帰ってくる。

○セイウンスカイ

香港に移動して香港三冠を狙う。何かと強豪が集まりやすい地であるためこちらもかなり成長して帰ってくる予定。香港三冠自体は早めに終わるが彼女がスペに勝てる確信を抱くまでは帰ってこないだろう。まあ今年以内に彼女は理想を手に入れるだろうし、心配はない。

○トウカイテイオー

現在リハビリ中。大阪杯にてスペに決戦を挑む予定。所謂自身の固有スキル二枚重ねが祟りケガをしてしまったが、マックとの友情トレーニングのおかげで回復、改善の兆しが見えた様子。皇帝から帝王へ、そのバトンは必ず渡される。

○メジロマックイーン

名優、マックイーン。この世界線のクラシック期ではあまりぱっとしない成績ではあったが、シニア級は別。彼女の走る目標である天皇賞はシニアにある。テイオーとの二枚重ね固有スキルの交換ノートで対策はバツチリ。全力でスペちゃんを叩き潰しに行くぞ！

○ウオツカ

ダービーに路線変更しなかったためこっちではダスカとティアラ路線で鎬を削った。結果としてはオークスとエリザベス女王杯をウオツカ、桜花賞と秋華賞をダスカ、という風に分け合う形になった。シニアではマイルを走る予定のようだが、彼女がスペとの対決を逃げ続けるはずもなく……

○ダイワスカーレット

ティアラ路線はウオツカと分け合うことになったが、永遠のライバルである彼女たちの絆を深める結果につながった。史実で有馬記念を勝ち抜いた彼女。長距離への適性は十分以上にある。一番を求め続ける彼女がスペとの戦いに背を向け続けるはずもなく……

○テイエムオペラオー

今までちよっとだけしかお名前が出てこなかった彼女。作者が忘れていたとかそういうことなく、史実通りになっただけである。同学年であるが一年参戦をずらした彼女。二年連続でクラシックは見ものである。スペとの対決はジャパンC、有馬記念あたりだろう。

○メイシヨウドトウ

この世界に海外ウマ娘に対する規制はほとんどない。ドトウとオペラオーの対決はクラシックから始める。個人的にはアドマイヤベガなども出したかったが今から出すと作者がパンクするのでしない。お許しを。

○マヤノトップガン

こちらもこれまで登場しなかったウマ娘。たぶん「マヤ、解つちやた！」で一年ずらしたのだろう。スペがシニアで暴れる間、クラシックではこの三人が暴れ回る。残念ながらモブに救いはないようだ。

○ミホノブルボン

サクラバクシンオーの海外遠征に付き合っつていち早く世界を経験した彼女。感想欄でもあつたが溶鉱炉に沈んでいくような奴みみたいな肉体になって帰ってきた。こちらも大阪杯に出走予定。……大阪杯から魔境過ぎない？

○ライスシャワー

マックイーンではなく、スペをついていく対象にしたライス。ステイヤーの彼女が勝負を仕掛けるのは春の天皇賞あたりだろう。もうすでに、鬼は宿っている。

○ナイスネイチャ

ダービー終わりから表記がなくなってしまった彼女。理由がない限りレースに出ないという選択はしないであろう彼女。次に出るときは滅茶苦茶強くなつて出てくるに違いない。

○ツインターボ

セクレタリアトの等速ストライド走法を自身だけの走法、ターボストライドにするため日夜特訓中。セクさんの見立てではそろそろ完成してもおかしくないのだが……

○ハルウララ

言わずと知れた、感想欄ですでにラスボス認定されている彼女。スペのクラシック有馬を見たことで次の有馬への出走を決意。目標に向かつて邁進するようである。そういえば最近ダートで化け物みたいな活躍をしているウマ娘がいるそうだが、いったい誰だろうか。

『と、まあこんな感じですね。』

「……正直、多すぎないか？ さばききれる気がしないのだが……、しかもまだ元々シニアで戦ってたやつらも参戦するのだろうか？」

『秋の天皇賞で対戦を予約しているサイレンススズカ、私のせいでス
ペに思うところがああるマチカネフクキタルなんかもいますし、あと金
色一家。』

「……ああ、アイツらな。……あと私も出すつもりらしいが……やる
としたら秋天か？」

『ま、そんな感じでしょうね。でも基本的には同世代との勝負を中心
にやっていく予定みたいですし、そこまで大変にはならないかなあ、
と。あとは世界編のKGV I & QES、凱旋門賞ですが、こっち
も色々イヤバくなりそうですよねえ……。』

「ブロワイエは勿論リベンジしに来るだろうし、セクレタリアトも来
るだろうな。あと前々から言っていた奴もいるし……。」

『ま、先のことはそんな時の作者が考えるでしょ。』

「ふむ、それもそうか。」

『では、長々となってしまうましたがこの辺でおしまいにさせていただきます。
明日からまたゆっくりとなりますますが本編の方続けていき
ますので、よろしければ応援の方、よろしくお願いいたします。』

『』では、またお会いしましょう。』

過去編

二度目の同じ日

夜、誰もが寝静まった時間帯。

本来聞こえるはずのない音と、において目が覚める。

人よりも優れた感覚器官のおかげか、それとも今暮らしている寮がボロ屋であつたからか、自身のいる場所が燃えていることは解つた。

今すぐここから逃げないといけない

そう思い、飛び起きようとしたのだが何故か体が動かない。

まるで何かが、“運命”が私を押しさえつけているように、ここで私は死ぬべきだと言うように。

びくともしない自身の体に抗いながら、何とか隣に寝ている子の方を見れた。

見なければよかつたかもしれない。

私も彼女もいっしょ。

“運命”からは逃れられない。

――
朝日。

もう二度と見る事ができなかった日の光が顔にかかり、目が覚める。

「朝、か……。」

隣を見れば同室のあの子がまだ寝ている。時計を見るに朝練をしない限り起きないような時間だ。まあここにはそんなもの好きなんてほとんどいないのだけれども。

隣を起こさないようにゆっくりと行動を始め、幾分か小さくなった体に戸惑いながら今から2年後に習慣化するルーティーンを開始する。本来なら”この体”は覚えていないはずなのに、体が覚えていたかのようにスルスルとできた。この分ならレース時の技術関連もどうにかなるのかな？

「よう。」

軽く髪を整え、ジャージに身を包んだ。あとは靴をどこにやったか、なのだがあいにく入学したての頃の記憶なんてかなり薄れてきている。……たぶん下駄箱に放りこんでいるだろう。

ゆっくりと自室のドアを閉め、下駄箱まで移動する。自身の場所を確認すると案の定靴が二足。私がいらないと言ったのに「せっかくの入学式にスニーカーで行くのかい？　こういう時は、お金のことは気

にしないで素直に甘えればいいんだよ！」と笑いながら母に買ってもらった革靴と、スぺの落書きがある学校配布のトレーニングシューズ。

たしか見つけたときはつい怒りそうになったんだけど、スぺの「お姉ちゃんが早く走れるようにおまじないしといた！」なんて言われて逆に褒めちやっただっけ。

「……懐かしいなあ。」

私の学年が上がるごとにスぺも大きくなって行って、買い替えるころにはもう恥ずかしがって書いてくれなくなっただよね。もっと大事に使えばよかつたってすぐ後悔したのを覚えてる。

「今回はもっと大事に使わないと、だね。……よし！」

思いつき顔を叩いて気合を入れなおす。次の最期がいつ来るのかわからない私にとって時間は金よりも貴重。今の体でどれだけできるのかを把握する必要もあるし、さっさと朝練を始めてしまおう。出来るだけ丁寧に靴を履き替え、走り出す。

さあ、二度目を始めようか！

—————

と、意気込んでみたものの私は私。このトレーニング中に考え込んでしまう癖はやっぱりある。

まあとりあえず自身の現状を確認しながらやっていますかね。

私の名前はオースミキャンディ、家族構成は育ての母と妹のスペシャルウィーク。妹の出産時に他界してしまった生みの母の記憶は私が幼かったこともあり、そこまで残ってはいない。ただ、やさしい人であったことだけはぼんやりと覚えている。

現在通っている学園は門別トレセン、所謂地方トレセンだ。一応中央のトレセンも受験して受かったのは受かったんだが、妹のスペが私と離れ離れになることを知って大泣き。私もわざわざ東京に出てまで勝負しに行きたい！ って奴ではなかったため合格通知を破り捨て、そのまま地元のトレセンに入学することになった。

また、理由として学費などの問題があったことも挙げられる。やっぱり中央に進むには結構なお金が必要で、経済的に厳しい我が家にこれ以上負担を掛けるのを気にしたということもあった。

そういえば地方に進むにしてもどっちみち寮生活だからスペが結局一緒じゃないことで大泣きしてたっけ。慰めるために毎週の休日に必ず帰ることを約束してたんだよね。

んでまあなんやかんやあって、レースに負けたり勝ったりしながら中等部最高学年。スペも来年からこつちに進学してくるなあ、ってことで色々と張り切ってる時に私は死んだ。

あとから、というか死んでから聞いた話だが、住んでいた寮の電気系統が老朽化していたため発火、また建物自体が古く木造だったためすぐに火が広がり建物全体が全焼。火事が起きたのが深夜帯だったこともあり、住んでいた生徒全員が死亡。という事件だったらしい。

実際死んだ人の感想としては燃えてることには気が付けたんだが、何か不思議な力に押さえつけられているような感じで全く動けず、ただ終わりを待つしかない、っていう最悪なもんだったんですけどねえ。

うくん、思い出してたら気分悪なってきた。この話はこころへんでやめやめ。

んで、死んだあと私は全く気が付いてなかったんだけど地縛霊みたいなものになってたみたいで、このトレセンに憑りついてたみたい。そこを何故か女神に見つかってヘッドハンティングされましたのだ。

何でも妹のスペシャルウィークに付けるトレーナーを探してたんだけどいい奴がいらない。んで血縁で色々探していた時にここで死んでる姉居るやん！ せや、地縛霊になってるみたいだしトレーナーの知識ぶつこんでスペシャルウィーク専属トレーナーしちやおう！というわけだそうだ。

正直に言う。

頭おかしいとちやいますかね？

まあ自慢の妹が三女神に見初められている、つてのはその時だけは正直嬉しかったし、スペともう一度話せるかもしれないと思ってその話に乗った。即決っていうやつ。

あちらさんも神なので、こっちの返答が解っていたみたいでして、早速トレセンから見たことのない真っ白な空間に瞬間移動、そこで無理やりトレーナーに必要な知識を頭の中にぶち込まれるという拷問が始まった。

霊でも無理やり何かを押し込もうとすると激痛が走るということを知れたのは僥倖だった。二度としたくないが。

それで地獄のような研修が終わり、ようやくスベと再会できる、つてなったときに問題というか女神側のうっかりがあったようで、スベがもうレースから引退を考えるようになる時期まで時間が経っていたらしい。

なんでも私の知識の吸い込みの様子が見て面白かったので忘れてたらしい、サデイストかよお前は。

それで時間が思いつきり過ぎちゃったことに対する対処法は、神サマらしいやり方で時間を巻き戻すというものだった。私としては引退したスベでももう一度会わせてくれるのだったらそれでよかったんだが、何かあちらさんも目的があるらしくそれを実行したようである。

んで気が付いたら生前の私、私のトレセン入学直後まで時間が巻き戻ってました、つてことだ。

まあ長々と考え込んでしまったのでまとめると

私、火事で死んだ！

← 地縛霊になったら、三女神にトレーナーになれって言われたぞ！

← 受け入れて、勉強してたら時間かかりすぎちゃった！

← 女神たちが時間巻き戻したら、私の生前まで時間を引き戻しちゃったぞ！

ということだな。

まあここら辺はさつき起きる前の夢の中で色々技の女神から説明

を受けたんだが……

そういえば三女神についてまとめてなかったな、それもしておく。

ウマ娘の神、三女神というのがいる。

個神名がそれぞれあるみたいだけど知らないのととりあえず、力の女神、知の女神、技の女神がいるとだけ覚えておけばいいはずだ。

力の女神は名の通りウマ娘の力を司る女神。レースの勝敗とかを見極める神でもあるらしいんだが、会ったことないからどんな奴なのかは知らない。

知の女神はサディスト野郎。私に知識ぶち込んで喜んでた奴。正直顔も見たくない。女神間の仲裁などもやってるらしいがあいつに任せてほんとにいいのか？

技の女神は私と接点が一番多い神。地縛霊になった私に初めて話しかけてきたのはこいつだし、女神関連の情報も教えてくれるのもこいつ。あと自分で遊戯の女神って名乗ってるのでそつちで呼ぶと喜ぶ。

という感じで女神サマが三人もいらっしやるっていうわけだ。

んで、さつきまで色々と夢枕で私の現状を教えてくれたのが技の女神っていうわけだ。

『ん〜、つてなわけで時間巻き戻したのはいいけれど、世界自体に変な影響を与えちゃったみたいでね、戻りすぎちゃったみたい。時代的にはキャンディ君がトレセンに入学した直後くらいだねえ。……まあ君がもう一度死ぬことは確定してるんだけどこの世界自体に異変が起きている以上、そのタイミングが前回と同じとは限らない。まあ君に依頼した妹ちゃんのトレーナー業のお仕事の契約はまだ残っているわけだし、色々とやってみればいいんじゃない？ 君のお仕事が始まるのは君が死んで霊になってからだし、それまでに準備を整えるも

ヨシ、生前出来なかつたことをするのもヨシ、家族との時間を楽しむのもヨシ。ま、ちよくちよく様子は見に来てあげるし、楽しく過ごせばいいんじゃないかな?』

まあまとめると次、いつ死ぬのかは解らないが、それまで後悔のないように好きに生きろと言うことだ。

「ふいふ、こんなもんか。にしてもやっぱり衰えてるなあ……。いや、この場合は元に戻ってる、か。」

昔していたなじみのトレーニングを終え、体がまだ成長途中であることを実感しながら休憩に入る。

ま、どれだけ時間があるかはわからないんだ。

思い残すことがないように、好きなことをするに限るかね。

過去改変、って奴をさ。

羞恥の味と再定義

朝起きたら同室の子が顔真っ赤にしながらベットに蹲ってた。

「何かツコつけてんだ私！ 恥ずか死にそうッ！」

一体全体どういうことなの???

あ、どうも初めまして。キタノセイドリと申します。

門別トレセン中等部、一年生です。まあ、昨日からなんですけど……。

何もかもが初めての学園生活、昨日初めて会った同室のオースミキャンディちゃんも良さそうな子だったし、これから楽しみだなあ、と思っていたその翌日。

目覚ましを掛けていた30分ぐらい前に、誰かが叫んでるような声が聞こえたので目を覚ましてみればこの光景。

「何かツコつけて『過去改変、って奴をさ。』だ！ もう厨二は過ぎてんだアタシは！ ウガツ〜!!」

昨日まで普通そうな女の子だったキャンディちゃんが枕に顔を埋めて思いつきり叫んでる。

……私はどうすればいいんだ???

と、とりあえず……。

「あ、あの……、キャンディちゃん？ お、おはようございます??？」

「ッ
!!!!!!」

う、うわ。すごい目で見られた。……これは治まるまで静かにしておいた方がよかったのかも。

「お、起きてたの?」

「あ、いや、うん。その、さっきの声で……。」

「……………ふう。いえ、本当にごめんなさい。つい叫んでしまつて、起こしてしまったみたいで……。」

—————

ヤ、ヤツベ、やらかしたツ！ ついあの例のクツソ恥ずかしい独白を思い返して憤死しそうだったのをドリちゃんに見られた！ ついつい自室に戻ったことで気が緩んでいた！

私にとってはキタノセイドリちゃん、通称ドリちゃんは3年間一緒に過ごした同室の親友だけれども、今この現在においては昨日初めて会ったばかりの、ほぼ初対面！

お、終わった！ 私の二度目の学園生活、完!!!!!!

焦りすぎて逆に冷静になってきたぞ、こいつは！ と、とにかく我が親友（予定）の下がりになり下がり切った好感度をどうするか考えねばならない!!!

「あ、あはは……、た、確かに叫びたくなることもあるよね。……そう、そうだ！ ジャージに着替えてるってことは朝から練習してたんだよね？ 昨日はそんな感じじゃなかったけど努力家さんだったんだね、すごいなあ。」

……ふう、天使か、こいつ？ いや天使だったわ。

さ、さすが3年後には“気遣いの鬼”とも呼ばれるわが友ドリちゃん！ このやさしさに、惚れてまうやる！

「うん、いつもの癖で走ってきちゃった。……あの、ほんとに起こしちゃってごめんね。」

「ん？ ああ、いいのいいの。キャンデイちゃんの意外な一面が見れてうれしかったし、早く起きられたから余裕をもって準備できるしね。ありがとう、キャンデイちゃん。」

あつ（浄化）

—————

ふいふ。このオースミキャンデイ、一度死を体験していなければドリちゃんのやさしさに浄化され、また天に召されるところであったわ。うむ、首一枚つながらなかったな。

というわけでやさしさに包まれながら学園内にある食堂で朝食をとり、登校。教壇に立つ教師の話聞き流しながら色々考える。所謂板書は取るが、話は聞いていない状態だ。

フマジメな生徒であるが、さすがにこの時期の勉学程度で躓くほど勉強してなかったわけでもあるまいし、いいだろうと思いつながら隠れてサボる。

「……というわけで国内には中央を除いて15か所、ローカルシリーズに参加するトレセンが……」

それにしても生き返ったというか遡ったことに対するうれしきと
いうか、肉体の暖かさに再開できたことに対する喜びからかテンションが有頂天になってて、あれは恥ずかしかったなあ……。

これは黒歴史ですな、うん。

ま、忘れたいことは脳内から消去しまして、今後のことを考えましょう。

とりあえず今の授業を聞き流しながら考えていた目標を並べていこうと思う。

まずは「自分以外の全員生存」。このトレセンで今後、全焼レベルの火事が起こるのは必須。たぶんだけどこれの原因を排除しても、同じことが起きると思う。つまり建物の老朽化を何らかの方法で防ぎ、火元となった電気系統を全部入れ替えたとしても、違う理由で発火し、結果は同じになると思う。

私は死んだとき、意識はしっかりしてたけど何かに押しつぶされるような、ここから絶対に抜け出させない、そんなものが感じられた。たぶんそういうものなんだろう。

私の死後はスペの霊トレーナーという席が用意されてるが、他のみんなは違うだろう。女神サマにも聞いたが私以外は霊になっていなかったようだし、そのまま何もできず死んでしまうしか道はないのかもしれない。

元々の規模が小さいのもあるが、三年もここで過ごせば大体の子は顔見知りだし、仲がいい子も多かった。そんな子たちをただ死なせるのは正直言ってイヤだ。あの私たちを押しえつけていたものは何なのか、そしてそこから逃げ出すにはどうすればいいのか。女神サマにでも聞いて、色々準備していく必要があるだろう。取り合えずできることは火事が起きたときの対処法を正しく伝えていくことからかな。

二つ目としては「トレーナーの勉強」。忌まわしい知の女神のせい
で無理やり詰め込まれたトレーナーをするために必要な知識は頭の中にある。しかしながらあのサディストのことだ、この知識が本当に
使い物になるかわからないし、私が担当することになるのは自慢の妹
であるスペシャルウィーク。些細な間違いが取り返しのつかない事
件に繋がってしまうかもしれない。そのため、できるだけ新しく、正
しい情報を手に入れて私が持たされた知識とすり合わせをしていく
必要がある。

これをしていく方法としてはまずは校内にある図書館で色々調べ
ながら勉強していく必要があるだろう。ここ自体古い学校だし、蔵書
も新しいものは少ないかもしれないがより別だ。新しい教本と
かは今後、買うなり借りるなりしていこうと思う。

三つ目、今のところ最後だが「お金集め」だ。つまりできるだけ多
くのレースに出走してその賞金をできるだけもらっていく。理由と
してはスペのためだ。死後、私がどのタイミングまでスペのトレー
ナーとして存在できるかは女神サマたちの御気分次第。どうなるか
は全く持ってわからない。

何らかの理由でスペが働けなくなった時のことも考えてお金をた
めておく必要がある。一応実家も総資産だけ見れば結構あるはずな
のだが、スペというオオぐらいのせいで結構傾いているのでそこまで
安心できない。まあ言ってしまうえば将来のスペの食費を稼ごうとし
ている。……まあ一応ウチは農場なので設備投資とかやりだすと
金がいくらあっても足りない。そこらへんにうまく使ってもらえれ
ばいいなあ、と思つてのこともある。

また、二つ目の理由でもあつた知識のすり合わせのために必要な情
報。これ入手するためにはやっぱり本やネットに頼らないといけ
ない、そのためには色々買いそろえる必要があるので金が必要。

ま、長々と考えたがたくさんレースに出て勝ちましょうというわけ

だ。

運よく、というべきか出走してくるライバルたちの作戦や癖は一度目に大体研究し終わっている。時間が経つごとに違いは出てくるだろうが最初の方は何とかなるだろう。また、多くのレースに出走するということは、そのための調整やトレーニングが必要になっていき、頭の中にある知識を、自分を実験台にすることで確かめていけるという利点もある。

と、まあこんなところか。

纏めてみると「私以外生存ルート確立」「トレーナー勉強」「資金調達」と言ったところか。

並べてみると三つしかないが、どれも大変になりそうですなあ。

ま、できるだけやってみましょうかね。

既知のまだ見ぬ好敵手

「あねうえー！ あねうえはちゅうおーというところにはいかないのですか？」

「ええフロート。私はこの地に残って戦います。せっかく頂いた推薦ではありましたが、ね。私はこの地に残ることで目標を達成しようと思います。……まあ近くのトレセンに進学し、そこで走るということですよ。」

中央からの推薦、それ自体はこの道を進む者からすれば喉から手が出るほど欲しい物であることは解っている。そして、それを断るといのがどれだけ失礼であるか、ということも。

しかしながら自身の力量を考えれば、このまま中央に進むことは何もなせずに埋もれてしまう可能性が非常に高い。親に頂いたこの体、健康な体に不満はないが、少しだけ早熟でありすぎたこの身を恨めしく思ってしまう。何故だかわかってしまったのだ、一度自身の体が大きく成長し、その力量も大きくなった時、もうこれ以後、このように大きく成長できることはない。一度限りの早熟、私の伸びしろがほとんど残されていないことを。

おそらく、中央に入学したとしてもあそこは魔境。通用するのも最初の一年。死に物狂いで努力したとしても二年目、クラシックの春ごろには埋もれてしまうだろう。

私の夢は寂れてしまったこの街に活気を戻し、豊かにすること。そして、もはや形すら残っていないツバキ家の流れを再興させること。そのためにはどうしても勝利が必要だ。

自身の成長型を考え、その勝利は中央の勝利とは比べ物にならないかもしれないが、私の夢を叶えられる道である地方に残ることにした。申し訳なきはあるが、後悔はみじんもない。

「じゃあフロートもいつしよにはしりたい！」

「あら、ありがとうフロート。でも私よりも速くなれるあなたはこんなところで小さく走っては駄目よ。もし私と同じ道に進みたいのであれば、もつと大きな目標を持たないとね。」

そう言いながらフロートの頭をやさしくなでる。

地方で名を挙げるには数多くの勝利が必要だ。

私が生まれ、育ててくれた街に活気を戻すためには中央の奴らに負けないくらい輝かしい成績を治めないといけない。誰もが忘れてしまったこの血筋に目を当てるためには、私達が優秀であることを示さないといけない。

幸い、私と違って妹は優秀だ。

私と同じくらいの年齢の時よりも体力があり、速度があり、気概がある。

フロートなら私が諦めるしかなかった中央での活躍も簡単なことだろう。

そのためにもまずは私が妹に恥じない走りをしなければならない。

さあ、まだ見ぬ者たちよ。

蹂躪して差し上げましょう。

—————

「んで、なんで夢枕に立たれておるの？」

『ん〜!! 厳しいお言葉! あ、キャンデイ君、私ら神を敬う気ないデシヨ。私は別にタメでいいけど他の二人はもうちよつと気持ちを込めて話した方がいいよ。』

「それは憎しみとか怒りとかの感情でしょうか？」

『うむうむ、やっぱり君、知の奴嫌いだねえ! そうじゃないと面白くない。』

「それで? 今日は何のために来られたので? 正直夢枕に立たれると寝た気がしないので嫌なのですが。」

『正直でいいねえ! ま、今回こつちに来たのはアニメ鑑賞会をしようと思つてね。ゴソゴソつと、ジャジャジャジャーン! ウマ箱全巻! 一期+OVA+二期の全部をこれから毎日一話ずつ見ていくよん!』

「これは……スぺ?」

『お、さすがお姉ちゃん! 成長した姿でも解るんだねえ! こちらはなんと君が存在しなかった世界をアニメ化したものですねえ! 一期は君の妹が主人公してるし、普通にアニメとしても面白いから楽しんでね!』

「いやまあ私もオタク趣味なのでそれはいいんですけど……、まあこういうのは見た方が早いかな。」

『うんうん、そういう物わかりのいいところは私好きだぞお。 あ、これ

見終わったら【技の女神が教える史実の歴史！】講座もあるから早めに見終わった方がいいよ。』

朝

「……どうしたのキャンディちゃん？ 見るからに寝不足そうだけど……。」

「いや、寝たはずなんだけど寝た気がしなくて……。 (あく結局1期全部見てしまった。)」

「うーん夢見が悪いのなら安眠効果があるアロマでも使ってみる？」

—————

いやー、マジか。こことは違う世界みたいだけど私の自慢の妹はアニメになってるとは知らなんだ。あと普通にアニメとして面白かったし一気見してしまった。

あ、どうも。

私達のいる世界がアニメ化していることや、自分たちが住んでいるこの世界以外にも平行世界みたいな別世界があること、あと私たちの元が謎の4足歩行生物だったり、色々なこの世界の真実を知らされてしまい、混乱しまくってるキャンディちゃんだぞ！

今も混乱しすぎて大体中学二年生ぐらいの子たちが発症する、自身

の考えを読まれている前提で話し出すという頭おかしいことをしているぞ！ 多分これも黒歴史行きだぞ！

やったねキャンディちゃん！ 黒歴史が増えるよ！

………とまあ色々大変なこと考えたが収穫は二つ。

一つ目は例のアニメのおかげでスペが通ることになる道がある程度知ることができたということ。おかげで色々目標を設定しやすくなるし、スペがどれくらいまで強くなれるのかの指標も得れた。……にしてもうちの妹がダービーウマ娘があ、ヤバいなあ……。

これは「資金稼ぎ」程度に思っていたレースを、かなり真面目にやつて成績残してないとスペに合わす顔がなくなりそうですなあ、頑張らねば。

二つ目は見せられたアニメとは関係ないけど、私のが死んだときに感じていた“押しえつけられている感触”。あれについて技の女神に調査を依頼することができた。あれが何だったのか、また何故私たちが死んだのか。その理由が解るかもしれない。

まあ相手は女神だしちゃんと教えてもらえるかはわからないのであんまり期待しないでおこう。

と、それよりも今日は選抜レースがある日だった。これからのことを考えるのもいいけど、一応今を生きているウマ娘ですし、そこらへんもちゃんとしとかなないといけませんねえ！

……それに私のライバルだった“あいつ”との初顔合わせもこの

レースだしね。

「キャンディちゃん〜！ そろそろ始まるらしいよ〜！」

「は〜い！ 今行く〜！」

さあ、競い合おうか、ツバキプリンセス。

—————

選抜レース。中央でも地方でも開催される理由は同じであるが、その力の入れようは全く違う。

この選抜レースに限って言われてしまうことがある。

中央で行われるのがレースだとすれば、地方で行われるのはお遊戯だ。

特にこの門別トレセンでは地域のウマ娘の母数の減少により、生徒数が毎年減少。箱と教員はいるが、生徒がいらないという状態に陥りかけている。ここで走る子たちにとってはどのような結果であってもトレーナーが付いてくれるという状態になっているため、気のゆるみが非常に大きい

史実とは違い、この世界で駆ける者たちはウマ娘。強く、気持ちの差が出てしまうのは仕方ないのかもしれない。

ただ、そこに中央で戦う者たちと同じほどの熱量を持ったウマ娘を二人。

一人は落ちぶれた姫。

人が少なくなり、活気がなくなってきたこの街を、この学園を、自身の走りによって盛り上げようと決意した者。

美しい青髪を靡かせながら、戦姫が今、ターフに降り立つ。

一人は亡者。

一度死に、蘇ったとしても終点が見えている者。終わりが見えていくからこそ輝ける、出し切れる。

燃え尽きたはずの亡者が冥府より這い上がる。

こんな面白そうな二人を一つのレースに放りこんだらどうなると思う？

本編

PART 1

ほーい、じゃあウマ娘プリティダービー 栄光のウイニングライブをやっていますぞ。

こちらのゲーム2021年にスマホゲームとして世に出されたウマ娘プリティダービーの据え置き版です。

このゲームアプリ版のスペック向上、FPS向上、シナリオの大幅追加、オリキャラの作成など

なんで据え置き版でやらせてくれないんですか!、というユーザーの我儘を余すことなく詰め込んでくれた今世紀最大の神ゲーでございます。

まあそんなことこの動画を見ている方は知っていると思うので早速やっています。

あ、それとこの動画は攻略であってTASとかRTAとかはしないから注意してくれよな!

今回からやっていくシナリオはストーリーシナリオの幼少期編から始めていきますぞ!

こちらのストーリーシナリオはトレーナー目線の学園入学から始めていく学園編と幼少期からウマ娘を操作していく二つのパターンがあります。ちなみにトレーナー編をクリアすると、学園編をウマ娘の視点でもプレイすることができるようになります。

ま、今回は幼少期から始めますがね、この理由は単に最終的なステータスが幼少期から始めた方が強くなりやすいからですな、たまた三女神がニャル様化してひっくり返ることはよくありますが…

そして、今回使用していくキャラはこちら、日本総大将ことスペシャルウィークです。

アニメ一期の主人公ということもあり、どのシナリオで始めてもイベント盛りだくさんで楽しい子です。

今回のプレイでは〈称号：日本の総大将〉の上位互換、〈称号：無敗の総大将〉をめざして走っていくぞ！ こちらの称号は日本の総大将の条件にプラスしてその名の通りすべての参加した公式のレースで一着を取った上に

凱旋門賞を勝利する必要があります。

…は？、凱旋門賞なんて勝てるわけないだろ！いい加減にしろ！

なんて言っていますが育成次第では何とかなると思います、多分

…

それでは継承はシンボルドルフとディープインパクトを選択して開始だ！

では長つたらしいスキップ不可のOPを後ろに流しながら継承について説明していきましょう。

ちなみにこのゲームのOPはスキップ不可です、何しろ膨大な量のデータを裏でロードしないといけないので、仕方がないことですが、このゲーム唯一の欠点ですね。

ホイ、それで継承なのですが色々過去の育成の結果スピードと芝に補正のかかるシンボルドルフと差し特性とスタミナに補正のかかるディープインパクトをご用意しております。

アプリ版では権利関係で出せなかったディープですが今作では登場してますな、権利関係者に感謝感激雨あられ。

このシナリオでは継承の恩恵が得られるのはトレセン入学以降のためこのような形としました。

スペシャルウィークはパワーと根性に成長補正がかかっているのので入学までに成長させる予定です。

なお、大事なスキルに関してですが会長の方は皆様ご存じの終盤に追い抜くことで加速する【汝、皇帝の神威を見よ】という逃げ適正以外には大助かりなスキルを、ディープちゃんの方は【空駆ける英雄】という最終直線で加速するスキルをご用意しております。

いやほんとにこの継承のため、星3を集める地獄の周回は来るもの

がありました……

こちらの画像を見ていただけるとわかると思うのですが、殿堂入り画面に所狭しと並ぶ会長と英雄……

どんだけ時間がかかったのか考えたくありませんね

はい後ろでOPが終わりましたね、ここから皆様お待ちかねのリセのお時間です。

ここではスペちゃんの個性のリセを行っていきます、アプリ版ではコンディションとされていたのがそのキャラごとに特性をもつて生まれてきます、これは良い方も悪い方もついてくる可能性があるのでリセ地点となるわけですね、解りにくい方は某国民的二頭身野球するより恋愛した方が強くなる野球ゲームの育成で天才を引くまでリセ、だと思っただければよいかと。

ちなみにトレセン入学後にはなりますが個性の消去や入手が可能になります。しかしかなり練習の時間が取られるので、ならばここでリセしてしまおうという魂胆です。

今回走っていくスペシャルウィークはパワーに補正のある「過食」や根性に補正がかかる「ド根性」などを持ちやすいですが、今回狙っていく個性は「練習好き」と「愛嬌」と「丈夫な体」です。

「練習好き」はケガ率が低下する「練習上手」とは違い、「なまけ癖」の習得率が下がり、確率で練習時に調子上がるようになります、「愛嬌」はアプリ版でもありましたが他のキャラの好感度が上がりやすくなります。

アプリ版とは違いサポートカードが廃止されましたが、変わらずこちらも必須コンディションとなります。最後に「丈夫な体」ですが引退や長期休養しなければならぬような故障の発生率が低下します、このゲームアプリ版とは違い、ケガが悪化したり運が悪かったりすると沈黙の日曜日などの悲劇が発生することがございますので十分な注意を払わなければなりません、もうあんなものは見たくない……

長々と話してしまいましたがそれでは記念すべき第1回目の個性ガチャ……ドン！

一回目

個性：「過食」、「太り気味」

あら、外れですね、まあ最初ですからこんなもんでしょ、次行きま
すよー

二回目

個性：「練習嫌い」

うーん、反対次！

277回目

個性：「愛嬌」「練習好き」「鉄人」「大食漢」

うん……？

オウ！ 思ったより早く来ましたね！ 個人的に4桁はかかるの
でないかと思っていました、こいつは幸先がよし！

ちなですが「鉄人」は「丈夫な体」の完全上位互換ですね、基本的
にケガしませんので大安心です。

はい、まあわかってますって、こちらの「大食漢」ですが皆様何と
なくわかってる方もいると思いますが「過食」の上位互換にして、下
位互換の非常にまず味な個性です。

こちらの個性はまず、「過食」がパワーに10%の補正のところ、パ
ワーに30%、スピードにー20%の補正が付きます、スペちゃん
は差しウマ娘ですがスピードがないと最後の直線で速度が出し切れな
いので、どうしても一定量は必要です……、RTAではないですが一
応チャートとか作ってたんですけどねえ……、一応言っておきましょ
うか。

ああ、もうチャートが崩れちゃう〜

はい、なんか違う気がしますね、大始祖から伝わるお家芸をすましました。まあこの個性の凶悪なところはステータスだけでなく、他にもありますがとりあえず2点ご紹介、一つ目はかなりの頻度で「太り気味」を習得します、こちらの「太り気味」はパワー系やスタミナ系の練習をこなすことで解消はできませんが、憎むべきはその発生率、なんと毎ターンに30%の確率で発生します。

はい、もうぶつ壊れですね、おへそミツフィーちゃん and おなかミルタンクちゃんの完成です。

w i k i 君によるとスペちゃんやオグリなどの大食い系のウマ娘は一定で発生するようです。

そしてもう一つは家庭財政の悪化です、このゲーム家庭財政のステータスが存在していて4段階に分かれています。

富豪、裕福、普通、貧乏ですね、例としてはメジロ家のウマ娘は富豪になります。

スペちゃんちの基本は普通ですが、あら不思議、この「大食漢」のおかげでワンランクダウン！

貧乏になります、悲しいなあ……、家庭財政は毎月もらえるお小遣いやトレセン学園の入学にもかかわってくるので

非常に大事なのですが……、大丈夫かな、これ……

まあ貧乏でも一応利点はありますのでその利点が出てきたときにも説明します。

じゃ、このスペちゃん始めて行きましようかね……

PART 2

はい、皆さまおはこんばんちわ、投稿者です。

前回はリセだけで終わってしまいました。が今回からはバリバリ進むぞー

現在はプレイしていくスペちゃんが決まり、小学校入学から始めていきます。

今は入学式中ですね、小さい彼女たちを見られるのもこのゲームの強みかと思えます。

ま、画面見てもらえばわかると思いますがど田舎の小学校、新入生はスペちゃんだけで

入学式に集まっている全校生徒も10人程度です、マジで少ないな

ちなみにアニメ版と同じようにウマ娘はスペちゃんだけ、練習相手が居りませぬ。

さて、こちら辺は特にイベントがないので入学式終わりで帰宅まで倍速していきましょう。

▽帰宅中…

はい、帰宅、ここでお母ちゃんから入学祝として豚の貯金箱と百円をいただきました。

ここから毎月いただけるようになります、ちなみに家庭財政が普通で500円、裕福で1000円、富豪で3000円です。お小遣いの使い方は、トレーニング用品や体力回復用に食べ物を買ったりするのが基本ですが、

ここはド田舎、買えるものは特にありません。まあそれでも通販とかで買えないことはないですが…

ちなみに家庭財政が普通以上だとお手伝いでお金がもらえることもあります。がうちのスペちゃんには関係ありません、悲しいなあ

じゃここからスペちゃんの日常を過ごしていきますでしょうか

基本方針としては「大食漢」のこともありますので、幼少期は

スピードの育成をあきらめようかと思えます。

トレセン学園で何とかなるし：、そんなわけで行うトレーニングは専ら、畑のお手伝いです。

運よく？、スペちゃんの実家は農家さんなので足腰を鍛えやすい農作業が簡単にできます。

もう少し年齢が上がればおもりを持ちながら、などの加重トレーニングも行っていくと思いますが、「鉄人」をもっているとはいえまだ幼子、それはやめておきましょう。

というわけで、お母ちゃん、オラ、畑仕事すつぞ！ 手伝わせてくれ！

＜トレーニング中：

はい、お手伝い終了です、ご飯の時間ですぞ！

通常なら食事の量などもこちらで決めることができますが「大食漢」のせいで超盛から変更不可です。

＜食事中

＜食べ過ぎてしまった！

＜「太り気味」を獲得！

はい、来ました、早速出てきやがったな、です、はち切れそうなお腹をだして寝転がってますね

ウシ娘かな？、ほらお母ちゃんもあきれてつぞ！

こんな風に食べ過ぎが重なっていくと「太り気味」を入手していきます、前回言ってた3割はこのことだったんですねえ、

あと、スペちゃん、飯食ったから眠いの解るけどこれから勉強タイムだぞ、スぺの重い体を引きずって教科書を開きます、メジロ家だったりすると家庭教師なんてものが付きますがスペちゃんちでは無理です。参考書とかもお小遣いを使用して購入するので、当分無理ですね。なので当分は教科書に頼りながら賢さを上げていきます。一応ゲーム内にて、最低値の上り幅ですが全体的に上がるのでウマ味で

す。

ウマだけに。

そういえば賢さについての解説を忘れていたのでしますぞ！、賢さはレースに關係するものと学校成績に關連するものと二つあります、動画内では面倒なのでまとめて賢さと呼んでいると思いますがこちらはご容赦を：、幼少期、つまり小学生時代は4教科、トレセンに上がると5教科になります。参考書やその他のアイテムなどは学校成績の方の賢さは上がりますが、教科ごとに買いそろえる必要やレースで使う賢さを微減させてしまうものもあります。ちなみに教科書は入学時に手に入るもので、全ての強化、レース時の賢さも上昇させてくれるのでお助けアイテムでもあります。それと賢さ上昇系の練習すべてにおけることですが体力も微回復してくれるので助かりますな。

＜勉強中…

＜眠くなってきた…

フア！不味いですよ、ここは連打で叩き起こすのだ！

＜寝てしまった…

あちやー、寝ちやいましたね、こんな風に自身の賢さが使用したアイテムの基準値より低めだとこのように眠っちゃいます、ま、現在最低値だからしかたないね。

お母ちゃんが眠ってしまったスぺちゃんを寢室まで運びまして本日は以上となります、次回も見てくださいよな！

【お母ちゃんの日記】

今日からスぺも小学生になった、地元の小さな学校で、新入生もスぺだけだったから入学式がどうなるかと思っていたけど、思ったよりもちゃんとしたもので安心した。

最初にあの子を引き取ったときは親友の娘、としか思っではいなかったけども、今では私の自慢の娘だと胸を張って言える。想像以上の大食らいで、色々大変だったけどここまで大きくなってくれたことにすごく感謝してる、あんたがずっと体の弱さに悩んでいて、結局レースに出る前にあきらめるしかなかったからか、スぺもそうなんじゃないかと思っっていたけどここまで大きくなけがやカゼ知らずの健康体でびっくりしたよ。あんたが見守ってくれていたからかもしれないね。

あの子の晴れ姿をあいつにも見せてやりたかったよ。

スぺも小学生に上がり、なにか変化があったのか、今日は自分から仕事の手伝いをすると言い出した。これまでは頼んだとしても途中でやめてしまったり、少なくとも自分からするなんてことはなかった、しかも今日は頼んだこと以上なことをやっていたし、本当に驚いた、子供ってというのは気が付いた時にはこんなにも成長するもんなんだねえ。

もっと驚いたことはいつも通りどこに入ってるんだ？というぐらい食べた後に、教科書を開いて勉強し始めたことだ、自分の目を疑ってしまったよ、いつも食べた後はテレビ見てぐだぐだしていたのに。ま、そのあと今日色々あつて疲れていたのかすぐに眠っちゃったけどね

ちよつと面白かったから笑っちゃった。

今日はまだうまくいかなかったかもしれないけど、明日はもつとうまくできるようになるよ

だから今日はゆっくりお休み、スぺ。

PART 3

ほいほい、最近リアル競馬で大爆死した投稿者ですよ、今回もよろしく願います。

前回からで、勉強中に眠ってしまったスペちゃんが次の日に起きるところからですね。

スペちゃんのお家は農家さんなのでかなり早めの時間にたたき起こされます、そこからお手伝いです。

ここで真面目にしているとちゃんとした練習だとみなされてごく微量ですがステータス上昇が期待できます。

オラ、今日も朝からお手伝いすっゾ！

〓お手伝い中…

ほいほい、無事にできましたね、じゃ、こっから通学です、このゲーム時間管理もしっかりしているので学校までの距離と自身のステータスから比較してかかる時間を計測しています、もちろんハイペースで移動したりすることで時間短縮も可能です。

それで登校しようと思うのですが自宅から学校までの距離はランダムなので一体どれほどかかるのか…

〓学校まで15 kmです

〓ペースはどうしますか？

え…、15キロですか…

いや、ちよつと待ってくださいよ！、わたくし、試走でも遠くて2キロぐらいでしたよ！

それが何で15キロって、今何時だ！

〓7時です（8時30までに登校しましょう）

ということは1時間半ですか、まあそれぐらいあれば…、不可能で

すね！ 予定ではこの通学時間中に普通ペースで登校しながら歩きながら教科書を読むつもりでしたが（歩きながらの読書とかスマホとかは危ないからやめとくだゾ！）不可能ですね、コレワア…

諦めて軽いジョギングペースで行きましょう、これなら何とか間に合うはずです。ある程度成長したあとではこの距離も比較的短い時間で走り切ることはできると思いますが、今のスペちゃんピカピカの一年生、いくらウマ娘といってもかなりギリギリなラインです。

＜登校中…

さて、まだ学年も低く持つていく教科書類も少ないので何とかかなりそうですが、体力の減り方がやばいですね。このままだと授業中に寝てしまいそうです、視聴者の方々の中には、親に送ってもらえよ、とコメントをしている方もいるとは思いますが、ここは頑張つて徒歩で行きます。

想定では1kmほどでしたが、15kmともなるとかなりのステータスアップが望めます、体力の消費量が大きく、授業を集中して受けることができずに、学力の問題が立ちはだかりそうですが、そこは何とかしていきましょう。最悪放課後の練習時間をすべて勉強時間に充てれば、最低限度ぎりぎり耐えられると思います。

＜学校に着いた！（現在8時27分）

うおおい！、かなりギリギリですな、しかも予想通り体力が激減していますねこれは耐えられるかなあ

＜授業中…

＜うとうと…

＜寝てしまった…

案の定寝てしまいましたね、うくんこれはステータスがある程度伸

びるまで悪循環から抜け出せそうにないなあ。

うーん、今回はここまでかな、次回は少し時間を飛ばしていこうと思います、ではまた！

動画時間が思ったより短かったのでちよつとばかりお話を、こちらのゲームですが決められたシナリオ中継地点や終了地点はなく、プレイヤーの自由で育成を終了することはできません。まあ一応トレセン学園卒業までという区切りはありますが。まあつまりアプリ版のように学園入学からジュニア級、クラシック級、シニア級の3年間だけで育成を終えることは可能ですし、メイクデビューだけ出走して育成をやめることもできます。

この実況ではジュニア級〜シニア級十海外遠征の1年までを育成期間にするつもりです。

それでこの後流すものなのですが、育成終了時にエンドロールが流れるのですがそれがまたカッコいいんです！ JRA風のCMみたいな感じだと例えば解りやすいでしょうか？

いまからご覧いただくのはテストプレイ時に完成したスペシャルウィークのエンドロールです。一応こんな感じになるよというのをわかっていただきたくて載せました。

今回も同じ道をたどるとは思いませんが一応参考までに…

皇帝、シンボリルドルフ

史上最強の7冠ウマ娘という壁はあまりにも高かった
名だたる英雄たちが挑み、不可能だと諦めてしまった

しかし「本当の敵は諦めだ」そうあざ笑うように

軽々と越えてしまったウマ娘がいる

スペシャルウィーク
その肉体は努力の塊

周りはただ、異常だと評した

皐月賞、日本ダービー、菊花賞
大阪杯、天皇賞（春）、宝塚記念
天皇賞（秋）、ジャパンカップ、有馬記念

挑まれた勝負、そのすべてを制し
史上初の9冠を制した彼女は
新たな敵を求めて世界へ遠征し

K G V I & Q E S、凱旋門賞

芝の頂点を取った

ただ一度の敗走もなく、ただ、得るのは勝利のみ
人は彼女を、無敗の総大将と呼んだ

PART 4

こんにちアリーヴェデルチ！ 出会ってすぐにさよならなウマ娘
実況プレイやってくよー

今日は前回からかなり時間が空いて、スペちゃんが小学3年生に
なったときからのスタートです。

ちなみにこの間の空白期間はダイジエストで見せていると思いま
すが、まあ「太り気味」と睡魔との戦いでした。

学校に行けば、体力が減少し、眠り、授業中に寝て、帰宅し、お手
伝いというトレーニングをし、飯食って勉強させようとすればすぐに
寝る…

そして飯はほぼ毎日食べすぎ判定をくらい、「太り気味」が発生し
て、それを直すためのトレーニングを行ったせいで体力が大幅に減っ
てしまい、夕食後に勉強ができない…

この悪循環の繰り返しでした。おかげさまでご覧下さいこのス
テータス、開始時点と現在を比べるとスピードが全く伸びていない代
わりにスタミナとパワーの上り幅がすごいことになっています

賢さは…、うん、お察しく下さい、現在擁護することができないほ
どにおバカちゃんです。

ちなですが、この状態、非常にヤバイですよ！、状態でして皆様ご
存じの通り、トレセン学園に入学するには試験がございます、当たり
前だよなあ！

んでこの試験3つの内容がございまして、筆記、面接、実技でござ
います、一つずつ解説していくと

筆記はその名の通り、学力筆記試験です、内容はそこまで難しくは
なくプレーヤーキャラの学年に応じた難易度のものが出題されます、
ですので地元の学校でよほどひどい成績を取っていない限りは大丈
夫です。

ちなみにですがこの試験は最寄りの試験場、もしくは各学校で受験
することができるのでわざわざ府中まで行く必要はありません、時間

的なロスが出ないのありがたいですね

お次は、面接、こちらはいたって普通の面接であり、そのウマ娘に輝くところ、所謂アイドル性があるかを見極められます。こちらは心配する必要がほとんどなく、ハルウララなどのレースがあまり得意でないウマ娘を入学させるときに使われる救済処置みたいなものです。

最後に、実技です。新入学生として受験するなら、各地にある地方レース場での試験、編入生として受験するなら、実際に走っているときの動画とタイムの提出が求められます。まあゲームとしては新入学生の方は簡単な模擬レース、編入生の方はタイムアタックです。

こちらはそのウマ娘によって求められるものは違いますがかなり難しめに設定されており、最初の挫折ポイントですね

それでこの3つの試験のうち、一つでも合格できたならば入学はできるのですが、その結果によってバフ、デバフがかかります、例えば筆記で落ちると学園での授業についていけなかったり、面接を落とすと他のウマ娘との距離感がうまくつかめず孤立してしまったりします。

わたくし自作のチャートではこの試験を全クリすることでバフ全積みスタートダッシュを決める予定なので頑張りたいところなのですが、現在のスペちゃんの様子を見てみましょう。

▽スピード：F
スタミナ：D＋
パワー：C
根性：D
賢さ：F＋
▽総合学力：F

ええ、ご覧のようにやばい感じですが、現在3年生なので6年になるまではオールBぐらいにしておきたいですね。

そういえばこの動画をご覧の方は既プレイ勢の方が多いと思うので説明しておりませんが、一応未プレイ勢の方に説明を、しておきますとこの据え置き版ではG〜SSまでステータスの範囲がありG、G+、F、F+のように段階ごとに上がっていく感じですが。アプリ版のように細かい数字を見ることも可能ですが、パツと見で解りやすいこちらを表記してます。なお、このステータスはトレセン学園入学時にすべて3段階下がるので、アプリ版からの方は高すぎいい！と驚かないでくださいまし、BだとD+まで下がる感じですね。

なお学力の方ですがFは大体小学1年生ぐらいです…、授業中寝てるからなあ…

そんなアタマよわよわスペちゃんに朗報です！、なんとですnessテータスの上昇と年齢が上がったことによる体の成長がうまく重なり、登校時の体力減少が減り、授業中に眠らなくても何とかなるようになりました！

おかげさまで見てください！いつも授業中にねむねむしていたスペちゃんがお目めぱっちりです受講しております！

これには先生もびっくり！

▽授業中…

▽???

▽内容が難しすぎたようだ…

▽先生が懇切丁寧に教えてくれた！

▽何とか理解した！

この学校は生徒数が少ないのですべての学年をまとめて授業していくタイプの学校なので先生もつきつきりで面倒見てくれます。そのおかげで、「ありやりや、授業態度は改善したけど内容の方はちんぷんかんぷんだったみたいですね、ま、2年分の遅れが存在してるし仕

方ないね！」ということにはなりにくいです。小人数制のいいところですね。

お、授業が終わったみたいですね、んじや帰りましようね

▽帰宅中：

ただいま！お母ちゃん！今からオラ、手伝いすつゾ！

▽お手伝い中：

よしよし、普通にできるようになってきましたね。

そろそろですかねえ…、よっしや、決めました、次回からは「太り気味」がついてない時はスピード練習をしようと思えます。この時期で可能なのはダッシュですね。それではお母ちゃんに許可もらいに行きましょう。

オツス、お母ちゃん！明日からお手伝いの時間減らしていいか？

へ？ 何するかって？ オラもつと強くなりてえ！、だからもつと走り込みをしてえんだ！

▽交渉中：

▽交渉に成功した！

おつと、これは幸先がいいですね、明日からこれでスピード練習ができそうです。

んじや今回はこんなところで、次回も時間を飛ばしまして6年生に上がったときから始めていきましよう。

でわでわ

【お母ちゃんの回想】

スペは入学したあの日からずっと同じことを繰り返して続けている。学校がある日は朝、仕事柄早く起きないといけない私と同じ時間に

起き、私の手伝いをしてから走って学校に行く。これだけなら普通のいい子なのだが家から学校までの距離は15km近くある、いつも後ろからついていってはいるが毎日毎日、1年生の時から同じことをしている。いくらウマ娘といってもおかしいのではないだろうかと思う。入学式の次の登校日、朝早くから仕事を手伝ってくれたし、家から学校までかなりの距離がある。ある程度学年が上がるまでは車で送り迎えをしようと思っていたとき、気がつけばスペが家にいなかった。

家中探し回って、脱ぎ捨てられたスペ用の作業服となくなったランドセルと用意しておいた服。これでスペが学校に行ったことにやつと気が付いた。

学校へ連絡してスペが学校に着いたら連絡してくれと電話してから、慌てて車に飛び乗ってスペが通りそうな道を片っ端から探した。家から学校までちょうど中間ぐらいで見つけたとき、スペは走りながら学校に向かっていた。

その姿を見たときひどく安心したのを覚えている。

「やあ、頑張り屋のお嬢さん、乗っていきませんか？」

「あ、お母ちゃん！ どうしたの、仕事は？」

「仕事は、って…、あんたが心配で見に来たんだよ。ほら、さつさと乗りな、送ってくから」

「大丈夫！ 私走っていくから！ もっと走って強く、速くなりたいの！」

そう言っただけはまた学校に向かって走って行ってしまった。

それから私の少しおかしな送り迎えは続いている。スペが毎朝走って学校に行くのを車で後ろから追いかけて、帰るときには校門近くで待っていて、家まで車で追いかける。

いくら車で送っていくよ、と言っても聞かず自分で走って行ってしまふので説得するのはもうあきらめた。せめて何かあったときのために後ろからついていくことにしている。

ガソリン代が馬鹿にならないので友人からもらった原付にしたり、自分も一緒に走ったりしたが、その間に気が付いたことは日に日にスベの学校に着く時間が早くなってきていることだ。ちよつとずつタムが縮んでいるのに気が付くと次の日からはわざわざ時計で計り、メモをつけてみると一日進むごとに数秒単位で到着する時間が縮んでいるのだ。毎日、必ずだ。

空恐ろしいものだったが、よく考えれば私はウマ娘、というか子供を育てるのはスペが初めてだったし、ちゃんとウマ娘を見たのもスペの母親であるあいつぐらいだったのを思い出し、もしかしたらこれが普通なのではと思った。いやそうに違いない。詳しくはよく知らないがウマ娘は例の野菜人みたいに強くなっていくのかもしれない、もし違つたとしてもスペの母親であるあいつは、ケガさえなければすごいウマ娘になっていたかもしれない、という話を聞いたことがある。つまりあいつ譲りのスペの才能がすごかったというわけだ。気づいたその時はそう思っていた。

いつの間に覚えたのか、スペの持つ才能なのか、それともウマ娘としての本能がそうさせているのかはわからないがスペは一度も休むことなく同じペースで毎日休むことなく走り続けている。

そんな、私が何か間違つてしまったのだろうか、朝いつも走っているし仕事の手伝いをしなくてもいいのではと思ひ、手伝うことはないよ、といつても私がやろうとしていたことを終わらせていたこともある。

ほかの保護者の方にも聞いたが、やはりこのぐらいの時期の子供は思いつきり遊んでいることが普通みたいだ。ウマ娘のことはわからないが、自分もそうだったし、自身の考えていることが間違っていないこともわかる。

スペは何かがおかしい。年頃の女の子なんだ、もつと遊んでいてもいいんじゃないかと思う。

学校での生活を聞いてみれば、授業は真面目に聞こうとしているが、どこか疲れているらしくとうとうとしていることが多かったらしい

が、最近はそれも少なくなり、真面目にしているそう。

しかし、交友関係はそこまで良くないらしく、「愛嬌」があつて誰からも好かれていたらしいが、彼女自身はどこか壁があるように見える、放課後も誰かと遊ぶことはせず、すぐに帰り、休み時間も基本どうとしているか教科書を見ていると担任の先生から聞かされた。

スペは何か、焦っているのだろうか？

そんなことを考えながら、いつスペにこのことを聞こうか、どのように入話せばスペが傷つかなくて済むか、どうすればスペが幸せになれるのか、そんなことを考えていた時、スペから大事な話があるといわれた。

話は明日からお手伝いをしなくてもいいか、ということだった。

このことに少し驚いた私だったが、この機を逃すか、と思いきやスペの思いをスペが傷つかないように、不安に思わないように、やさしく聞いてみた。

スペは速く、強いウマ娘になりたいそう。昔一緒にテレビで見た日本ダービー、それが頭から離れないらしい。

「あそこで走っている人たちみたいに速くなりたい、強くなりたい、カッコよくなりたい。」

そのためには小さい時からたくさん練習して、たくさん勉強して、たくさん食べれば強くなれる、そう思ったの。それで毎日やってみたら、自分が毎日少しずつだけ強くなっている気がする。だから毎日続けるの！」

スペは私が思っていたよりもずっと成長していたみたいだ。スペは目標に向かってもう走り続けている。

ならば親である私が応援しないでどうするか。

スペの夢がかなうように色々と私も考えてみることにした。まずはウマ娘のトレーニング方法について色々調べてみることにする。

気がつけば、思い悩んでいた私の心は晴れていた。

PART 5

皆さま、どうもどうも、どうも君、今日もスペちゃんの育成始めていきますよ。

それにしても初めて実況上げてみたんですが、思ったよりも見てくださる方が多くて感謝感激雨霰でございます。

失踪しないように頑張るタイ！

んじや、今回もやっていきましょう。前回は3年生まで進んだスペちゃんですが、今回も大きく飛ばして6年生からのスペちゃんです。かなり単調な毎日でしたのでカットしちゃいました。一応どんなイベントがあったのかご説明すると、お手伝い以外の練習をし始めたおかげで、お母ちゃんのドキドキ！スパルタ練習が開始されました。アニメ版であった、タイヤ引きとか水風船避けとかですね。これのおかげでステータスの伸びがウマ味でした、ウマだけに…

失礼しました、会長の呪いが…、ま、そのおかげで結構いいステータスになっています。

▽スピード：D+

スタミナ：B

パワー：B+

根性：C+

賢さ：D

▽総合学力：D+

とこんな感じです、アプリ版と同じでCランク以上は上がりにくくなるので、遅いように感じる方もいるかとは思いますが、かなりいい感じですね。スピードが弱点になっていますが、それは残り一年で何とかしようと思います。

で、問題なのが学力の方です。ちよつと体力管理を失敗してしまつたのかテストプレイ時よりもお母ちゃんの課す練習での体力消費が大きく、予定していた夕食後の勉強があんまりできませんでした。

これも私の調査力不足が招いたこと、本当に申し訳ない…、だが私

は謝らない！

まあふざけるのも大概にして、そろそろ総合学力の方を上げていきましょう。現在6年生になったばかりのスペちゃんには来年の初めにトレセン学園の入試試験が待っています。

学力試験、筆記試験に無事、合格するには総合学力がC以上必要になります。入学後のある予定を考えるともう2ランク上のB以上には上げたいところです。そのためには勉強するほかありませんが、スペちゃんがとれる方法は一つしかありません。そう教科書で勉強です。

一応、毎月お母ちゃんから頂いているお小遣いですが、全く使っていないのですが月1000円なのでスペちゃんのお財布には6000円しかありません。こちらで参考書などの勉強用アイテムを購入してもいいのですが、こちらもトレセン入学後の使い道が決まっているので手を付けることができません。

そうつまりスペちゃんは教科書だけを引っ提げてトレセン学園に入学する必要がございませぬ。

いざ言ってみるとやばいこと言ってるな…

そんなわけでお母ちゃん！そろそろオラ、受験勉強すっゾ！だから練習は控えめでお願ひするだ！

▽交渉中…

▽交渉に成功した！

おっしや、無事に成功しましたね、後顧の憂いもなくなりましたし、登校しましょうか。

そういえばですが登校時間のことですが、無事に授業中に眠らなくても済む体力消費&短時間での登校に成功しています。途中からちゃんと計ってなかったので詳しい時間は解りませんが、おそらく20分は切ってるんじゃないですかねえ、んじや登校して、学力を稼ぎに行きますかねえ

▽登校中：

▽無事についた

▽早めについたが何をしようか…

はい、このように早めに学校に着くと自由時間が生まれます。投稿者がスペちゃんと同じくらいの時は普通に遊んでいましたが、スペちゃんは学力を上げるために勉強です。

▽教科書を使って勉強することにした

▽勉強中：

▽勉強をしていると先生が話しかけてきた！

あれ、おかしいですね。何かイベントに引つかかったかな…

「スペちゃん、今年、中央のトレセン学園の入試を受けるんですよ。だったらこれを使ってよ！」

おお、担任の先生からアイテムいただきましたね、これは…

▽参考書を手に入れた！

参考書じゃないですか！こいつがあればレース時に使用する賢さはちよつと減少しますが学力の上がり方は団地になりますよ！先生！ありがとナス！

「いえいえ、いいんですよ、スペちゃんいつも頑張ってるから何か応援したくて。こんなことしかできないけど頑張ってるね！」

いえいえ、先生、十分以上でござえます。この会話の裏でちよつとwiki見てたんですが、どうも好感度の影響みたいです。学校の先生などのキャラ、一定以上の好感度を稼いでいるとこのように勉強に役立つアイテムを確率でくれるみたいです。小学校の先生とか友人とかはトレセン学園に行けば会う機会が消滅するので特に友好関係を結ぼうとかはしなかつたんですが、「愛嬌」のおかげか好感度がたまっていたみたいです。非常にウマ味です。

では早速こいつを使って勉強していきましょう。

ちよつと早い気もしますが今回はここまです。次回はトレセン学園入学試験になると思います、ではまた！

【担任の先生視点】

私がこの学校に赴任してきてから今日でちょうど5年、6年目に入る。新任教師としてこの学校に就職したが、全校生徒数が両手で数えられるほどの小規模な学校に赴任するとは思わなかった。

最初は色々と不安だったが、少人数のおかげで生徒一人一人にかけられる時間の量が多いのが私にあっていただけなのか、生徒たちと楽しくやらせてもらっている。

不安なのはここ二、三年新入生が入ってきていないのでこの学校大丈夫なのかなということだが…

まあ何とかなるだろう。

私が赴任した時に一緒に入学した女の子、ウマ娘のスペシャルウィークちゃんは私と一緒に成長してきた子であり、ちよっと手のかかる妹のように思っている。

スペちゃんは今では真面目で、みんなに愛されるようないい子だが、入学した時はかなりの問題児だった。

何てだったって、登校日初日にスペちゃんのお母さんから「どこかに行ってしまった」という電話がくるんだもの。

そのとき電話を取った私も新任初日で迷子!? ってなって慌てふためいてしまったことは絶対に忘れられないだろう。

それで無事、お母さんと一緒に登校した時は安心したけど、そのあとの授業でほとんどウトウトしてるんだもの。

その日は色々大変だったし、仕方ないかなと思って、お母さん宛の連絡事項やスペちゃんの様子などを書いて、明日からも頑張ってるね、という感じだった。

先輩の先生からスペちゃん担当に任命された、私の苦労はそこから始まった、スペちゃんはそれから3年生になるまでほぼ毎日授業中にウトウトしてた、初めのうちはお家が遠いし、仕方ないかな、と思っ

て彼女用のノートなんかも用意していたがそれが丸々2年間続くと

は思っていないかった。

私はいったい何をしてるんだろうかと思いつきながら過ごしていた3年目、あの時のことも忘れられない。

いつも眠そうで無理やり起きていたスペちゃんが朝からお目目パッチリで私の話をちゃんと聞いてくれたのである。あの時の私の喜びようは傍から見たら、完全に変な人だったろうが、終わったことだし、どうしようもない。

それからスペちゃんは今まで寝ていた分を取り返すようにちゃんと授業を受けてくれた。かなり遅れ気味だったカリキュラムも少し遅れ気味、普通、少し早め、と進んでいき、気がつけば彼女のカリキュラムは小学校で教える分を終えてしまった。

先輩から少し怒られてしまったが、私は非常にうれしかった。初めて持たせてもらった子がウマ娘で緊張していたが、無事何とか成長の手助けができたことに。

今日から6年生になるスペちゃんは中央のトレセン学園への入学を目指しているらしい。入学に必要なレースの知識は私にはないけど、面接や筆記試験のお手伝いならできると思った私は、彼女のカリキュラムがもうすでに終わっていること、彼女なら中央のトレセン学園に入学することは可能だということを先輩に相談し、本来ならだめだが、今年からの授業は受験対策の勉強をしていくことを校長先生にも黙認してもらった。

そうと決まったとき、私はすぐにスペちゃん用の参考書や過去問を買い込み、どうやれば万全な状態で彼女を送りだせるかを考えていた。

彼女の明るい未来を信じている。

PART 6

自転車操業のRTAとは全く関係のない実況プレイやっていきま
すよ

いつもお世話になっております、投稿者です。

ではでは、早速やっていきましょうか。前は6年生になり、担任
の先生から参考書をもらったところからでしたね。今回はトレセン
学園入学試験編となるのですが、一応この一年間何をしていたのかと
いいますと、とにかく勉強とスピード練習です。ま、とりあえずはス
テータスを見ていただきましょう、ホイっと！

▽スピード：C+

スタミナ：B+

パワー：A

根性：B

賢さ：C

▽総合学力：A

はい、このようになりました。いやー、スペちゃん賢くなりました
ねえ。なんだか試走の時よりも学力が上がリすぎてる気もしますが、
高ければ高いほどいいので気にしなくてもいいでしょう。ちなみに
ですが試走ではどんなに頑張ったとしてもB+が限界なのは、と考
えていました。やっぱスペちゃん地頭良かったんだなあ。

それでスペちゃんの行っていた練習ですが、スピード練習を4割、
勉強系を4割、「太り気味」解消のための練習を2割、てな感じでやっ
ておりました。勉強では教科書と参考書を交互にすることで賢さの
減少値を抑えるようにしてましたので何とか賢さのステータス減少
を抑えて、上げることができた、という感じですかね。

ステータスを見たところからこれから試験を受けに行くのですが、
ゲームの都合上落ちることは滅多にありません。だってお話進める
にはトレセン学園入学してないと、何も起きないもの…。

ならなんで試験のために学力などを上げる必要があつたのかとい
いますと、入学後に受ける恩恵が非常に大きいからなんですね。入学
すると通常の学校と同じように授業が進み、寮で生活し、どこかの
チームに所属して育成を進めていくのですが、各試験の成績が良いと
それぞれにボーナスが入ります。

筆記試験だとその後の授業での理解度が深まりステータスが上が
りやすくなり、面接がいいとクラスメイトや同室のウマ娘などの好感
度が上がりやすくなったり、実技試験のレースでいい結果が出せると
その分いいチームに所属しやすくなったり、所属したのちにいい機材
で練習できるようになります。この恩恵はメイクデビュー戦までの
半年間のみですが、これがかなり重要なのはお分かりいただけ
たかと思えます。

んじや早速、試験会場に向かいますようか、試験場は札幌みたいで
すねえ、スぺちゃんのお家は日高町にございますので電車で二時間ぐ
らいです。北海道での開催場所が札幌の一つしかないみたいなので
筆記試験はお昼すぎから、翌日に面接、翌々日にレースという形で行
うみたいですね。やっぱり受験人数が多いのか時間かかるみたいで
すねえ。

スぺちゃんは初日は受験してからそのまま帰り、二日目からは札幌
でお泊りするみたいですね。まあレースするのにわざわざ2時間か
けて移動するのは結構疲れると思うのでありがたいですね。それと
お母ちゃんも全部についてきてくれるみたいです。では早速向かい
ましょうか。

お母ちゃん、ヨロシク、って、ん？ 行く前に学校に寄る？ はい、
別にいいですがなんかイベントあつたかな…

＜移動中＞

＜学校に着いた！＞

＜校門前には先生と他の生徒たちが集まっている

お守りをもらった！

＜調子が上がった！＞

おお、これはありがたいですね、これにはスぺちゃんもニッコリ。意気揚々と試験場に向かうことができますね。それにしてもこんなイベントがあるなんて知りませんでしたね。驚くべきは制作陣の作りこみの深さ、足を向けて寝れませんな。あとでwiki確認しとこ
：
では気持ち新たに試験場に突撃！

デッデッデデデ！（カーン）デデデデ！

ほい！ 電車移動で二時間ほど、その他含めて計3時間ほどで試験会場に着きましたね。あとは受験するだけですし、現在の総合学力では試験中に寝ない限りは大丈夫でしょう、：寝ないよね（震え声）。（震え声）。

初めて他のウマ娘を見て、ウキウキしているスぺちゃんには悪いけどちゃんと集中して受験しましょう。

＜試験中…

＜試験終了！

＜どうやらうまくできたようだ！

ほっと一安心。大丈夫みたいでしたね。試験終了後のメッセージを見る限り、試験結果の方も大丈夫そうですね。

ここから帰宅して、また明日も面接を受けに行きますが特に見どころもないでしょうし、倍速ですかねえ。

はい、一日たってお次は面接試験ですね。こちらの試験はプレイヤーが選択肢を選んでいくタイプのものですが、当たり障りのないものを選んでおけば大丈夫です。「愛嬌」もありますし、大体好印象で終わるか。

んじや、面接の先生方、ヨロシクオナシヤス！

〓あなたが本校を受験した理由をお聞かせください

ここは「強くなりたいから」を選択ですかね、実際そうですし。

〓入学後、あなたは何をしたいですか？

何を、ですか…、とりあえず「レースがしたい」と言っておきましよう。スペちゃんの周りにはウマ娘がいなかったので競い合うというのに憧れて、とかでしょうか。ちな明日のレースが初レースです。

〓入学したとして、どのようなチームに所属したいですか？

所属するであろうチームはもう決めてまして、アニメ版と同じようにスピカに参加する予定です。ですので「自分のしたいことができるチーム」としておきましょう。

〓試験終了！

〓どうやらうまくできたようだ！

うしうし、いけましたね。これで目標のうち二つはできました。あとは明日の実技試験、レースですね。スペちゃんにとっても、この動画シリーズにとっても初めてのレースですがステータス的にもまあ負けることはないと思います。

ちなみにですがこのレース、芝orダートの右回りで1000mのレースになります。場所は直線が短い札幌競馬場ですね。差しウマ娘で、長距離、中距離適正のスペちゃんにはちよつと厳しいと思われるかもしれませんが。

そのためここでオリチャー発動！（言ってみただけ）

まあオリチャーでも何でもないですが先行策で行きます。スペちゃんの適性は先行、差しにAなので大丈夫です。

では明日に備えて、軽く走ってからお泊りです。おやすみなさい、

スペちゃんしつかり寝るんやぞ。

おはようございます。スペちゃんもしつかり睡眠がとれたようでいい感じですね。では勝ちに行きましようか。

初めてのレースで浮ついてますが、まあ何とかなるでしょう。

このレースはアプリ版のメイクデビュー戦と同じようにモブウマ娘しか出てきません。チュートリアルの側面もあるのか説明も出てきますが既知なのでスキップです。

ではでは先行策で走っていきましよう！

【模擬レースにて】

その日、私は絶望に遭った。

私は中央のトレセン学園に入学するために最後の試験である模擬レースに出走しようとしていた。

筆記と面接、思ったより上手くいき、あとはレースだけだった。3つの試験のうち、どれか一つでもいい成績を収めていれば入学はできるらしく、2つ上手くいった私はかなりリラックスして試験に挑むことができていた。

あいつが横に立つまでは…

私は奇数番だったので先にゲートに入った、そのあと、後ろから入ってきたあいつ。

忘れたくても一生忘れられそうにない。

ゲートに入る前、あいつはどこか浮ついた様子で、正直レース前の集中はできてないように見えた。地元で一番速く、負けなしで自信家だった私は、その時、自身の勝利を疑っていなかったし、そんな浮ついた奴がいることを軽蔑さえしていた。

奴の雰囲気はゲートに入った瞬間、激変した。

隣から襲い掛かってくるその圧に、同じゲートにいた他の奴も一瞬で呑み込まれた。

ここがどこかわからなくなり、どうにかしてここから抜け出したいと感じさせられた。

誰かがその圧に耐え切れなくなり、声を上げようとしたとき、

その瞬間、ゲートが開いた。

地元で何度かレースをしていて、ゲート練習もできていた私は何とかゲートに反応することができたが、他の奴は無理だった。

あいつと私、それ以外は2、3テンポ遅れてのスタートだった。

あいつは速かった。追いつくのがやっとというほどの速さ。

学年が違うのではないかと思うほどだった。

どうにかして食らいつかないと巻き返せるものも巻き返せなくなる、そう思い全力でついていった。

元からそこまでの長さが無いレース、最後の直線に入るのは速かった。

私はそこらいつも通りのスパートをかけようとした、が…

できなかつた。もともと差しを得意とする私は、最後の直線までに脚を残しておき、ごぼう抜きしていくのが得意だった。だがあいつについていくことだけに必死だった私にはそんな力は残されておらずあいつを抜かすことはできなかつた。そのことに気づいてしまった瞬間、

あいつが急激に加速し始めた。

一瞬であいつの背中は小さくなり、気がつけば私はゴールしてい

た。何バ身離れているかすらわからない、大差負けだった。

その現実をうまく呑み込めず、呆然としていた私にあいつはなんと声をかけたと思う？

「楽しかった、また走ろうね！」

まったく息が上がっておらず、レース前と同じ表情で私にそう言ったのだ。

何かが碎ける音がした。

それから家に帰るまでの記憶はない。

その後、走ることが全く楽しくなくなり、何も無い日々を過ごしていた私に封筒が来た。

合格通知だった、筆記や面接がよく、実技でも一定の評価をされたため合格していたらしい。

だが、私が受かってあいつが受からないはずがない。

もし、中央に行けばまたあいつと走らないといけないかもしれない。いい。

その恐怖に勝てなかった私はそれを蹴って地方に残った。

本当に高すぎる壁にぶつかったとき、人はただ膝を折るしかないのだ。

PART 7

はい、どうも、いつもお世話になっております。投稿者です。

本日はですね、前回からの続きを行う前に、色々コメントをいただいたのでその返答をしていこうと思っております。そんなの見たくねえ、早く本編見せろ！ という方は飛ばしていただいても大丈夫です。

では一つ目、『スペちゃん強すぎませんか？ 同期の娘とか心折られないか心配！』

とのことですね。ご安心ください、大丈夫です。こちらのゲーム、スペちゃんやスズカ先輩などのプレイアブルキャラクターは入学時のステータスは一定ですが、育成中のキャラに合わせて成長してきます。所謂、野菜人の王子みたいに「お前には負けんぞ！ キャロット！」みたいな感じで追いつけてきます。

それでこの中で特に追い上げ、成長率が高いのは「ライバル枠」と言われておりました、今回の育成キャラであるスペシャルウィークは育成可能キャラの中で一番ライバル枠が多いキャラとなっております。

こちらに挙げさせていただくと、サイレンススズカ、エルコンドルパサー、グラスワンダー、セイウンスカイ、キングヘイローの5キャラです。改めて並べるとやばいな……

気を取り直して、二つ目、『前回の試験のレースで固有スキル発動してました？』

はい、こちらはですね、発動しておりません。スペシャルウィークの固有スキル、「シューティングスター」の効果は『レース終盤に前の方でウマ娘を抜くと速度が上がる』というものです。前回のレースでずっと先頭だったので発動できませんでした。

まあ確かに最後の直線で意味わからん加速してましたからねえ。このゲームたまにスキル発動してらんじやないの？ というぐらいの走りを見せているのに発動していなかったり、スキルは発動してる

のに効果がいつもより弱いな、なんてことが結構報告されています。おそらくマスクデータで何かが作用している、とwikiで説明されてました。公式の発表でも『より、リアルな競馬に近づけた』とされていきましたし、何かあるんでしょうね。全く競馬の世界は奥が深いぜ……

ま、そんなわけで今回のコメント返しはこれまでとさせていただきます。返信できなかったのもちゃんと全部見てるから、これからもどんどんコメントしてくれよな！

てなわけでお持たせしました。本編です。

前回は無事すべての試験を受け終えたところからでしたね。ここからはゲームの都合上、展開が速いです。通知を受け取ったらすぐに学園入学と、それまでの準備期間などはカットされているのでご容赦を。

▽試験結果が届いたようだ…

▽結果：合格！

筆記、面接、実技の点でよい成績を収めた！

ふうー、よかったですね、無事合格です。筆記や面接はできた感触は良くても実際は悪かったということもあるので一安心です。これで入学後のバフはいただきましたね。

スペちゃんもお母ちゃんと手を取り合って喜んでいきますね。あらスペちゃん、学校の先生にも連絡するの？ なら参考書のお礼もついでにオナシヤス！

そんなわけで時は流れて、地元を離れる時が来てしまいましたね。見送りに小学校時代の友人や先生方も来ているみたいですね。あ、も

ちろんお母ちゃんもいますよ。当分、もしかしたらこの育成中には帰省することがないかもしれないのでちゃんと挨拶しておきましょうね、スペちゃん。

……ん、お母ちゃんが何か話しかけてきましたね。

〽「スペ、お前はどんなウマ娘になりたい？」

お！ これは有名なあのシーンですね。答えは決まっているとも！

「私は日本一の…、ううん、世界一、世界一のウマ娘になりたい！」

「そっか…、なら全力で頑張っておいで！」

いやー、やっぱりいいシーンですねー、正直このシーンだけ切り取って実況なしで投稿したいぐらいです。担任の先生や小学校時代の友人たちからもエールをもらってますね。オラ、頑張ってトップに立つゾ！

では東京に向かいますよう、さらば我が故郷、待つてる新天地です。

さあ皆様お待ちかね、お祈りタイムです。ウマ娘の世界と史実の間軸がごっちゃになってるのは周知の事実でございますが、ここで皆様に謝罪しなければならぬことがあります。

こちらのゲームその時間軸を史実基準、アニメ基準など、色々と変更できるのですが、わたくしのガバでアニメ基準にしていたはずが、一部ランダムになっていました。本当に申し訳ありません。今回ランダムになってしまったのは中等部です。

育成キャラの先ほど説明したライバル枠は元のアニメ設定から変わりますが、それ以外の子は別です。本来ならスペちゃんの後輩

だったウマ娘が先輩になつてたりするかもしれません。

本当に申し訳ありません。これも全部スペちゃんを先輩呼びするサイレンススズカがどうにか見れないだろうかと設定いじくつていたこの指が悪いんだア！

それでなぜお祈りかといいますと、この同級生になるウマ娘たちが誰になるかदैだいぶ難易度が変わります。いくらライバル枠ではないにしても育成キャラが強ければ強いほど他のキャラも強くなつていきます。切磋琢磨している姿は美しくいいのですが、その分勝利するのが難くなる上に、レースでもらえる経験点などは変わらないという鬼畜スタイルなので……

願わくば同級生がライバル枠の4人だけでありますように……

〽東京に着いた！

そうこうしている間に到着したようですね。アニメとは違い、ここからレース観戦ということはないのでそのままトレセン学園に突撃します。それと安心してください、ちゃんとのちにサイレンススズカとのイベントはありますし、同室です。

ではトレセン学園に向かいましょうか……

さあ祈りましょう、同級生となるのはだれか。本日入学式ということもあり、校門入つてすぐで、ざわざわと集まっています。そこで気になるウマ娘、としてアナウンスされるんですね。

〽トレセン学園に着いた！

〽入学式だからか校門の近くにたくさんウマ娘たちが集まってる！

頼む三女神！　どうかライバル枠だけを……

〽いろんなウマ娘がいるみたいだ！

〽目の周りを隠すようなマスクをしているウマ娘がいた！

〽おしとやかそうなキレイなウマ娘がいた！

〽高飛車でお嬢様みたいなウマ娘がいた！

〈マイペースそうな銀髪のウマ娘がいた！

〈元氣いっぱいポニーテールの小さいウマ娘がいた！

〈どこかの令嬢みたいな薄紫のキレイな髪のウマ娘がいた！

〈シニカルガール、そんな感じのするクリスマススカラーのウマ娘がいた！

〈どこかカツコイイ髪の短いウマ娘がいた！

〈ツインテールで頭にティアラを載せているウマ娘がいた！

〈頭に王冠を載せた宝塚に出てきそうなウマ娘がいた！

〈どこかネガティブな感じのする発育のいいウマ娘がいた！

〈オレンジの髪を持つどこかおませな感じのするウマ娘がいた！

〈なぜか機械みたいな雰囲気があるウマ娘がいた！

〈青いバラを頭に乗せた自信のなさそうなウマ娘がいた！

〈ピンク色の髪を持つ楽しい雰囲気を持つウマ娘がいた！

〈青いツインテールを持つ逃げ馬みたいなウマ娘がいた！

〈たくさんの個性豊かなウマ娘たちがいて、これから楽しい学園生活になりそうだ！

（。ダ）…（つダ）ゴシゴシ（。ダ）…（。ダ）

…：はい、おめでとうございます。エルコンドルパサー、グラスワンダー、キングヘイロー、セイウンスカイ、トウカイテイオー、メジロマツクイーン、ナイスネイチャ、ウオッカ、ダイワスカーレット、テイエムオペラオー、メイショウドトウ、マヤノトップガン、ミホノブルボン、ライスシャワー、ハルウララ、ツインターボ
以上、16名、スぺちゃん合わせて17名の出走です。

こんななん心折れるわ…

PART 8

はいはい、皆さま、お世話になっております、投稿者です。

前回から皆様のお優しいコメントで元気づけられた私は帰ってま
いりました。

はい、正直失踪するか、最初からやり直すか、それとも入学直前ま
で戻して、同級生のリセをしてやろうかと色々考えました。

でもね、こんなにコメントいただいたちゃったら走り抜けるしかない
でしょうよ！

俺が止まんねえ限り、道は続く！ だから止まるんじゃねえぞ！

んじゃ、早速やっていきましょかね。

前回校門前で絶望した所からですね。ま、スペちゃんはたくさん
ウマ娘がいてウキウキしてますが…

入学式に参加するために移動しましょかね。

この後はちみつこ理事長とルドルフ会長のありがたい話が続きま
すので今後の方針などを説明していきたいと思います。ちなみ
にですが会長のお話の中にはいくつものダジャレが入っていること
で有名でして、最高記録は3分の生徒代表挨拶のなかで23のダジャレが
入っていたと報告されています。

一応わたくしもその動画を拝見いたしました。ものすごくニコニ
コして笑いをこらえながら挨拶している会長と式場がだんだんと凍
り付いていく様子がとても面白い物でしたね。皆様もよろしければ
ご覧になってください。

この式のあとはクラスごとの学校案内があり、そのあとで寮長によ
る各寮の案内がございます。この時にトレセン学園のマップが公開
されるんですね。トレーニングルームや各チームごとの部屋は何か
と覚えておいた方がいいので覚えておきましょう。

案内が終わった後は同室のスズカ先輩にご挨拶をして、夕食を摂つ
てお休みです。

さて、今後のスペちゃんの方針なのですが、同級生たちがヤバくても、ヤバくなくてもやることは決まっております。スペちゃんは現在、クラシック級に放り出されても十分勝てるステータスをしておりますが、調子に乗って喧嘩を売りに行くと最初はよくても後々でやられます。

このゲームのシステム上、プレイアブルキャラクターと交流しているうちにステータスが引き上がってくるのは周知の事実でございますが、これレースでの勝ち負けだけでなく、日々の交流でもちよつとずつ上がっていくみたいなんです。

なのでメイクデビュー戦までの授業として行われる模擬レースなどによるステータス上昇は仕方ありませんが、交流を深めることによるステータス上昇はいただけません。

他のキャラを育成しているときのことなのですがターボ師匠育成中、逃げ専用のスキルなどを取るためにミホノブルボンと放課後の練習などの交流を行っていたのですが、ライスシャワーのメンタルが木っ端みじんになりそうなスピードカンストサイボーグが出来上がっていました。あれは色々ヤバかったですね…

まあもつとヤバかったのはそれに追いつくために化け物になって同じくスピードカンストしてきたライスシャワーでしたがね、ほんとこの世界は修羅の世界だよ…

ま、そんなわけでレースなどによる他キャラのステータス上昇は諦めるしかないのです、それ以外の時間をどう過ごすのかですが、ズバリ、バイトです。

はい、視聴者の方々が驚いているのが浮かびますねえ、お願いですので驚きすぎてブラウザバックとかやめてくださいよ。

ま、なんでバイトかというと、スペちゃんを育成していくうちに大量の金銭が食事によって消え去るからです。このスペちゃんは「大食漢」という、「いっぱい食べる君が好き」なんて言ってる輩の財布を吸い尽くす、あのピンクの悪魔みたいな食欲をしているので食費がヤバ

いです。トレセン学園内では食堂を無料で利用することができ
ますが、それ以外は別。外出時に気が付いたら両手に大量の食べ物を持
てることなんてざらです。

しかもこの行動、プレイヤーが制御できません。所持金がどんどん
消えていきます。

スペちゃんちよつと食欲抑えてもらっても…、あ、だめですか。

お金の使い道は色々あり、トレーニング用品も自費で買わなければ
なりません。しかもいいものはかなり値が張ります。しかも確率で
壊れるので買い替えるために予備資金も欲しいところですよ。

レースで好成績を収めると賞金が出るのでメイクデビュー後は何
とかなりますが、それまでの半年間は全力でお金を稼がないといけま
せん。

それでスペちゃん、入学式中で悪いけど、今お財布にどれぐらいあ
るのか教えてもらっても…

▽現在の所持金：320円

…え、ちよ、なんで？ あなた小学生時代一銭も使わずにトレセン
まで来ましたよね。なんで半分以上使ってるんですか!? え、東京に
来てからトレセンに着くまでにおなか減ってたから色々買って食べ
た！

すいません、ちよつとログ確認しますね…

はい、確認の結果、空港に着いた時に空腹を感じていたらしく、お
いしそうで珍しいものを色々買って食べてみたそうですね…

まあ初めて東京に来たし、色々と目新しい物ばかりでおいしそうに
見えたんでしょうね…

しかも、トレセン内部では食費関係はほぼ気にしなくていいのも
あってほとんど使い切ってしまったみたいですね。

お祈りとかで倍速しながら飛ばし飛ばししていたのが仇となりましたね：

これは早急に仕事探さないと…

ちなみにですが本来なら高校生以上にならないとバイトなんかできませんが、ゲームの仕様上なんかできます。お願いだからそこんとこ突っ込むのやめてくれよな！

推測ですが時間軸がずれまくってるサザエさん時空なのでそういった年齢関係の話は制限が甘いのもかもしれませんね。

んじゃ、今回はこんなところで、次回は学園での授業か、バイトあたりの動画になりそうです。ではまたお会いしましょう。

【サイレンススズカ視点】

今日はなんだか人の出入りが多かったように思える。私は来月走る予定のレースのため定められたトレーニングをしていたため、気が付かなかったが、入学式の日だったらしい。

…
そういえば、エアグルーヴや寮長のフジ先輩からも聴いていたが今日入学してくる子が同室になるらしい。いったいどんな子だろうか

コンコン

「失礼します！ 入ってもいいですか！」

考えていれば、ちようどやってきたらしい。先輩らしく振舞わなければ。

「はい、入っても大丈夫ですよ」

「失礼します！ 初めまして、私、スペシャルウィークつて言います！ 今日からよろしく願います」

入って来たのは、元気そうなウマ娘だった。

私は自身の目を疑った。見た瞬間に思ってしまった、勝てるかどうかわからない、と。

これがまだ私の同年代や先輩方ならまだ理解できた、しかし、相手は入りたての新生。理性は不可能と叫んでいる、だがリギルで多くの才能と触れ合った経験は目の前の相手が強敵であると告げている。

「あの…、私、何かやってしまいましたか？」

いけない！ まだ挨拶すらしていなかった。さすがに後輩までに何か変なところがある人、なんて思われたくない！

何もなかったように、落ち着いて挨拶しないと…

「ごめんなさい、少し、ぼーっとしちやって。初めまして、サイレンススズカといいます。スズカって呼んでください。」

「スズカ先輩っていうんですね！ これからよろしくお願いします！」

「こちらこそよろしく申し上げます。そう言えばもういい時間ですし、食堂の案内も兼ねて、一緒に夕食はいかがですか？」

「わあ、一緒にですか！ うれしいです！ ぜひお願いします！」

私は彼女、いえスペちゃん（彼女にスペと呼んでほしいと強く希望された）と夕食を食べに行くことになった。彼女と一緒に食堂に向かいながら、私はこれからのことを考えていた。

スペちゃんは新生で私と互角かそれ以上、今のままでは近いうちに必ず追いつかれる。

彼女に勝つには何が必要だろうか、彼女が何を得意とするウマ娘なのかはわからないが、私が勝つ方法は一つしかない。速さを極めることだ。

極めるには今のリギル、東条トレーナーの下では不可能だろう、彼女が許してくれるとは思わない。ならば少し名残惜しいがどこかに移籍するしかない気がする。かといって私がしたいことをさせてくれるチームはあるだろうか、最近のトレーナー界の主流は東条トレーナーと同じ管理するタイプの人が多い。

どこがいいか悩んでいた時、食堂までの道に貼ってあるチラシが目に入った。はつきり言ってセンスがなく、勧誘するつもりがあるのか？という出来だったが、チーム「スピカ」か。

あまりいいかわさは聞かないが、確かあのゴールドシツプが所属していたはずだ、あれだけ自由奔放なウマ娘がそのままなのだ。もしかしたら自由に練習させてくれるかもしれない。

そう思った私は、明日の放課後すぐに見学に行くことにした。東条トレーナーからは止められるかもしれないが、こういうのは早ければ早いほどいいだろう。

その後スペちゃんも夕食をとったがあのおグリ先輩と同じぐらい食べているのではないかと思うくらい食べていた。

嬉しそうに、おいしそうに食べるのを見ると餌付けしているみたいで少しほっこりしてしまっただが、いつの間にかスペちゃんの隣に座ってたオグリ先輩とフードファイトをし始めたことには驚くしかなかった。

オグリ先輩もすごく強いし、もしかして食事は強さに直結するのでは…、そう思った私はいつもよりご飯を多く食べることにした。

ちなみにスペちゃんもオグリ先輩も食べ終わった後はスイカでも入っているのか、というほどに膨れていたお腹が次の日には何もなかったように引っ込んでいた。

この謎についてはあまり考えないようにする。

- (マスクデータを公開します。)
- (サイレンススズカのスピカ合流が早まりました。)
- (サイレンススズカのスピード成長率が大幅に増加。)
- (サイレンススズカのパワー成長率が微増。)
- (サイレンススズカのスタミナ成長率が微増。)
- (サイレンススズカのイベント『最速は譲らない』が発生しました。)

PART 9

なーんか前回から寒気がしますね…、体調を崩してしまいましたかね。色々大変な時期なので皆様もお気をつけて。んじや早速やっていますでしょうか。

前回は無事、スズカ先輩に挨拶できて、今日から授業という感じですね。

にしてもスズカ先輩、なーんか考えてる表情してましたね。時期的に次の月の頭ぐらいにアニメ1期、1話でのレースが始まります。なのでリギルトレーナーとの方針の違いについて考えてたんでしょうか？

ま、どつちみちスズカ先輩にはある程度関わって好感度を上げないと、沈黙の日曜日回避できなくなりますので積極的にかかわってきます。その時にいずれ解るでしょう。

ちなみにですが蟲毒と化した同級生たちとは違い、スズカ先輩はシニア級で参加できるレースでしか対戦しませんし、ある時期からアメリカに遠征なさるのでそこまで心配する必要はありませんね！

それで今日から始まる学園生活ですが、その前にトレセン学園に入学してどんなステータスになっているか確認しておきましょう。では、ドン！

▽スピード：D
スタミナ：C
パワー：C＋
根性：D＋
賢さ：E＋
▽総合学力：C＋
▽所持金：320円

という、感じですね。普通にクラシックでも戦える状態です。

ちよつと賢さが低めなのが問題ですけどね。

学力の方はD以上あれば、1年は大丈夫です。ゲームの仕様上、D以上あれば補習、再テストなどに呼ばれることはありません。しかし1年がたつと自動的に2ランク分減少するので注意が必要です。ま、普通に授業と課題をこなしていれば、1年で2ランク分上昇するのでほとんど心配する必要はありません。

まあ育成が進むうちにレースとかで忙しくなって、どうしてもおろそかになるから定期的に確認することが重要ですね。

はい、時刻は早朝、地元にいたときも朝からお手伝いとかしていたので、かなり早めに目が覚めましたね。ちよつと朝練するにはいい時間なので、この習慣をキープしていきましょう。

あ、ちよつとスズカ先輩が朝練しに行こうとしてますね。

おはようございます、スズカ先輩、今から朝練っスか？

「ッ！ お、おはようございます、スペちゃん。ごめんなさい、起こしちゃったかしら？」

ありや、驚かしてしまつたみたいですね。後輩を起こさないように静かに出ようと思つたのね、やっぱいい先輩ですな、スズカ先輩。あ、返事していませんでしたね。

大丈夫っスよ先輩！ 自分、実家農家なんで元から朝早いっス！

朝練頑張ってくださいね！

「ありがとうございます、それじゃあ行つてきますね。」

いつてらつしやいですが、スズカ先輩、朝飯は一緒に喰いませようや。

はい、そんなわけで同室のスズカ先輩が朝練に出発しました。RT A走者なら、今日から一緒に朝練しに行くんですが、私は明日か

らやろうかな、と思います。さすがになんも約束せず、急に一緒に走ってもいいですか！ と行くのは先輩に対して、スゴクシツレイなので注意していきましよう。

今日の就寝前に明日から一緒に走ってもいいですか？ と聞いて予定を入れておきましよう。

んじゃ、ちよつと時間が早いですし、朝食と一緒に食べる約束？もできたので今日は部屋の中にいましよう。

ズカ先輩が帰ってくるまでやることもないので寮内の探検でもしましようか。

お金があつたら、テレビを購入して、過去のレースなどを見て賢さを上げのことを考えましたが、320円じゃね何もできないね。バイトしてある程度稼いだら、買ってみましよう。

んじゃ、スペちゃん、寮内を探検しに行きましよう。

この早朝の時間帯で起きていて、寮内をうろついている人に会いに行きましよう。あ、つゴルシちゃんではないですよ！

▽「ん？ 君は…」

あ、ロビーにいましたね、ご紹介いたしましたましよう。エアグルーヴ閣下です。会長と副会長は朝の早い時間帯に生徒会の仕事とか、寮内の見回りとかをやっているの朝方寮内をうろついているとかかなり高い確率で会うことができます。ちなみにですが美浦寮の方でも早朝に会長がうろついているので何か相談があれば行ってみましよう。では、挨拶。アイサツは大事だと古事記にも書いてあるので、大きすぎず元気なアイサツをいたしましよう。

オッス、おはようございます、先輩！ アチキはスペシャルウィークと申すものでさあ！

▽「スペシャルウィークというのだな、よろしく頼む。私はこの学園で生徒会の副会長を務めているエアグルーヴというものだ。」

押忍！ エアグループ先輩よろしくお願いいたします！

〽「それでこんな早くにどうしたのだ？ 見たところ新入生のようだが…」

はい、それはですね。もともと早く起きる生活をしていたもんですから、時間が余ってしまつて、寮内を探検していたんです！

〽「…探検？ まあそれは結構だが、時間もまだ早い、他の生徒の邪魔にならないようにな。」

オツス、解りました先輩！ ちなみにですが先輩は何してたんですか？

〽「私か？ 私はさつきも言ったが生徒会に所属してはな、その仕事をしていたのだが自室では少し気が滅入ってしまったな。この時間ならここで作業しても他の者にも迷惑が掛からないと思つてな。」

おお、さすが副会長ですな。もしお邪魔じゃなかったら何かお手伝いさせてくださいえ。

〽「ありがとうございます。ほかの生徒に見せてはならない資料もあるから気持ちだけいただいておくよ。」

んじや、お邪魔ですし、あつしは他のところを探検しに行きます。先輩、失礼いたしやした！

〽「ああ、ではな。…ああ、そうだとスペシャルウィーク、もし何か困ったことがあれば教えてくれ。何か手伝えることもあるだろう。」

え！ いいんですか！ んじや早速で悪いんですが、私バイトをしたいんですけど、どこで申請したらいいんですかね、たしかバイトをするには学園の許可がいるはずだったと思うんですが…

「バイトか、なら今日の放課後に生徒会に来てくれ、許可証を用意しておこう。」

え！ いいんですか！ ありがとうございます！

「ああ、大丈夫だ。では、他の者に迷惑をかけないように。」

オッス、ありがとうございます！

はい、これでバイト許可が出そうですね。本来なら放課後などに生徒会で申請した後、次の日に発行されることになるのですが、個人的なつながりを持っていると、わざわざ生徒会に行かなくても何とかあります。時間短縮ですね。もう少し探索をつづけてもいいですが、これ以上うろついているとゴルシちゃんに発見される可能性があるのですね。すぐに自室に戻ります。

ゴルシちゃんはRTA走者などには忌み嫌われている存在でして、走者たちが命より大事にしているタイムやチャートのことごとく破壊していく存在として有名です。あんなかわいい顔して強いのに、やることなすことハジケリストなので、悪影響が出る個性や調子を絶不調まで下げたりと結構いやなイベントを引き起こしてきます。

なんかプレイヤーがっているキャラに対してのあたりが異常に強いので第四の壁突破してんじやねえかこいつ、なんて言われていますが、まあゴルシちゃんだし…

色々話しているうちに無事、自室に到着しましたね。

そろそろスズ先輩も帰ってきそうですね、今回はこれぐらいにし

ておきましようか。

思ったより進行が遅い気がするので、次回からはちよつとペースを上げていきましようかね。

今回は初めての授業と同クラスとの交流、同級生たちと初めての模擬レースという感じになりそうです。

ではまた、次の動画でお会いしましょう。

【エアグリーブ視点】

今日は面白いウマ娘にあった。あのようなやつは天然というのだろうか、新生が寮内を探検していた。

スペシャルウィークというらしく、元気なやつではあったが、普通ではないだろう。

あの後、なにか問題や苦情が来た、ということはなかったので大丈夫な者かもしれないが、ゴールドシップのこともある。少し、気にかけておいた方がいいかもしれない。

彼女が求めているバイトの許可証、彼女の母校からの資料や面接時の成績を見る限り、問題はなさそうであり、教員からの許可も出たので発行しているところだが、本当に出しても大丈夫なのだろうか。

彼女もまだ入学したばかり、一人だと色々大変だろう、お目付け役も兼ねて誰かに面倒を頼んでみるか…

面倒見がよく、バイトをしている者といえば…、アイネスフウジンはどうだろうか、あいつならば十分に頼むことができるな。あとで相談してみるとしよう。

その後、アイネスフウジンが快諾してくれたため、不安要素が一つ減り、安心していたところ、スペシャルウィークがゲートをくぐったあの天然のサイレンススズカと同室ということに気が付き、要注意のリストに彼女の名前が載ったのは言うまでもないことだ。

PART 10

オッス、オラ投稿者！ いつもコメントワクワクしながら読んでっぞ！ いつも応援ありがとうございます。

今回からペースを上げていきたいところですが、まだまだイベント盛りだくさん。

今日はちよつと長くなつたとしても前回決めた、初日授業と模擬レースまでやっていくのでよろしくですよ。

現在はスズカ先輩と雑談しながら朝食中ですね。スペちゃんはいつも通りのドカ盛り、スズカ先輩はいつもよりちよつと多い食事ですね。いっぱい食べるのはいいことですが、スペちゃんはちよつと抑えてくれるとありがたいんですけどねえ。

前々回の裏でやっていたオグリキャップ先輩とのフードファイトのせいかな、食堂の方々からすごい警戒されながらのお食事ですが、ここで特になにかイベントは起きることはないでしょう。

まあ、関係を持つてるのがスズカ先輩、エアグルーヴ閣下、オグリキャップ先輩ぐらいですから、そんなものでしょう。これからスペちゃんはどんどん交友関係を広げていくので、どんどんイベントも起きやすくなると思います。未来のスペちゃんに期待ですな。

んじや、飯も食べたし登校しますか。スズカ先輩と別れて、自分の教室に向かいますよ。

と思いましたが、大事なことを忘れてたので教室に行く前にそつちを済ませます。

というわけでやってきました三女神像の前。ここで継承を済ませてくださいませ。

アプリ版とは違い、すぐにステータスが上昇するわけではないですが成長率にバフがかかるようになるシステムです。また、本来ならそのウマ娘と仲良くなり、スキルを教えてくださいるまでの好感度を上げるな

くってはならない固有スキルのもいただけます。

まあこちらでもアプリ版と違いました、例えばこの会長のスキル、【汝、皇帝の神威を見よ】ですが、グレーになっているのが解ると思います。こちらの状態は、そのスキルを習得するのに必要なきつかけは得たが、技術としてはまだ使い物にならない、という状態です。これを使えるようにするには、スキル習熟練習や、実際にそのスキルの使用者を観察することで経験値を溜めていく必要があります。

ま、解りにくかったら、すぐに結果は出ないけど後々大切になってきますぜ、という感じで大丈夫です。

んじゃ三女神像の前でお祈りをしまして：

- ▽シンボリドルドルフから【汝、皇帝の神威を見よ】を継承した！
- ▽シンボリドルドルフからスピード補正を継承した！
- ▽シンボリドルドルフから芝適正を継承した！
- ▽デーパーインパクトから【空駆ける英雄】を継承した！
- ▽デーパーインパクトからスタミナ補正を継承した！
- ▽デーパーインパクトから差し適性を継承した！

シンボリドルドルフとデーパーインパクトの走る姿をスペちゃんが幻視いたしましたして、継承終了。

ちなみにですが、アプリ版と違い、現在進行中の幼少期から育成を始めていくシナリオは継承は一回だけなのでご注意を。

無事、継承も終わりましたので教室に向かいますようか、確かC組でしたね。

出来れば同じクラスのこはライバル枠以外で、ティアラ路線を進むウマ娘がいいんですが、多分無理でしょう。

諦めて頑張っていくしかありませんな。

アニメ版のスペちゃんはちよつと失敗してしまいましたが、今回は私があるので大丈夫。完璧に初対面の方々に対して失礼ではない上に、覚えていただける、RTAでもよく使われる初めての挨拶の仕方

をお教えいたしましょう。

ちょうど教室の中に十数人のウマ娘がいるのが解りますね、ちょうどいいです、行きますよスペちゃん！

まず、ドアの取っ手に手をかけて精神統一、この時にこのドアがどうすれば開くのか、確認しましょう。今回は引き戸ですね。

次に開ける方向に向かって力を溜めます。

その次は勢いよく、ドアを開けましょう。この時にドアを壊さないよう、力を掛け過ぎないこと、勢いよくやりすぎてドアが閉まってしまわないことに気をつけましょう。音が大きいほどgoodです。

最後にその音に驚いてクラス中の視線がこちらに集まった瞬間に大きすぎず、しかしクラス中に聞こえるように、ニツコリ笑って、クソでかアイサツ！

「おはようございますー！」

はい、スペちゃんよくできましたね。あとは静かに黒板前に貼つてある紙を確認し、自分の席に向かいますよう。普通なら完全にヤベー奴扱いされるところですが、ここはトレセン学園。個性があふれ出している場所なので、すぐに人が集まって……

あれ、来ませんね……

もしかして私、やっちゃいました？

いや、確かに好感度の稼ぎ過ぎは、同級生の成長を促してしまうから控えめに行きたいよ！ でもね、スペちゃんがボツチになるのはやめてください！ スペちゃんの精神衛生上にもやばいんですよ！

あ！ ほらスペちゃんもやらかしてるの解ってるから、自分の席に座って顔真つ赤だよ！ 誰か、誰か来てくれ！

く「わく、すごい大きな挨拶だね！ 私、びっくりしちやつた！」

あつ！ この声は！ あの素敵な silhouette は！
ハルウララ！ ハルウララです！ 私たちの希望！

ハルウララにつられて、他のウマ娘たちも集まってきました。
やった！ ハルウララのおかげでポツチ化回避！ 第3部完！

ま、ふざけるのは大概にして同じクラスの子たちを確認していきま
しょう。

では、左から行きましょう。

＜「初めまして！ ワタシ、エルコンドルパサーって言いマース！

エルって呼んでくだサーイ！」

＜「グラスワンダーです。よろしくお願いします。」

＜「キングヘイローよ、覚えておきなさい！」

＜「セイウンスカイだよ、よろしくー」

＜「ターボもびっくりしたぞ！ ターボはツインターボっていうん
だ！ よろしくなっ！」

おっ！ ライバル枠の皆さんにウララとターボ師匠ですか！

ライバル枠の皆さんはクラスが一緒になりそうな気はしていまし
たが、この二人は予想外でした。

申し訳ないですけど、結構いい引きですね！ いやー、今後見どこ
ろが少なくて悪いな視聴者の諸君。

では、こちらもニンジャの礼儀でお返ししましょう。ドーム、ウマ
娘のミナサン、スペシャルウィークです。

スペと呼んでください。

と、無事に友達ができそうなスぺちゃんを裏に、ちよっとお話。

現在、スぺちゃんたちは、今日は各授業のガイダンスとか、チーム
に所属するための手続きとかを説明されると思いますが、ちよつと違
います。

上記のことは、ちゃんとしませんが、イベントがもう一つ。クラスの
面々の実力を図るため、担任主催の模擬レースが行われます。どこぞ
のアカデミアは入学式でしていましたが、こっちの方が一日遅れな

分、やさしいですね。ちなみにですが、担任を任されるような教師陣は大体トレーナーの資格を持っているそうなので、放課後に話を聞きに行く簡単な指導ぐらいはしてくれそうです。チームに何らかの理由で所属できなかったとき用の救済処置ですね。

お、話しているうちに、いつの間にか授業が始まっていますね。真面目に受講しているスペちゃんの裏で今度はチームの説明でもしましょうか。

こちらのゲームはどちらかというアニメよりなんだなあ、と視聴者の皆様の方々は思っているかもしれませんが、ちよつと違いました。アニメ版とアプリ版が両立している形になっております。なのでスピカやリギルといった有名チームもありますし、一対一で指導するタイプのチームもございます。

基本的にこちらから何かアクションを起こさない限りはアニメ版のようにウマ娘たちが所属していきます。今回は別にIFチームが見たい、といった目標はありませんので動く予定はありませんが、視聴者の皆様方が望むのであれば、やってみようかな、と思ってるのでコメントください。

もちろん、チームごとに育成力の差がありまして、スピカとリギルが同じくらい、ちよつと落ちてカノープスというような感じですよ。たまたま、新人で化け物みたいな育成力を持ったトレーナーとかいますが、見つけることがほぼ不可能なので、今回は自由度が高く、しかも育成力の高いスピカに所属していきたいと思えます。

前回のパートにて寮内探検をしていた時に発見したのですが、例のとても個性的でバッチグー、なチラシが張り出されていきましたので、おそらく現在はゴルシちゃんだけのチームです。なのでリギルみたいにテストを受ける必要もないので、簡単に所属することができま

す。ま、他にも理由がありまして、リギルに所属することは、現在のスペちゃんからすれば簡単であり、実はおハナトレーナーに見つかるスカウトされる程です。実際試走でもされてました。

しかし、何回か走った結果、リギルに所属しているとエルとグラスがえらいことなつて、アルティメットスペちゃんですら負けることをわからされたのでしません。気が付くと前に二人が走ってたとか普通にありましたからね…

なんでスピカに所属する必要があつたんですね。ま、その代わりにテイオーやマックイーンと勝負する必要が出てきますが…、おそらくライバル枠でないことから成長率も幾分かましでしょうし、何とかなると思います。

お、ちょうど授業でもチームの説明なんかをしてたみたいですね。担任の先生が話してます。

ちやうど模擬レースを行うことを話してたみたいですね、皆さん驚きながらもワクワクしているのが解りますね。

スペちゃんもレースができると知って大喜びですね。

知ってるかい、このスペちゃんクラシック級の実力があるのにレースで走ったの入学試験の一回だけなんだぜ…

じゃけん、体操服に着替えて移動しましょうかねえ、場所は共用レース場で行うみたいです。

はい、つきました。皆さん体操服に着替えて集まっていますね。これから順番にレースしていくみたいで、先生がやる気を出させるためか、いい結果を出したのものには各チームへの推薦状を書いてやる、と言っていますね。

周りもやる気だしてきたね、スペちゃんもフンスフンス言ってます。スペちゃんそれそんなに必要ないよ…

それでこの模擬レースですが、規模は芝のrダートの右回りの1200m。芝状態は良、ですかねちよつと前回と比べて距離は伸びまし

だが、スペちゃんなら余裕です。

前回は先行策で行きましたが、差し適性成長補正が継承で手に入りましたので、差し策で行きましょう。このレースの結果でもらえる経験点は少なめですが、負けるのは癪なので本気で行きましょう。

出走者は……、ウララちゃんとモブウマ娘の皆さんみたいです。ウララちゃん君、ダートじゃなかったですか……？ まあいいか、ウララちゃん、同じ差しウマとして頑張らしましょうぞ！

【ハルウララ視点】

今日から私もトレセン学園生！ いっぱいお友達を作って、いっぱいレースするんだ！

初めてのクラスでも、もう一杯友達もできた！

マスクをつけたエルちゃん、キレイなグラスちゃん、お嬢様のヘイローちゃんにセイちゃん！、あとターボのターボちゃん！

あとすごく大きな挨拶をしたスペちゃん！

みんないい人ばかりで楽しい学校生活になりそう！

そう思っていた時に、担任の先生が今からレースをしてくれるみたい！

みんなでレース場に向かっているときも、レースをみんなで見てる時もすごく楽しかった！

それで、やっと次は私たちの番みたい！

一緒に走る人たちの中で知ってる人は……、あつ！スペちゃんがいる！

「スペちゃん！一緒に頑張ろうね！」

「あつ！ウララちゃん！頑張らしましょう！」

スペちゃんも走るのがすごい好きみたい、あとでスペちゃんから聞いたんだけど、住んだところでは他にウマ娘がいなかったからレースをそこまですることがなかったみたい。

私もこんなにきれいな芝で走るのは初めてだったから初めてどう

しだったんだね！

そんなスペちゃんはゲートに入った瞬間にちよつと変わった気がした。

それまではなんだかぼわぼわした感じだったけど、急にビシッ、とした感じになった。

私もみんなもちよつと驚いちゃったみたいで少しだけスタートに遅れちゃった。

スペちゃんの作戦はさいごに後ろからビューンってする、つもりみたいだから先頭に立つ気はないみたいだけどすごいきれいなスタートだったと思う。

他のみんなはスペちゃんに追いつこうとしてる子と、先頭になろうとしてる子がいて、すごい頑張つて走つてたみたいでしんどそうな感じだったけど、スペちゃんからは全然そんな感じはしなかった。

私も頑張つて追いつこうとして走つたけど、うまくいかなくて後ろの方を走つてた。

結果はスペちゃんが直線ですごいスピードを出して一番だった。先生が言うには10ばしん？ぐらい離れてたみたい。

他のみんながスペちゃんを追い抜こうとして、頑張つてたせいとか、疲れてたみたいで直線で力をうまく出せなかったみたい。

私はなんだかキレイな芝で走るのには苦手だったみたいで最後までうまく走れなくて、最下位だった。

けど、みんなと走れてすつごく楽しかった！

スペちゃんもすつごく楽しかったみたいで、レースが終わった後にスペちゃんと一緒にはしゃいじゃった！

スペちゃんがすつごく楽しそうで、うれしそうだったからなんでかっ
て聞いてみたら

「誰かと一緒に走れるのがすつごく楽しいです！ それで一番にも成れたからすつごくうれしい！」

って教えてくれた！ 先生もすごくスペちゃんのことをほめてたし、私の新しい友達はすごかった！

私も誰かと走れるのはすごく好きだったけど、一番になってスペちゃんみたいに誰かに褒められたと思うた！

だから、この学校で一杯練習して、もっとたくさん走って、スペちゃんみたいにもっとレースを楽しみたいと思った！

それと心配だったんだけどエルちゃんやグラスちゃん、ハイローちゃんにセイちゃんたちがすごい怖い顔してたけどどうしたのかな？ お腹でもいたかったのかも…、あとで大丈夫か聞きに行こう！

(マスクデータを公開します。)

(エルコンドルパサーの成長率が増加しました。)

(グラスワンダーの成長率が増加しました。)

(キングヘイローの成長率が増加しました。)

(セイウンスカイの成長率が増加しました。)

(既定の四人の成長率が増加し、レースで圧勝したため条件が達成されました。)

(特殊イベント『栄光の世代』が発生しました。)

(エルコンドルパサー、グラスワンダー、キングヘイロー、セイウンスカイの成長率がさらに増加します。)

(ハルウララの成長率が微増しました。)

(ハルウララが一番に興味を持つようになりました。)

(学園内のプレイヤーアブルトレーナーがハルウララに目をつけスカウトしようとしています。)

(ハルウララの固有イベント『目指せ一等賞』がプレイヤーアブルトレーナーの影響で『目指せ有馬の一等賞』に変化しました。)

PART 11

なーんか新たに走者が増えた気がしますねえ、な実況プレイやってくよー！

まあ正確にはわたくしRTAを嗜んではおりますが、こちらの動画はRTAではないのでご注意ください：

でも私以外に同条件で同目標を走っている人、見たことないので完走した時に実質一番：

つまりRTA？ ま戯言はほつといて本編行きましょう。

いやー、大差、大差の大勝利。無事に勝利しましたね。みんなでスペちゃんを称えましょう。

まあデビュー前にクラシックレベルの子が負けたら、大問題ですからね。「太り気味」でない限りは大丈夫でしょう。

そういえば「太り気味」の最大デメリットについて話してなかった気がするのでいまさら説明します。ご存じの通り体重が増加して、走りにくい状態のことを指し、練習で手に入るはずのスピード経験値が0になるいやなやつですが、こちらレースにも影響します。腹が重くて動けねえ…、というやつですね。

このスペちゃんは非常に健啖家、「大食漢」なのでよく引き起こすので注意が必要です。

「本当の敵は諦めではなく、体重だ！」

ま、説明はこれぐらいで、適性外なのに一緒に走ったウララちゃんを称えながら、一緒に見学の方に回りましょう。お、次走にはターボ師匠が出走するようなのでいせんが、それ以外のライバル四天王の皆様がいらっしやいますね。

…はい、お目目が怖いです。これはスイッチはいっちゃったみたいですねえ。闘争心があふれ出てます。なんかオーラみたいなのでるし…。

では覚悟きまっちゃった子たちから色々聞きだされてるスペ

ちゃんを裏にライバル枠の4名がどうなっていくか説明していきたいと思います。

試走時のデータを参考にしながら説明していきましょう。

エル、グラス、ヘイロー、セイの四名は通常なら史実と同じルートを通りますが、スペちゃんをライバル視した場合、基本GⅠでスペちゃんに勝負を挑んできます。それだけならかかって来いといえるのですが問題が一つ。

ステータスがこちらに迫っていることが多いです。

例えばこちら、菊花賞でのセイウンスカイと試走時のスペシャルウイークですが

セイウンスカイ		スペシャルウイーク
∨スピード：B+		∨スピード：C+
スタミナ：C+		スタミナ：B+
パワー：D		パワー：A
根性：C+		根性：B
賢さ：B+		賢さ：C+

とこのように、スペちゃんが埋もれてしまったりすれば差し切れなかった相手でした。ちなみにですがセイウンスカイの入学時ステータスはオールG+といえ、この成長がヤバいことを理解していただけるかと。

んで何度か試走してわかったことですが、基本的に彼女たちはジュニア級では何もしかけてはこないです。メイクデビュー後もちよつとした調整としてGⅡ、GⅢを走るぐらいしか確認していません。

なので本格的にやりあうのはクラシックとなります。それまでにはこちらも十分以上に仕上げる必要があるので頑張っていきたいところですね。

はい、では模擬レースも終わり、放課後になりましたのでエアグ

ルーヴ先輩にバイト許可証を頂きに生徒会室に行きましよう。ちなみにですがライバル枠からスペちゃんが強理理由は才能と意味わからん努力という風に落ち着いたようです。まあこのスペちゃん小学一年生から準備してますもんね。

んじや、生徒会室に向かいましようかね。

オツス、失礼します！ エアグループ先輩はいらっしゃいますか！

〽「ああ、スペシャルウィークか。すまない、今少し作業中でな、ちよつとだけ待ってくれ。」

オツス、解りました！ んでそちらにスペちゃんの知らない人が二人いますね。もちろん私は知っていますが、自己紹介はしておきましよう。オツス！オラ、スペシャルウィーク！ 新入生でやらしてもらっています！

〽「入学式以来かな？ この学校で生徒会長を務めさせてもらっている。シンボリルドルフだ、よろしく頼むぞ。」

〽「元気いっぱいいいね！ あたしはアイネスフウジン、よろしくなのー」

シンボリルドルフ会長にアイネスフウジンの姉貴ですね！ 今後ともヨロシクオネガイシマス!!

〽「うむ、よろしく。……スペシャルウィーク、間違っていたらすまないが過去にあったことはあるか？」

いえ、お会いしたのはこれが初めてのはずっス！

〽「そうだったか、すまない。私の思い違いだったようだ。」

いえ、大丈夫っス！ まったく構わないっス！

「……こんなものか、よし。スペシャルウィーク、アイネスフウジン、すまないがこちらに来てくれ。」

お、呼ばれましたので行きましようか。

「スペシャルウィーク、今朝言っていたバイト許可証だ。トレセン外での身分証明代わりにもなるからなくさないように。それと学園と提携している場所では、学生証と許可証をお世話になる場所に渡せばそれで大丈夫だから覚えておいてくれ。詳しいところは私より、アイネスフウジンの方が知っているだろう。アイネスフウジン、後は頼んでもいいか？」

「うん、大丈夫なの。じゃ、さっそく行こうかスペちゃん！」

お、思ったより早く終わりましたね。さすがエアグルーヴ先輩、仕事が早い。感謝感謝です！

ではシンボリドルフ会長、エアグルーヴ副会長、お忙しいところ失礼しました。退室いたします！

「いやー、スペちゃんも入ったばかりなのに大変なのね。何か困ったことがあったら、何でも言ってね。」

押忍！ ありがとうございます、姉貴！

「うん、いいお返事！ それじゃスペちゃんのために学園内外でのバイトについて説明しちゃいましょう！」

はい、ありがとうございます姉貴！

んじゃ私は姉貴がスペちゃんに説明している裏で視聴者の皆様に解説させていただきます。

トレセン学園でのバイトは学園内部でのものと、学園外部でのものです。まあさらに細分化しますが、それはあとで。学園内部のものは体力消費が少なく、入手金額も低いですが、代わりにバイト中に関わった生徒たちとの好感度が上がりやすくなります。学園外部は入手金額が多い代わりに消費体力が多いです、またウマ娘としての知名

度が上がりやすくなる、といった効果もあります。今回は完全に金メインなので外に稼ぎに行きましょう。

というわけで姉御、アチキはお金乞食なんで外でおねげえしますだ。

「なるほど、外部かあ。うんわかったなの！ いつもお世話になっているところでスペちゃんにちようどよさそうな場所があるの！ 今から行こうと思うんだけど時間は大丈夫？」

おう！ 早速！ さすが姉御、仕事ができる。予定がなかったわけではないけど、優先度はバイトの方が上なのでぜひオナシヤス！

というわけで連れてこられたのはボウリング場。姉貴はこの受付のお仕事をお勧めしてくれるみたいですね。しかもなんと、ひと月ぐらいは姉御がここでバイトしてるみたいなんで面倒見てもらえますね。

んじや、早速バイトしていきますか！ 内容的には受付とシューズ貸出、後はボール磨きみたいですね。

成長するステータスはパワーと根性が微量、お給金はトレセンと提携してるので時給2000円ですね。

実際高いですね…、都内にしてもおかしいです。まあ理由はトレセン提携店はお給金の半分をトレセンが学生への補助として出してるからなんですね。理事長が勉強やレースに少しでも集中してもらえるように、このことでお金を出してるみたいです。

ま、もらえるもんはもらつときましよう。実際色々お金かかりますからねえ。

んじや今回はここまで、初めてのバイト頑張ってるスペちゃんを背にお別れです。ではまた次の動画で。

【シンボリドルフ視点】

今年も桜が咲く季節となり、トレセン学園にも新たな仲間たちが入

学してきた。未だ、入学したばかりの生徒たちであり、誰が飛び出してくるかはわからないが、才能ある子たちばかりであろう。

まだ名も顔も知らない子ばかりであるが、3名だけ気になる者たちがいる。

1人目はトウカイテイオー。昔、私がレース後記者会見を受けていた時に関係者以外立ち入り禁止なのにも関わらず、入ってきて私に思いを伝えてくれた子だ。あの子にはなぜか私を超えてくれるという確信に近い思いがある。なにが理由で私がそう感じているかはわからないが、入学試験時のレースを見る限り光るものがあるのは確かである。

もう一人はスペシャルウィーク。先ほど生徒会室にやってきた者だ。エアグルーヴによれば、何でも入学してすぐにアルバイトの申請をしたものらしい。色々心配なのでアイネスフウジンをつけるようだ。アイネスフウジンはその道に詳しく、その判断に間違いはないと思うが、疑問には思わなかったのだろうか？

彼女の肉体がすでに完成しかかっているのを。ほんの2,3の会話しかしなかつたが、その力量はすでにクラシック級に出走している者たちと遜色ないように見えた。未だデビューすらしていない者がだ。

これが才能というものなのだろうか？ 現役時代も自身を超える才能は多く見てきた。生徒会長としてこの場に立ったのちも多くの才能を見てきた。

彼女は私が見たものの中でも別格であるといえる。

しかもあれは一つの形として完成しているのであり、成熟しているのではない、ということだ。まだ彼女は成長を残している。未恐ろしいものだが、いつか戦ってみたい、そう思えるウマ娘だといえるだろう。

最後にハルウララ、名前は後で調べたものだが彼女が一番気になっているものかもしれない。

ちよつとした用得三女神像の近くを通つたのだが、彼女とそのト

レーナーらしきものが三女神像前で祈りを捧げていた。それだけなら信心深いもので終わったのだが、次の瞬間、

彼女の力量が大幅に増加した。

思わず足を止め、凝視してしまった。先ほどまではあまり特筆するものがないウマ娘だったが、今は彼女の同世代の中で頭一つ抜けているほどの力量だ。

彼女は神に愛されているのだろう。そうとしか考えられなかった。

トウカイテイオーよ、お前の世代は必ず荒れるだろう。どうか折れずに自身の道を進んでくれることを祈ろう。

それとなのだが、なぜハルウララのトレーナーは黄色いT字の被り物をしているのだ？

PART 12

そろそろ挨拶のレパトリーがなくなってきた投稿者です。早速やっつけていきましょう！

前回はスペちゃんが初バイトをしているところでしたね。バイト終わりはスペちゃんにトレセン学園まで全力で走ってもらったので何とか彼女が買い食いをすることは防げました。

ですが、商店街の入り口を通るときに完全にペースを下げておいを嗅いでましたので最大限の注意を払わなければいけなさそうです。スペちゃんそれトレーニング用品とか買うように必要なお金だからね！ 使っちゃダメなんだよ！

そのあとはスズカ先輩と夕食を一緒に一緒に就寝。現在授業終わりの放課後でございます。

それにしてもなんかスズカ先輩のご機嫌がよかったような気がします。さすがなんかいいことあったんですかね？

それでは早速スピカの自室に参りましょうか。予定では昨日チームに参加する予定でしたが、バイト関連が思ったより早く進み、現在の所持金が致命的だったのでそつちを優先しました。

ちなみにですがチームに参加せずからふらしている確率でゴルシちゃんにドナドナされます。ご注意ください。

授業中のスペちゃんたちの様子を見る限り、交友関係にヒビが入っている、なんてことはなさそう。周りからは頭一つ抜けている同級生と思われるぐらいのようです。ひとまずは安心ということですねえ。

さて、スピカの部室に向かっている途中ですが、なぜ今日にしたのかというと、単純に早ければ早いほど指導を受ける時間が増えるので早く入った方がよい、ということと、隣のクラスからマックイーンの叫び声が聞こえて来たからです。チャートブレイカーのゴルシちゃんがマックイーン勧誘に入っているのが解りますねえ、これは。

ゴルシちゃんはいつかは必ず会わなければなりませんし、色々と面

白い上に好感度を稼いでおくと育成的にウマ味（ウマだけに）なので積極的に交流するつもりではありませんが、今接触するとスペちゃんがスピカに入るのを嫌がるかもしれませんので、後々ということでご容赦を。

ちなみにですが、走者の方々はゴルシちゃんのイベント関連はタイム的にまず味なので行かないだけであって、内容は面白いものが多いので誤解しないように。

んじや、早速部室に到着したので入室してみますか！ ノックノック、どもー、入部希望者です。入ってもいいですか？

「はい、どうぞ〜」
ん？ なんか女性の声でしたね。この時期はゴルシちゃんとスピカトレーナーしかいないはずですが。なんか裏でイベント起きてたんですかね？

では失礼して、ってスズカ先輩！

「あらスペちゃん！ いらつしやい！ スペちゃんもこのチームに参加するの？」

ええ、はい。なんか自由そうな感じがしたので。そっちの方が楽しめかなあ、と思っに入ろうかと思っただけです。スズカ先輩って確かにギル所属じゃなかったでしたっけ？ ほらすごく早そうですし、おすし。

「ふふ、自由そうな所よね。けど面白くていいチームだと思うわ。」
「確かに、私はリギル所属だったけど、やめてきちゃった。何故？
そうねえ、方針の違いかしら。リギルは完全に管理する方針だったけど、ちよつと私にはあつていなかったみたいで…、だから今は自由にやらせてもらえるスピカに所属させてもらってるの。」

ほへー、そうなんですわ。いやスペちゃんの影響でスピカに所属するのはわかってましたが、こんなに早く移籍することがあるんですねえ。スズカ先輩の話しぶりから結構移籍してから時間たってるの

かな…？

移籍した時期はわかんないですけど、スペちゃんが理由にならずに移籍するパティーンは初めて見ました。

それでなんですけど、確かチームに所属さしてもらうには担当トレーナーの許可が言っただけです。見た感じスズカ先輩じゃないんですけど…

「あの人ならちよつと席を外しているわ。もうちよつとしたら戻ってくるはずだけど…」

現在、離席中みたいっすね。なら部室でちよつと待たせてもらいましようか、ってん…？

「太ももに何か違和感がある…」

「誰かに触られているようだ…」

あつ（察し）

「非常に引き締まっていて、弾力も申し分なし…。肉の付き方からして先行…、いや差しがメインだな。この学園にまだこんな逸材が眠っていたとは…」

なーんか触りながらぶつぶつ呟いている不審者がいますねえ！

スペちゃんが思いっきり蹴ろうとしてますがかわいそうなのでやめさせましょう。代わりに汚物でも見るような目で変態呼ばわりしてあげましょうね！

「うぐっ、蹴られるよりもそっちの方がきつい…」

「自身の行いを振り返ってみては？ トレーナーさん。」

お！ スズカ先輩！ トレーナー呼びということは…！

「はい、この変態がスピカのトレーナーさんです。」

「いや、変態呼ばわりはやめてほしいんだが。」

「入部直後の私の足を狙った方はどなただったかしら？ お次は

スペちゃんですか？」

はい、こちらでスズカ先輩に怒られているのが皆様ご存じスピカトレーナーさんです。基本的に第一印象が変態な可哀そうな人ですね、作中ではトップを争うほどの育成能力なのですが、まあ仕方ありませんね！

ちなみにですがこの方、パワーカンストした足で顔面を蹴つても鼻血ですみません、お前ほんとに人間か…？

〽「それで、君はスズカの友人か？ 入部希望者なら大歓迎だが…。」

ほい！ スズカ先輩の同室で新生のスペシャルウィーク、ついでうもんでさあ。スペって呼んでください！ このスピカに末席に加えていただきたく！

〽「新生！ てつきりスズカの同学年かと思ったが…。」

〽「すごいですよね、スペちゃん。」

いやー、スペちゃんを褒められるのは照れますねえ、んで、あたい入っていいの？

〽「ああ大歓迎だ！ ようこそスピカへ！」

ではではちよつと時間が飛びまして、こちらはスピカの練習場でございます。トレーナーが現在の實力を見たいということをやつてきたわけですね。スズカさんも一緒ですが、今日は彼女は走らないみたいです。

じゃけんタイムアタックしましょうねえ！ 芝・右回りの距離2000、やつとスペちゃんの適性距離で走れますね。ちなですが、距離は好きな距離でいいといわれたので、2000にさしていただきましたまし

た。

ではイクゾー!

デツデツデデデデン! (カーン!) デデデデデン!

ほい、ゴール! タイム的にはよかったんじゃないですかねえ!

トレーナーさんもスズカ先輩も驚いてますねえ! これはいい感じなのでは!

<「これは……、ひどいな。」

<「ひどいですね。」

え! 何ですか! 結構いいタイム出てたんじゃないですか!

<「ああ、タイムはいい。新入生なら恐ろしいぐらいだ。」

<「だが、フォームがでたらめすぎる。今は自身のパワーで無理やり動かしてる感じだな。」

マジですかあ…、スペちゃんもちよつとしょんぼりしてますねえ。

まあ、それもそのはずでして、スペちゃんの周りには幼少期からウマ娘なんていませんでしたし、走り方の矯正を行ってくれる人なんていませんでした。この油をさしてないガチガチの精密機械をパワーと根性で何とか動かしていた、というのが現状ですね。

本来ならこんなこととしていたら体がボドボドダア、なんて状態になりかねないんですけど、それは最初の個性ガチャの時に手に入れていた影の薄い「鉄人」クンが仕事してたんですねえ。いい仕事するなあ、君は。

ま、それでも限界はあるので早めにトレーナーに見てもらって修正する機会が必要だったんですね。(大始祖の構文)

走り方の矯正は結構時間かかりますので、フルで時間を使って半月。スペちゃんの場合はバイトやら賢さ上げの作業などがありますので一か月半ほどかけてじっくり変えていきましょう。ほかにしたいこともありますね。

ではトレーナーさんやスズカ先輩に走り方の矯正を受けているスベちゃんを眺めながら、今回はここまでとなります。ではまた次の動画でお会いしましょう。

【スピカトレーナー視点】

今日はスピカに新メンバーが入った。昨日のサイレンススズカに続いて非常に幸先がいい。ゴールドシップにはかなり馬鹿にされたが、やはりあのチラシは正解だったに違いない。

スズカのことはおハナさんからも頼まれ、色々と資料をいただき、彼女の強い希望である逃げウマ娘としての成長はある程度は何とか出来ると思う。逃げの戦法を取り続けることは体に強い負担をかけるしまうのでそれに強く気を付けておくことにする。

問題は今日入ってきたスペシャルウィークだ。あいつは素人がよくする間違った走り方をしていたが、それでも異常なほどの速さだった。彼女が意識しているかはわからないがジュニア級中距離のGI、ホープフルSと同じ距離で走っていて、おそらくだが今走ったとしてもレコードは余裕だろう、というほどのタイムだった。

今、スズカに教わりながらスペに矯正させているが、少し時間がかかりそうだ。まあ走り方を一から変えるようなものだから仕方ないだろう。

矯正後を100とするならば、矯正前はよくて75といったところか……。それでいてすでにレコードを余裕といえるだけの実力、未恐ろしいがトレーナーとしてはかなりワクワクしている。

トレーナーならだれでも思い浮かべる夢、『史上最強のウマ娘を育て上げること』。それを達成してくれそうな気がするウマ娘、できるならば自身のすべてをつぎ込んで育て上げたい。

だが、今俺はスピカのトレーナー、誰か一人にかまけていることはできないし、他の原石たちもスペと同じ、『史上最強のウマ娘』になってくれる可能性を大いに秘めている。

ならばやるしかないだろう。自身のできる100%をスペ、スズ

カ、ゴルシに100%ずつ、注ぐ。単純に考えれば3倍だが、やってやれないことではないだろう。これはもしスピカの人数が増えたとしても同じだ。

とりあえずは目の前のことを全力でやっていこう。スズカはスピード上げて、最後まで最速で走りぬけられるようにスタミナを鍛える。スペは走り方の矯正をしながら、全身の力をうまく扱えるようにする。ゴルシは普通に練習させる。

ん？ どうしたスペ？ 矯正と並行してゲートの練習がしたい？
わかった用意しておこう、すぐには無理だが準備ができたら伝える。

もしかしたらゲートも苦手なのかもしれない、そう思い、ゲート使用の予約もしておくことにした。

PART 13

はい、皆さま投稿者です。今日はスペちゃんとゲート練習をしますよー。

未だにスピカは3人しかいない弱小チームなので朝早くにしかゲートの予約ができなかったらしく、トレーナーに見てもらいながら、朝練としてゲート練習をしています。

ん？　なんでスペちゃんゲート得意なのにゲート練してるかって？

それはですね、なんとスペちゃんにスキルのヒントが生えていたからですね。何でも前回のレース後にヒントを得ていたらしく、どんなレースでも必要なゲート関連のスキルは大変有用なので早めに習得しておきたいと思った次第です。

入手したスキルのヒントはこちら、【ゲートの支配者】です。こちらはデバフスキルで自分以外のスタートを失敗させやすくするスキルですね。文面だけならかなり強めですが、対戦が初めての相手には効きやすいが、二回目以降は成功する確率が低くなる。重賞レースで勝利している相手だと成功率が低くなる。などの欠点も多いので注意が必要です。

ですが結構使いやすいですし、汎用性も高いので今回は時間を使って取得していきましよう。このゲームではスキル入手には実際にスキルを使用してみながら経験値を溜めていく必要がありますので、どんどんゲート練習しましよーね。

スペちゃん、やり方はですねこうゲートを支配するような感じで全体にプレッシャーをかけていく感じですよ…。

ちようどゲートだけに影響が出るようにですよ…。

「…：…：スペ、何をしてるんだ？」

何って、スキル取得のための練習ですぜ、親方！　あ、好きなタイ

ミングでやってもらっていいのでよろしくお願いしまーす！

「いや、何かつかもうとしているのはわかるんだがもうちょっと解りやすくだな……」

えっとね、魔力を暴走させるの。え、解らない？ ゲートをミートのプレッシャーで破壊するんだヨー！

「なるほど、プレッシャーを与えるのを目的にしてるんだな。しかし自身のスタートがおろそかになるかもしれないが、それはどうする？」

にやび！ 努力でガンバるっぴ！ スキルを習得すればそういうった未取得のために発生するデバフはなくなるんで大丈夫っス！

「回数をごなして何とかする、か……、わかった、技のタイプの事前知られてるとまずいよな。この朝の時間帯だとそれほど人もいない。スペがよければ毎朝ゲートの予約を取っておくがどうする？」

マジで！ いいですかい！ ぜひお願いしますだ。このスキルレース前の練習とかで見られても一回と数えられるのでマジでありがたいですね。

「わかった、予約しておこう。そういえばなんだが、スペはスズカと同室だったよな。」

はい、同室でやらせてもらってますけど、先輩がどうかしましたか？

「なら、ちょうどいい。スズカの様子がおかしいと感じたら教えて

くれるか？ スズカは逃げを得意として多用してるんだが、作戦柄どうしても体に負担がかかりやすくてな。こちらでも注意するつもりだが、どうしても抜けは出てくる。同室なら接する時間も多いだろうし、スペがいいならお願いしたいんだが。」

大丈夫っス！ スズカ先輩がケガとかしてしまうのは私もいやですし、朝練付き合ってもらおうお礼としてもやらしていたいただきますよ。

〽「そうか、ありがとう。」

いえいえ、んじや。合法的にスズカ先輩のことを気にすることができるようになったので、例の日曜日回避していきましようね。

お、いい時間ですね。スズカ先輩も朝練帰りでしょうし一緒に朝飯を食べるためにそろそろ撤収しましようか！

〽「ん、帰るのか。片づけはやっておくから先に上がっていいぞ。」

お、マジっすか！ ありがとうございます。ではお先に失礼しますよ。

んじや今回はこれぐらいですかね。次回からはちよつとスペちゃんのメイクデビューまで倍速&カットを多用して、見どころさんだけを見せる感じにしていきましようかね。

一応倍速中の基本行動は朝にゲート練習、スキル取得後はスズカ先輩と朝のランニング。昼は授業で、放課後はバイトかチーム練習、それが賢さ上げ用の練習を行う、って感じですかね。

確定している見どころさんはスズカ先輩のレース観戦、ちよつとお買い物してみますか、の二つぐらいですね。

乱数くんのご機嫌次第でもうちよつと増えるかもしれませぬ。では今日はこれぐらいで、ではまた。

【ゴールドシップ視点】

なんか最近静かですね…、この近くにはエアグルーヴもないし、栗東寮とはえらい違いだ。

「いきなり何言ってるんですか、貴方。」

ああ、生徒会の戦力、軒並み部屋に回してんのかもな。

「生徒会の戦力!? 何したんです貴方!」

いや、このゴルシちゃん地味に初登場だしき! やっぱ最初は派手に行かないといけないだろ。

「まあ確かに初登場時は色々と考えた方がいいと思いますが、生徒会の方々に一体何したんですか?」

ドア開けた瞬間にゴルシちゃん特製☆『パーペキ爆竹』が爆発してそいつだけアフロヘアになるようにした。

チユドーン☆

ゴールドシップウウウウ!

あ、やべ、エアグルーヴの旦那だ!

「ほんとに何やってるんです貴方!」

逃げるぞ、マックイーン! このゴルシちゃん号につかまれ!

「それってただの麻袋じゃボギヤア!」

なんかヤベえ音したな、まあマックイーンなら大丈夫だろ!

イクゾー! 無限のかなたにさあ進め!

あ、そだ自己紹介、こちら葦毛のパーペキ美人異世界オルガのゴールドシップことゴルシちゃんだぞ☆

スピカで名探偵やってんだけど、最近事件が多くてな……、だから助手のマックイーンとエアグルーヴの旦那から逃げるためにいま疾走してんだよ。

あ、トーセンジョーダンだ！

「……ッ！　なんであんた出会い頭に蹴ってくんの！　あとその麻袋誰！」

おう、さすがは我が永遠のライバル、ジョーダン。この麻袋の中身はメジロマックイーンだぜ☆

ほい、あげる。

「ちよ！　人入ってるのに投げるな！　それにメジロ家のお嬢様じゃんか！」

隙あり！　ゴルシちゃんスマッシュ！　相手は死ぬ☆

「ニギヤアアアアアアアアアア！」

うん！　今日もトレセン学園は平和だな！　一件落着！

そういえば、なんでここで話してたんだっけ？　ま、忘れちゃったしどうでもいいか。

そう言っただけで去っていったのはゴールドシップ。

残ったのは麻袋に包まれたメジロマックイーンと顔面に深刻なダメージを受けたトーセンジョーダン。

急いで駆けつけてきたアフロ姿のエアグルーヴであった。

おわり。

PART 14

ほうほい、皆さん、こんにちは。投稿者ですよー、今回は前回よりちよつと時間が飛びまして、今日はスペちゃんダンスとお歌の練習をしています。これをおろそかにすると会長にブチギレされますからねえ、真面目にやりましょ。でもまあスペちゃんは田舎住みだったのと、そういう華やかなものに触れてなかったのでやっぱ苦手みたいですよ…。

ほらスペちゃん、そこはえい、えい、むん！　ですよ。

＜「スペシャルウィークさん！　違いますよ！　もつとリズムを合わせてください！」

え…！　違うの…。投稿者もセンスないみたいですねえ。先生に怒られちゃいました。

こういったダンスや歌の練習は、ライブに直接影響してくるのでしっかりやっておく必要があります。ライブが成功しているとファンが増加して、ファン投票などに影響してきますし、もつと後の話になります。レースで勝ち続け人気が出てるとスペちゃんのグッズが発売されて、お財布的にウマウマになってきます。

なので人気に直結するライブは成功させる必要があるんですね。

(構文)

ですが、このままだとまず味になりそうですね…、こんな時はダンスやお歌がうまいウマ娘なんかに指導してもらえば変わるんですが、できればあの子がいいんですね…。

ちよつとイベントのために居残りして練習してみましようかね。

＜「もー、ヘタだなあー、ちみい。そこはこうやるんだよ！　見てて！」

なるほど、そうするんですね！　教えてくれてありがとうナス！

「ううん、いいよー」

あつしはCクラスのスペシャルウィークっていうもんでさあ。ス
ペって呼んでくださいませー！

お名前お聞きしてもよろしいか？

「へー、スペちゃんっていうんだ。よろしくね！　ボクはトウカイ
テイオーだよ！　テイオーって呼んでね！」

おおー、テイオーさんっていうんですね。なんか全部半角カタカナ
で聞こえてきますねえ。なんででしょ。

とりあえず教えてくれて感謝ですよ。あと申し訳ないんですけ
どまだわからないところがありましたね。もうちよつとお時間いただ
いても？

「うん！　何でも聞いて！」

んじや、もうちよつと教えてもらいましょう。

—————

ところ変わって現在部室でござい。先ほどのイベントだけだと
ちよつと短いのもう一つ。今日はチーム練習、というか今日もゴル
シちゃんがお休みみたいなのでスズカ先輩との練習です。

一応、ゴルシちゃんのご挨拶は済ましましたが、なんか試走時よ
りもおとなしかったですね？　単に乱数がよかったのか、この後のた
めに大きなことをやらかす準備をしているのか、新しい興味の行く先
を探しているのかはわかりませんが、今は放っておいても大丈夫かな
？　チームメンバーがそろってきたらゴルシちゃんのイベントを進
めるために行動を起こしてみましようか。

スズカ先輩、そろそろ練習始めましょう！

「ええ、行きましようか、スペちゃん。今日から併走をやっけていくんでしたっけ？」

へい！　そうできあ！　そろそろスズカ先輩もレース近いですし、あつしもお手伝いしますよ！

ちなみに何出るんでしたっけ？

「プリンシパルステークスよ、東京で開催されるからよかつたら見に来てくれる？」

勿論できあ！　でもスズカ先輩ならその時期ならNHKマイルとかもありますけど、いいんですか？

マイル苦手でしたっけ？

「ううん、長距離はちよつと苦手だけど、マイルと中距離は得意な方。リギルにいたときに調整のために登録していたの。今はもう調整の必要はないから出走しなくてもいいんだけど、一度決めたからにはちゃんと走らないとね。」

なるほど、えらいっすね。

おそらくですが先輩の言っている調整、というのは先行策で走れるかどうかの調整だったんでしょね。スピカに入って逃げしか使わないことに決めたのでいらなくなった、ということでしょうね。

ちなみにですがプリンシパルステークスは東京で行われるクラシック級でOP、芝左回りの2000mですね。重賞ではないですし、適正内の距離なので普通に圧勝しそうですね。

んじや、併走のお手伝いしていきましようかね。未だ走り方の矯正

は終わってませんのでその練習を兼ねながらやっていきましょう。ついでに差し適性とか会長とかディープのスキルの熟練度集めもしていきますようかねえ。

スズカ先輩！ アチキもスキル練習をしながらなんで本気でいきますぜ！

＜「ええ、望むところよ。全力でお願い。」

＜「いや、レース前に無理はしないで欲しいんだが…。」

お、トレーナーじゃん！ 今日もよろしくお願いしますよ！

【ゴールドシップ視点】

どもども、ゴルシちゃんだぞー、二回目の登場じゃい、ほらそこ！
味を占めたなんて言わない！

！
マックイーンの部屋の前でパンツ一枚にして逆吊りの刑に処すぞ

なんでも投稿者がテイオー視点の話を書こうとして、「なんかこいつテイオーじゃなくね？」ってなったからあたしになったみたいだぞ。

テイオーの代わりって言われてなんかムカついたからマックイーンの部屋の前に吊つといた。

ちゃんと別日にテイオー編は書かせるから安心してくれ。

んじゃ、頼まれてたこと早く終わらして、ジョーダンの顔をまたつぶしに行くか…

では一つ目、最近のスピカの状況についての紹介だな、

現在はゴルシちゃんとスズカ、あとスペの3人だな。今日、ゴルシちゃんがお休みしていたのはマックイーンの勧誘に行っていたからなんだぜ！

ちなみになかなか受け入れなかったから、さつき気絶させて部屋に放り込んでおいた。

…ん？ 入部届？ それはゴルシちゃんがマックイーン名義でスピカに入ること申請しておいたぞ！

さつすが、ゴルシちゃん！ やっさし〜！

ちなみに明日、スカーレットとウオツカがスピカに入ってくれたぞ！

トレーナーのチラシで入部するのは業腹だが、致し方なし、ラリアットで許してやろう。

お次はスズカの話だな。スズカのレース予定はアプリ版のクラシックを現在走っている、という感じだな。

クラシックの4月後半ってところだな。

それとこのSSのレースは大体アプリ版に合わせていくみたいだからそこは許してくれよな、だそうだぞ。

ま、こんくらいかな。じゃまたゲーム越しに会おうぜ！ トレーナー！

PART 15

〔ハルウララ視点〕

最近は何日たくさん走れて、たのしいんだ！ 学校に入ってすぐに今のトレーナーさんからスカウトっていうのをされて、トレーナーさんに色々教えてもらいながら毎日走ってるの！

トレーナーさんは面白い人で毎日いつも黄色い被り物をしてるの。最初はそういう人なのかな？ って、思ってたけど前にトレーナーさんの部屋で別の被り物に被りなおしてるのを見たから普通の人だと思う！

最近は何とかトの形をしたのがお気に入りみたいで私の練習に付き合ってくれてる時はいつも被ってるの。私も同じものを被ってみたい！ って言っただけけど、トレーナーの神聖な？ 被り物らしくて私は被っちゃダメなんだって！ とっても不思議！

トウインクルシリーズに参加するためにはトレーナーについてもらうか、チームに参加しないといけないらしくて、私もキングちゃんやセイちゃんみたいにチームを探そうと思っただけ、トレーナーさんが私の模擬レースを見てくれたみたいでスカウトしてくれたんだ！

何でも私はダートで走るのが得意みたいで、『ダートと一緒に一番を目指さないか！』 って言われたの！

その時私はスペちゃんみたいに一番になりたい！ そう思ってたからすぐにお世話になることにしたの！

その時、トレーナーさんにこう言ったんだ！

「私はスペちゃんと一緒にもつと走りたい！ それでいつかは私が一番になるんだ！」

トレーナーさんは色々考えた後、『かなり高い目標だけど頑張れるか？』 って私に聞いたの。

「もちろん！ いっぱい私頑張るよ！」

トレーナーさんの練習は不思議なものが多いみたい。いろんな道を走ったり、他のチームの練習を見に行ったりするのも楽しいけど、トレーナーさんのお話を聞くのも面白いんだ！ 前なんか一日中トレーナーさんのお話を聞いていたんだよ！ っておんなじ部屋のキングちゃんと話したらすごく心配されちゃった。でも毎日すごく楽しいよって言ったらキングちゃんも気になるみたいで今度見に来るんだって！

「本当に大丈夫かしら、騙されてなんかいないわよね…。もしもの時のためにうちのトレーナーに話をつけておかないと…。」

それと、トレーナーさんには仲良しな人がいっぱいいるんだって！ 理事長さんの秘書のたづなさんや同期の桐生院っていうトレーナーさんと仲良しなんだって！ 前の練習がお休みの時に桐生院トレーナーとお勉強会してたって言ってた！

トレーナーさんは他のチームの練習もよく見に行ってるんだって！ 何でも新しい練習方法を探しに見学に行ってるらしいよ。前にスペちゃんが参加してるスピカに行くらしいから私も連れて行ってもらったことがあったんだけど、その時は急にトレーナーさんが来られなくなっただけで一緒に練習してもらったんだ！

「今日はよろしくね！ スペちゃん！」

（ウララちゃんのトレーナーが来てませんけど、どうしたんですかねえ？ まこんなこともあるんでしょうか。ウララちゃんは主戦場がダートですんで今後のレースで戦うこともないでしょうし、一緒に練習しても大丈夫でしょう。ウララちゃんのためにも芝とダートの両方で走ってみましょうか、いくら不得意でも一緒に軽く走るぐらいなら何とかなるでしょう。）

「うん！ 頑張ろうね！ ウララちゃん！」

毎日、いろんな経験ができて楽しいです！ 私は今年の6月後半ぐらいにデビューするってトレナーさんが言ってたからそれに向かってもつとウララ頑張るよ！ えい、えい、おー！

【キングヘイロー視点】

あの時のスペシャルウィークさんのレースは私の目に焼き付いている。他の者はどうかは知らないが、あの模擬レースの時間、私は自身ならどこに付くか、どこを走るかを投影しながら観戦していた。

あのレースだけは全くそれができなかった。

まずはスタート乱れ、何が起こったのかはわからないがスペシャルウィークさんだけが飛び出し、それ以外の方々は飛び出した彼女を見てからのスタート、2, 3テンポの遅れ。彼女が何かしたのは明白だが何をしたのかはわからない。おそらくプレツシヤーの類だろうが……。

その後のレースは彼女の独壇場。後々知ったが彼女の主作戦は差し、そのレースでは当てはめるとすれば大逃げ、全くの適性外で大差をつけて勝利。当の本人はレースなんてなかったかのようにケロツとしている。

先行についても、差しで脚を溜めたとしても絶対に勝てない。そう思わせるほどの壁があった。

入学すぐにこの差、なにがキングか。

彼女に勝つためには何をすればいい。何を求めればいい。

私が先頭に立てるのは何か、私がわたしであるためには何が必要か。

才能の差はこうも恐ろしいものなのか。

才能に勝つには努力しかない。

私が彼女に勝つためには恥や外見を気にしている時間はない。

私は自身の力を完全に伸ばしてくれるトレーナーを探した。

効率の問題から、私ひとりに専念してもらうため、どこかのチームトレーナーではなく、個人でやっているトレーナーを。

運よく見つかった。高齢のため多人数を持つのは厳しく、マンツーマンでの指導を行っていて、去年担当されていた方が卒業なさったトレーナーが。担当されたウマ娘の方々もその世代のエースと呼ばれる方ばかりであった。

当然人気は高かったが、今年はお気に召す人がいなかったらしくフリーになるかもしれない。そう噂されていた。

私が担当になってもらうために頼みに行くと、何か光るものを見出してくれたらしく簡単に担当になってくださった。土下座も辞さぬ覚悟だったので正直拍子抜けだった。

「お前さん、目標は？」

「前までなら三冠ウマ娘になることでしたが、今は違います。どうしても勝てないと思った同期の子がいるのです。その子にどうしても勝ちたい。」

「いいじゃねえか、よくわからん称号なんかを目指すよりはそっちの方がよっぽどいい。ちゃんとして来いよお、そしたらせめて食らいつけるぐらいまでは仕上げてやる。そっからはお前さんの仕事だ。気張れよ。」

「…………ッ、はい！ よろしくお願いします！」

見てなさい、スペシャルウィークさん。すぐに追いついて、追い抜かして差上げますからね。

PART 16

皆さまお待たせいたしました！

見たかったでしょう？ このお祭りを、もちろん今年も行います！

食堂主催の大食い大会！ 実況は私、イナリワンが務めさせていただきます！

この大会の開催に至って、食堂の方々が通常の5倍の食材を搬入したらしく、あとは「持つてくれよ、オラの体力…！」というくらい気合十分で調理してくださるそうです！

それでは参加する選手を紹介していきましょう！

まずはこの方！ 小さい体に大きな食欲！ ナニワのフードファイターは伊達じゃない！

タマモクロス選手です！

「誰が小さいやねん！ 後で覚えとけよ！ タマモクロスや、応援よろしくな！」

お次はこいつ！ あふれる母性と胸部装甲！ 食べたものはどこに行くんですか！ 私、気になります！

スーパークリーク選手です！

「応援よろしくね〜」

続いて優勝最有力う！ 質量保存の法則？ それはおいしいのか！ 食堂職員の悪夢！ 暴食の権化！

オグリキャップ選手です！

「いつも食べ過ぎなのだろうか…、これでも抑えているのに…。」

最後はダークホース！ 新入生ながらも初日にオグリ選手とフードファイトしたこの逸材！ 期待の新人！

スペシャルウィーク選手です！

「頑張ります！ いっぱい食べるぞー！」

（優勝賞品が非常にウマ味なんで参加したんですが、これは「太り気味」確定ですね。スペちゃん明日からダイエット頑張ろうね…。）

さあ、選手紹介も終わり、場も温まってきたところで優勝賞品を発表いたしましょう。

今大会の優勝賞品はくくく

『商品券10万円分』です！

ちなみにですが準優勝は同じく『商品券3万円分』です！

こちらの商品券、校内の購買は勿論、トレセン提携店でも使える優れもの！

これを見て、選手たちも気合が入ってますよ〜！

「むっちゃええやん！ 最近買いたいもんあったからちようどええな！」

「いいですね〜、何を買いますしょうか？」

「あのお店のホットケーキに使おうかな…。」

「お金…、お金…！」

（スペちゃんお目がドルマークですよん。色々買いたいものあるしちやつかりいただいて帰りましょう。）

ではルールを説明いたしましょう！

今回のルールは前回までと違いより、見ごたえのあるものになっております！

『ドキドキ！ 魔の一時間！ どれだけ多く食べられるでしょうか！』です！

今回のルールは前回のルールとは違い早食いではなく、一時間のうちに食べた重量勝負になります！

なお、出されるメニューは食堂側が全員に同じものが行き渡るようにしてくださるようです！

重量の測定はこちらに控えている委員長たちが行つてくださいます！

「バッチリ、きつちりと計つて見せますよ！ バクシン！」

では選手たちの反応を見ていきましよう！

「え、マジで…、早食いとちやうの…。」

「これはやらかしましたか…？」

「好きなだけ食べていいのか！」

「ご飯！ ご飯！」

（スぺちゃんさつきから語彙力が残念になつてる、お勞しやスぺ上…。）

おつとく、約二名が驚愕しておりますね！ 直前のお知らせでは『食堂側の意向により変更されることがあります。ご注意ください。』とお伝えしていたので反論は認めません！

さあここで一品目！ 巨大かつ丼が選手たちの目の前に置かれました！

その重量、なんと2キロ！

お手製カツがきれいに卵で彩られ、艶々でおいしそうなご飯の上に鎮座している、まさに絶品です！

かつ丼の後ろでも続々と巨大な料理が運ばれてきます！ 同じどんぶり系は勿論、ニンジンハンバーグなどのお肉系、サラダなどの野菜系もしっかり用意しています！

おつとく、並べられた料理を前に表情が二分されたく！

タマモクロス、スーパークリーク選手は顔を曇らせ、オグリキャツプ、スペシャルウィーク選手は顔を輝かせています！

ではでは、皆さまお待たせしました。こちらのビッグタイマーを起動させましょう！

60分に設定しまして…

ではカウントダウン行きますよ〜！ 3, 2, 1, スタート！

さあ全員順調な滑り出し。タマモクロス、スーパークリーク選手は逃げ、先行と行ったところ、徐々にスピードを上げて食べ進めています。

「ごちそうさま、次お願いします。」

おっと〜ここで早くもオグリキャップ選手が完食！ 二品目に移行だあ！

「あつ！ 私もお願いします！」

スペシャルウィーク選手も遅れずについていく！

やはり、この二人は次元が違ったあ！

タマモクロス、スーパークリーク選手ははまだどんぶりの半分も行っていない！

さあ大会も終盤、残り時間も5分となりました！

タマモクロス、スーパークリーク選手は30分経過ごろに沈んでしまい、今は全く箸が動いていない！

お腹もすでにスイカ腹だあ！

対して、オグリキャップ、スペシャルウィーク両選手は追い込みが激しい！

食べた品数、重量は全くの同じ、これからどうなるのか全く予想がつきません！

最初のころと比べると明らかに速度は落ちていますが、山盛りスパゲッティをフォークで岩のようにして食べています！

「おかわり！」

「おかわり！」

ここで両者同時におかわりだあ！

すでに厨房も疲労困憊、死屍累々、作りだめはとつくの昔に出尽くしたようです！

ここで出てきたのは山盛りのニンジンサラダだ！

厨房側のできるだけ手間が少なく、時間が稼げるものを、という意味が見え隠れしています！

おっと〜ここでスペシャルウィーク選手スパートを掛け始めたあ

！

オグリキャップ選手も負けじと速度を上げてきたあ！

「おかわり!!」

「おかわり!!」

さあ時間的にも最後の一品でしょう！

出てきたのは…、10ポンドステーキ！ 10ポンドステーキです

！

学園内にも愛好者の多いメニューですが最後にこれはヒドイ！

両者さすがに一瞬手が止まった〜！

両者ともにお腹は破裂するんじゃないかというぐらいの大きさ！

そこに10ポンド！ 4・5キロが襲い掛かる！

しかもこれ、自分で切り分けて食べないといけない！ 肉体的疲労

とのダブルパンチだあ！

スペシャルウィーク選手切り分けて、口に運びましたが…、飲み

込めません！

もうすでに喉まで食べ物詰まっていたのかあ！

おっと、オグリキャップ選手、ゆっくり、ゆっくりとですが食べ進

めています！

やっぱりオグリは強かった!!

おっと、ここで時間終了だ〜！

結果はオグリキャップ選手が一着で、スペシャルウィーク選手がアタマ差で2着です！

残念ながらタマモクロス選手、スーパークリーク選手は脱落となつてしまいました！

選手の皆さんの健闘を称えましょう！

さあオグリキャップ選手への優勝賞品の授与に移ります！

運営側から生徒会の代表としてエアグルーヴ副会長から優勝賞品の『商品券10万円』が手渡されます！

「大会開催にかかった費用を考えればとても笑えないがおめでとう、オグリキャップ。」

「ありがとう、エアグルーヴ。」

そして次は計量係として働いてくれたサクラバクシンオーさんから準優勝賞として『商品券3万円』の授与です。

「おめでとうございます！ よい食べっぷりでした！ まさにバクシンー！」

「おえつぶ…、あ、ありがとうございます。」

（さすがに食べ過ぎましたね…、何十キロ分食べてるんでしょ？）

大会もこれ以上になります。皆様ご声援ありがとうございました。

実況は私、イナリワンでお伝えしました！ 機会があればまたお会いしましょう！ バイバイ！

PART 17

【リギルトレーナー視点】

「なるほど、あれがスペシャルウィークか。」

私は今年新しく入ってきたエルコンドルパサーとグラスワンダーを超えるべき友、として教えられたスペシャルウィークを見に来ていた。

そこには最近リギルからスピカに移籍したサイレンススズカと併走している彼女の姿があった。

「予想よりも強い、いや強すぎるな。本当に新入生か？」

口ではそう言いながらも彼女のフォームの荒さやレース勘があまり養われていないこと、スピカのあいつの指導方針、過去の非公式レースの映像を考えると、新入生が持つていて学年が進むごとに矯正される癖が散見されるので間違いないと考えられる。

「そして、ただの早熟なのではなく成長途中、当てはめるとすれば晩成型タイプか？ フツ、全く笑えんな。」

才能あるウマ娘たちを見てきたからわかる。あれは時間をかければかけるほど強くなるタイプだ。

「そうになると、早いうちがいい。彼女たちが超えれるとすればクラシックになるのか？ いやシニアの春でもまだいけるのか？」

悩む。本来ならもう少し時間をかけて育成していききたい二人だったが、あいつらはスペシャルウィークとの対戦を望むのだろう。ならばトレーナーである私もそれに合わせる必要がある。

「ならば今年のジュニアはできるだけ避けて、決戦は皐月かダービーのどちらか。」

いや、皐月は敗北覚悟で対戦させて、経験とやつの癖を把握させてから、ダービーで決戦を仕掛ける方がいいだろう。いや、二人ともマイルの適性があるからそちらでGIの舞台馴れをさせてもいい。

エルコンドルパサーはマイルと中距離で、グラスワンダーはマイルと長距離で力を発揮できるだろう。両者ともに中距離、長距離が不得意なわけではないがそのあたりも考えた方がよさそうだ。

「海外で成長させる方法もある、か。まったく、才能をもつものを任せられると考えることが多くて困るな。」

まあ、その苦勞が楽しいところもあるのだが、これは胸に秘めておいた方がいいな。

今年はあるの赤田先生が本腰を入れて育成する、と言っていたキングヘイローや、期待の新人が担当するダートで活躍しそうなハルウララ。入部選抜テストに来るのなら入れていただろうセイウンスカイ。ルドルフが注目するトウカイテイオーにメジロの最高傑作メジロマツクイーン。それ以外にも多数の才能たちがいる。

その中心にいるのはスペシャルウィークだ。彼女が先頭を維持し続けるのか、誰かが彼女を負かすのか。出来れば私が担当する二人がそれになって欲しい。

そんなことを考えながらスピカの練習場を後にした。

最初はスズカの様子を見に来るついでにスペシャルウィークを見に来たが、目的がいつの間にか変わってしまったような気がする。だが、今日のスズカの走りを見る限り大丈夫だろう。スピカのト

レーナーならば安心して任せられる。あいつも新しい世代に熱されたのかいつになく真剣だったしな。

さあ、わたしも彼女たちのために頑張るか。

「スぺ〜！ またお前食べ過ぎて太っただろ！ 体重管理のためにもっと走れ〜！」

「お、おながが重いです……、いつも楽しいはずの走るのがつらい……。」

「確かにスぺちゃん、またお腹出てきてますよね。」

「リバウンド横綱のスぺちゃんにはこちら！ ゴルシちゃん特性の虹色に光るドリリンクを進呈しよう！」

「（わたくしも最近ストレスで食べ過ぎてますし、人のこと言えませんね）そんな物騒なものどこで手に入れたんですか……。」

「タキオンにもらったの改良した。マックイーンも最近太ってるし飲むか？」

「何であなたが知ってるんですか！」

とりあえず体重管理だけはしつかりしよう。そう思う東条トレーナーだった。

【セイウンスカイ視点】

「セイちゃんはクールダウンですか？」

ああ！ トレーナーさんか。びっくりさせないですよ。うん、ちよつとだけ休憩。

「セイちゃんは自分で色々考えてくれるから楽でいいですねえ。」

もうちよつとはしつかりした方がいいんじゃないの、トレーナーさん。

「いえいえ、私のやり方は自分で考えて実行する、ですから。トレーナーは皆さんの後ろでサポートするのが一番いいんですよ。それにセイちゃんもそれが目的でウチに入ってくれたんでしよう？」

まあね、でも最初にゲートになれるために、入部直後に丸一日ゲートに縛り付けたのは忘れないからね。

「あれはチーム：アークトゥルス伝統行事みたいなものですから。セイちゃんの先輩方もみんなあれでゲートに慣れ親しんだんですよ。」

おかげさまでもつとゲートが嫌いになったよ。

「……今からゲートに縛られたいですか？」

いや、大丈夫ですので、お願いですからそんな怖い顔しないでください。

「……まあ、よしとしましょう。ああ！ それと頼まれていた資料、用意しておきました。記録に残ってるすべての逃げウマ娘と差しウマ娘のレース映像と私の解説付きの特別版ですよ。大事に使ってくださいね。」

うん、ありがとう、トレーナー。これでやっと私は始められる。

「今年は正直に言ってしまおうと栄光の世代というより、蟲毒に近い感じがしますね。セイちゃんが周りに勝ってあの子に挑戦するには作戦がすつごく大事ですよ。」

解ってる。トレーナーも手伝ってよね。それじゃ休憩もこれぐらいにして私も走ってくるよ。

「解りました。これまで通りスピードとスタミナに注力しながらやっていきましょう。では、行ってらっしゃい。」

「作戦が大事なのはその通りですが、それだけではトップは目指せませんね。セイちゃんの目標であるスペシャルウィークさんのデータを集めるのは勿論ですが、それ以外の方々のものも必要ですね。それとセイちゃんの練習メニューもあれだけでは足りないでしょう。彼女の気質的に時間を延ばすのは自分から言い出さない限り、悪影響でしようし、もつと質を上げられるように考えてみましょうか。」

「やることは多く、大変ですが、他の方や今後の後輩たちのためにも必要なことですしね。頑張っていきましょうか。」

PART 18

オッス！ オラ投稿者！ 最近投稿してるはずなのに投稿してないような気がしていても不思議だぞ！

今日はスペちゃんと一緒にお部屋でくつろいでます。ちなみにスズカ先輩は夜のランニングに行ってますぜ。

それで先輩とのランニングをせずに何を始めようとしてるのかというと、こちら、購買部が発行しているパンフレット。こちらを見ていこうと思ったからです。

こちらのパンフを見ながら購買部の方で注文するとその翌日に頼んだものが自室に届きます。簡単なトレーニング用品などは購買部で購入できますが、スペちゃんに使いたいと思ってるようなものは注文する必要があるんですね。

ここではプレイヤーが選択して必要なものを買ってあげる必要がありますが、キャラの方が自分の好きなもの、欲しいものにチェックをつけたりしているので、お金の余裕があるときは買ってあげましょう。買ってあげるとキャラの調子が上がるし喜んでるキャラも見れるのでとってもヨシです。

んで、私は全身に過重をかけるおもりとか、大リーガー育成ギプスの簡易版なんかを買おうとしているわけですし、最近スペちゃんが頑張って稼いだお金（買い食いとかでそこまで時間をかけた割には貯まってない）と前々回の大食い大会で手に入れた商品券を使っています。

もちろん、スペちゃんが欲しいものも値段によりませんが買いますよ。

ほら、スペちゃんおじさんに欲しい物教えてけろ。

スペちゃんがパンフにしおりをしてペンでぐるぐるしてるのは

……

炊飯器ですね。

……炊飯器ですか!? しかもこれ結構お高い奴じゃないですか。

これほんとに欲しいの? ええ…、そんな笑顔で顔振らんでも…。いつでもおいしいごはんが欲しいんですか…、食堂で食べるっていうのは駄目みたいですね。スペちゃんの目が絶対にこれは買う、って目をしています。

まあ別に買うのはいいんですが、問題がお値段なんですよねえ。この炊飯器、5万ぐらいしてるんですよ…。

全身を鍛えるためのギプスもそれぐらいしますし、加重トレーニングに使うおもりも買いたいの、スペちゃん諦めてくれませんか?

ああ、これは駄目みたいですね、このままだとおもちや売り場でほしいものを買ってもらえるまで寝転んで暴れまくるスペちゃんが完成しそうです。

うくん、でもここで買ってそろそろ育成を本格化させないと後々すごい苦労するんですよ。

ごめんねスペちゃん、メイクデビューの賞金で買ってあげるから。

ということと商品券と稼いだバイト代をしましてギプスとおもりを買いますか!

✓ 買い物を終了しました。商品は翌日に届きます。

✓ 欲しいものが買えずスペシャルウィークが拗ねました。

✓ 調子が絶不調になりました。

フア! ナンデ! ゼツフチョウナンデ!

ええ、そんなに欲しかったんですか。メイクデビュー後に買ってあげるって言ったじゃない！

はい、先ほどまで調子は絶好調でしたが、正反対の位置まで落ちましたね。自分泣いていいですか？

こうなってしまうと練習を行っても気が入らず、ケガしやすくなったり、経験値が入りにくくなったりするので非常にまず味ですねえ。

これは早急にスペちゃんのご機嫌直しをしなくてはなりませんねえ。

ご機嫌直しに一番いいのは誰かと遊びに行くことですが、同室のズカ先輩はもうすぐレースになりますし、同じクラスの子たちか、スピカメンバーの誰かと遊びに行きますか。

ちなみにですがお出かけはアプリ版であったお出かけを自由に選べるようになり、またその行き先が増えたものと考えていただいてもらえばOKです。クレーンゲームはお前、許さんからな。

んじゃ、スペちゃん。あしたお友達とどこかに遊びに行きましょうね。ほら、元気出して、早速連絡して明日遊べるのが誰か確認しますよ。

「グループラインにて」

＜明日、時間があつたら一緒に遊びませんか？

ごめんなさい、明日は練習があるからいけないわへ

＜ワタシもデース、ゴメンネ

＜私もパスー

「ちょっと私も難しいわ。また今度誘ってください。」

「ウララは大丈夫」

「ターボも行けるぞ！」

「よかったですか、練習がお休みの日に、せっかくのお誘いを断つて。」

「それは貴方もでしょ、エル。」

明日はリギルで初めての休日、練習が忙しく大変だが毎日成長を確信できる。本来なら休日はゆっくり休んで疲れをとるべきなのだが…。

「にしてもおハナトレーナー、アレ、絶対わかってましたよね。」

「そうね、私たちが何をしたいか、解ってらっしゃったんでしょうね。」

明日が休日だと発表されたとき、私たち二人は東条トレーナーに、休日に練習場を使わせてもらえるか頼みにいった。すると…。

「解った、その日はトレーナー会議があるのでいけないが使えるようにはしておこう。一応監督として後輩のトレーナーに面倒を見させる、新人だが能力はある奴だ。」

とすぐに許可を出してくださいました。

「……追いつけるんでしょうか、私たちは。」

「何とかありますって、スペちゃんたちが遊んでるうちに追い越せ、追い抜け、ですヨ！」

「ふふ、ええ、そうね。弱気になったら勝てるものも勝てないわ。」

あの時、思ってしまった。絶対に勝てないと思わせるあの走り。それに近づきたい、追いつきたい、追い抜きたい。おそらく、エルもそうだろう。

「スぺちゃんもそうですが、貴方にも負けませんよ、エル。」
「望むところデース！ 私の世界制覇の礎としてやりマース！」

そう言つて私たちは笑いあつた。おそらく、エルがいなければ私は折れてしまつただろう。

良き友人がライバルであり、同室であることに感謝しなければならぬわね。

後日、練習を見てくれたトレーナーさんはウララさんの担当の方だったが、色々とすごい方だった。エルが何も言わなかつたので指摘しなかつたが、あの黄色いTの被り物は何なんだろうか。指導はちゃんとしていたのでそこだけは安心できたが。

PART 19

はい、遊びにかまけてるウマ娘実況プレイやってくよ〜!

遊んでて大丈夫かって? 我日本総大将ぞ! (デビュー前) ダイ
ジヨブダツテ!

今日は同じクラスのウララちゃんとターボ師匠、あと同じチームの
スカーレット・ウオツカコンビにマックイーン。あと呼んでないのに
来ているゴルシちゃんとお近くのシヨツピングモールに遊びに来て
るぞ!

ゴルシちゃんが何でいるんですかねえ?

「へっ! 水くせえじゃねえか、スペ! こと、遊びにかけてはこのゴ
ルシ様の右に出るものはいないぜ!」

「確かにいなさそうですわね…。」

「へえ〜、ゴルシちゃんっていうんだ、私、ウララ! よろしく!」

はい、スペちゃんが橋渡ししながら自己紹介しましょうね〜。

こちら同じクラスのウララちゃんとターボ師匠、こっちはスピカの
スカーレットとウオツカ。あと爺孫です。

んじゃ、早速遊びに行きましようかね、前回絶不調になってしまっ
たのを絶好調になるまで遊び倒しましょう。

先頭は遊びマスターのゴルシちゃんで行きますよ〜!

はい、(遊びシーンは)カットです。動画時間的にも仕方ないよなあ
! 別に録画してるのあげるから許してヒヤシンス。

かなり限界まで遊んだので体力が持ってかれてますが調子はちや
んと回復してますね。

今日の目的は達成できてるのでよきかなよきかなです。

お！部屋に帰ると荷物が届いてますね、スズカ先輩が受け取ってくれてたみたいですね。大丈夫でした？ スズカ先輩、結構重かったと思うんですけど……

「大丈夫よ、でもいったい何を買ったの？」

これっすから、これはですね服の内側に仕込むおもりと大リーガー育成ギプスならぬ大スターウマ娘育成ギプスですね。こちらのギプスは元ネタのアニメみたいにどう着てもバネが挟まりますよね…、というものではなくて全身タイツみたいなやつ、まあ簡単に言ってしまうとトレーニングスーツの全身版です。

例のアニメみたいにあんまり加重トレーニングやこのスーツを着て練習しすぎると故障の原因になりやすく、通常の育成ではあんまり使われないですが、今回のスペちゃんは違います。

そう、スペちゃんの個性、「鉄人」ですね。こいつのおかげで普通ならケガ率危険率ですよ…、という練習やちよつとした無理もきいてくれるようになります。ま、そこらへんはお任せください、度重なる試走のおかげでちゃんとしたライン引きはできてます。スペちゃんがケガや故障をすることはありません。

これ関係でのミスはガバではすみませんので細心の注意を払っているのでほんとにご安心を。

んじゃ、明日からは毎日これを着て生活しますよ。最初は色々日常生活に影響が出ますが一か月ぐらいたら慣れてくるのでそこから服におもりを仕込んでいきましようね。

お？ スズカ先輩どうしたんですか？ すごい顔してますけど…？

「スペちゃん、それほんとに着るの？」

はい、着ますよ！ 毎日トレーニングです！ あっ！ ちゃんと脱ぐときは脱ぐんで安心してくださいね！

まあ嘘ですが、スペちゃんはこれからレース時以外はこのスーツを着続けますし、おもりもちゃんと付けます。そうでもしないとライバル枠においてかれるからね！

んじやちよつとスズカ先輩に心配されながら、今回はここまでとなります。

最近動画時間が短くてすみません、メイクデビューがくるまでちよつとお待ちです。

ではまたお会いしましょう。

【サイレンススズカ視点】

今日はスペちゃんは新しく入部した子たちと遊びに行っていた。急な決定で昨日の夜にあたふたしながらみんなと予定を合わせていたが、なんでそんなに急に決めたのかしら？ なにかみんなで遊ぶのを決めていて、直前までスペちゃんが忘れていたのかしら？

スペちゃんは私が行けないことを気にして申し訳なさそうにしていたが、私に気にせず楽しんできてと伝えると

「お土産話、いっぱい用意して帰ってきます！」

と、張り切って出発した。色々とお金に困っていて、バイトをしたり大食い大会に参加したりする子だから、なにか買ってきてもらうよりも、お金がかからない方が彼女のお財布にとっても、私の心情的にも安心だ。

元々、今日はスピカのチーム練習はお休みでレースが近い私の追い込みと、最近全然練習に参加していないゴールドシップさんと二人で練習するはずだったのだけど、やっぱりゴールドシップさんは練習に来ず、最近メンバーが増えて忙しそうになってきたトレーナーさんが空に吠えていた。

スマホを見てみるとゴールドシップさんからスペちゃんたちと遊びに行ったと連絡があったので面倒を見てもらうことをお願いしておいた。スペちゃんの実力のせいかあまり学年が変わらないように思ってしまうが、彼女は新入生。一緒に行く子たちも同学年と聞いていたから、ゴールドシップさんがついていつてくれるのは安心できる。

彼女は自由奔放なことが目につくが、そういった細かいところにも気が付くから意外と頼りになる。

決して練習が面倒だからそっちにいった、というわけではないはずだ、たぶん。

「トレーナーさん、叫んでも変わりませんし始めましょう。」

「ああ、すまない。早速やるか！」

私も先輩として恥ずかしい姿は見せられない、次のレースに向けて頑張っていこう。

その日の練習の帰りに寮に帰るとフジキセキ寮長から私の部屋宛に荷物が届いていると伝えられた。何か頼んでいただろうかと思いつながら渡されたものは大ききの割にはかなり重めな荷物だった。

運べなくはないが私はそこまで力がある方ではないので少し苦勞しながら部屋まで運び、宛名を確認してみると学園が提携しているトレーニング用品店からスペちゃん宛の荷物だった。

スペちゃんのお財布事情的にそういえば最近スペちゃんが熱心に購買のパンフレットを読んでいたのを思い出し、最近出場してまた太った大食い大会の賞品を使ったのだろうと考えた。

スペちゃんが帰ってきてからわかったのだが、荷物の中身は服の中に仕込むおもりとトレーニングスーツ。おもりはまだわかるがスーツの方は取り扱いに気を付けた方がいい。

説明書を見る限り、市販されているものとは違い、ウマ娘用の特注品。体にかかる負担が大きい分、効果を大きく上げるものだった。そのことを伝えると

「ちゃんと考えてるので大丈夫です！ あと私、体が丈夫なので！」

とのことだった。ちよつとやりすぎないように気を付けた方がいいかもしれない。明日からよく注意して見ておこう。そのあと、トレーナーさんにも連絡した方がいいと考えて、伝えておいた。当分はこれで大丈夫だろう。

スペちゃんは最近走り方も安定してきたし実力も上がってきている。私ももつと頑張らないといけないが、スペちゃんと私が戦うにはスペちゃんがシニア級に上がるまで待たないといけない。それまでに故障してしまつては元も子もない、スペちゃんのことにも気にしないといけないが、自分のことにも注意しておこう。

そんなことを考えながら今日も終わっていく。スペちゃんはもう眠ってしまったようだ。

「今日はどうしても楽しかったね。明日は、もっと楽しくなるよね、スペちゃん？」

PART 20

さあやってまいりました！ スピカーズ＋αによるお出かけ会！
投稿者がキャラ数の多さを内容をどうすればいいのか全く分らないけど早めに書いておかないと後々の展開に響きそうなので見切り発車でやってくぞー！

「一体誰に向かって話してるんですか……、というか投稿者って誰ですの。」

というわけでスペー！ イカれたメンバーを紹介してくれ！

「はい！ では右側から！ 私と同じクラスのハルウララさんです！」

「今日はよつろしく〜！ ハルウララです！」

「お次はツインターボさん！」

「おう！ ターボはツインターボっていうんだ！ よろしくな！」

「次に私の所属してるチーム：スピカから仲良しコンビ！ ウオツカさんとダイワスカーレットさんです。」

「あたしらそう思われてんだな、ウオツカだ、よろしく。」

「ダイワスカーレットよ、よろしくね。」

「同じくスピカより、メジロマックイーンさんです！」

「メジロマックイーンです。よろしくお願ひしますね。」

「最後に我らがスピカのリーダー！ ゴールドシップさんです！」

うっむ！ 紹介ご苦労、スペ君。

「というかうちのリーダーってゴルシなのか？」

「どっちかというとなスズカさんっぽいよね。そこんどこどうなの、スペ？」

「スズカ先輩が入るだいぶ前にゴルシさんが入部していたので、多分

「そうかと。」

「いつの間にかに所属チームがスピカになっていた私はいったい…、まあ、そこまで不満はありませんが…。」

「うわ〜！ とつても楽しそうな人たちが集まったね、ターボちゃん！」

「そうだな！ これなかったあいつらの分も楽しむぞー！」

ところでスペ、とりあえず学園近場のショッピングモールに集まっているわけだが、今日の予定は決めてるのか？

「いえ、全く！」

「「ズコーー！」「」」

お、さすがはスピカの面々、ギャグ時空に？まれているな！

ウララにターボ！ このようにボケが来たときはうまくつなげるのがコツだぞ！

「ほへー」

「なるほど、次はウララもやってみるね！」

「やらなくていいですからね！ スペさんも同じクラスならば汚染される前に早く助けなさい！」

「す、すみません…。」

ならこのパーペキゴルシちゃんが今日の進行を務めてもいいんだが、主催者のスペさんは何かいい案はありますか？

「あ！ ならいつもお世話になっているボウリング場なんていかがでしょうか！」

お、ボウリングか、投稿者の嫌いなカタカナでいいな！ あたしは賛成だぞ！

「ボウリングか、いいな！ 勝負しようぜ！ スカーレット！」
「望むところよ！ 吠え面かかせてやるわ！」

「ボウリングはしたことありませんが、何とかなるでしょうか？」
「ウララも初めてー！」

「ターボもやったことないぞ！」

「なら私が教えますよ！ といってもバイトでお世話になってる時に教えてもらったのでうまくはないんですけど…。」

ならレーンを分けてやるか！ 初心者と経験者に分けて、スペは初心者の方に行く感じでいいか。

ならさっそくイクゾー！

さて、ついたわけだが、スペ！ 早速隣同士のレーンとシューズの貸し出しの申請を行うのだ！

「解りました！ ゴールドシップさんは靴、どうしますか？」

ゴルシちゃんはこんなこともあろうかとMYシューズとMYボールを持ってきているので心配はフヨウラ！

さて、ゴルシちゃんはどう投げてでもストライクだし、ウオツカとスカーレットもいい感じで接戦して引き分けだろうから初心者組の方を見てみましょうかね。

ふむ、スぺはいたって普通なスコア、投げ方も普通って感じだな。まあ楽しめたらいいって感じだろうし、こんなもんか。

マックイーンは投げる動作もガタガタだし、手を離す位置も高いなあ。スコアの方もボロボロ。

うん、お察し！

ウララはスぺや隣の二人組のやり方を見ながらだんだんと成長していく感じだな、時間が進むごとにうまくなっていく感じだな。スコアはスぺを追い抜きそうな感じだな。

ターボは全部ストライク狙いだな！ 思い切りがよくてヨシ！
面白いぐらいにストライクとガターしかとってないな。

成績の方はあんまりよくないが、もうちょつと練習すれば伸びそう
だ。

お！マックイーン！ 苦戦してんな！ ゴルシちゃんが教えてや
ろうか？

「むう…。結構難しいですね。ゴールドシップさん教えてくださるの
ならちやんと教えてくださいなね。」

勿論ですとも、プロですから。

まあちやんと教えるんだがイタズラとして、さっき用意した大手洋
服店のタグをちやんと見えるようにくっつけておくんだけどな！
わかる奴からすれば服の品質のレベルが違うからちやんと見ればわ
かるけど、パツと見ただけならわからないしな！

結果はゴルシちゃんはパーフェクト。二人組は引き分け。

スぺは普通に終わらして、ウララはさいごの方に上げてきてかなり
いいスコア。

ターボはガターか、ストライクのどちらか、スコアの方は残念なが
ら最下位。

マックイーンはゴルシちゃんが教えてから伸びてきて最下位から

逃げ切った、っていう感じだな！

ちなみにマツクイーンは寮に帰るまで気が付かなくて、見かねたフジキセキ寮長にエレガントに取ってもらったぞ！ やったのがばれてマツクイーンのプロレス技を受けたけどゴルシちゃんは今日も元気です。

おわり。

PART 21

ホーイ、今日はレース場からウマ娘プリティーダービー、始めて行きますよ。今日は前回お話していたイベント回収編になりそうですね。そうですね、スズカ先輩のレース観戦ですね。

今回のイベント、スペちゃんにとっても大事なイベントでございまして、何とスペちゃん初レース場です！

今回はスピカ他メンバーは先に場所取りをしまして、スペちゃんがちよつと遅れて向かってる感じですね。

まあ言ってしまうえばアニメ一期の話をイベントに起こしたという感じですからみんなスズカ先輩を応援して、スズカ先輩はっやーい！ ってするだけですね。

何にしてもスペちゃんは初めてのレース場、人もたくさん集まっていますし、色々と屋台も出てるみたいですね。案の定大量に食べ物を買って入っています。あの…、また所持金が減ってますが…。最近トレーニング用品を購入いたしましたしお財布が結構寂しいのでやめていただいても…。

あ、はい。無理みたいです。お財布の残量が二桁まで喰われました。そんなに食うからお金に苦労するんやぞ、スペちゃん。それにこの後…

〓レース場に近づくほど歓声が聞こえてくる。私は憧れの場所に来ているのだ。

〓感極まり、持っていたものを落としてしまった。

〓ほとんどひっくり返してしまった、もう食べることはできないだろう。

あーあ、やっぱりね。せつかく買った食べ物を落とすしちやいました。さすがに落としたものは食べれないのでごめんなさいしませうね。

スペちゃんは食べ物をボツシユートしてしまったことよりも、初めてのレース場での興奮の方が勝ってるみたいで調子は下がっていませんが、お財布的には大打撃です。悲しいなあ…。

ま、気を取り直してスピカメンバーが集まってる場所に移動しましょう。

ちなみにですが現在のメンバーはゴールドシップ、サイレンススズカ、ダイワスカーレット、ウオツカ、メジロマツクインとスペちゃんの6人です。我らがテイオーちゃんはまだ参加していませんね。一応今後のチャート的にもスピカに参入していただかないと困るのでメイクデビューがある6月までに入部してくれなかった場合はスペちゃんに動いてもらって勧誘しに行きましょう。最悪ゴルシと麻袋です。

「おお！ スペ！ 遅かったな、このゴルシ様が場所をとっておいただぞ！」

お！ ゴルシちゃん、ありがとナス！ これで最前列でレース鑑賞できますねえ！

んで、スズカ先輩のパドック入りはどんな感じでしたか？

「見た感じ気合も入ってたし、緊張もしてないっぽかったから行けるだろ。あつそうだ！ このルービツクキューブもう一個あるけどやるか？」

結構ですたい！ ならスズカ先輩が一着は確定でどんな勝ち方をするか、っていう感じですかね。ゴルシちゃんからおもちゃではなく、今日のレース新聞を頂きましてウオツカちゃんとスカーレットちゃんと一緒に見ましょう。

ふむふむ、なるほど。見た感じそんなに強い人はいないみたいですよ

ねえ。スズカ先輩が一番人気で周りはOPでやってる方ばかり、もともとGI狙える方ですし安心して鑑賞できますね。

〈「まあもともと調整で走る、って話だったらしいからな。そんなもんじゃねえの？」

〈「でも、スズカ先輩が調整って、何に向けてのかしら？ 宝塚記念とか？」

いや、元々は先行策で走れるかどうかの調整だったみたいですよ。今は逃げ一本で進むつもりだから、自分がどこまで走れるかの確認って、昨日言っていました。

〈「なるほどなあ、くうく！ 俺も早く走りたいぜ！」

〈「あら、私が先に走るに決まってるじゃない！」

おっと、このコンビがまたじゃれ合いを始めましたね。見てて楽しいですし…、このまま眺めているのもいいか。

〈「あら、またやっていますの？」

〈「周りに迷惑かけないようにな。」

お、マックイーンにトレーナーさんですね。見た感じ皆さんの飲み物を買って行ってみたみたいですね。

〈「ほら、スぺ、適当に買ったやつだがこれでいいか？」

ニンジンジュースですねえ、わざわざ感謝ですよ！ さつき買ったものボツシュートしてしまったのでお口が寂しかったのでちようどよかったです。

それとスぺちゃん、このレースは後々使えるので目に焼き付けておいてくださいね。

さあ、そろそろ始まりますね。

【サイレンススズカ視点】

このレースに出走した理由は調整だったが、今は調整ですらない。言ってしまうえば私はここで走る理由もないし、資格もないだろう。

だが、それでも私は先頭を譲らない、譲りたくない。その意味がなければ、作ればいい。

私が走る理由は見せつけるため。

新しくできた後輩たちに私がここにいることを。

エアグルーヴやフクキタルにまだ私が走れることを。

日々成長し続けるスペちゃんに負けないためにも、ここで勝たなければならぬ。

私がすること、できることはただ前を進み続けること。

『各ウマ娘、無事ゲートに納まりました。』

『今、スタートです。』

スタートは上々、後は何も気にせず前を走り抜けるだけ。

少し前までは先頭で誰も周りにいない時の静寂、ゴールの先にあるあの光を求めていた。

けど、今は違う。

私は、あの子に、勝ちたい。

『速い！ 速い！ 速過ぎる！ 前半1000m通過タイム、56秒2！ こんなに速いレースがあったでしょうか！ サイレンススズカが二番手に大きく差を引き離して独走状態！』

自分以外、なにもいない先頭、誰もついてこれていない。

だが、あの子と一緒に走ったら、必ず後ろについていただろう。

最終コーナーに入るあたりで、位置を整え、直線で爆発させてくる。

私を抜き、先頭に立とうとする彼女を思い浮かべ、私も加速する。

『サイレンススズカが最終コーナーを抜けた！ 未だ後続は来ていない！ ツ！ ここで加速した！ どこまで速くなるのか！ 最強は、最速はここにあった！』

最速は私のものだ！ 誰にも渡さないっ!!

『サイレンススズカが独走で、いまゴールイン！ タイムは……!! レコード！、レコードです！ 記録を大幅に縮めて、1分54秒3！

誰も寄せ付けない！ 最速の機能美、ここにあり！』

走り終わり、速度を落としながら、息を整える。 体に違和感もない。

確信した、このままいけば彼女にも負けない。

「「スズカ先輩……!!」」

ああ、応援に来てくれていたスベちゃんたちが呼んでいる。

自分の世界に浸るのもいいが、ライブもあることだし、まずは彼女

たちに感謝の言葉を伝えにいこう。

そうだ、スぺちゃんに伝えなければ、

「私は負けませんよ。」って。

PART 22

「どうだったテイオー、私のライバルは？」

うん、とつても速かった。

「だろう。ま、私を差し置いて最強呼ばわりされるのは癪だが、最速、という点ではあいつの方が上だろうな。」

エアグルーヴにそこまで言わせるなんて、やっぱりすごいんだね。

「ああ！ リギルに居たところは燻っていたが、元々奴はすごい奴だった。」

そっか、そうなんだね。 ……ねえエアグルーヴ。ボクはどうすればいいのかな？

「……もう決めていることを私に聞くのか？」

え！ なんでわかったの！

「顔を見ればすぐにわかる。ここに来る前は凄い顔をしていたが、今はずいぶんとましだぞ。」

……そんなにボクの顔ひどかった？

「ひどかったぞ。ひどすぎて会長が私に相談しに来るぐらいだ。帰ったら会長にお会いしに行くのだぞ。」

そっか、ありがと、エアグルーヴ。帰ったら会いに行くよ。

ボクが勝てないと思わせられた初めてのウマ娘、その子と会ったのはダンススタジオだった。

その時は忘れ物をしてしまって、放課後に取りに来たんだ。それで、スタジオに入ると、一人で練習している子がいた。その時はちよつと笑つちやつたよ、音楽からボクたちが初めに練習する簡単な曲なのはわかつたんだけど、あまりにもへタ過ぎたんだ。

それでちよつと見てられなかったから、色々と教えてあげた。その時に名前を聞いて、その子がスペシャルウィークつていうのを知った。

その時はただ、ダンスが苦手な子、というイメージしかなかった。そのあと、チーム選びでいろんなところを見てきた帰りに、練習してるのを見た。

そこでは今日見に来ていたサイレンススズカさんとスペシャルウィークちゃんが併走していた。

目が離せなかった。単に強かった。

自分がその場にいると想像してみる、が、掻き消される。

二人のレベルが、いや、スペシャルウィーク、あの子の力が強すぎるんだ。

二人の練習が終わるまで、ずっと見ていた。自分があの子に勝つにはどうすればいいか考えながら見ていた。

思いつかなかつた、思い浮かばなかつた、考えられなかつた。

ボクがあの子に勝つビジョンが。

ボクがどんな作戦をとつたとしても、彼女がボクの前にいるのが見えた。

ボクがどんな技を使ったとしても、彼女が力技だけで勝つのが見え
た。

ボクがどれだけ成長しても、彼女がボクよりも成長してくるのが見
えた。

その後、自分がどうやって帰ってきたか覚えていない。

気が付いたら自室に戻っていた。

あれから、何も感じない日々が続いていたけど、今日、エアグルー
ヴに連れてきてもらって色が戻った。

レース場の熱狂した雰囲気、それがボクに熱を取り戻した。

あの時から格段に成長したといえるサイレンススズカを見て、自分
がまだ成長できると感じた。

そして、あんなにキレイな勝ち方を見て、ボクもあの場に立ちたい、
勝ちたいと思った。

「まあ、大丈夫そうだし、安心したぞ。お前の顔を見たときは目を疑っ
たからな。」

あはは、ゴメンネ。

「そういえば、どこのチームに所属するのか決めたのか？ お前のこ
とだからもう決めてるのかもしれないが、もしリギルに入るのなら東条
トレーナーに言付けしておくが。」

大丈夫！ もう決めたから！

ボクが入りたいのはスピカ！ あの練習を見たときからそこまで
時間が経っていないのにあれだけ成長したサイレンススズカさんが
証明してくれた。あのチームはボクを成長させてくれるって。

それに、ボクの一番のライバルになりそうなあの子もいることだし

ね！

近くで見て、色々盗ませていただくことにしましょうか！

このあと、会長に会いに行ったときに教えてもらったんだけど、ボクのことを心配してマヤノが相談しに来て、ボクの変調を知ったんだってね。あとでマヤノにお礼しておこう！

そういえば、エアグルーヴにスピカに入るって言ったらすごい心配されたけどどうしてだろう？

PART 23

ハイイ！ スズカ先輩が予定より強くなりすぎたみたいで絶望した実況プレイ、やっていくよー！

はい、さすがにちよつと泣きそうになりました。何ですかね、あのタイムは？ 先輩はRTA走者だったりしたんですかね？

ちよつと後で確認してみたんですけど、あのタイム史実の日本記録を大幅に更新してるんですね。

やっぱりあいつ、おかしいや…。

まあスペちゃんの方はやっぱり凄い先輩なんだ！ 私ももっと頑張らないと！ みたいな感じでライドオ！ になっていきますがわたくし的には色々大変ですね。

ま、頑張っていきましようか。

時間はスズカ先輩のレースから数日たったチーム練習日でございます。スペちゃんは例のトレーニングスーツを着て練習しています。ちよつと動きにくそうにしていますが、ちゃんとできてますね。経験値的にもウマ味です。

あ、それとレース翌日にテイオーちゃんが無事、入部してくれました。何でもスズカ先輩のレースがすごかったから入部したそうです。確かにすごかったからなあ…

〓「スペ、ちよつといいか？」

お、トレーナーさんですねえ！ どうしたんですかい！

〓「ちよつと部室まで来てもらってもいいか？ 今後のレースについての相談なんだが…。」

りよ！ んじゃ皆さんれんしゅ途中ですが失礼しますタイ！

「それでスペ、今後出走するレースのことだが、確認だが次の6月下旬でメイクデビューでいいんだな。」

そうですね、一年見送りなんてせずにこのままデビューしますよ。

「解った、話を聞いてる感じクラシック路線で行くと思うんだが、入り方はどうする？俺としたら来年のトライアル系に出るよりも今年のホープフルに出走して、その成績で招待される方がいいと思う。GIレースだが、お前の実力なら勝てると思う。どうする？」

お！そっちのルートできましたか。試走時では普通にトライアルを走るルートで行ったんですが、今回はホープフルに出走することもできるみたいですね。育成的にはGIを走れた方が経験値的にもウマ味ですし、冬から春までの全部を皐月に向かって練習に使えるのはとってもいいです。

というわけでホープフルステークスに出走するぞ！

「わかった、そのように調整していこう。一応叩きとして他の重賞レースに出走することもできるが、どうする？俺としてはどっちでもいい。」

たまに意味わからん強さの方（シニア級）が出てきて事故る可能性があるなので回避しますぜ。

「…よっしゃ、こんなもんか。スペお疲れさん。悪いが次はマツクイーンを呼んできてもらえるか？」

了解です！んじゃ呼んできますね。

にしてもホープフルルートですか、これはちよつとチャートを書き

換える必要があるかもしれないね。でもスペちゃんの功績がまた一つ増えるので私的には、OKです！

んじゃ、次回はメイクデビュー走っていきましようかね。次回の動画でお会いしましょう。

【メジロマックイーン視点】

「それで、マックイーンお前は どうしたい？ スペよりも一年遅らせてデビューすることもできる。」

私たちウマ娘のレースはデビューした瞬間にジュニア級とみなされ、そこからクラシック、シニアと進んでいく。一度入ると途中でやめることはできない。

スペシャルウィークさんと戦うのを回避し、来年デビューすることと比較的楽な道を歩むか、ということを知っているのだろう。

たしかに、スペシャルウィークさんは恐ろしく強い、かなわないと思うほど。

しかし、それを避けこの私が楽な道を歩むとでも！

メジロの令嬢を舐めないで頂きたい！

私はどんな壁にぶつかつたとしても諦めはしない、負けはしない。壁である限りは必ず飛び越えられる！

「ふざけないでください、私も今年デビューいたしますわ。」

「……そうか、解つた。目標は春の天皇賞、それからの天皇賞連覇でいいんだな。」

「もちろんですわ。必ず、メジロにあの盾を持ち帰って見せます。」

ゴールドシップに無理やり入部させられたこのスピカでしたが、今

は入ってよかったと思えます。

自身の目標とできる方をすぐ横で観察し、競い合うことができますから。

それにちよつとだけこの雰囲気も気に入ってきましたしね。

私が提示された道は菊花賞からの天皇賞のルート、それまでにいくつかの重賞レースを走ることになるみたいですが、スペシャルウィークさんと競い合うのは菊花賞が最初になりそうですね。

そこでメジロの、いや私の意地をお見せいたしましょう。覚悟しておいてくださいね、スペシャルウィークさん。

【トウカイテイオー視点】

「テイオー、お前も今年入りでクラシック路線か？」

「うん、もちろん！ 目指すは会長と同じ三冠ウマ娘だよ！」

「…かなり厳しいが、解ってるんだな。」

スペちゃんは確かに強い、でも戦う前に逃げるのはボクじゃない。

「うん、高い壁なのはわかってる。でも挑まずに逃げるのはね！」

「…そうだな。かなりキツイ道になるがついてくれるか？」

「もちろん、ボクは最強のウマ娘、トウカイテイオー様だよ！ いくらでもかかって来いってんだ！」

ボクは一度折れてしまった、でも立ち上がった。

これから、ボクのレースがどうなっていくのかは誰にもわからない。い。

どんな壁にあたるのかはわからないけど絶対に立ち向かって見せ

る、もうボクは折れない。

目標は会長みたいなウマ娘、それは今も変わらない。
けど最近もう一つ増えた。
スペちゃんに勝つこと。

これから一緒に練習する仲間になったから近くで全部吸い取ってやる。それで成長してやる。

皐月賞で勝つのはこのボクだ！

PART 24

ハイイ、スペちゃんを限界まで強くしようとしたらスズカ先輩がちやくちや強くなりそうでチャートを組みなおすことになった実況プレイ、始めて行きますよ〜。

今回はですね、お待たせいたしました、やっと公式レース出走ですよ。part 20 超えても公式レースに出走しない実況動画があるらしいぜ、笑えよ…。

んじゃ、気を取り直して現在のスペちゃんのステータスをご覧くださいだきましようかね。

▽スピード：D+
スタミナ：C+
パワー：B
根性：C
賢さ：D

と、こんな感じですね。入学から出走まで、バイトや調子上げのイベント回収など丸まる練習につき込んでいませんでしたし、トレーニングスーツを導入したのも最近でしたのであんまり伸びてないです。まあでも、トレーニングスーツの購入とメイクデビューの賞金でバイトの必要性が薄くなってきましたのでこの後は、全部の時間を練習に使えるようになってくるので安心ですね。

んじゃ、スペちゃん、インナーとして着込んでるスーツを脱ぎまして、レース用の体操服に着替えまして、ゼッケンをつけましょうねえ。なるほど、今回は一番人気の一枠一番の内側での出走になるみたいですね。一が多くて縁起がいいですね！ これなら……

▽「スペ、ちよつといいか？」

お！ トレーナーさんじゃありませんか！ 今から向かうところ
ですし、緊張もしてませんか！

「そうか、ならよかった。それと皐月賞まではゲート時のアレ、使
うなよ。」

お、なるへそ。温存するわけですねえ。りよです！

「よし！ なら頑張つてこい！」

おつす、じゃあ行きますよ。

んじや、皆さん集まってきましたし、ゲートに入る用意をしましよ
うね、スペちゃん。

あ、それとここでオリチャーを発動しときましょう。スペちゃん、
お耳を拝借。

わたくしの趣味の部類になるのですが、メイクデビュー時は何バ身
離して勝てるかな？ というのをやってまして、今回もスペちゃんに
挑戦していただきたいんですね。

今回のレースは右回り・内の2000mのレースです。見たところ
プレイアブルキャラクターなどの警戒すべきウマ娘の方々はいらつ
しやらないようですし、いつもは最後の直線or最終コーナーあたり
で仕掛け始めるのがスペちゃんの戦法になりますが、今回は半分あた
り、1000m付近から仕掛け始めましょう。

それで、最終コーナーに入るあたりで先頭に立ちまして、後は後続
を離して走り抜けましょうね。この前見たスズカ先輩のように走り
ましょう。解った、スペちゃん？

お、理解してみてくれたみたいですね、実は最初は逃げで行こうと
考えていたのですが、現在熟練度を上げている差し適性に経験値が入

らないと気づきやめとききました。

ではでは、スペちゃん走っていきましようね。

『各ウマ娘、ゲートに納まりました。』

『今、スタートです。』

「ふう、スタートは大丈夫みたいだな。」

「あれ、スペちゃんゲート苦手だったの？ トレーナー？」

「そういえば、スペシャルウィークさんはゲート練習をなさっていませんでしたね。」

「え！ スペちゃんゲート苦手だったの！」

「お、落ち着けスズカ……。スペはどちらかという得意な方だぞ、ただちよつとな……。」

「ふむう、このゴルシ様を前に隠し事かねえ、チミ〜。」

「……ま、スペの切り札のことだな、この後にでもスペに話してもいいか聞いてみるよ。」

「切り札、ですか……。」

「ふうん、ま、ボクはどんなものでも攻略してやるけどね！」

「切り札か、なんかカッコイイな！ 俺もなんかそんなのが欲しいな！」

「確かにそういった決め技は欲しいわね……。」

「さ、みんな。そのことは後でトレーナーさんを尋問するとしてレースに集中しましょ。」

「尋問って……。」

『さあ先頭がちょうど半分を通過、これからどうなるのか、おつとこ

ここで一番人気、スペシャルウィークが後方集団から上がってきた!』

「ちよつと! 仕掛けるのが早すぎない!」

「これは持つか?」

「スぺの体力的には十分に持つ、がやはり早い。これは緊張で掛かったか?」

『スペシャルウィーク! 最終コーナー入ろうとするところ、後方から追い上げ、現在先頭です!』

「さあ、こっからだな……!」

「」「」「ガンバレー! スぺ(ちゃん)ー!!」「」「」

『現在先頭が最後の直線に入りまして、おつと! スペシャルウィーク加速していく!』

『後方ついていけない! 驚異の加速力! なんなんだこれは! なんなんだ君は! これは本当にデビュー戦なのか!』

『何バ身離れているのか! 後ろが見えない! どれだけ離せば気が済むのか!』

『スペシャルウィーク! 一番人気に伝えて、いま勝利です! 本当に何バ身離れていたのか!』

『掲示板には大差の文字! 今こちらにデータがまいりました! 現在のレースでの2番手との差は……!! 20バ身! 20バ身差です!! 過去の日本記録、デビュー戦での18バ身差を大きく塗り替えまして、今!! 伝説が誕生しました!!』

「「やったー!!!」」

「これは、挑みがいがありますわね……!」

「……見とれちゃった。でも、こうでなくちゃ! 壁は高ければ高いほどいい!」

「スペちゃん……、ふふ。私も頑張らないとね。」

「(マックイーンにテイオーにスズカ、完全にスイッチ入ってるな。……さ、次はライブだ! 移動するぞ。)」

「そういえば、ゴルシちゃん思うんだけどさ。スペってライブの練習してたか?」

「「「あっ!」」」

PART 25

ほい！ 無事にデビュー戦を勝利した実況プレイやってくよ。いや、スペちゃんよかったですね。20バ身行けるとは思ってたんですけど。まあ伝説のあいつには負けませんが、日本の新馬戦での記録は塗り替えましたね。

スペちゃんも喜んでるようでよかったです。油断は禁物。おそろくですがこのレースをライバル枠が見てるはずなので、また成長ブーストしてきます。ここで気を抜いていると普通に負けるので頑張ってくださいましょう！

んで、勝った賞金の使い道なんですが……、やっぱり炊飯器ですか、スペちゃん？

あく、前回欲しいと言っていた5万ぐらいのやつよりも上のグレードのが欲しいみたいです。これでもか！ というぐらいに丸を付けて、付箋をつけまくっています。本当は他に買いたい器具類があったんですが……

今度は拗ねすぎて泣きそうになってますね……、解りましたって。また拗ねて調子が下がるのは本意ではありませんし、いいの買いましょうね。

▽炊飯器を買った！

▽調子が絶好調になった！

おう!? 大喜びですね、こんなに喜んでるスペちゃんは初めて見たかもしれませぬ。

これからお米代もかかると考えると賞金が入ったと考えてもちよつと厳しいですが、そんな時はそんな時で何とかしていきましょう。

んで、これからの方針ですが、ひたすらトレーニングですね。一応、現在が6月後半程ですのでそろそろ夏合宿が始まりますが、スピカは

人数が集まったと言えどもまだ弱小チーム。学校側が用意している合宿場に入れるかは、解りませんで合宿後のことを決めていきましよう。

スペちゃんの次走はホープフルSで今回と同じ芝2000mです。GIともなるとライバル枠や他のプレイアブルキャラクターが出てきてもおかしくないですが、ライバル枠の子たちとのステータス差が未だ大きいと考えられるので回避してくると思います。

ので、GIですが楽に勝てるか、なので目標はライバル枠が狙ってくるであろう皐月賞に定めていきましようね。毎日インナーにトレーニングスーツを着て、服の下におもりをつけて生活しましようねスペちゃん。加重トレーニングですぜ。

時間が変わりました、現在スピカのチーム練習の最中ですね。スペちゃんは加重トレーニングをしながら他のデビュー戦を控えている子たちの併走をしております。

併走中ですが、実はスキルの熟練度上げもしてるんですよ。

スペちゃんが持つてるスキルは自身の固有と会長、デープの【ゲートの支配者】ですが、支配者以外は終盤で誰かと競り合って抜かさないと発生しないスキルです。なので、併走に付き合っていると見せかけてこれらのスキルの熟練度上げをしてるんですね。

今、特に上げたいのはデープの【空駆ける英雄】です。こちらは最終直線までに誰かを追い抜いているときに加速する、というスキルなのですが、これの熟練度上げがかなり時間がかかります。

これはですね、会長や自身のスキルだとお手本を見たり、自身の思うようにやってみることで熟練度が上がりやすくなるんですが、このスペちゃんがいる時代にはデープは学園にやってこないんですね……。

なんでお手本なしで試行錯誤しながら熟練度を上げる必要があります。

ほら、スペちゃん。最強の自分をイメージするんだ……、最終コーナーに入った瞬間、前にいる全員を抜き去って君が先頭に立つ瞬間を、そしてそこから後ろからくる圧を力にして、加速する。

ね、簡単でしょ？

〈【空駆ける英雄】を発動！

〈……失敗した。

……まだ無理みたいですねえ。

ま、気長にやっついていきましよう。デイープのほうは難しくても自身の固有は上げやすいですし、会長のは過去のレース映像を研究していけばブーストがかかりやすいですしね。

スペちゃんもそんなに気落ちなさんな、ほら、そろそろ練習も終わりにみたいですしおすし、柔軟とかしつかりしておくんですよ。あ、それと部室のテレビで過去の会長のレースを見ていかトレーナーさんに聞いといてくれるかい？ 多分テイオーにも言ったら一緒に頼み込んでくれると思うので。

〈「ん、部室のテレビか。使っても大丈夫だぞ、多分過去のレースを録画したのが残ってたはずだし、そこから探してくれ。」

〈「おー！ いいねえ、ならボクが持つてる会長のレースコレクションも持って来るよ！ 一緒に見ようね、スペちゃん！」

ちゃんと許可取れたみたいですね。お、スカーレットとウオツカも一緒に見るみたいですね。みんなで研究しましょうか。

では、今回はこの辺で、レース鑑賞しているスピカメンバーを背にお別れです。ではでは。

【スピカトレーナー視点】

「……うし、こんなもんか。」

今日、無事勝利したウオツカのレースについてまとめ終わった資料をまとめながら一息つく。

ウオツカが勝利したことで無事、今年入った奴らのデビュー戦がすべて勝利で終わった。入部した時から才能の塊みたいなやつばかりで色々心配していたが、まずは何とかなつたようであんまり安心した。

そして、スぺの影響がよい方向に向かっていることにも非常に安心している。スぺは今、シニアやクラシックで走っている奴にとつて劇薬になりうる。それが同世代にいることに絶望してしまうんじゃないかと思っていたが、いい刺激になったようで、いや刺激というには強すぎるか。

マックイーンは自身の目標に向かって強い意志を保っているし、テイオーはすでに壁に立ち向かう覚悟ができてきている。スカーレットやウオツカは路線が違うからかそこまで気にしていないみたいだが、その分いい刺激になっている。二人で高め合ってくれればいいコンビで安心して見てられる。

スズカは後輩に負けないように頑張っているし、ゴールドシップは練習していかないように見えるが、メンバーの様子をかなり気にしてくれているのが解る。それで真面目にやってくれれば完璧なんだが……。

新人たちのデビューも終わった。あとは来週のスズカの宝塚記念だな。OPでレコードを叩き出していたし、体の調子もよさそうだった。今はスぺが併走に付き合っているようで、それがいい刺激になっているのか少しづつだが成長している。あとはケガさえ気にしてお

けば大丈夫だろう。

にしても、宝塚記念ということは、もう前期のシーズンは終わりか……。これから夏をどう過ごすかでこれからが決まる。どれ、もう少し頑張つてやっついていきましようかね。

「……………ん？ 夏？」

夏ということは、合宿。夏合宿の時期……………！

「マズい！ 合宿場の予約つていつまでだっけ！」

学園には専用の合宿場があるが、合宿場の定員にも限界があり、スピカのように弱小チームは、前もって予約しておいて、初めて抽選に参加できる。急いで確認しなくては……………。

「……………学園専用の合宿場の予約は先週までとなります、か。やらかしたなあ。」

マズいなあ、これからの夏が大切だ、つて言つてる時からこれか……………。

いや、切り替えないとな。

大手のチームが合宿場に行くということは学園内の使われないトレーニング施設が使えるようになる。そこをえるようにしてもらおうように明日、頼み込む。そして、設備点検の日は毎年同じなので使えない日が解つてるから、その時期にどこかうまく使えそうな場所を探して、合宿を行う。

これならいけるか？ 関東で素足でもランニングできるようにゴミが少なく、キレイな砂浜がある場所を探して、その近くにある旅館を1週間ほど。うちは部費も少ないし、ある程度は自腹で出さないといけないのは覚悟するべきか？

そんなことを考えながら調べていると、思っていた条件に当てはまる場所があった。

キレイな砂浜があつて、かなり小規模でお世辞でもキレイとは言えないが旅館がある地域があつた。

「ここだな、早速予約できるか聞いてみよう……。あとウマ娘もOKなのか聞いておかないと……。」

電話してみると、人のよさそうな女将さんが対応してくれて、すぐにOKしてくださった。かなり大食らいがいるといったが、毎年ウマ娘を連れてトレーナーさんが来ているから大丈夫だという。大丈夫だといわれても、スペのことなのでとりあえず人数＋3人分で食事を用意してもらおうようにお願いしておいた。

にしても、毎年来ているトレーナーとは誰だろうか？ 話しぶりからしてかなりの常連のような話しぶりをしていた。女将は「赤さん」と呼んでいたが……。

いや、まさかな、あの人がくるとは思えないし、他人のことだろう。

何故かいやな予感を覚えながら予定を詰めていく。スズカの宝塚記念もあることだ、今はいまやるべきことに集中しよう。

PART 26

別ゲーだけどスズパレードでシンボリルドルフを打ち崩した実況プレイ、やってきますよ。いや、皐月賞でスズパレードがルドルフを打ち負かしたIFは涙出ましたね。出来ればウマ娘でもしたいものです。

運営さん、スズパレードの実装はまだですか…？

前回ちよつと言い忘れてたことがあったのでそれから行きますねえ。

まず、スペちゃんのスキル関係のことから。

スペちゃんが改善していた走り方の件ですが、すでに改善し終わっています。ま、前回のレースを見てくださった方で解った方もいましたかね？ デビュー戦始まるちよつと前に改善し終わっていたんですが見どころ君がなかったのでカットしました。申し訳なし。

お次はスキル、【ゲートの支配者】ですが、スペちゃんの修行の結果。無事習得で来てます。なんで前回トレーナーさんが使うなど指示してくれたんですね。ちなみに余った朝の時間はスズカ先輩と朝のラニングしてました。

それでなんですけど、こちらのような汎用スキル、ま、固有スキル以外のスキルにはレベル表記がなく、一度習得すれば終わりです。またアプリ版でもあったように固有スキルはレベルを上げることができましたが、こちらの据え置き版は、自身以外の固有スキルもレベルを上げることができます。ま、その分要求熟練度は多いですが。

ちなみに最大値はアプリ版と同じでレベル6です。

スペちゃんは自身の固有のみしかアクティブになつてないのでこれからどんどん熟練度上げていきましょね。

んで、本来ならスズカ先輩の宝塚記念があるまで飛ばしていこうと

思ったんですが、ちよつとイベントがあつたんで見ていきましようね
〜。

〈「スペ、ちよつと話があるんだがいいか？」

お、デビュー戦をきれいに勝利し、このわたくしのダンスが炸裂し
たスペちゃんになにか御用ですか！

〈「ゲートでのお前の技のことなんだが……」

【ゲートの支配者】ですねえ！ 一度見られると効果が下がってしま
うので臯月まで封印しておくはずな奴ですな。その秘密兵器がどう
したんでい！

〈「その、悪いんだが、口を滑らしちまってメンバーにばれちまった。
詳しい内容はまだだがどうする？」

……そうですかー、ばらしちやいましたかー。

スペちゃん、そいつ東京湾に沈めに行こうぜ。

〈「いまなんか、すごい寒気がしたんだが！」

ま、いつかはばれることでしたし、許してあげますか。一応スピカ
内にはライバル枠はスズカ先輩以外はいませんし、スズカ先輩も戦う
とすればシニア級、当分先です。そのころにはこのスキルも対策され
てるでしょうし、ばらしてもまーもんだいかな？ 別チームにば
れないようにだけ言っておくなら見せてもいいですよ。

〈「ほんとか！ ふう、よかった。」

どうせゴルシちゃんに言わなきや「ゴルシスマツシユだぞ！」なんて言われてたんでしょね。見るからに安心してます。

んじや、今度の朝練にゲートでも借りて実演会しますか。

【ウォッカ視点】

スペシャルウィークが今後のために用意したっていうゲートでの技を見せてもらうためにみんな集まってる。

トレーナーの話しぶりからすると結構すげえ切り札みたいで、見せてもらうのはちよつと悪い気もするがかなりワクワクする。

実際に感じてみた方がいいということなんでゲートに入っただけで待つてみる。

本当に走り出しはしないけど、スタートの用意をする。

最後にスペが入って構える。

その瞬間、世界が真っ暗になった。

ゲートの中から見える景色は変わらない、でも真っ暗のように見える。

自分がどうなったのかわからない。

ここから早く逃げ出したい。

そう思っただけで足を動かさそうとした。

動かない。

地面から無数の手が湧き出て自分の足をつかむ、ここから行かせるものかと言っている。

無理やり足を動かそうとするが、ピクリとも動かない。

もう、どうすればいいかわからない。

恐怖で頭が真っ白になってくる。

気がつけばスペとゴールドシップがスタートしていた。

レースでもなかったし、どうしても走る気が起こらなかった俺はその場に座り込んだ。

その時は周りを見る余裕はなかったが、後で聞くとみんなそんな感じだったらしい。

なぜか、ゴールドシップが解説していたが、何でもスペのプレッシャーが大きすぎて脳が混乱し、その人にとっての恐怖を幻視したのではないかということだ。

克服するには自身の実力を上げて、何回もアレを受けることで体に慣れさせるか、ゴールドシップ主催のマグロ漁に参加すれば何とかできるらしい。

正直、マグロ漁の方に惹かれたが、マックイーンとテイオーに止められたのでやめておいた。面白そうだったんだが……。

ま、今回は完全に負けちまったが、次はこうはいかねえ。今回の感覚は覚えた。つぎこそは克服してやる。

いつまでもスペに負けてらんねえしな、カッコいい俺になるためにも今は力を溜めるところだ！

そういえばこんどゴールドシップが必殺技講習会をするって言うてたけどどんなのだろ？

面白そうだし行ってみるか……！

【ダイワスカーレット視点】

この学園に入ってから、『一番は私』から『一番になるのは私』になった。

競い合えるような相手がウオツカしかなかったということもあった。昔の私は自信に満ち溢れていた。

けど、入学して。いや、正確にはあの子を見てから自分が井の中の蛙であることを理解させられた。

スペシャルウィーク、おそらく私たちの世代の中で一番強いウマ娘。

私やウオツカが何とかついていけるような練習を平気な顔して終わらせてくる。

私たちが息を整えている間にすでに走り出している。

世界にはこんなに強い人がいるのかと思わされた。

そんなときに、

彼女がクラシック路線、自分の走るティアラ路線とは違う道と走り聞いている。

私は安心してしまった。

安心した？ この私が安心したのか？

彼女と戦わなくて済むことに安心したのか？

自分はすでに負けを認めていたというのか？

認められない、認めたくない。戦わずして負けを認めるなんてありえない。

知らずのうちに負けを認めてしまった自分が恥ずかしい。

私は『一番』になるんだ。

だから今の『一番』の近くでその技術を、力を自分のものにしてやる。

最初はチラシにひかれてはいったチームだったけど、本当に入れてよかったと思う。

ここには『一番』がいる、『最速』がいる、そして『好敵手』もいる。言動や行動はアレだけど能力は確かなトレーナーがいる。

ゴールドシップは……、うん。

とにかく、ここには『一番』になるために必要なものが全部ある。なら、後は突き進むだけ。遅れるんじゃないわよ、ウオツカ。

PART 27

【サイレンススズカ視点】

また、私たちの部屋宛に荷物が届いたようだ。最近スペちゃんがカタログを見ていたし、トレーニング用品でも買ったのだろうかと思いい、受け取りに行くかどうか見ても家電の箱だった。しかもかなり大きい。

よくよく確認してみると、炊飯器だった。

さらに、メーカー、品種を確認すると10万近くする本格的でかなり大きめな炊飯器だった。

その場で怒りを爆発させなかったのは奇跡に近い。

いつもなら運ぶのに時間がかかりそうな重さだったが、その時だけは重さを感じなかった。

部屋に戻るのも早かった。

「スペちゃん、正座。」

「おかえりなさい、スズカさん。どうかしま…」

反応が遅いスペちゃんにさらに苛立つ。床を指さし

「早くそこに座りなさい。」

「は、はい！」

「スペちゃん、これは何ですか？」

重いはずの炊飯器が片手で持てた。自身の冷静な部分がそこを指摘する。

「す、炊飯器、です……。」

「なんで買ったの？」

「い、いつでもご飯がたべたかったの……。」

「いつも食堂であんなに食べるのに？　いつも体重計の前ですごくいい顔してるのは誰ですか？」

食堂の方々を困らす程食べて、体重計の上で表情をあれほど変えるのはあなただけですよ。

オグリキャップ先輩は例外なので数には含めません。

「私です。で、でも……。」

「口答えしない！」

「とりあえず、この炊飯器は食堂の方にお渡ししてきます。このサイズなら使えるでしょうし大丈夫でしょう。それでいいですね。」

「で、でも……。」

「それでいいですね。」

「は、はい。」

（最近「太り気味」が頻繁に起こってましたし、これ以上の過食は止めるべきだったのでよかったですね。明日からスズカ先輩に頭が上がりませんねえ、クオレワ。）

本当にスぺちゃんさんの食欲は色々と逸脱してるんだから。これからはもう少し厳しめに言った方がいいかもしれないわね。そんなことを思いながら私は食堂に向かう。

ちなみに食堂の方々には、かなりいい物だったようでお礼を言われた。スぺちゃんのことを話すと食欲のこと以外は悪く思われていな

いようで安心した。

それにしても食堂で使える炊飯器を買ったスペちゃんはどれだけ食べるつもりだったのか。

あの子の食欲について考えるのが少し怖くなった。

—————

〽『サイレンススズカが先頭で今、ゴールイン！ まさに最速だ！』

オツスオツス、おら投稿者！ 今日には宝塚記念の応援にきてっぞ！

出走者はスズカ先輩、今一着でゴールインしてみたいつすよ！

お、こつちに先輩が来ましたね、GI勝利おめでとうございます！
勝負服も似合ってますねえ！

〽「ありがとう、スペちゃん。 みんなも応援ありがとね。」

いえいえ。にしても、あの後、今期デビュー勢は全員かつたし、スズカ先輩も勝つたし。いいことばっかですなえ。スペちゃんもスズカ先輩みたいに勝てるように頑張りましょうね。とりあえずは、直近の夏合宿、頑張りましょう。

と、思っていたんですけど……

〽「んじゃ、地図にルート描いておいたからここまで来てくれよな。お先に。」

トレーナーさんが地図を渡して車で行っちゃいましたね。

今日は合宿に行く日っていうので、全員荷物を用意して、ジャージで来るように、と言われていましたから、もしかしたらと思つたら、悪い予感が当たりましたね。

ちやつかりトレーナーさんが全員分の荷物を載せて先に行っちゃいましたから、みんなマジで何も持つてねえ、つて感じですね。財布もないから諦めて走るしかないですね、つらい。

〈「おい、スペ！ お前の持つてるデカイリュックの中には何が入ってる！」

はい、ゴルシちゃんだけじゃなくて、わたくしも気になってました。スペちゃんだけは荷物を預けずにかなりでかめのリュックを前後に持つてますが何持つてるん？

え、お弁当？ 全部？ マジ!? あ、一応みんなの分のお弁当なのね。途中でお腹が減るかもしれないから食堂の方々に作つてもらつたんですね。前に背負つてるのがみんなの分のお弁当で、後ろに背負つてる分が自分用ね。

いや、そんないい顔で言われましても……。

〈「スペ、お前つてやつは……。」

〈「わ、わらえばいいのかな……？」

〈「これはまた怒つた方がいいのかしらっ？」

いや、一応みんなの分ももらつてきたみたいですし、許してあげても……、ん？ ということはこの何キロあるかわからないお弁当を、どこにあるかわからない合宿場まで、しかもインナーにトレーニングスーツを着て走ると？ スペちゃん行ける……、無理そうですね。今現実に気づいて顔が青くなっていますやん。

〈「じゃ、じゃあ地図を見る限り、途中で休憩できそうな場所がある

し、そこでお昼にしましょうか。あ、スペちゃんは責任をもって自分で運んでね。」

え！ そんな殺生な！

▽「最近またお腹出てきてるわよ。」

……スペちゃん、あきらめて走りましょうね。スズカ先輩には逆らえませんよ。みんなもすごい憐みの目で見てますねえ、悲しいなあ。

んじゃ、あきらめて合宿場まで走りましょうね。

ちなみに行きはお弁当の重みで苦しみ、昼食後はリュックの中身を全部しっかり食べたので途中からはお腹の重みに苦しみながら走りました。一応それでも最後尾をちゃんと走ってきてるスペちゃんはさすがだなあと思いました。

マル。

PART 28

【スピカトレーナー視点】

女将さんが言っていた、「赤さん」、正直そこだけで気が付くべきだった。いや、気が付いていたとしても練習環境としてはここ以外いいところはなかった。つまりこうなるしかなかった、ということだろう。

「……ん、お前さんはスピカのとこのか。」

「どうもご無沙汰しております、赤田先生。」

「お前さんも近くの砂浜目当てかい？ 去年までは貸し切りだったが、ま、いいか。にしてもいいところに目をつけたな。」

愛想笑いしながら受け答えする。赤田先生とこんなところでお会いするとは…、自身の選んだ場所がああ赤田先生と同じことに喜ぶべきか、トレーナー界の神と同じになったことを嘆くべきか。

にしてもああのシンザンを担当していた赤田先生がこんなところにいるとは……。

「ん、お前さんも俺がここに来るのが不思議と思ってるのか？」

「い、いえ。そんなことは。」

「別に怒ってなんかねえよ。ま、確かに学園がやってるとこの方が幾分かいいんだろうけどな。ここは俺がチームを持ってた時からお世話になっててな。ここでやらんと気が引き締まらんよ。」

「そうでしたか……。」

「最近はお嬢に頼んで器具類も置かせてもらってるしな。今はうちも一人だけだし使うか？」

「いいんですか！ ぜびー！」

「おう、その代わり、うちのお嬢と練習させてやってくれや。一人でやるのも限界を感じてたし、いい刺激になるだろ。」

「それはこちらからお願いしたいぐらいですが、お嬢というのは、先生

が担当してらっしゃるっ！」

「ヘイローだな。そろそろ来るだろ。」

「トレーナーさん、用意してきました。って、そちらは？」

「よう、お嬢、準備できたみたいだな。こいつはスピカのトレーナーだ。あいつらもこっち来るらしいぞ。」

「スピカ、ということは……、いえ、失礼しました。キングヘイローです。」

挨拶を返しながら赤田先生が担当しているウマ娘、キングヘイローを見る。スペには劣るがかなりなものを秘めている。今はまだスペに届かないが、今後はどうかかわからない。そう思わされた。

「じゃ、俺は先に練習場の方に行ってる。場所は女将も知ってるからそっちに聞いてくれ。」

「では、私も失礼します。」

トレーナーたちの間で神と崇められる赤田先生とスペを倒しうるキングヘイロー。かなりのコンビだが経験を得れると考えればスペのせいで財布が空になるのも痛くはない。そう思った。

いや、やっぱり痛い。

なんでスペはあんなに燃費悪いかなあ。

「お嬢、デビユー戦を見た感じ、あのチームは化け物だらけだ。盗めるもんは盗み尽くして自分のものにしろ。」

「解りました。キングの意地、見せてやります。……アイタ！ 何をなさるんですか！」

「お前さんは気が張りすぎてんのよ。もう少しリラックス、ていうや

つだ。」

――
最近はちみつがおいしい実況プレイ、やってくよ。

ほらスペちゃん、動画始まってんだからどんなにお腹が重くても走るんだよ！

まあ食べすぎもありますが、ジャージの内に着ているトレーニングスーツがキツくなってるんですかね。これから服の内側にももりとかつけていきますから、早く慣れてほしいんですが、ま、始めたばかりですし、仕方ないかな？

ま、そんな風にぜえぜえいいながら、何とか地図に描かれていた宿泊地に着きましたね。

宿泊地は…、よく言って老舗、悪く言ってボロイ、って感じですかねえ？ ま、スペちゃんはみんなとお泊りなんて初めてなんで、ワクワクが抑えられてませんね。代わりにお嬢様のマックイーンは凄顔してますが。

〽「おう、皆さんお疲れさん！」

お、トレーナーさんですねえ。顔見せた瞬間にプロレス技食らってますがご愛敬でしょうね。

〽「そ、それと、砂浜の方にうち以外のチームが来てるから挨拶だけでもしに行くぞ、失礼のないようにな。」

スピカ以外のチームですか？ こんなイベント初めてですねえ。コレワ、wikiに情報提供するためにも調べつくしましょうかね。ほい、ウオツカにスカーレット、そろそろ勘弁してやれい！ オラ、挨拶しに行くぞ！

「おう、来たみたいだな。どうも、赤田だ。個人でやってるおいぼれだ。ま、合宿の間だけでもよろしくな。」

「キンググヘイローです。スペちゃん以外は初めましてかしら？」

あ、ライバル枠のキンググヘイローちゃんですねえ。すみません、ちよつと退席します。

どうして
なんでな
私が何か悪いことしました
????????????
????????????
????????????
????????????

はい、失礼しました。なんで経験値習得量が馬鹿でかい夏合宿でライバル枠と会うんですかねえ!? わたくしのチャートにPASS AWAYされとおっしゃるか!

まあここで発狂しても仕方ないですし、こうなればキンググヘイローの成長率をわたくしのオリチャーと豪運で何とかするしかあるまい! スペちゃん、ちよいと厳しくなるがついてきてくれ!

というわけで今回はここまで、次回からはオリチャーが火を噴くことを祈って。次回の動画でお会いいたしましょう。

PART 29

ではでは、チャートがぶっ壊れた実況プレイやってきますよ。

今回はですね、何の因果か、ライバル枠のキングヘイローと一緒に夏合宿を過ごさないといけなくなつたところからですねえ。

ライバル枠になってる子たちは育成キャラと一緒に練習している、そしてその育成キャラとライバル枠の子とのステータス差が大きい場合「なにくそ」、という感じで成長率が爆発し、意味わからん成長を遂げてきます。皆様に解りやすく言うならばアプリ版でのトレーニングにてトレーニングレベルが1と5ぐらい違います。もう爆速です。

そもそもライバル枠自体が成長しやすいようになってるのにこれ以上成長するなんて胃が痛くなってきましたねえ！

胃薬が欲しいです。なんでゲームで遊んでるはずなのにストレスを受けねばならないのか？

ま、でもわたくしの心は水たまりぐらいに広いので、許してあげます。(何に對して?)

というわけで、これまで試走などを繰り返しているときにケガ率が高く、総合的に見てまず味だった、スパルタ式練習方法をオリチャーとしてやっていきましようかねえ！

こちらはですね、夏合宿中に遠泳などの海を使うトレーニング以外はトレーニングスーツをインナーとして着た上にジャージを着用。そのジャージの中におもりを仕込んで素足砂浜ダツシユというものです。

元々、トレーニングスーツ自体がケガ率を上昇させる代わりに練習時の経験値が上がるものですし、今回はその上におもりと、素足で砂浜ダツシユです。体の負荷が半端なく、いくら「鉄人」持ちのスペちゃんでもお祈りが必要なレベル。こうなつたのも全部乱数、つてやつの仕事なんだ……。

愚痴はそこら辺に置いて、始めますか。

ご覧くださいませ、スピカメンバーたちが水着で練習している中、スペちゃんだけかなり厚着しています。ま、ちよつと変な目で見られませんが、減量と言つとけば何とかかなります。実際最近「太り気味」が頻発していますのでちよつといいダイエットになりますしね。

さあ、スペちゃん。ジャージが砂で汚れ過ぎないように足元をちよつとめくりまして、素足で走りますよ。

あ、水分補給だけはしっかりとってくださいね。

では、スペちゃんが裏で走ってる間に、他のメンバーが何をしてるか確認していきましようか。もし、何らかの成長イベントやスキル習得のきっかけが得れるイベントがあればそつちの方を優先したいですし。

んじや、順番に。

スズカ先輩は……、スタミナ強化のために遊泳してますね。トップスピードを維持するための練習でしょうか？

でも、見た感じ、特にイベントは発生しなさそうなので次！

ウオツカとスカーレットは……、スペちゃんとは反対方向に砂浜ダッシュしていききましたね……？いつもの勝負でもしてるんでしょうか。こつちはトレーナーさんがついてるので大丈夫そうですね。ま、イベントの気配はなさそうなので無視ですが。

ゴルシちゃんは……、何やってんだこいつ？一輪車乗りながらスイカ三つでお手玉してますね。サーカスですか？まあゴルシらしいといえばゴルシらしいですが、なぜそれをしようと思ったのか。これがワカラナイ。

スペちゃんを連れて行けば同じことを強要されそうなので無視しときましよう。次！

マックイーンは……、あれ？ テイオーとキングとで何かしていますね？

近くにキングのトレーナーもいるみたいですし、一緒に練習でもするんですかね？ イベントの香りがしますし、ちよつとこっちの練習風景を確認してみましようか。

スペちゃん〜！ Uターンして戻ってきて。うん、そのままキングちゃんのところに行きましょう。マックイーンやテイオーもいるみたいですし、何をするのか聞きに行きましょう。

オツス！ お三方、何をなされているのか！ よろしければあつしも参加させていただきたく。

〈「ああ、スペシャルウィークさんですか、ちようどよかったです。よろしければ簡単なレースをしませんか？」

〈「え、いいの、マックイーン！」

〈「私は構いませんわ、今のスペシャルウィークさんの実力をこの身で感じたかたところでしたし、キングさんもよろしくて？」

〈「構いませんわ。トレーナーさん、タイムの計測をお願いしてもよろしいですか？」

〈「それは大丈夫だが、お前さん、スペシャルウィークといったか？ 着替えてこなくていいのか？」

お、よくわかりませんがなんかレースするみたいですね。イベントみたいですし、レースするみたいですから一応おもりだけは抜いておきましょうか。スーツの方はこれを着て毎日練習してますし、大丈夫でしょう。

ほら、スペちゃん仕込んでるおもりをそこらへんにペイ、しておきましょう。

〈「うわあ、そんなの仕込んで走ってたんだ……。」

おつす、準備完了ですぜ。どこをどう走りますか？

「ヘイローさんのトレーナーさんに聞きましたが、ここから海岸の端まで約1000m、レース場のようなコーナーはありませんが端まで行って帰ってくる、そのように走るつもりでしたが、いかがでしょう?」

いいですねえ! んじゃ、やりましょうか。

「なら、俺が合図とタイムを計る。合図はこのコインが落ちた瞬間だ、いいな。 なら行くぞ。」

思ったよりすぐですね。スぺちゃん、今回は普通に走りますぜ、Uターン後の残り800mぐらいで仕掛けていきましよう。ちゃんとしたコーナーでないので足に負担がかからないように曲がりますよ。うねえ。

んじゃ、イクゾー!

【キングヘイロー視点】

砂という不安定な足場、行って帰るといいうレースではあったが、2着。差もそこまでなかったように思える。いままで、どれだけ練習したとしてもスぺちゃんに届いたという感覚はなかった。

この前見た彼女のデビュー戦、あの圧倒的な勝利で自分が本当に彼女に勝てるのか不安になった。

私もデビュー戦で勝利はしたが同じ勝利でも全く違う、そう思った。

だが、今回のレース。自身が成長できていること、彼女に近づいていることを実感できた。

このままいけば彼女に勝利することが……

「そこまでしておきな、お嬢。」

「ッ！ トレーナー！」

「その感じじや、気が付かなかったみたいだな。」

「気が付かなかったとは……？」

「あいつがインナーとして着ていたもの、トレーニングスーツだ。」

トレーニングスーツ？ たしか普通の人用のトレーニング用品
だったと記憶しているが…

「ウマ娘専用のトレーニングスーツ、その効果は絶大で全身を引き締め、鍛え上げる。」

「なら、私も……！」

「その代わり、ウマ娘に対して効力を発揮させるために引き締めも力が強く、普通の奴じゃすぐに体を壊しておしまい。ま、副作用が大きすぎて常人なら使えないし、上位勢は割に合わないから使わない。」

「なら、なんで彼女は！」

「……才能、つてやつだろうなあ。尋常なく体が強くて、しかも強いか……。とんでもねえ奴を目標にしたな、お嬢。お前さんもかなりのものになったと思ってたが、アレを着て何も無いように走り、勝つてくる。あいつも周りにはこう思われてたのかねえ……。」

トレーナーさんのいう、あいつとはあのシンザン先輩のことだろう。今は彼の元を離れて世界を走ってるらしい。

そんな大先輩を育てた人の下で鍛えてもらってるのに未だに勝てず、偽りの実力に届いたと思いい調子に乗っていたとは……。あまりにも、あまりにも惨め。ただひたすらに悔しい。

「ま、そんな思いつめた顔をすんなって、この俺に任せておきな。あいつがどんなバケモンだろうと勝てるぐらいには仕上げややるつて言ってるんだろ。最後の最後に勝つのに必要なお前さんがここで沈ん

でどうする！　こんな時こそ上を向いて笑ってやれ！」

「そう、ですわね。わたくしはキング！　こんなところでくじけてられませんわ！」

「おう！　その意気だ！」

そう、わたくしはキング。最後の最後であなたに勝つのはこの私、キングヘイローです！

【トウカイテイオー視点】

「あ、マツクイーンじゃん。」

「テイオーさんですか、貴方も眠れませんの？」

「……うん、ちよつとね。」

もうみんなは寝てる時間帯、旅館の外で座り込んで空を見上げていたマツクイーンに近づき、ボクもその横に座る。そういえばちゃんと話したことなかったね。

今日やったレース、結果は散々。スペちゃん、ヘイロー、ボクにマツクイーン。もともと長距離が得意だったマツクイーンに不利なレースだったし、ボクも砂浜を素足で全力で走るなんて初めてだった。二人とも初めてで苦手だった。

でも、ボクたちがスペちゃん以外に負けるなんて思わなかった。

「考えていることは一緒のようですわね。」

「そう、だね。」

ボクたちの世代で挑むべき相手はスペちゃんだけじゃなかった。もう一人いたということは多分あの子だけじゃない、スペちゃんだけが特別だったわけじゃない。

「ほんと、世界は広いよね、ボクびつくりしちゃった。」

「……そうですね。井の中の蛙というのは私たちのことをいうのでしょうかね。」

「確かに、ケロケロ〜とでも言っておく？」

二人で笑い合う。

「それで、ボクたちカエルちゃんは諦めちゃうのかな？」

「こういうのを愚問というのでしょよね、諦めるわけじゃないでしょう。」

ほんと、そうだよ。挑む壁は大きく、そして多い方がいい。

ボクたちは挑戦者だ。

「頂点に立つのはただ一人、そこに立っているのはこのわたくしです。」

「お、ボクのこと忘れてない？ 頂点に立つのはこのボクだよ。」

お互いを高め合う相手、ライバルというのはマックイーンのことを言うのだろうか。

一緒に高め合う友もいる、目指すべき目標はそばにいる。

「さ、明日も早いしもう寝ようよ！」

「ええ、そうですね。」

今日はなんだか気持ちよく眠れそうだ。

(マスクデータを公開します。)

(メジロマックイーンの実績率が大幅に上昇しました。)

(メジロマツクイーンが個性：「諦めない心」を獲得しました。)

(トウカイテイオーの成長率が大幅に上昇しました。)

(トウカイテイオーが個性：「諦めない心」を獲得しました。)

(一定条件を達成したので特殊イベント『不屈と奇跡』が発生しました。)

(条件を達成しました。)

(メジロマツクイーン、トウカイテイオーがスペシャルウィークの『ライバル』に昇格します。)

(新しく『ライバル』になったキャラクターの成長率が増加します。)

PART30

【スピカトレーナー視点】

「スペの食欲は化け物か！」

あ、いかんいかん。ついに叫んじまった。いくら食費がえぐくても叫んじやだめだな、うん。

……まあ叫んでも仕方ないと思うんだよ。もともと俺はどうせスペが滅茶苦茶食うんだろうと思って俺たちの人数分＋3人分で予約したんだ。もともとウマ娘用っていう食分量多めのプランがあったし、そっち用のを頼んでいた。頼んでいたはずなんだが……

「すいません、トレーナーさん。おかわりしていいですか？」

自分の分＋3人分、ペロリと平らげた上でおかわりを要求していた。

既に4人分食ってるのにだ。他のやつらにとっては見慣れた様子だったみたいでそこまで驚いていなかったが、俺と赤田先生、あと女将さんも驚いていた。

スペは食べ過ぎだとまたスズカに怒られていたが、できればおかわりを頼む前に止めてほしかった。

それが毎日続き、スペの腹が風船みたいに膨らんだり縮んだりするのにも慣れてきたとき、夏合宿が終わった。行きと同じように帰りも走って帰るように指示し、先生のところのキングヘイローも参加を求めているのでスズカとゴールドシップに後を頼んで先に出発させた。

それで、先生と共に支払いを済ませようとしたのだが……

「本当に申し訳ないのですが……、スペシャルウィークちゃんがある、すぐたくさん召し上がっていたので、追加料金のほうを、こ

れほど……」

そこに書かれていたのは予定していた金額の1.5倍ほど。思わず二度見してしまった。確認してみたが、どこも間違っていない。

もともと部費と自費で何とか行けるか？ だったものが大幅に超過してしまった。

「……ま、なんだ。いいもん見せてもらったし、追加分は俺が出すよ。」
「本当にありがとうございます、必ずお返しします。」

来月からもやし生活かな……。次、スペを連れていくことがあったら、食べ放題のところにしよう。たぶん一度行ったら二度といけな

【リギルトレーナー視点】

夏合宿の合間、今年入学した生徒の中でリギルに入らず、見込みあり、としていた生徒のデビュー戦の結果が出たためその資料をまとめる。例年通りなら片手で済むのだが、今年は非常に量が多い。

まずはスペシャルウィーク、デビュー戦で2番手と20バ身差をつけ記録を塗り替えた期待の新人、いや化け物というべきか。部分的にだがシニア級に近い実力を持っている。現在この世代の頂点に立っている。もつとも注意を払うべき人物。また、一部の者が彼女を目指そうとして奮起し、これまでに考えられないほどの成長を見せている。彼女の付近も確認しておいた方がいいかもしれない。

次にキングヘイロー、あの赤田先生が担当しているウマ娘。爆発的に成長しているといえる。デビュー戦でも楽々と先頭を取り、そのままゴール。短距離から中距離までこなせるオールラウンダーでもあ

る。どの路線で来るかわからないが注意が必要。

セイウンスカイ、デビュー戦は何とか一着といったところ。逃げウマ娘。世間はそこまで注目していないが、実力を隠すために力をセーブしていた可能性がある。おそらく、自分でレースを作る練習をしていたのだろう。緑川が担当であるためそういった戦略は怖いところがある。注意すべき。

トウカイテイオー、スペシャルウィークと同じスピカより。こちら一着。総合力の高さや足の柔らかさが特筆できるだろう。スペシャルウィークと同じチームに在籍しているため彼女も爆発的に成長する可能性がある、注意。

メジロマックイン、スペシャルウィークと同じスピカ所属、デビュー戦一着。メジロ家の最高傑作と称されるほどの才能を持っている。世代のトップに立つてもおかしくはなかった。まあそれはここで挙げるすべての子に当てはまるのだが。おそらく長距離が得意、クラシック後半、シニア級で爆発してくるかもしれない。注意。

ハルウララ、主戦はダート。デビュー戦一着。主戦はダートのはずだが、彼女のトレーナーによると芝の方でも出走するらしい。日に日に成長が見えるスペシャルウィークとは違った意味で恐ろしい相手。どこまで成長するかわからない上に芝にでも出走してくる可能性がある。なので要注意。

その他にもテイエムオペラオー、メイショウドトウ、マヤノトップガン、ミホノブルボン、ライスシャワー、またティアアラ路線ではあるがウオツカやダイワスカーレットといった才能あるウマ娘たちがいる。

正直に言おう。

何なんだこの世代。

本当に意味がわからない、なんでこんなにも才能あるウマ娘たちがいるんだ？

他の世代に居れば普通にトップになれるような奴ばっかだぞ？

ほんとになんで？ 神はそこまで信じていない人間だったが三女神は何を考えているんだ？

頭を抱えて叫びたくなる。

特に、なんでスペシャルウィークはあんなに強いんだ？

本当に意味がわからない。

どうすればエルとグラスを勝たせてやることができるんだ……。

ああ、私がいくら悩んでも何も始まらないな。本当に悩んでいるのはあの二人だ。

指導する私が弱気になってどうする。

私は、いつも正しく、強く見せないといけない。

ついてきてくれる子たちのためにも、心配させるわけにはいかな

い。
だ。
さあ、気を引き締めよう。必ずあの子たちの夢を叶えさせてやるんだ。

PART 31

ハイ！ スペちゃんが強くなった代わりに周りもさらに強くなっていく実況プレイ、やってきますよ。

お時間は前回より飛びまして、夏が終わり、9月が始まった感じですよ。

最近スペちゃんはステータスの方はある程度仕上がったと思ったため、スキルの習熟、成長をメインに頑張ってます。重点的にやっているのは依然話していたディープのスキルの取得ですね。なくんにもお手本なんかありませんのでこのわたくしがスペちゃんに教えるしかないんですが……

◇【空駆ける英雄】を発動！

◇……失敗した。

ん、ちよつと難航してますねえ。いや、スペちゃん、謝らんでもいんですよ。こういったものは時間が解決する問題ですしおすし、数をこなすしかありませんね。

でも、その代わりにスペちゃん固有のスキルと会長のスキルの熟練度上げは順調です。固有スキルは普通に頑張つてれば何とかありませんし、会長の方は部室のテレビで過去のレースを見れば、そこにお手本があるので何とかあります。

んじゃ、スペちゃん、あんまり根を詰めすぎるとよくないですし、休憩代わりに会長の過去レースでも見ましようか。……あれ、スペちゃんの動きが止まっちゃいましたね。

……？ 飽きた？ 飽きた、飽きたかあ、ま、結構同じもの見えますしねえ。飽きるほど見ちゃったということは研究し終わったとみていいでしょう、これ以上やっても熟練度は上がらないでしょうね。と、なると見るものがなくなっちゃいましたね。

デープの方も行き詰ってますし、上げるスキルがなくなっちゃいましたね。と、いうことは……、

皆様！ お喜びください！ 学校探検のお時間です！

そう、上げるスキルがないのなら、新しいスキルを見つけに行つてしまえばいいじゃない！ の精神で目ぼしいスキルを持ったウマ娘たちを探しに行こうと思います。

放課後の学園内はイベントの宝庫、どこに行つてもイベントが起きてますし、スぺちゃんの知らないウマ娘たちもたくさんいます。誰に会うかは完全にランダムですが、持ち前の運で夏合宿を乗り切ったわたくしなら大丈夫ですね。

ちなみにわたくしが会いたいと思つているウマ娘はナリタブライアン辺りでしょうか、彼女の固有スキルは差し策をとるなら必須といえるもの。ま、お会い出来たら色々と説明していきましょね。

んじゃ、スぺちゃんには悪いけど早速制服に着替えてもらつて……、あ、スぺちゃんちゃんと服の内側におもり仕込んでくよ。ちよつとしたところが大事ですからね。

よし、着替えましたね。んじゃ早速部室のドアを蹴破つて、イベントを探しに行きましょう！

▽開けようとした扉が突然開かれる。

▽目の前にいたのはなぜか漁師の恰好をしたゴールドシップだった。

▽「おー、ちようどいいところにスぺがいるじゃねえか！ 今からサンマ漁に行くぞー！」

……………は？ いや、ご遠慮しますけど……………。

〈「そうかそうか！ なら、今から行くぞー！」

〈ゴールドシップが麻袋を持って近づいてくる……………。

ま、マズいですわよ！！ スペちゃん！ 早く逃げるのだ！

〈スペシャルウィークは逃げようとした！

〈しかし、回り込まれてしまった！

〈「スペ、知らなかったのか？ ゴルシちゃんからは逃げられないのだよ！」

〈捕まってしまった！

〈視界がふさがれ何も見えない！

〈ゴールドシップに担がれ、どこかに運ばれるようだ……………。

えー、はい。ということだね。本実況プレイはここまでとなります。

残念ですがスペちゃんはゴルシにドナドナされてしまいました。皆様、長らく応援してくださいまして本当にありがとうございました。また、お会いできる日を心待ちにしております……………。

ま、茶番はこれぐらいにいたしましたして、イベントを探しに行こうとしたら、イベントからやってきましたね。うくん、さすがのゴルシクオリティ。カオスが極まっていますなあ……………。

スペちゃんも混乱するのはわかりますが、まあゴルシだし、の精神で落ち着くしかありませんぜ。ほら、激流に身を任せて同化する、つて言うでしょ、その精神です。

はい、こんな風にスピカに所属していたり、ゴールドシップの好感

度が高かったり、トーセンジョーダンだったりするとこのようにたまたに拉致されます。連れてかれる場所は時期とゴルシちゃんの気分によつて変わりますが、今回はサンマ漁と言っていたので北海道、ですかねえ？

いきなり北海道ですか!?! という方もいらつしやるかと思いますが、ゴルシちゃんのイベントの中ではまだましな方ですね。運が悪いと「地軸と一体化しに行くぞ!」なんて言われて南極か北極に連れてかれます。だからRTA走者に嫌われるんだぞゴルシちゃん。

わたくしとしましてはスペちゃんのスキルの方も行き詰つてましたし、このイベントが終わればゴルシちゃんの固有スキルがいただけるのでちょうどよかったですね。しかも漁なので肉体労働をこなすことで結構ステータス上がると思います。

▽「おーい、スペー。着いたから降ろすぞ。」

▽気が付くと目的地に着いていたようだ。

お、ついたみたいですねえ!

▽担がれた状態から降ろされ、麻袋を取られる。

▽視界が開けると、そこは船の上、海上だった。

……………は? いや意味わからんのですが?

【サイレンスズカ視点】

「ふう、今日はこんなものかしら」

秋の天皇賞に向けての練習、タイムもよくなってきたし、自分の成長も感じられる。このままいけば順調に勝つことができるだろう。

そういえば、今日はみんな、早めに上がっていったが何かあっただろうか。考えながら部室に向かう。

まあ、自室に帰ればスペちゃんがいるだろうし、一緒にご飯を食べながら話でも聞こうかと思っていたのだが、

「あら、これはスペちゃんのカバンね。」

スペちゃんがカバンを忘れて帰ってしまったようだ。何故か入り口付近に放り投げられている。

「これはティオーちゃんのカバン、こっちはマックイーンちゃんの。あそこにはスカーレットちゃんのと、ウオツカちゃんのが……。」

部室の中にみんなのカバンが置かれている、おかしい。

みんなが全員忘れ物をするなんてことはないだろうし、今日何かイベントがある、ということは聞いていない。

少し不安になり、いつものように回り始めた時、机の上に何か書かれた紙が置いてあるのに気が付いた。

『いつも頑張ってるスズカさんへ

練習頑張っているところを

陰ながら応援していました。

なにかお力になりたいと思い

今日から行われるサンマ漁に

参加してきます。

おいしいサンマを食べ

ただけよう頑張ってくださいね。

あと、人手が足りないから

スピカメンバー連れていくぞ。

あ、一応トレーナーに

許可取ってあるから。

黄金の不沈艦より。』

………とりあえず、トレーナーさんに話を聞きに行こう。

問い正さねば。

PART 32

オッスオッス！ 投稿者ですよ！ 今日もスペちゃん頑張る実況プレイ、進めていくのでよろしくお願いします。いや、今回のイベントは強烈でしたね……、まさにゴルシちゃんワールドでした。

サンマ漁をしていたと思えば、海底から悪の秘密結社イーン・マツクの巨大潜水艦が現れて、世界征服の野望に必要ななかでマックイーンが誘拐され、それを助けるために単身ゴールドシップが素潜りで追いかける。

どうしようもなくなったため、近くの漁港に戻ったら実は北海道の近海まで来ていて困惑していたら、なぞの葦毛ウマ娘、マスターGにスペちゃんが誘拐されて、ゴルシ神拳の継承者に選ばれ、マックイーン救出に向け、山のとっぺんで夕日を見ながら修行。

継承が終了したと思ったら改造され、誰かわからなくなってしまうとお母ちゃんとの戦闘、最後に倒してしまった時、仮面が割れて正体がわかったときの、

「I AM YOUR MOTHER」

「NOoooooooooooo!!!」

のシーンは涙なくては見れませんでしたね。その瞬間までわたくしも正体がわかっていなかったため全力で戦闘してしまい、内心ではかなり冷や汗ものだったんですけども。

その後、並み居る強敵をなぎ倒し、秘密結社イーン・マツクの本拠地である巨大潜水艦に到達し、潜水艦を破壊、沈みゆく潜水艦の中で、なぜかイーン・マツク総帥に就任していたゴルシちゃんとの最終決戦かと思いきや、ここまでガチ戦闘してたのにここだけレースで決着を決めることになり、札幌レース場に肝心のマックイーンを置いて、なぜか復活していたお母ちゃんを含め、みんなで移動。

そこでタイムマン勝負のレースをしましたが、ゴルシちゃんがゲート

を蹴破ろうとして自爆、後ろから追い上げようと加速してきますが、いつの間にか単身で泳いで帰ってきた海藻まみれのマックイーンがゴルシちゃんを強襲、その隙にスペちゃんゴールインで無事勝利でした。

その後、マックイーンのプロレス技によって、上半身を地面に埋められたゴルシちゃんをほっておいてみんなでスペちゃんちに帰省。みんなでおいしく暴食しておしまいという感じでしたね。

口にしてみると何なんでしょ？ これ？

ま、いいや。現在は学園に帰るために新幹線に乗ってるところですね。お母ちゃんからたくさんお土産持たされたのでお友達にも分けてあげましょう。お母ちゃんも最近家庭財政がまともになってきたから、毎月ニンジンボックス送ってくれてるって言っていましたし、自分の分が少なくなるからって独り占めとかはなしですからね、スペちゃん。え、そんなことしないって？ ほんとかなあ？（茶色いくま）

あ、そういえば今回のイベントで手に入れたスキルについて説明していませんでしたね。

今回手に入れたスキルは【不沈艦、抜錨オツ！】と【食いしん坊】ですね。前者はマスターGことゴルシちゃんとの修行時に、後者はイベント後半のおいしく暴食してた時にお母ちゃんから

「相変わらずスペは食いしん坊だねえ、学園でもたらふく食べてんだろ。」

と、いわれてスキルが生えてきました。今まであんなに食べてたのに、なんでこの瞬間に生えてくるんですかね？食いしん坊とはいったい何なのか……？

ま、先行用スキルなのでいらないちゃいらないんですが、これの熟練度は食事の量によって勝手に上がります。つまりスペちゃんの場

合、爆速で上がるんですね。先行策使わなければならなかったときに、ってことで置いときましょう。

ゴルシちゃんのスキルは正直、ここで頂けるとは思ってませんでした。かなり強いスキルですし、ゴルシちゃんのことだからもつと時間がかかると思ってたんですけどねえ。

でもちようど育成できるスキルを探してみましたし、ちようどよかったです。これからはこのスキルを練習していきましょう。时期的に現在9月前半なので、12月後半の次走、ホープフルSまでにスキル獲得を目標にしていきましょう。頑張りましょうぞ、スペちゃん！

【サイレンススズカ視点】

私の次走は秋の天皇賞、たった2000m、今の私なら新しい世界、最速のその先を見れるかもしれない。

たった一人でターフを走っているとそんな思いが浮かんできた。

正直に言つて、今の私に勝てる人はかなり少ない。スペちゃんに負けないよう、強い先輩であるよう頑張ってきたが、あのエアグルーヴでも私と競り合ってくれるとは言えない。そこまで私は速くなつてしまった。

それがうれしくもあり、悲しくもある。

みんながなぜか北海道に行き、これまでのスピカでは考えられないほど静かな、私だけのターフ。静かな光景が好きだったはずなのに、どこか寂しい。

そんな寂しさから、スペちゃんが私と戦えるまで私は一人になってしまいかもしれない、と考えてしまう。

日本でただ、スペちゃんを待っているだけでは私は腐ってしまうかもしれない。

スペちゃんは必ず成長してくる、私が日本に残り、停滞したままで

あればすぐに抜かされてしまうだろう。

「やつぱり、トレーナーさんから勧められたアメリカ留学、考えてみるべきかしら。」

私の前走、宝塚記念を見たURAがアメリカ留学を勧めているらしい、費用もあちら持ちらしいが、話を聞いた時は行く気になれず、とりあえず保留にしてもらった。

でも、気が変わった。

アメリカ、いや海外は日本よりも競技レベルが高い。海外ならば私が挑むべき相手や、競うべき相手が見つかるかもしれない。あちらで英雄と呼ばれる方たちに挑んでみてもいいかもしれない。

そんなことを考えているとなんだか楽しくなってきた。

スペちゃんとの挑む壁であるよう、スペちゃんに負けられないよう、頑張ってみよう。

そうと決まれば、話は早い方がいい。もう少し軽く走ったらトレーナーさんに言いに行こう。スペちゃんたちが帰ってきたら留学のことをすぐに伝えよう、どんな顔をするのだろうか。

きつとすごく驚くのだろう、その顔を見るのがちよつと楽しみ。

「……………ッ、左膝か……………」

左膝に軽い痛みを覚える。いつの間にか、オーバーワークになって

しまったのだろうか？

とりあえず、走るのをやめて冷やして置こう。

スペちゃんも勝負する前にケガなんかで引退してしまうのは絶対に避けたい。

体は大事にしないと……。

その後、膝の痛みを感じることはなかった。
たぶん、気のせいだったのだろう。

PART 33

【サイレンススズカ視点】

「スズカ先輩、足は大丈夫なんですか？」

今日は秋の天皇賞、アメリカに留学するのが正式に決まったので、日本で走ることは当分ないだろう。そんなことを思いながら、朝の自室で気を引き締めていた時、スペちゃんからそんなことを言われた。アメリカに留学するといった時のこんなに驚くのか、というすごい顔とは打って変わって、何かこれから悪いことが起きるのではないか、それに対しておびえている顔だった。

「大丈夫よ、スペちゃん。最近はタイムもいいし、体の調子はバツチり。そんなに心配しなくてもいいわ。」

彼女の実力は抜きんでている。だが、実力以外にも不思議なことがあり、なにか未来を知っているかのような動きをしていることがある。ウオツカやスカーレットが入部してきたとき、私は自分で入っておきながら『そのチラシで入ってきていいのか？』なんて思っていたが彼女は驚かなかった。マックイーンがゴールドシップに無理やり連れてこられた時もそれをなぜか知っているようだったし、テイオーの時もそんな感じだった。

日常生活の中でもまるでその先を知っているかのような、必ず自分の力になるようにしている節があった。

たぶん今日もそんな風に先を見てしまったのだろう。

それで、この先、私がレースに出れば、何か起こるのだろう。

彼女にとっても、私にとっても悪いことが。

以前の私ならばそれにおびえ、レースに出るのを避けていただろう。

だけど、今の私は違う。私は逃げたくない。

私の目標はスペちゃんに負けないこと。彼女の壁であり続けること。

なんだか、ここでこのレースを避けてしまったらそれはもうできないように思う。

ここで逃げてしまえば、この先、逃げてしまうことを許してしまいうような自分がある。

私になりたいのは、そんな私じゃない。

不安でつぶれそうな、そんな顔をしているスペちゃんをこちらに引き寄せ、抱きしめる。

「大丈夫ですよ、スペちゃん。私に悪いことなんか起きませんし、起こさせません。だから安心して、私が勝つのをちゃんと応援してね。」

スペちゃんは泣いていた。納まるまで少し時間がかかるだろう。

もうちよつとだけ、こうしていいようか。

んじや、今回も実況プレイ、やっていきましようか。今回はスズカ先輩が秋の天皇賞に出走するみたいで、その応援に来ています。ほら、スペちゃんそんな不安そうな顔しないで、先輩大丈夫そうでしたよ。ほら毎日スズカ先輩のこと見てたでしょ、それで足を痛めたとか、ケガしたとかなかったですし、大丈夫だって。

実際、何か悪いことが起きる場合はこのゲームでは教えてくれますから、あんな日曜日なんて起きないに決まっています。私、あんなの見たくないですし。

ほら、そんな顔してたら起きないことも起きちゃいますよ。ほら！
しゃんとして、全力で応援しましょ。

〈「おーい、スペー！ そろそろ始まるから早く来いよー！」

ゴルシちゃんも呼んでますし、応援しに行きましようね、ほら。

〈「おー、すつごい顔してんなあ。そんな顔してたら幸せ逃げちゃうぞおー！」

ほら、ゴルシちゃんも慰めてくれますし、しゃんとしていきましよう。

さ、レースが始まりますよ。

全力で応援しましよう、スペちゃん。

—————

『さあ、秋の天皇賞、栄光の盾を手に入れるのはどのウマ娘か。やはり、注目はサイレンススズカといったところでしょうか？』

『そうですね、秋シニア三冠のはじめということで、名だたるウマ娘が

出走してはいますが、やはり彼女は格が違います。2番人気と大きく差を開いての堂々の一番人気ですからね。』

『まさにそうかと。宝塚記念をレコード勝ちで飾った、異次元の逃亡者。今回は一枠一番一番人気という幸先の良い形で出走となります。』

体の調子は絶好調、いつでも行ける。

今日も始まりから終わりまで、ずっと先頭に立ち続ける。

先頭の景色は譲らない。

『各ウマ娘、ゲートに収まりまして……、今、スタートしました!』

『サイレンススズカがスーッと上がってきて先頭をキープ! 期待に応えて早くも先頭!』

「うし、いいスタートだ!」

応援に来た他のスピカメンバーからも喜びの声が上がる。

『サイレンススズカ! いつも通り後続をグングン離していく! 影は踏ませない!』

『10バ身ほど後続と離れているでしょうか! かなり縦長の展開、まもなく三コーナーの手前、果たして1000mの標識をどのぐらいで通過していくのか!』

『1000mの通過タイムは54秒8！ 54秒8です！ 未だに速くなる！ どれだけ速くなれば気が済むのか！』

「54秒8だって！」

「どれだけ速くなるんだ!!」

「スズカ先輩！ いけー!!」

(スズカ先輩はやっぱり、すごい！ これなら聞いていたことも…)

『何馬身離れているのか全く分かりません！ 会場の盛り上がりは最高潮、これを見に来たんだ！』

気力も、体力も、そしてこの速度も

今までで最高。まだまだ私には先がある、走れるんだ！

『おっとー！ さらに加速していく！ 後続は全くついてこれない！ 大櫂を超えて、ラストスパートだ！』

(やった！ 大櫂を超えれた！ 4コーナーを迎えられるんだ！)

『さあ、最終コーナーを超えまして、最後の直線です!』

最後の直線、少しだけ息を入れる。

さあ、ここからだ!

「……………ッ!」

左足が、思うように動かない。

「……………な、なんで……………、コーナーは超えれたはずじゃ……………。」

『サ、サイレンススズカ、サイレンススズカに故障発生です！ なんと
いうことでしよう！ 神はいないのか！ サイレンススズカ大丈夫
でしようか！』

（左膝に軽い痛みを覚える。いつの間にか、オーバーワークになって
しまったのだろうか？とりあえず、走るのをやめて冷やして置こう。）

……あの時のか、多分速さに体がついていけなかったのだろう。

今朝のスペちゃんの様子からやめておけばよかった。棄権してお
けばよかった。

どこか冷静な自分がそう言っている。

諦めるわけないだろう、逃げられるわけないだろう。

このレースのあと、私の足がどうなっているのかわからない。

後続とはまだかなりの差がある。

幸い、まだ右足は残っている。

左足も、速度に乗ってるこの状態ならまだ走れる。

府中の直線は約500

あと、500。短くて、遠い。

せめて、せめて、このまま最後まで。

私だけの先頭を、私だけの景色を。

ここで走るのをやめてしまえば私は一生後悔する、これでおわりになってもいい。

ここからが、私の最後のレース、最後の直線。

スぺちゃん、ちゃんと最後まで見ててね。

未だ最速は、私だ。

『サイレンススズカ止まりません！ 故障した足で走っています！
お願いだ、止まってくれ！』

『後続のオフサイドトラップ、キンイロリョティが上がってきた！
サイレンススズカはかなり減速していますがゴール目前！ サイレ
ンススズカが逃げ切るか、後続が差し切るか！』

足が痛い。

ゴールまであと何歩だろう。
よくわからなくなってきた。

『後続が全力で追いかけてきます、先頭との差はほんの5バ身。オフサイドトラップか、サイレンススズカか！ 減速しているがサイレンススズカが有利か！』

後ろから来ている。

逃げないと

進まないと……

『サイレンススズカ、いま執念のゴールインです！ 二着のオフサイドトラップとは1バ身差といったところ！ それと救護班は何をしている、早く来てくれ！』

おわった

さいしよからさいごまでわたしがいちばんだった

『スズカ先輩！ スズカ先輩！ しっかりしてください！』

ああ、すぺちやんがだきかかえて、ねかしてくれた

ふふ、けさとははんたいね

ちゃんとわたしはちゃんとさいごまではしりましたよ、すぺちやん。

—————

病院の手術室前、ドラマなんかでよく見る風景。

自分がそちら側に立つなんて思ってもみなかった。

いつもは騒がしすぎる面々も口を閉ざしてうつむいている。

ランプが消え、担当医の方が出てくる。

みんな、おびえて何も言えない。

俺も悪い言葉なんて聞きたくなかったが、聞くしかないだろう。

「先生、スズカは大丈夫ですか、また走れるようになるんでしょうか。」

「正直、奇跡といってもいいでしょう。スズカさんは無事です。」

「ほ、ほんとですか!」

「ええ、折れてからあれだけ激しい動きをしていたので、もっとひどくなっただけでもおかしくはなかったはずなのですが、大丈夫でした。ちゃんと骨がつながって、リハビリすればまた走れますよ。」

「」「」「よ、よかったあ。」「」「」

みんな一斉に息を吐く、本当に良かった。

時間はかかるだろうけど、スズカの走る姿がもう一度見られるんだ。

ああ、本当に良かった。

PART 34

どうも、投稿者です。今日も頑張つてやっけていきたいと思いますが、まず謝罪を。

史実よりは幾分かましですが、沈黙の日曜日回避に失敗したことをお詫びいたします。

前回の動画にて、我らがスズカ先輩は天皇賞に勝利したものの、左足の骨折、入院となつてしまいました。これはわたくしがスズカ先輩の不調イベントの回収に失敗したことが理由かなと……。正直こんなイベントあるなんて知らなかったですし、試走時に回避できてたので油断していたのかと。

とりあえずwikiさんに投げておいたし、参考資料としてはこの動画を使っていたら、あとは解析班の皆様にお預けしようかと思えます。

ま、暗い話はこのままで。実はですね、今回の失敗を糧に、チャートを組み替えて、さらにアルティメットなスペちゃんを行こうと思つてます。ま、皆様へのお詫びですね。

変更点は二つ、一つ目はクラシック級にてジャパンカップ、有馬を制覇することですね。今までのチャートではクラシックでは3冠以外は他の重賞レースで経験点を稼ぐつもりでしたが、こちらに変更。シニア級でも狙いますので連覇してしまおうというわけですね。

もう一つは、今までのチャートだと海外遠征で狙っていくのは2つだけでしたが、もうこうなつたら無敗のまま行けるところまで行つてやろうと考えております。つまり、シニア級後の世界遠征編で可能な限りGIをスペちゃんと一緒に荒らしてやろうというチャートですね。

ま、色々と厳しそうですが、今回のスペちゃんはわたくし史上、最強のスペちゃん。まあ行けるだろと考えております。詳しくはその時にご説明していきましよう。

では、スペちゃん。視聴者の皆様方に説明も終わりましたし、スズカ先輩の面会許可が下りたということなのでお見舞いに行きましよう。何を持っていくか決めました？

あく、お母ちゃんから送られてきたニンジンですか。1箱まるまるニンジンが入ったやつを持っていくんですか……。うん、それもいいとは思いますが、食べ物系は病院に持ってつちやうとだめなこともありますし、退院してからお渡ししましょう。それ以外にないようでしたら、近くのお花屋さんにもよって行きましよう。

お、お見舞い品も選び終わって、無事病院までついたみたいですね。んじゃ、声は控えめにオッス、スペちゃんだぞ！ お見舞いに来ました！

〽「あら、スペちゃん。わざわざありがとうございます。」

お、元気そうで何よりっす！ 足の方はどうでしょう？

〽「ええ、順調みたい。あの時はもう走れないかもしれないと思ってたけど、何とかなるものね。これなら来年の頭には留学できそうよ。」

え、縁起でもないこと言わないでくださいよ……。でもやつぱりアメリカ留学なさるんですか？

〽「決めたことだしね。リハビリも兼ねてあちらに行くつもり。なんでも日本よりも進んだ設備があるみたいで、国内でリハビリするよりもそっちの方がよさそう、ってトレーナーさんにも勧められたの。」

なるほどなあ、トレーニング設備とかもアメリカの方が整ってるって聞きますし、そっちの方がいいのかもしれないね。でも、来年からさみしくなりますねえ。

〈「ふふ、そうね。…ねえ、スペちゃん、お願いがあるのだけどいいかしら。」

お願い？ いいですけど、何でもやりませあ！

〈「ならスペちゃん、負けないでほしいの。あなたがシニア級に上がって私と戦えるようになるまで、誰にも。最速は私のもものけど、おそらく最強になるのはあなた。2年後の秋の天皇賞、最速と最強でどっちが勝つのか勝負しましょう。だから、私以外に負けちゃだめよ。」

お、宣戦布告ですか！ いいですねえ！ 受けて立ちますぜ。でも、私が負けちゃダメならスズカ先輩も負けちゃだめですよ！

〈「ええ、そうね。私もすぐに足を治して、元に戻って、さらに速くならなくちゃ。」

〈「スペちゃん、負けませんよ。」

「はい、望むところですよ！」

(マスクデータを公開します。)

(特殊イベント「負けない誓い」が発生しました。)

(スペシャルウィーク、サイレンススズカが公式レースにて敗北しない限りこのイベントの効果が続きます。)

(スペシャルウィークの成長率が上昇しました。)

(サイレンススズカの復帰時期が早まりました。)

(サイレンススズカの成長率が上昇しました。)

(育成キャラの成長率が規定値まで上昇したため、イベントが成立しました。)

(次のG Iレースにて勝利した後、イベントが開始されます。)

「病室の前で、待つなんて失礼だし、他の方に迷惑では？」

そう怒るなよ、マックイーン。今、いいところみたいだからさ。

「? どなたかスズカ先輩に面会してらっしゃるのですか？」

おう、スペと話してるみたいだな。でもこりゃ長引きそうだし、下の売店で何か買ってからもつかいこよう。

「同室で仲がよさそうなお二人でしたし、大事なお話でもされていた

のでしょうか？ あ、あとなんで解るのか、ということとはもう突っ込みませんからね。さすがに少し疲れました。この前の北海道でも色々とやられましたし……。」

お、なんか色々考え始めてるな。こうなったら周りが見えなくなるから注意してやらんとね。

にしても、まだ強くなるつもりかあいつら……

ま、世界にいる化け物ちゃんたちに勝とうと思ったら自分も化け物にならんと勝てないから仕方ないのかもな。

せめて、精神的につぶれないように気をつけてあげましようかね。にしても膝やらかした後にあれだけ走って、普通に回復可能って、色々とすげよなあ。今度山盛りのお供え物でも、しに行きませんとねえ。

「ゴールドシップ、ゴールドシップさん！ 聞いてますか、貴方！」

ん、わりい。聞いてなかった。

「あなたねえ…、はあ。スズカ先輩にお渡しするお菓子、どちらがいかが意見をくださいます？ こちらのふわふわのパン生地には餡子と生クリームをふんだんに使った和風なお菓子か、しっとりとしたチョコレートの生地にチョコクリームをこれでもかと使ったロールケーキ。」

うわあ、キングサイズで、カロリー爆弾。あとなんで病院の購買にこんなもの置いてあるの……

この名探偵ゴルシ様にもわからない難題がこんなところにあつたとは思ひもよらなかつたぜ。

マックイーン。うん、両方持つていけばいいと思うよ、ゴルシちゃんは。

スズカが嫌いだったら私らで食べればいいし、スペもいるから食べきれない。つてこともないだろ。

あゝあ、目を光らせてよだれたらしてる。うん、あとで揶揄う用に写真とつとこ。

明日はスペと一緒に減量ダツシユ。マックイーン様、ご招待く

PART 35

ホイっと、今日もやっていきましょう。ウマ娘実況プレイ始まるよ！

前回スズカ先輩のお見舞いから帰り、スペちゃんたちは真面目に練習してます。たぶん、これはスピカ全体に対してバフでもかかってんのかな？先輩は足が完治した後はリハビリも留学先のアメリカでするみたいですし、あと二年くらいは日本で走ることはないからでしょうか、今までスピカの先頭はスズカ先輩だったが、次は私の時代だ！そのためにも頑張らないと！って感じでしょいかね。

んで、おそらくスペちゃんにもいくつかバフがかかってんのか、成長値がえらいことなってます。ほらご覧くださいませ、

▽【空駆ける英雄】を発動！

▽……成功した！今後このスキルが使用可能になります。

▽【不沈艦、抜錨オツ！】を発動！

▽……失敗したがもうすぐものになりそうだ！

という感じでスキルの取得がものすごくはかどってます。正直怖いくらいです。お願いだから今後、ガバとかしないでくれよ（戒め）。この調子なら不沈艦の方も年末のホープフルまでには習得できそうですね！

ま、こういった固有スキルは熟練度上げるのがね、とっても大変ですし、習得した直後のLv. 1ではそこまで強くないです。なので今後もスペちゃんと一緒に頑張っていきましょう。

それとですね、以前の説明不足で視聴者の方々に混乱を招いていたようで訂正をさせていただきます。

こちらのゲームに『スキル』というものがあるのはご存じだと思いますが、種類に分けると3種ございます。まずは一つ目、そのキャラ固有のスキルです。スペちゃんの場合だと「シューティングスター」ですね。こちらはそのキャラクターが初めから持っているスキルで、熟練度が上がりやすいものとなっております。限界レベルはL v. 6となっております。

二つ目は現在育成しているキャラクター以外の固有スキル、今回の場合だと【空駆ける英雄】や【不沈艦、抜錨オツ！】ですね。こちらはそのスキルを持っているキャラクターとの好感度を稼いだり、そのキャラ特有のイベントをこなすことで、きっかけ、所謂L v. 0を習得できます。その後、練習や元の所有者の動きを見ることが熟練度を貯めてL v. 1にすればレースなどで使えるようになります。限界レベルは固有と違い、L v. 5までとなっております。

ちなみにですがL v. 5とL v. 6には大きな隔たりがありまして、そのスキルの効果も段違いです。ま、本物は超えられない、つてことでしょうかね。

三つ目は汎用スキル、スペちゃんの【食いしん坊】や【ゲートの支配者】がそれにあたります。こちらにはレベル表記はなく、一度使用可能な熟練度まで貯めると使えるようになります。固有スキルより効果は薄めですが、日常生活で手に入ったり、レース後にキャラクターが勝手に閃いてくれたりするので入手難度は簡単です。

ま、こんな風に三種類あるんですね。アプリ版と違い、他キャラの固有スキルのレベルが上げられたり、ポイント制から熟練度制に変わってたりしますのでご注意の方をよろしくお願いいたします。

▽「お〜い！ スペちゃん〜！ 併走しよ〜！」

お、テイオーが練習に誘ってくれていますね。こういった付き合いも

大事ですし、熟練度上げやステータス上げにもウマ味なんで、喜んで引き受けて頑張りましょう。

では、今回も短めですがここまでとさせていただきます。次回はホープフルをホープレスに……、失礼しました。ホープフルSをスペちゃんと一緒に蹂躪していきたいと思うのでそこんとこ、よろしく。ま、多分私強いムーブができるのがここまですべてになってきそうなので、思いつきりやろうということですね。

【トウカイテイオー視点】

ボクの強さはなんだ。

これまでなら総合力と答えた。
今なら体の柔らかさと答える。

この長所でもあり欠点でもあるボクだけのもの。
このことだけならスペちゃんにも負けない。

総合力で勝負するのはちよつと難しい、でもこれなら勝てるかもしれない。

ボクの欠点でもあるこの柔らかすぎる足、これを武器にする。
柔らかさをそのままに、バネのような瞬発力を、鋼のような頑丈さを。

併走で横を走るスペちゃんを見る、明らかにキープしている。
合わせてもらっている。これじゃだめだ。もっと強くならな
きゃ。

元々考えていたボクだけのステップ、テイオーステップ。

これだけじゃまだ足りない。

諦めるな、ただ自分が勝つ瞬間を、あの子の前にいる瞬間をイメージしろ。

絶対は、ボクだ。

(マスクデータを公開します。)

(トウカイテイオーが育成キャラのライバルとなったため、イベントが発生しました。)

(トウカイテイオーの固有スキル【究極テイオーステップ】が強化されました。)

(スキル発動時、最終直線での速度がさらに増加します。)

(トウカイテイオーが新しい固有スキル【絶対は、ボクだ】のきっかけを習得しました。)

(なお、このスキルは他の固有スキルと併用できます。)

【メジロマツクイーン視点】

サイレンススズカ先輩が骨折による長期休養、休養明けにはアメリ

カ留学。今現在、スピカには柱となる選手がいません。次の柱、チームのエースとなる人物、わたくしたちの力量を数値化して並べてみれば、おそらく誰でもスペシャルウィークさんの名を挙げるでしょう。確かに、彼女の実力は誰もが知るところ、結論を出すのは簡単。

でも、それは少し、いえ、かなり気に食わないです。

今の実力を比べてみれば彼女の方が強いこと、理解はできますが納得はしたくありません。

ならば、どうするか。

勝つしかないでしょう。

誰もがわたくしが勝者であると認めるような勝ち方を。大舞台上で圧倒的な勝利を。

彼女に勝つためにはどうすればよいのか。
彼女に勝てる道を見出すとすれば、距離。

わたくしは自他ともに認めるステイヤー、勝負を仕掛けるとすれば長距離レース。

長さをもってスタミナを削り
時間をもって集中力を削る。

策をもって制するのも考えましたが、やはり私には合わない。
勝つならば、力をもって勝つべきです。

あのスズカ先輩のように、最初から最後まで彼女の前に居続ける。

必要なのはスタミナと集中力。

さあ、始めましょう。

メジロという名にかけて

盾の栄光を、勝利を譲るわけにはいきません。

(マスクデータを公開します。)

(メジロマックイーンが育成キャラのライバルとなったため、イベントが発生しました。)

(メジロマックイーンの固有スキル【貴顕の使命を果たすべく】が強化されました。)

(スキル発動時、最終コーナーでの速度上昇率がさらに増加します。)

(メジロマックイーンが新しい固有スキル【最強の名にかけて】のきっかけを習得しました。)

(なお、このスキルは他の固有スキルと併用できません。)

(また、【最強の名にかけて】の強化イベントが発生しました。)

(スキル効果が大幅に変更される可能性があります。)

PART 36

【レース雑誌記者視点】

「先輩！ ついに始まりますね、ジュニア級の大舞台。ホープフルステークス！ いや、先輩に教えてもらわなかったら有馬の方に集中していたところでした。」

「年末の大舞台ってことで、そっちは誰でも注目するし、出来上がってるスターも多い。どこの雑誌でも必ず狙ってくるからな。それに代わってこっちはそこまで多くない。来年につながる新星達を決める大舞台だが、有馬に比べれば話題性は劣る。」

「そこを、数ページしかもらえない俺たちが担当するってわけですね。」

「そういうこった。俺たちは星を見上げればいいってことじゃない。ここで活躍する、今後目が出てくるであろう選手を発見し、つなぎを作っておく。」

「運が良ければ、そのウマ娘の担当記者にもなれるってわけですね。」

「そういうこった。んでお前は誰を注目する。」

「そうですね、やっぱり、スペシャルウィークでしょうか。戦績はデビュー戦のみですけどあの日本記録となった20バ身大差勝ちは忘れられませんよね。」

「ま、本命はそれで、勝者も彼女だろうな。実力が一人だけおかしい。でもレース屋としては正しくても俺達にとっては減点だ。」

「やっぱり他にも狙ってきますか？」

「必ずな、レース後の会見はえらいことになると思うぞ。それで俺たちが狙うとすれば、本来注目を浴びない子たち、再戦に燃える子たちだ。」

「先輩は誰になると？」

「可能性がありそうなのはミホノブルボン、ライスシャワー、ツイントーボあたりだろうな。本来ならもつといたはずなんだが、明らかに避けてきてる。」

「噂になってたエルコンドルパサー、グラスワンダー、セイウンスカイ、キングヘイローの4人ですね。」

「そうだな、全員トレセンの名トレーナーがついてる新星達だ。おそらくだがスペシャルウィークのデータ集めに集中して、決戦はクラシックにするつもりだろう。」

「……荒れそうですね、来年は。」

「本当にな、さて誰が初めに彼女を倒すことになるのやら。」

—————

初のGIレースで気合がえい、えい、むん！ な、スペちゃんと一緒に中山レース場で今日もやっていきますよ。にしてもスペちゃん、勝負服似合ってますねえ！ デフォルトだけどかわいいです。

はい、こちらのゲームですね。勝負服の変更及び改造ができるようになってましてね。いろんなものを着ることができます。スペちゃんにスズカ先輩を着せることだつてできちゃいます。

ま、わたくしはデフォ服の方が好きなので変更はしていきませんが、ちよつとした改造はしていきます。それはまた後程……

んで、今日のレースの出走表を見ていたんですが、やっぱりプレイアブルキャラクターの皆様がいましたねえ。今回参戦してきているのは、ミホノブルボン、ライスシャワー、ツインターボ師匠の3人ですね。アプリ版超強化ブルボンをご存じの方は彼女を見ただけで震えあがってそうですがご安心を、ステータスも確認しましたがよくてEぐらいですね。これは簡単に勝てそうですねえ！

スぺちちゃんのも公開しときましょ。

▽スピード：D+

スタミナ：C+

パワー：B

根性：C

賢さ：C

▽スキル

【シューティングスター】Lv. 2

【汝、皇帝の神威を見よ】Lv. 2

【空駆ける英雄】Lv. 1

【不沈艦、抜錨オツ！】Lv. 1

【ゲートの支配者】

【食いしん坊】

と、こんな感じですね。やっぱりスキル熟練度上げに奔走していたためかステータスが上がってません。ま、それを補って余りあるスキルがありますしダイジョブでしょ。

でも、今回使うチャートでは大体のスキルはお蔵入りなんですよねえ！

ではスぺちちゃん耳を貸せえい！ 我が秘策を伝授いたそう！

今回の作戦はとっても簡単！ 最初から中盤まではターボ師匠についていき、中盤を超えたところに師匠を抜き、そこから先頭で最後まで行くぞ！

何！ スペちゃん！ そんなことすれば作戦も大逃げになっちゃうし、手に入れたスキルもクラシックまで「ゲートの支配者」を封印してるから、「空駆ける英雄」ぐらいしか使えないだつて！

それでいいのだ！ このレースはいわば勝ち戦！ どうやって勝つかが問題であり、スペちゃんが実は逃げもできちゃうんです！ と思わせるブラフなのだ！

……え、なんか嘘ついてるみたいでイヤ？ いや、イヤじゃなくてですね、そこを何とかありませんでしょうか…、うん、ほら今お部屋にスズカ先輩いないし調理器具買えるよ、毎月ニンジン送ってもらえるようになったからチンできるいいレンジ買ってあげるから……。

うん、まあばれたらまた怒られますけども……、そこを何とかありませんかね？ ほらスズカ先輩と同じ走り方ですよ。今回だけでいいのでしょうか、やってくれませんか……

▽スペシャルウィークはしぶしぶ領いた。

▽レース後にレンジを買うことが確定した！

ふう、何とか交渉成立ですね。うまくいってよかったぜえ。

お、ゲートまで移動してたらターボ師匠がこっちに気づいて近寄ってきましたね。

今日は途中までついてきますし、ご挨拶ときましよう。

にしても師匠の勝負服可愛いな。スペちゃんも着てみない？ 着

ないか、ああそう……

▽「おおく！ スペも一緒に走るんだな！ 勝負だあ！」

オツス、勝負つす！ んでもなんか出走するメンバーのこと知らない雰囲気でしたね。なんででしょ？

▽「ん？ なんかうちのトレーナーが出れるし、出といたほうがいって言ってたから走りに来たぞ！ ま、勧められなくてもG Iの大舞台だし走りに来てたけどな！」

なるほどね、師匠はチームカノープスでしたっけ？

▽「そうだ！ ネイチャと一緒にターボ毎日頑張ってる！」

おおく、そうなんですわね。んじゃ、そろそろゲートイン始まりそ
うですし、頑張りましょうね。

▽「おう！ じゃな〜！」

なるほどなるほど、カノープスにネイチャとターボ師匠が既に入つててホープフルを進めてきたということですか。あの南坂ってやつ
の仕業だな……。あの人は指導力はおハナさんや我らがスピカト
レーナーに劣りますが、それでも作中トップクラス、マネジメント能
力もある上に、奇策も打ってきますから結構注意が必要ですねえ。

今回はターボの経験積みということでしょうが、今後も師匠を通じて
情報収集した方がいいかもしれません。

ま、そんなことは置いといてレースしましょう！

ではではゲートにスっ、と入りまして。何もしません。

あ、そうだミニRTAしよ。

はい、ヨーイドン。

はい、スペちゃん。いつもならここで速度落として後方に付きますが、この速度のまま前に行きましょう。

横からターボ師匠が前に出てきますので、その後ろにピッタリ、セツトしましょうね。

このまま中盤まで暇なので周りに、ゲートの要領でプレッシャー放ちながら、

はい、残り1000mの標識が見えたので加速しましょうねえ！

後は誰も寄せ付けずに、最終コーナーで少し息を入れまして、直線で爆発させましょう。

∨【空駆ける英雄】発動！

はい、直線からスキルであげていきますよ、バリバリ！

んで、ゴールインしてタイマーストップ。

タイムは1分57秒3、といったところですね。スズカ先輩の記録には届きませんでした、大差勝ちなのでよしとしましょう。

んじゃ、勝利ポーズでも決めましょうか。

応援してくれた皆さんにおじぎして、Vサイン！

(GIレースに勝利しました。)

(特殊イベントが発生します。)

(お楽しみいただけいますか?)

PART 37

【キングヘイロー視点】

好敵手である彼女がGIレースに出走する。そう聞き、自身の目標を再設定するためにトレーナーさんと共にレース場に来ていた。

「あの子は逃げもできるのですかッ！」

逃げもできるとなると彼女が使える戦法は逃げ、先行、差しの3つ。これほど恐ろしいことはない。

逃げという作戦は、そのレースのペースを決める。

あれだけの實力を持ったあの子が自分の意思でレースを作ることができる。

それを意味している。

「……なあ、お嬢。奴さんは策をめぐらしたりするような奴か？ 日常生活で感じたことでもいい。」

「スペさんですか？ ……いえ、そのようなことをする人ではないと思います。」

「なら、ブラフだな。帰ってから映像で見直す必要があるが、逃げをやる奴は最後のコーナーであそこまで息を入れない。見た感じ、お手本がいいだけの突貫工事だ。」

「お手本というと、やはりサイレンススズカさんでしょうか。」

「だろうな。ま、お前さんは気にせずいつも通りのことをやっつけば

いい。こういったものを考えるのは俺の仕事だ。さ、帰って早速練習！」

「き、急に押さないでくださいー！」

(しかし妙だな、スピカんとこの小僧はそんな小細工を用意するやつじゃねえし、そもそも彼女には策なんて用意しなくてもいいほどの強さがある。いったい誰の入れ知恵だ？ 明らかに俺らのような挑戦者を惑わすような意図が感じられた。……もしかしたらもう一人、厄介なトレーナーが付いてんのもかもしれねえな。注意する必要があるかもしれない。)

【セイウンスカイ視点】

「おーい、トレーナーさーん。聞こえてる？」

(マズいマズいマズいマズい、どうすればいい、どうすれば勝てる。あの逃げ策は今の時点では明らかにブラフ、しかし今はブラフというだけで、今後はどうなるのか全く分からない。あちらにはサイレンスズカがいる。現在彼女は休養中で手が空いてる。その空いてる手を彼女の逃げ策の成熟に使われたら？ そもそもあの走り方、中盤までは自身の走り方を先行策に当てるはめたものだという事はわかる、問題は後半の逃げ方、明らかにサイレンスズカのもの。近くで見たものを模倣したのか、教わったのか。どっちでもかなり不味い。前者ならばあの実力の上に自身の走り方を確立しているのにかかわらず、他人を模写して自身のものにできる怪物。後者なら速度という怪物が新たな才能の塊に自身の持てるものすべてを教えようとしているということ。どちらであっても、現在考えていた長距離でレースを操るといふ菊花賞に焦点を当てた作戦は意味をなさなくなる。考えろ、自身の思いつく限り、セイが彼女に勝てる道筋を……。)

「聞こえてないな。なら遠慮なくほっぺでも抓らせてもらいましょか。」

むちー

「あ、思ってたよりも柔らかい。」

「……何してるんですか、セイちゃん。」

「お、戻ってきたね。トレーナーさん。すごい顔で固まってたよ。」

「そうでしたかく、それはごめんなさいですね。」

「……ね、トレーナーさん。私、頑張るよ。今までよりずっと。取れる選択肢をもっと増やすために。だからさ、これからもお願いしてもいいかな。」

(……そうですね、これは私だけの問題じゃない。あ、あ、教え子に諭されるなんてトレーナー失格ですねえ。この失敗は成果で、自分のできることを精一杯やるだけです。)

「もちろんです。限界まであなたのために頑張りましょう。早速、帰って練習。私は分析です。」

「そうこなくっちゃ!」

【リギルトレーナー視点】

「完全にブラフ、とも言い切れないのが難点だな。」

「そう……ですね。」

「逃げもできるかもしれない。ほんとに怖いですネ。」

例のあの子が出走すると聞き、グラスワンダーとエルコンドルパサー。二人のスケジュールを調整してこのレースをともに見に来ていた。収穫はあったといえるが、見つかったのは思ったより大きかった。

「スピカにはスズカがいる。ゆえに今後、逃げを習熟してきてもおかしくはない。」

「逃げにも対応できる必要……。」

「ただ、ついていくだけでは勝てそうにありませんネ……。」

差しが基本で、先行もできる。もしかしたら逃げも。さて、どうやって攻略すればいいのか。細かいことはまた帰ってから映像を見ながら自室で悩むとしよう。今は、指導者だ。

「さて、レースも終わった。今日はフリーだし、顔出しでもしてくるか？ 話は通してあるし、控室まで行くことができるぞ。」

「そうですね、今日は友人としてお祝いに行きましようか。」

「お、いいですネー！ 行きましょー！」

—————

あ、スペちゃん勝利者インタビューがあるみたいですし、ちゃんと

しましうか。

ま、スぺちゃんなら大丈夫そうですし、後ろにトレーナーが控えます。

ちよつとした指示ぐらいでいいですかね。

「スペシャルウィークさん、G Iレース勝利。おめでとうございませす。」

「ありがとうございます！ 応援してくださった皆さんのおかげです！」

「デビュー戦の次走にG Iレースということでしたが、どのようなお気持ちで挑まれたのでしょうか？ やはり、緊張などしたんでしょうか？」

「いえ、特に緊張はしていませんでした。友人のターボさんがいたからでしょうか？」

「そ、そうでしたか。では今日は前走とは違い、大逃げをしていたツインターボさんの後ろに付いていましたがどのような意図があったのでしょうか？」

「…いえ、何も考えていませんでした。ただ、あのようには走ればいいかなど思っていたぐらいです。スズカ先輩のようになりたいと思っていたので、それが行動に出してしまったのかもしれない。」

「スズカ先輩というと同じスピカ所属ということでしたが、どのような関係ですか？」

「尊敬している先輩です。同室なのでよくしてもらっています。」

ま、ファンへの感謝も忘れてませんでしたし、このままほっといても大丈夫ですかね。実況中すみませんがちよつと離席して、飲み物でも取ってきましようかね。最近なんかのど渇くんですよね……

「……今回のレースではスペシャルウィーク選手以外の注目選手が出走していませんでした。それで、同世代の中で一番戦ってみたい、ライバルはいらっしゃいますか？」

「いえ、特には。」

—————

「くす、そこまでなめられていましたか……ふふふ。」

「本心、なんでしようネ。……ならー！この世界最強のエルコンドルパサーの覚悟！見せつけてやるのデース！」

「ふーん。言われちゃいましたねえ。」

「視界にすら入ってませんか。ならば目にもものを……。」

「ボク、忘れられてるね。……思い出させてやる。」

「……私の意地を見せてさしあげましょう。」

（マスクデータを公開します。）

（特殊イベント【その一言で】が発生しました。）

(ライバルの6名に特殊スキルが付与されます。)

(グラスワンダーが特殊スキル【対スペシャルウィーク〇】を獲得しました。)

(エルコンドルパサーが特殊スキル【対スペシャルウィーク〇】を獲得しました。)

(セイウンスカイが特殊スキル【対スペシャルウィーク〇】を獲得しました。)

(キングヘイローが特殊スキル【対スペシャルウィーク〇】を獲得しました。)

(トウカイテイオーが特殊スキル【対スペシャルウィーク〇】を獲得しました。)

(メジロマツクイーンが特殊スキル【対スペシャルウィーク〇】を獲得しました。)

PART 38

すみません、帰ってきました。お、記者会見終わってますね。スペちゃん、どうでした？ うまくできましたか？ ……うん。スペちゃんの顔はバツチりなんです、トレーナーさんのお顔がそのままよろしくありませんね。なんかやらかしたかね？

んま、終わったことですし、インタビュで変なことしてても多分、癖のあるウマ娘は強い、理論で何とかできますので、よしとしましょう。ではではスペちゃん、ウイニングライブの時間だあ！ 今回はちゃんと練習してきたから歌えるし、踊れるぞ！

では、スペちゃんがライブしてる裏で、勝負服の改造についてご説明いたしましょう。GIレースでしか着れない勝負服ですが、こちらの手で改造や、新規を作ることができます。作成にお金と時間がかかりますがDLCの購入次第では全く新しいものが作れます。ま、かといって私にデザインの才能なんかないので新規ではなく、スペちゃんのデフォをちよつとだけ改造していこうかな…、ということですね。

この動画の目標は〈称号・無敗の総大将〉を入手することですが、最近できた副目標に海外GIをできるだけ荒らすというものが増えました。それで、スペちゃんの勝負服にトロフィーみたいなものをつけたいなあ…、と思いました。

会長とかだつたらじやらじやらした勲章をいっぱいつけければ済んだんですが、スペちゃんの勝負服には合わないだろうと思い、スペちゃんがGIで勝利することに背中に星を入れてもらおうと思います。固有スキルともマッチしてるのでいいかなあって。

というわけで、新たな副目標！ 背中に一杯星をつけよう！ です。目指せ合衆国！

てな感じですね、ハイ。長々と失礼しました。

んじや、多分これ以上目標は増えないし、できないので、ジュニア

級を制したということでもまとめなおしてみましようか。

『主目標』

〈称号：無敗の総大将〉の獲得。

条件：日本ダービーを1番人気かつ5バ身差以上で勝利し、天皇賞（春）、天皇賞（秋）、ジャパンC、凱旋門賞を勝利する。また公式レースにて無敗であること。

『副目標』

クラシック級でジャパンC、有馬記念を制覇。

シニア級後の海外遠征でできるだけ多くのGIレースを勝利する。

GIレースで勝利することに背中に背負う星を増やしていき、目指すはGI50勝！

（国内では普通に走るの、背負える星の数は12。その後、海外遠征をおこなうのは1年の予定のため、どう考えても不可能。ま、目標はできるだけ高くつてことね！）

って、感じですかね？ ま、こうゆう感じでやるよ、ってことで軽く見てもらえればと。

お、お話してたらスペちゃんのライブも終わったみたいですね。お疲れ様やで。んじや、学園に帰りながら今日のレースのリザルトを確認していきましよう。

今回のレースでは苦手というか、初めて逃げ策を使用したため、逃げの適性値がちょっとだけ上がってますね。まあ、今後使いませんが。あとはスキル系統も状況的に使えないものばかりだったので熟練度がたまったのは【空駆ける英雄】ぐらいですか。ま、こちらもどの作戦でも使えるんですが、適性が差しなのでそこまで貯まってない

ですね。ま、こんなもんでしよう。

ステータス増加もいつも通りの上り幅で……、お！ 新スキルのきっかけをつかんだみたいですね！ えらいぞくスペちゃん。どれどれ…

【逢魔時】

効果：残り1000mを経過した時に加速していると発動。レースを一段階ハイペースにし、全体を掛からせる。

……やばいわよ！ なデバフスキルですね。ぶっ壊れてやらあ！ ま、性能自体はいいんでしようけど発生条件が難しくて、「ゲートの支配者」みたいに何度か使うと効果が薄くなってくるタイプでしょう。

でも、使えそうですし、習得してみましようか。次走の皐月まではこれの習得と他、固有スキルの熟練度上げに費やしましようかね。にしても、知らないイベントやスキルが盛りだくさんですね。これもwikiさんの方に投げとききましたが、もしかしたら裏でなんかイベント起きてるのかもしれないね。でも、ま、大丈夫じゃろ。

んじや、今回はここまででござす。次回も、つてスペちゃんいまご挨拶中だから後に……、あ、レース前に言ってたレンジ？ うん買っていないから、締めだけさせて。

では次回の動画でお会いしましょう。

【ウオツカ視点】

「う、ぐす。。 えぐ。。 うえくん。。。」

「……なあ、スカーレット。なんでスペが泣きながら走ってるか知っ

てるか？」

「なにそれ、ってほんとね。あんなに号泣してるの初めて見た。」

「その感じなら知らないみたいだな、なんでだろ……。」

「呼ばれて飛び出てジャジャジャジャーングル、呼んだ？」

「呼んでない。」

「お、真面目にそういわれるときすがのゴルシちゃんもダメージ頂いちやうぞ！」

「んで、ゴルシちゃんは知ってんの？」

「お、ついに後輩から先輩呼びされなくなった、悲しいなあ……！　これは私も号泣しながら走り出すべきか……、んでなんで泣いてるかだつたな。何でも、うん十万した高性能レンジを買ったけど、スズカに見つかって没収、前回のよう食堂に寄付されたらしいぞ。」

「あー、例の炊飯器と同じやつね。」

「まあ、やったんかい。懲りないなあ……。」

「んで、無茶苦茶怒られた後に体重増加が発覚してさらにお怒りモード爆発。こつてり絞られてああなつたみたいだな。」

「「自業自得（だな）ね。」」

「だよなあ……、おっ！　ジョーダンじゃん！　あつそぼく！！」

あ、なんでこっちに来たのかわからないけどジョーダン先輩が襲われてる。かわいそ、でもオレたちにはなんもできないしなあ……。

「南無南無くく。」

ジョーダン先輩に幸あらんことを。 あ、蹴られた。

【ツインターボ視点】

「うくく!! くやしいくく! ターボくやしいぞくく!!!」

あのホープフルS、ターボは真っ先に逃げた! でも差しのはずのスペにずっと後ろに付かれて大逃げできなかったし、中盤ですぐに抜かれた!

「でもよかったじゃん、掲示板に入ってたし。ほら4着だったんでしょ。」

「1着だったネイチヤに言われたくないぞ!」

「ほら、私はGⅢだったし、他の目ぼしい人もいなかったしね。それで負けちゃったらダメでしょ。」

「でも、ネイチヤの方が上だ! くやじいくく!」

「にしても、5人組のうち、一人しか出てこなくてそれがトップ。これはみんな見に戻ったのかねえ。」

「ん、ネイチヤ! 5人組ってなんだ?」

「最近噂になってるうちの学年のトップ層ってやつ。上から順にスペシャルウィーク、エルコンドルパサー、グラスワンダー、キングヘイロー、セイウンスカイって感じみたいね。ちなみにその下にトウカイテイオー、メジロマツクイーン、ミホノブルボン、ライスシャワー。」

「ターボたちは！ ターボたちはどこにいるの！」

「残念ながら圏外。重賞では勝ってもG Iじゃ掲示板に残ればいいほう、って思われてるみたいよ。ほら、さつき買ってきた雑誌、見る？」

「見る！」

ジュニア級のランキングが載ってる！ ターボは……ずっと下！

ランキング圏外で光るものはあるけどそれしかないって書いてる

！

「くやじい〜!!! 来年はターボたちが一番になってやる〜!!!」

「ただいま戻りました、って何ですかこの空気、お通夜ですかこれ……。」

「トレーナー！ ターボたちがもっと強くなる方法ってないの！ 秘密特訓とかないの！」

「そんな都合のいいことなんて「ありますよ。」え、あるの！」

「はい、私だけでは難しいかなと思っていたところ、先方からいいお返事を頂きました、カノープスのサブトレーナーとしてこちらに来てくれるみたいですよ。」

「え！ 誰が！ 誰がくるの〜！」

「それはですね……」

―東京、某空港―

『パスポートお預かりしますね、ってセクレ、むぐつ！』

『騒ぎになっちゃうから、秘密、ね。』

『は、はい！ あ、あのサインとかは……。』

『もちろん！ ここに書けばいいのかしら？』

さて、スペシャルウィークだっけ。どれだけのものか見せてもらいましようか。

赤い英雄、来日。

PART 39

スピカ部室、楽しそうな声が途切れない騒がしい場所だが今日は一段とうるさい。

ま、新年だし許してやるか。

さて、他も見回らんと。にしてもブライアンの奴はどこでサボっているのやら。

にしても、会長から新年祝いとして渡されたこのダジャレTシャツ。

『信念をもって新年を迎えよう!』、うん。非常に達筆だが着れないな、コレ。

既に自分で着ていて、あんなにいい笑顔で渡されたら断れんしなあ。

貰い物だから捨てるなんてできないし、実家に送るのは論外。

またタンス行きかあ、タンスの一段がそろそろTシャツ群で埋まりそうだし、そろそろ解決策を考えないと……。

「……ハア。」

最近ため息が増えたなあ……。

新年というめでたい日のはずなのに、エアグルーヴの背中は疲れていた。

「「「「「カンパニー!!」」」」」

「いや、去年はどうなるかと思ってたけど無事、新年会できてよかった。

たな！　そう思うだろ、トレーナー！」

「それは解るが、なんで俺は料理させられてるんだ？」

あまり大きくない部室の中で所狭しと置かれた料理たち。約一名のせいで食事の消費量がすごいことになっているため、さつきから休める暇が全くない。食堂の方々の偉大さを再確認しながら手を動かす。ああ、もうスぺ用の鍋が食いつくされた……。スぺ用とそれ以外とで分けたのは正解だったがその分スぺが気兼ねなく食べるせいで回転率がヤバい。誰か助けてくれ……。

「生徒の食生活を管理するのもトレーナーの仕事でしょ。」

(と、言っても相変わらずスぺがヤバいわね。手伝った方がいいのかしら……?)

「むぐむぐ！」

「そうそう、いつも仕事してねえんだし、今日ぐらいは働けよな。」
(これで巨大土鍋何杯目だ？　そろそろ誰か止めてあげた方が……。)

「むぐむぐ！」

「……ねえ、スぺちゃん？」

(（来た！　スぺの保護者だ！　これで止まる！)())

「たくさん食べるのはいいけれど、食べながら喋るのはやめましょうね。」

(（そっちかよ!!!)())

「むぐむぐ……うん！　わかりましたスズカ先輩！　あとトレーナー

さん、おかわりいいですか！」

「ちよ、ちよつと待つてろよく、はあ。」

「……さすがに手伝うわ、自分たちの分は自分たちでやるし。」

「……俺も手伝うよ。あとस्प、これで最後にしておけよく。」

「お、お前ら……、ぐす、いいやつだなあ。」

「ほら、泣くなつて、トレーナーだろ……。」

「ほら、マックイーンもちゃんと食べるよく。全然箸が進んでないのう。もしや昨日深夜にシュークリームをドカ食いしたなあ〜！」

「だから何でわたくしのプライベートを知っているのですか！ ストーカーですよ、貴方！」

「でも、ボクも知ってるよ！ ほら、みんな見てよ。大量のお菓子買い込んでる変装マックイーンの写真、面白くてつい撮っちゃったんだ〜。」

テイオーのスマホに映っているのは女物のサングラスを掛け、帽子を深くかぶったマックイーンの写真。変装しているのは解るがバレバレである。そのマックイーンが両手に大きなビニール袋、中にはシュークリームを中心としたコンビニスイーツの数々……。

「おー！ すげえじゃねえかテイオー！ パパラッチの才能あるんじゃないやねえか！」

「本当にきれいに撮れてますね！ でもマックイーンさん、お家の人に頼めばよかったんじゃない？ わざわざ変装なんてしなくても……。」

「たしかにスペちゃんという通りだね、なんでこんなことしたのかなあ？　ねえマックイーン、ボクたちに教えてよく、証拠は拳がってるんだしさあ。」

「うぐ。……その、さすがに買ってきてもらうのは恥ずかしかったですし、一人でじっくり見てみたかったですし……。しかも行ってみたら色々たくさんありすぎて買ってしまいましたし……。」

「確かに色々あるみたいだから、仕方ない……。のかな？」

「ですよね！　先輩！」

「ちよつと怖いわ、マックイーンちゃん……。」

「おお、ガンギマリマックイーン、相手はケガ人だぞお！　そんな悪い子にはゴルシちゃん特製虹色ニンジンジュースを飲ませてやろう！」

「ちよ！　やめてくださいまし！　その色の奴はやばいですわよ！」

今日もスピカは平和です。

「全然平和じゃないですわよ！　ちよ、ゴルシ！　飲ませないでくださいまし！」

【スピカトレーナー視点】

洗い終わった食器の重なる音が誰もいない深夜の食堂に響く。

「ふう、これで終わりか。にしても食堂を借りれてよかったなあ。」

スぺの炊飯器事件に続き、電子レンジ事件のおかげでスぺに対する食堂職員の印象はかなりいいらしく、新年会の話をしたらすぐに貸してもらえた。それはいいことなんだが、一体いくらものレンジ買ったんだ？ 食堂で喜ばれるものってかなりの値段してそうなんだが…

スぺの印象といえば、例の勝利者インタビューの時は怖かったなあ。寿命が何年か縮まった気がする。

『いえ、特には。』かあ、あの場ではインタビューのお姉さんがうまくまとめてくれたおかげで、スぺの普段の性格のこともあり、世間では緊張していたか、パフォーマンスのどちらかって言われている。

あいつは誰かと走ること自体を楽しんでいる。勝ち負けに興味がないわけではないが、根本はそこだ。たぶん話をちゃんと聞いてなかったせいで、あんな回答になったと思う。

やっぱり初めてのインタビューだったし緊張してたのかねえ。

にしても、今年は色々大変になりそうだ。

クラシックはスぺが直通で皐月賞。テイオーは今月末の若駒Sと3月の若葉Sを挟んで皐月賞。阪神JFで一着だったウオツカと二着のスカレットはチューリップ賞を挟んで桜花賞。マツクイーンは秋までは長距離を選んで走る感じで行く。ゴルシは……、うん。好きに走るだろ。

そして何よりもスズカのアメリカ留学、来年の秋までらしいが大丈夫だろうか。

現地にも優秀なトレーナーはいるだろうが、やはり自分で指導できないのは不安だ。

……そうだ。そういえばあの人、今、アメリカでやってるのか。

今のうちに頼んで、スズカを見てもらえるように頼んでおかねば。

さ、今年も忙しくなりそうだ、頑張らないとな。

PART 40

【サイレンススズカ視点】

「8A、8A……、あ、ここね。」

今、私は飛行機の中。空港でみんなに見送られた後、アメリカに向かうところ。

それにしても、走れはしないけどもう普通に歩けるのにみんな心配しすぎなんじゃないかしら？

スピカのみんなだけじゃなくて、グルーヴやタイキ、フクキタルやドーベル。それにおハナさんまで来てたんだもの。

別に今生の別れでもないのにあんな心配そうにしなくてもね。

手荷物を棚に移し、みんなから饞別に送られたものを見ながら席に座る。

ちなみにスペちゃんからの物はない。実家から送られてきた大きな段ボールに大量のニンジンが入ったものを渡されそうだったが、グルーヴに止められていた。

それを見て、彼女なら大丈夫だと思い、

「グルーヴ、悪いんだけど私がない間、スペちゃんのことお願いしてもいいかしら？ いらない調理器具買ったりとか、食べすぎちゃったりしちゃうから……、調理器具系は食堂の人たちに渡せば何とかなるわ。」

って言ったら、グルーヴもスペちゃんもこの世の終わりみたいな顔してたけど大丈夫かしら？

……まあ二人なら大丈夫でしょう、なんか仲良さそうだったし。

さ、スペちゃんたちもクラシックで頑張るのだから、私がいつまでもリハビリにかまけている暇はないわね。あちらに着いて、手続きが終わればすぐに始めましょう。

……そういえばご挨拶しなければいけない人がいるって、トレーナーさん言ってたわよね。

確か……、ミスターシービーさんのトレーナーさんだったかしら？

—————

いや、最近このゲームをプレイしていると寒気というかなんというか、何か大事なものを見落としている。そんな気がするんですよ。ねえ？ ガスの元栓は締めてるし、何なんでしょ？ な実況プレイ、やっていきますよ！

いや、スズカ先輩のガチ怒りは凄かったですね。ホープフルSで手に入れた賞金をドボンして買ったレンジがまた寄付されました。前回の炊飯器とは違い、レース前に購入が決められていたためスペちゃんが勝手にあんな高い物を買っていて、慄きましたがあま問題はそこまでないです。ホープフルはGIですし賞金もすごいんだあ……。ちなみに一度、似たようなことを経験しているせいか調子の変化はありませんでした。前もって結果が見えていたからでしょうが、なんで没収されるとわかっていながら購入しちゃったんですかねえ？

では気を取り直してやっていきましょうか。

つい先日、スズカ先輩がアメリカに旅立ってしまったのでお部屋も一人。ちよつと寂しくなっちゃったスペちゃんと一緒に今日も頑張るタイ！ ほら、スペちゃん。アチキもいるんだし、これから本気で頑張っていけないと勝てなくなっちゃいますから頑張りますよ！

「そうだよ、落ち込んでちゃだめだ。うん、頑張る！」

ではでは、今年からクラシック。ですので他陣営がどんな感じになりそうか予想しまして、それに対応したどのようなスペちゃん育成計画を用意しているかご説明していきましよう。

まずは、リギルチーム。おハナさんとこですね。

所属してるのがエルコンドルパサーとグラスワンダー、マイルから長距離までできるつよつよちゃんたちです。作戦もスペちゃんと同じように先行と差しを使ってくる人が多いのでレース中の場所取りとかで戦うことがありそうですね。

おハナさんの育成方針的には総合力を鍛えた上で自身の強みも伸ばすというなんか意味わからん育成力してますがスピカも同じなので無視します。ま、大事なのはおそらく皐月賞ぐらいまでにはオールCぐらいには仕上げてきそうだなあ、って感じですよ。運が悪いとやられますのでご注意ください。

お次はキングヘイロー、合宿で一緒になったあの赤い帽子のトレーナーさんに師事してるみたいですね。一応wikiに記載があったのでわかりましたが、なんでも育成力はおハナさんたちよりも上だが、トレーナーを引き受けてくれないことの方が多いためマズ味ということだそうですね。

……なんでそこにライバル枠が入ってるんですかねえ？

まあそこらへんは運なのであきらめるとしますか……。ちなヘイローちゃんも短距離適性がよく、距離が延びるほど苦手になってくるウマ娘で、先行もできますが、差しを得意にしている子ですね。

またレース中のポジション争いが大変になりそうですが、頑張りましよう。

最後にセイウンスカイ。スペちゃんによると彼女はアークトゥルスというチームに所属しているみたいですね。こちらのチームはデータと戦略を重視してくるチームなので、戦略眼を持ち、逃げでレースを引っ掻き回すセイウンスカイとはピッタリなチームですね。

花丸をあげちゃいます。

と、言っても例のカノープスの奴よりはまともな策ですし、メタを張りやすいです。育成力も高いみたいですが、ま、大丈夫なんじゃねえの？ 知らんけど。

とまあこんな感じですね。ちなですが同じチームのテイオーはクラシックルートに、マックイーンは秋までは他重賞をメインにしているみたいです。たぶんマックは神戸新聞杯からの菊花賞ですかね。

このつよつよライバルたちに対抗するため、スペちゃんの実習方針は基礎ステータス強化をメインにやっつていこうと思います。スキル育成にかまけてたのでちよつとそこらへんが不安でしたので強化していこうかと…

特に未だにスピードがCになっていないのは致命的な気がします。ま、そんな感じですかね。

んじゃ、スペちゃん。今日もバリバリ行くぞー！

【現在のステータス】

▽スピード：D+

スタミナ：C+

パワー：B

根性：C

賢さ：C

▽スキル

【シューティングスター】Lv. 2

【汝、皇帝の神威を見よ】Lv. 2

【空駆ける英雄】Lv. 1

【不沈艦、抜錨オツ！】Lv. 1

【ゲートの支配者】

【食いしん坊】

【逢魔時】

PART 41

【ハルウララ視点】

「え〜と、お洋服は入れたし、歯ブラシも入れた！ 持っていくものはこれで全部だっけ？」

「ただいま戻りました。あら、ウララさんどうしたんですか？」

「お帰りなさい、遅くまでお疲れ様！ 明日からウララ、えんせい？ というので高知に行くんだ！」

「なるほど、地方遠征ですね。何か忘れ物があれば大変でしょうし、お手伝いしましょう。」

「やっぱりキングちゃんはやさしいね〜。」

「そうやってキングちゃんが私の荷物を一緒に用意してくれたんだ！」

「やっぱり私、忘れ物してたみたいでキングちゃんにちよっぴり怒られちゃったけど、二人で旅行の用意をするみたいでとつてもたのしかった！ 最近元気なさそうだったキングちゃんも元気になったみたいでとつても良かった！」

「そうだ！ あしたは朝早くに出発するから早く寝ないとね！」

「おやすみなさ〜い！」

【キングヘイロー視点】

「練習終わりの帰り道、門限まで余裕がないので早く帰らないといけないが、足が重い。」

「トレーナーさんから渡されたメニューを淡々とこなす。自身の実

力が上がっていることは理解できるが、彼女の走りを見せられたあの時からずっと私の不安は消えない。

このままで本当に大丈夫なのだろうか？ 私の担当になってくださった赤田先生はこの学園の中でトップのトレーナー、その指導に間違いはない。そのはずなのに不安になる、本当に私は勝てるのだろうか。先生の汚点になってしまわないのだろうか。私に彼女に勝てる力はもともとあるのだろうか。

そんな思いがじわじわと心に溜まる、気分が沈む。

練習終わりの疲れもあるが、気分が落ち込んでるのもあるのだろう。

何とか門限までに寮にたどり着いた。寮に入ってしまったらどこに誰の目があるかわからない、いつもの私らしく「キング」でないといけない。気を引き締め寮に入る。

運よく今日は自分の部屋まで誰とも会わなかった。結果的に無駄に力んでしまった自分を笑う。結果論だが、誰にも会わないのに自分のちっぽけな意地を保とうとしていたことが非常に滑稽だった。

自室のドアノブに手をかけ、思いとどまる。同室のウララさんはどこか抜けている方だが、よく物事を見ている。こんな気が抜けた状態で彼女の前に出てしまえば、すぐに不調を見抜かれ、心配されるだろう。

彼女を心配させないためにも気を引き締め直し、ドアを開ける。

「ただいま戻りました。あら、ウララさんどうしたんですか？」

「お帰りなさい、遅くまでお疲れ様！ 明日からウララ、えんせい？ というので高知に行くんだ！」

いつも通りの挨拶、いつも練習で遅くなってしまう私を気遣ってくれるやさしい言葉。話しぶりから気づかれないようだ。少し

だけ安心する。

彼女は自身の持ち物すべてを自身のベッドの上に放り出し、半ばその中に埋もれながら荷造りをしていた。あまり整理が得意でなく、私物も多いため整理するために並べようとしたが途中で目的が二転三転しながら用意したのだろう。明らかに必要なさそうなものが彼女のカバンからはみ出ている。これは手伝う必要がありそうだ。

「なるほど、地方遠征ですね。何か忘れ物があれば大変でしょうし、お手伝いしましょう。」

「やっぱりキングちゃんはやさしいね。」

彼女のトレーナーもうまく用意できないことを危惧したのか、彼女がうまく用意できるようにカラフルな配色とイラストが描かれた旅のしおりのようなものを用意してくれたおかげで荷造りは比較的早く終わった。

いつの間にか彼女のカバンに入っていたぬいぐるみなどを二人で笑いながら除いたり、レースをしに行くはずなのにシューズを忘れていたウララさんを叱ったりとそんな他愛もなく、楽しい時間を過ごしているうちに私の心にあったものはなくなっていた。

明日、早くから出発するらしいウララさんに合わせて、私も早めに就寝する。

いつもは疲れに任せて無理やり寝ていたような感じだったが、今日は気持ちよく寝れそうな気がする。

夜が明け彼女のトレーナーと一緒に旅立ったウララさんを見送った後に、私のトレーナー、赤田先生から食事のお誘いを受けた。どうやら私の不調はバレバレだったらしい。

昨日、ウララさんのおかげでリフレッシュできたこともすぐに見抜

かかれてしまったが、笑って食事に連れて行ってくださった。やはり私は恵まれている、これからも頑張ろう。

【シンボリルドルフ視点】

最近私に新しい趣味が増えた。そう、シルクスクリーンだ。ブライアンに貸してもらった立川で救世主二人が生活する漫画の中で、主人公がしているのを見て気が付いてしまったのだ！

私のジョークをこのように服に描いて、その服を着ればとても面白いということをしる！

思いついてしまったからにはすぐに行動しなければ気が収まらない。借りていた漫画をブライアンに返し、私に新しい道を教えてくれた聖書をネットで全巻購入した。

過去最速で生徒会の業務を終わらせた私は、早まる足を抑えながら近場のシヨツピングモールに移動し、シルクスクリーン一式と大量の生地が厚めの白地Tシャツを買い求めた。

その後、買い求めた品を持ちながら自室までつい走ってしまったが、その速度はシービーと競い合ったあの有馬の時よりも速度が出ていたかもしれない。次回の練習時に取り入れることができるようにメモをしておく。

自室に着いた瞬間、私は自身の机の引き出しの中からネタ帳を引っ張り出し、ネットでシルクスクリーンの行い方を検索し、研究し、実践した。

作業中、思いついたジョークの冴えも抜群に切れていて、思いついたらシャツに書き出し、思いついたら書き出しを繰り返した。かなりの数があったTシャツのすべてに文字を書き入れた時、気がつけば夜

が明け、朝日が昇っていた。徹夜してしまったようだ。しかし私の脳は冴えており、目も閉じることを知らない、絶好調だ。

全てのTシャツに書き入れ終わった達成感と数々の素晴らしいジョークを生み出すことができた幸福感に包まれながら朝日を浴びる。

そうだ！今日は早朝から生徒会の会議があつたはずだ！朝早くから集まってくれる彼女たちのためにもここは笑いを届けないといけない！

そう思った私は身だしなみを整えながらすべてのTシャツを確認し、面白く、朝というタイミングに合っているものを制服の上から着用した。

今日一日はこれで過ごすとしよう。

『朝食抜かれて超ショックー！』だ！

その後、彼女は意気揚々と生徒会室に向かったが、運よく誰とも出会わなかった。

生徒会室に先に来ていたエアグリーブだけがその姿を見たらしい。その日からエアグリーブの引き出しには胃薬が常備されるようになった。

スピカの新年会よりも少し前の話である。

PART 42

誰もいない部屋、グラスは今日、おハナさんとの話があるらしく帰りが遅い。

練習で汚れた服を着替え、顔を洗うためにマスクは外す。

自身の顔が目の前に映る。鏡の向こう側には弱い私。

そういえば最近一人でいる時間がなかった、”マスク”を脱ぐ時間がなかったことに気が付く。

心に封じたはずの感情があふれ出てくる。

焦り、不安、そして恐怖。

感情に押しつぶされそうになり、慌ててマスクをつけなおす。

ちよつとだけましになった。

今年いっぱい日本で過ごし、来年から海外に、ヨーロッパに行く。おハナさんと私が出した結論、それに不満はない。

彼女と戦えるのは今年だけ。

彼女を超えるのは今年だけ。

もうちよつと、もうちよつとだけ頑張れ、エル。

【リギルトレーナー視点】

「……それでは、失礼します。」

「ああ、しっかりと休むように、エルにも伝えておいてくれ。」

グラスが退室する、少しだけ息を入れるためにいつの間にか冷たくなってしまったコーヒーを口に含む。

エルもそうだが、グラスも海外への思いが見え隠れしている。

つい最近まではシニアも国内で走ってもらうことを考えていたが、グラスに意思があるのならエルと同じように海外で走ることも考えないといけない。

目標があるのはいいことだ。彼女に勝った後のことまで考えているのは好感が持てる。

話を聞くに、例の彼女はシニア級は一年、国内で過ごしたのちに海外に出るといふし、それ以前に海外に出ることで慣れておき、彼女と海外で戦おうとすることも考えているのかもしれない。

彼女たちは驚異的な速度で成長している。彼女たちだけ見ればこの世代の頂点を決めるのはこの二人のどちらかだけであるといえる。少なくともこれ以前の世代ならそうだった。

先日、校内にあるジムの前を通ったとき、スペシャルウィークが一人で練習をしているのを見かけた。

寮の門限まで時間があまりなく、片づけは私がしておくから早く帰るように、と言うと感謝を述べ慌てて帰っていった。それだけなら可愛らしいもののだが、使用していた機具、よく自身のスピードを鍛えるために使うランニングマシンの設定を確認すると思わず声が出てしまった。

設定速度が速すぎた、とてもジュニアから上がったばかりの子が練習で使う速度ではない。少なくともエルやグラスには過度なトレー

ニングになるため、設定させない速度だった。機器についているタイマーから長時間やっていたこともわかる。

彼女はただ門限の時間に慌てただけで、息は上がっているように見えなかった。

つまり彼女たちが走れないような速度を息を切らさずに走ることができるということだ。

焦りを感じた。このままでは間に合わない。

私は目標の上方修正を余儀なくされた。

当たり前の話だった、こちらが成長すれば、あちらも成長するのだ。

二人の練習内容はかなり厳しくなってしまうている。何とかついてきてくれているが、どうしてもオーバーワーク気味になっている気がする。休ませるタイミングもよく考えないといけない。

精神的な負荷も取り除かねば……、私でこれなのだ。当事者たちの不安は大きいはずだ。

それとなく、友人と遊ぶように勧めてみることにする。

少しでも気が晴れればいいのだが……。

【カノープストレーナー視点】

『いや、悪いですね。わざわざ日本まで来て指導もしてもらうなんて。』

『別にいいわよ。元々あの子のことは気にしていたけど、日本の資格なんて持ってなかったからね。』

『トレーナー免許を持つものが監督する場合、他地域の免許を持って

いてもサブトレーナーに就任することができるとも。まあ他にもありますが何とか通ってよかったです。色々面倒事が起きそうなので偽名での活動は申し訳ないですが。』

『仕方ないでしょ、さすがに私がこつち来てるって知られたら色々とうるさいでしょうし。』

『世界最強ですもんねえ。』

『ま、最近ちょっと怪しいけど。私に勝てる子たちを探すために色々出張しているとあの子みたいなヤバイ子は出てくるしね。』

『あなたもそのやばいのでしょうか……。それで、スペシャルウィークさんはあなたから見てどうですか?』

『あら、そこは自分の担当の子を聞くのが普通じゃない?』

『自分の教え子のこととはちゃんと把握していますよ、もうあんなことは引き起こさせませんし……。ま、あなたを呼んだのも一種の自信付けですしね。』

『そんなに軽く私を呼べるのはあなただけでしょ。まったく、こんなことならトレーナー資格を取るのとは別の学校にすればよかったわ。そうすればあなたとの接点なんてできなかつたし……。それで、彼女についてよね。たぶん行けるとこまで行けるんじゃないの? 彼女が世界に出てくれれば結果は変わってくるかもしれないけど。』

『変わってくる、じゃなくて変えてやるでしょう。まだあなた現役ですよね。』

『ありや、ばれたか。』

PART 43

『トウカイテイオー！ 見事な先行力！ 年初めの勝利を大差勝ちで収めました！』

ふいふ。ちゃんと勝ててよかった。

うん、やっぱりボク強い方だね？ ちゃんと強いよね？

スペちゃんもそうだけどスピカは強いコばっかだしちよつと自信なくなっちゃうよね。

勝てたのは良かった。でも、出走していたコには悪いけど勝てて当然だったレースでもある。

ボクたちの世代は色々とおかしい。

世代に一人だけだったら絶対的エースであつただろう人たちがいっぱいいる。

スペシャルウィーク、現在の世代最強。その実力は圧倒的だけど性格はいいこ、無邪気と言ってもいい。ボクたちに火をつけたあの発言も彼女にとつては本当に何でもないのだろう。ただ走ることを楽しんでるだけだからたちが悪い。ま、そこがいいところもあるんだけどね。

エルコンドルパサー、世間では二番手の怪鳥さん。先行、差しもできてマイルから長距離までできるコ。自分の得意な位置を取るのがうまく、先行力に長けているといえる。ダートも出来るみたいだけど、出走してるレースが今のところ芝だけなので何とも言えない。

グラスワンダー、お淑やかだけど何か怖いものがあるコ。ダートができてなくて先行よりも差しの方が得意なエルコンドルパサー、そう言える。けどその末脚は全然安心できない。スペちゃんには及ばない

けどもその爆発力、前に行こうとする執念は同じターフに居なくてもわかった。

キングヘイロー、ボクとマックイーンを負かした相手。夏の合宿で会ったおかげでこの世代はスぺちゃんだけじゃない、もつと他も知る必要がある。それを教えてくれた相手。彼女も差しで、末脚に気をつけないといけない。根拠はないけどそこまで長い距離は得意じゃないように感じる。ついでにあのトレーナーさんも怖い。

セイウンスカイ、一番厄介かもしれないコ。逃げが得意で、自分でレースを組み立て周りを引つ掻き回すことができるコ。出走したレースを見たけど、元の能力が高い上に作戦もあつたらどうなるのか、その結果を見せつけられた気がする。

メジロマックイーン、同じスピカでボクのライバル。ステイヤーだけど中距離でも強い。先行の方が得意みたいだけど逃げもできる。出走するレースは長距離に絞っていくみたいで重賞を走るのは秋からなるみたい。自分の目標が決まっついていて時間もある。

他にもミホノブルボン、ライスシャワー、ナイスネイチャ。ボクが把握できてない強いコもいるかもしれない。

そんなエースになりうる人たちが出走していないレースで負けたら……ね。

それに、今回のレースで何かつかめた気がする。

ほんとは一つしか使えないものを二つ使うような感じ。

体にすごい負担がかかりそうだから多用はできないけどこれを極めればいけるかもしれない。

とりあえず、直近の目標は見えた。
なら、後はどこまで仕上げられるか、だ。

【ナイスネイチャ視点】

私には才能がなかった。

この一年でどれだけそれを思い知らされたか。

新星と呼ばれるような人たちのメイクデビュー。

特にスペシャルウィークのメイクデビュー戦。

私はあるなことでできない。どんなに頑張ってもそこに行きつくことができない。

単なる有象無象の一人。

ほくんと、とんでもない時代に生まれちゃったよね。そう言っておで諦めるのは簡単だった。

そんなわけない。

どうしようもなく、くやしい。

有象無象の一人、そう見られるのがたまらなく悔しかった。

世間は私を見ない。次の時代を作る子たち、そこに私の名はない。

私はナイスネイチャ、それを証明してやりたい。

私のことを見向きもしなかった奴らを見返してやりたい。

この名を忘れられないようにしてやりたい。

いつの間にか、その思いに取りつかれた私はすぐに行動に移していた。

無理をした。トレーナーから提示されたメニューの倍をこなそうとした。

真似をした。食事を変え、無理やり多く食べるようにした。

観察をした。戦うことになりそうな人を徹底的に調べた。

研究をした。過去のレース、自身の糧になりそうなものは何でも見た。

まわりを見ていなかった。止めてくれる人もいたが私の目には入らなかった。

とにかく、前を見続けようと、進み続けようとした。

結果、私は壊れかけた。

その時はターボもいなくて、私とトレーナーだけの部室。

いつも通りのトレーニングを始めようとして、急に体から力が抜けた。

強く体を床に打ち付けてしまったようだが何も感じなかった。

気が付くと病室だった。

横には心配そうにこちらを見つめるトレーナー、見たことのない機械に、多分初めてされただろう点滴。

そうか、私は倒れたのか。倒れてから自身が無理をしていたことに気づいた。

泣きながらトレーナーに謝られた。

私の不調に気がつけなかったこと、私の気持ちを考えられなかったこと、自身がするべきことを私に任せるような形になってしまったことを気がつけなかったこと、他にもたくさん、たくさん。

全部私のせいなのに、ずっと謝られた。

ただ、申し訳なかった。

私が倒れたのは、過労と強いストレスによるものだったらしい。

そこまで長く入院することはなかったけど、いろんな人がお見舞いに来てくれた。

ターボもそうだった。

私のことを心配して止めてくれようとした相手、その時は名前すら気にしてなくて、前に進むのに邪魔だと思ってしまう、強く当たってしまった私なんかを心配して、一番早くお見舞いに来てくれた。

「ネイチャは強くなりたかっただけだろ、ならすぐくいことだ！」そう言って笑って許してくれた。その優しさに何も言えなくなって顔を伏せてしまったら、泣いてると思われる。「ネイチャ大丈夫か!?」どっか痛いのか!?!」と心配されてしまった。やっぱりターボは凄いや。

彼女はそれまでは違うチームにお世話になろうとしてたみたいだけど、私のことが心配になってカノープスに入るって言ってくれた。

それから、退院してから私の生活は全部変わった。私とトレーナーだけだったチームにターボが増え、トレーニングもまるつきり変わった。他の人のレースや、過去のレースについても私が調べようとした時にはトレーナーが用意してくれていた。私がつらくなった時はターボと一緒にいてくれた。

全部、全部いい方に変わったんだ。

だからね、

面と向かっては、恥ずかしくて絶対言えないけど、二人にすごく感謝してるんだよ。

だから、私は二人のために走るんだ。

私のためにも、二人のためにも、絶対に負けられないんだ。

PART 44

思い出すのはあのレース。

私は当初の作戦通り、作戦：逃げを遂行。
スタートは成功。

正確にはスタートのみ成功。

私のペース配分は途中までは正確だった。

一番人気のスペシャルウィーク、警戒すべき相手なのはわかっていたが、大逃げで有名になっていたツインターボと同じように大逃げを選択することは私の予測パターンの中にはなかった。

最初はツインターボの大逃げにつられたと考え、当初のペースを維持した。

それは間違い、いえ、当時の私の能力では結果を変えることは不可能。

なるべくしてなったと考えられる。

中盤から彼女が驚異的な加速を行い、これ以上逃げられては勝利することは不可能と考え、無理やりペースを上げた。同じことを考えたのは私だけではなかったようで、レースの動画を確認したところ、全員が掛かっているという状態になっていた。

大逃げを選択していたツインターボが状態：逆噴射になったため抜かすことは難しくなかったが、その先にたどり着くことはできなかった。結果は2着。

3勝2敗、敗北したホープフルSも2着。

世間は良い成績だという。私も一度も負けずにいられるほど甘くないのは解っている。

問題は私の達成目標：クラシック三冠の達成への道筋が全く見えないことだ。

どれだけの思考を経てもあそこにたどり着ける過程が見えない。

学園に入学して一年、私の夢を応援してくれるマスターにも出会い、スタミナを鍛え、マイルを超えて何とか中距離までペースを崩さずに走れるようになった。

自分がどこまでやれるのか、それを確認するために、また世代で頂点を獲ろうとしている彼女の実力を見るために私は出走した。マスターにも勧められていたためそこに疑問はなかった。

この状態をなんと表せばいいのだろうか。

何をしていてもあの時追いつけなかった背中が脳裏に浮かぶ。

だんだんと遠くなっていく背中、どうしても追いつけない自分。

自身の心に何かが溜まっていく。

普段のトレーニングにも支障をきたしていた時、マスターが私に言った。

「ブルボン、お前に客が来ている。気晴らしにもなるだろう、会ってくるといい。」

「……わかりました、マスター。」

マスターに伝えられた場所に向かうと、そこにいたのは彼女だった。

「バックシーン！ おや、ミホノブルボンさんですね！ お待ちしておりました！」

「お久しぶりです、サクラバクシンオー先輩。」

私に短距離の道を勧めていてくれたサクラバクシンオー先輩だ。

「とても暗い顔をしていますね！ でも大丈夫です！ トレーナーさんから頂いたアメを差し上げましょう！ これを食べれば気分上々、桜満開です！ トレーナーさんがそう言ってました！」

「……頂きます。」

先輩から頂いたアメを口に入れる。ほんのりとした甘みと桜の風味が口に広がる、おいしい。

「お！ とてもいい顔です！ そうだ！ 忘れるところでした。この度、私サクラバクシンオーはグローバル・スプリント・チャレンジに挑戦いたします！ それで世界中を走りながら巡るのですが、ミホノブルボンさん、私と一緒に行きませんか！」

「世界……ですか？」

「はい、そのとおりです！ あなたのトレーナーさんに伺いましたが、何でも最近スランプの様子！ でしたら私と一緒に世界中を股にかける武者修行に行こうと思ったわけです！ 私が走るのは短距離とあなたの求めるものとは違いますが、きっと何かあなたのためになるとお誘いしたわけです！」

「……少し、考えさせていただいてもいいですか。」

「もちろんです！ こちら、私が乗る飛行機のチケットです！ 最初はおーストラリア！ お返事はいつでもお待ちしておりますので！ バクシンバクシン！」

そうやって、私に飛行機のチケットを渡して去って行ってしまっ

た。まだ行くとは言っていないのだが。

私が呆気にとられていると

「ブルボン、どうだ？　行ってみないか？」

いつの間にかにマスターが後ろにいた。

「確かにお前の夢を挑む前にやめてしまうことになってしまいかもしれない。だが、国内でクラシックに挑むよりも得るものは大きいはずだ。世界はお前が思ってるよりも広く、強い。幸いワクシンオーのトレーナーは俺の恩師だ、きつと俺よりもうまくお前を導いてくれる。」

「……しかし、マスター。」

「あいつが頭から離れないんだろ。言ってしまうがこのまま燻つていたら絶対に勝てない相手だ。勝つには新しい何かがある。世界をめぐってそれを見つけてこい。」

「……………」

「別についていくのを途中でやめてもいい。何か見つけたら帰ってきてもいい。そういう気楽なもんだ。」

「……解りました、行ってみることにします。」

マスターが私にこれだけ言葉をかけてくれることは少ない。いつも態度で示す方だった。そんな方がこれだけ言ってくれている。ならば行ってもいいかもしれない。そう思った。

「そうか、頑張ってきて。手続き関連は俺がしておく。」

『おやつさん、すみません。俺が不甲斐ないばかりに。』

『気にすんなよ、黒沼。仕方ないところもあるんだから。ま、ワクシンオーのついでにブルボンも見てやるよ。それで海外レースに出走はさせてもいいんだな。』

『はい、お願いします。』

『うし、なら化け物に対抗できる精密機械、育ててみつか。お前も落ち着いたらこっち来いよ、ブルボンのトレーナーはお前なんだからさ。』

『………すみません、ありがとうございます。』

PART 45

(お、スペちゃんどうしましたか?)

「友達と一緒に遊園地に行かないかと誘われちゃって……、明日、行ってもいい?」

(遊園地ですか。ま、最近頑張ってますし、大丈夫だと思いますよ。ただ明日練習しない分、他の日の練習内容が増えちゃうけど頑張れる?)

「うん、頑張る!」

(なら、思いっきり遊んでおいで。それとちゃんとお休みの報告をトレーナーさんしておくんだぜ!)

「解ってる。じゃあ準備してくるね。」

(あ、それとミーはお留守番しておくからみんなと楽しんでおいでな。)

「は〜い! わかった。」

(これは楽しすぎて聞いてないですね、こりや。)

—————

「わあ〜! ここが遊園地! 初めて来た〜!」

「え、スペさん、あなた初めてなんですか!」

「うん！ 近くにこんなすごいところなかったし、あんまりお金もなかったから……」

「オウ……、スペちゃんも苦労してるんですネ。」

「ま、まあ、その分今日は楽しみましょう、ね。」

「そうですね……、ってセイさんどこ行きました！ いつの間に消えたんですか！」

私たち、スペちゃん、エル、キングさん、セイさんの5人で遊園地に来ています。

おハナさんから勧められてみんなに遊びに来たのですが、早速セイさんが消えてしまって……。

「あ、セイちゃんからメッセージ来てる！ 先に優先チケット買いに行ってるって。」

あら、先に行ってくださいだったのでね。とりあえず迷子じゃなくてよかったです。

「では、セイさんだけに行かせても悪いですし、私たちも向かいましょうか。」

「そうですね。あ、グラス、あそこにあるパンフ取ってきますネー。」

「すみません、お願いします。あ、スペさん！ そんなにフラフラしてたらはぐれますわよ！」

なにか面白い物でもあったのかフラフラと中に進んでしまうスペちゃんを追いかけてキングさんが走っていく。結構奥まで進んで

いったみたいなので私はここで待っておいた方がいいだろう。

「おつまたせしましタ〜！ アレ、みんなは？」

「スペちゃんは何かに惹かれてフラフラと、キングさんはそれを追っ
ていきました。」

「アリヤ、でもスペちゃんらしいですネ〜。でもキングちゃんなら任
せても大丈夫でしょうし、セイちゃんと合流してしまいまシヨウ！」

そんなことで笑い合いながらセイさんが先に向かったであろう券
売所に向かう。

「……エル、あの時のおハナさんの顔、見た？」

「あ〜、あれですね！ 『んん！ 最近お前たちも疲れがたまってきた
のではないか？ 貰い物なのだが近場の遊園地の割引チケットがあ
ってな、どうだ、いるか？』ですもんネ。」

「ふ、ふふ！ エル、すごいにてる。」

「そんなに笑われるとなんか自信出ますネ〜。にしてもすごい赤面し
ながら言っていましたよネ〜、普通に渡してくれていいのに。」

「そ、そうですね。」

「さすがに笑いすぎですヨ〜、グラス〜！」

—————

「お〜い、ゴルシ〜。スペが来てないんだけどなんか知ってるか〜。」

あ、わりい。今日休みってこと伝えんの忘れてた。わざわざトレーナーのところに行いに行こうとしてたから代わりに伝えておく、つて引き受けたんだった。

そのあとにマックイーンがまた変装してスイーツを買いに行こうとしてるのを発見していじり倒してたら忘れちまつてたな。

「そういうのはもっと早く教えてくれ……。はあ、それでマックイーンはまた食べたのか？」

食べてましたね、がつつりと。

おいしそうに暴食するスぺの影響で完全にスピカのエンゲル係数が爆上がりですねえ！

「スぺだけでもやばいが、スぺに影響されてみんな食事量増えるみたいだもんな。それ自体はいいんだがなあ……。」

ちと、カロリー取りすぎですな。

「とりあえず、追加で走ってもらおうか……。あとスぺも。」

スぺもまた太ってきてるからな、実は裏で結構「太り気味」判定くらってるんだが、あんまりやりすぎんのもだめだし、カットしてますもんねえ！

とりあえず、スぺ。明日ダイエット確定みたいだぞ。

—————

「あれ、スぺちゃんそんな青い顔してどうしたの？」

「なんか寒気がして……。」

「え！ 大丈夫なの？」

「うん、大丈夫。心配しなくていいよセイちゃん。たぶん気のせいだし……。」

PART 46

オツスオツス、オラ投稿者！ 今日もバクシンしていきましょねえ！

現在スペちゃんは重点スピード強化月間（皐月賞まで）なのでスピードトレーニング中ですねえ！ スピカのチーム練習としてテイオーと併走しております。

なんか最近スペちゃんがテイオーと仲がいいのか、よくあつちから併走を持ちかけられるんですね、なんででしょ

？ スペちゃんなんかしました？ ……してないみたいですね。

まあなんか変な乱数引いてるか、イベント引き起こしちやつたかのどちらかでしょうが、まあ大丈夫でしょ。

＜「おーい、スペ〜！ ちょっとここっち来い〜！」

ありや、珍しくゴルシちゃんが呼んでますね、ちょっと行ってみましょう。テイオーちゃん、申し訳ありませんが席外しますぜ、先に行っててくださいえ！

＜「りょうか〜い、先走ってるよ〜！」

んじや、お言葉に甘えまして、移動！ んでゴルシちゃん何の御用だ！

＜「おー、最近また速くなってきてんじやねえか？ うんうん、このゴルシ様を満足させるとは感心感心！ んでよ、悪いんだけど今下に着てるそのスーツとおもり、取ってきてくんねえか？」

ん？ なんかのイベントですかね。確かにスペちゃんはいつも通りにトレーニングスーツとおもり（最近増量済み）を付けてますね。模擬レースでもするんでしょうか？ ま、とにかく言われたとおりに

しましようか。

スペちゃん、着替えに行きましよう。

んゝむ、にしても順調に成長してるからこそゴルシちゃんが何をしでかすのか怖いところではありますよ。前回のゴルシちゃんイベントも急に拉致されましたし、何が起こるのやら。まあ事前に何かするって言ってくれてるようなもんですから、まだ心の準備ができますね。

お、スペちゃんもう着替え終わりましたか？ 考えていたらすでに部室に移動して着替えててくれたみたいですね。では元のところに戻りましようか。

＜コンコンと部室のドアを叩く音がする。スピカメンバーやトレーナーさんはノックをしないので他の誰かだろう。

ありや、来客ですかね。とりあえず開けたげましよう。どちら様ですかい！

＜『ここがスピカの部室ね！ あら、早速会えたわねスペシャルウィーク。初めまして、私のことはセクって呼んでね。よろしくね！』

うん？ 深くキャップを被った赤髪の女性？

ちよつと悪い予感が…… と、とりあえず返事ましよう。

＜スペシャルウィークは慌てている。

＜急な英語で驚いているようだ。

「あい きゃんのつと すぴーく いんぐりっしゅー！」

……スペちゃん!?

「アハハ、ゴメンナサイネ。ワタシ、”セク” ッテイイマス。ヨロシクネ。」

”セク” って言いましたか、この人……。いやなんで日本にいますか貴方！ あなたアメリカのダートでしょ、主戦場！ 早くお帰りになりやがりくださいませ!!

「ネ、スペシャルウィークサン。ワタシトシヨウブシマセンカ？」

へ、勝負？ 勝負ですか……。

どうしましょう、たぶんイベントなんでしょうが受けるべきか受けないべきか……。

「シヨウブですか？ レースですね、ぜひ！」

ちよ！ スペちゃん勝手に受けないで！

「ジャア、サツソクハシリマシヨウ。アナタノレンシユウシテルトコニイキマシヨウ。」

ああ……。わたくしの手が及ばないレベルでイベントががが!?

……ま、まあお相手がですね！ 例の真つ赤な方じゃない可能性もありますしね！ まだ慌てるような時間じゃないですよね！

「ここでいつも練習しています！ セクさん、走るのはいここで大丈夫ですか？」

「ダイジヨウブデスヨ、デハサツソクハシリマシヨウ！」

あ、あの。走る前にそのお帽子、走るのに邪魔じゃないですかね

？ 取っていたいただいてもよろしいでしょうか？

『あら、そうね。ならセクレタリアトとして相手さしてもらおうわ。』
「ヨロシクネ、スペシャルウィーク。」

バサツと広がる特徴的な赤い髪。そこをいたのはセクレタリアト
でした。

ナンデ！ セクレタリアト、ナンデ！ なんでこんなところに赤い
英雄がいるんですか！！

ウウウウーン、めまいと吐き気がしてきて、目の前が真っ暗に……。

—————

！
あく、やっぱり化け物来てましたやん。早速スペに目をつけてやらあ

「ちよ！ ゴルシさん！ あ、あれつて、セクレタリアトですか！」

お、マックイーンか。そうだぞ、あれが今のてっぺんですたい。ス
ペになんか用があるみたいですねえ！

「うわ、初めて見ましたわ！ 後でサインとか頂けるのでしょうか
……？」

たぶん言ったら書いてくれると思うぞ。あ、でも色紙取りに行くの
は後にした方がいいぞ。あいつらレースするみたいだし。

「え！ スペさんとレースですか！ ちよつとうらやましいですわ。」

ま、世代頂点のご褒美みたいなもんだらうな。マックイーンも一緒に走ってもらえるように頑張らないと。

それとみんな呼んで来ようぜ、絶対得るもんあつから。

「そ、そうですね！ 皆さん呼んできます！」

頼むぞ。

さ、スぺ。相手は世界最強だ。盗めるもん全部盗んでいけよ。お前の世界一の夢を達成したお手本が横にいるんだもんな。

—————

さ、始まってしまいました。赤い英雄セクレタリアトとの模擬レース。一対一でのタイムマン勝負です。

始まってしまったからにはやるしかねえ！ 公式戦じゃないからもし負けたとしても本動画の目標、称号入手に問題は起こらぬ！ 日本の意地を見せてやるぞ、スぺちゃん！

「はい！ 頑張ります！」

相手は世界最強でおそらく作戦は逃げで来るはず。さすがにあの31バ身差の爆逃げをされたら終わる。得意の差で行っても差し切れない可能性の方が高い！ ゆえに取るのは先行策。今日ばかりはスキルの出し惜しみなんてしてらんねえ！ 全部使って食らいつくぞ！

〈「お、準備できたみたいだな。んじやルール説明な。ここから右回りで2000m。ゴール地点はあのヒシアマパネル付近だ。OK？」

〈『大丈夫だ。』

「解りました。いつでも行けます。」

く「んじや、合図はゴルシちゃんが。ちょうどピストルあるし、これでやるぞ。じや、ヨーイ……。」

【セクレタリアト視点】

芝2000m、本業はダートだけど芝が苦手なんてことはない。むしろ芝も得意だ。

日本の新星の力、見せてもらいましょう。

スタートの準備をする。すると隣にいる彼女の雰囲気が変わった。おそらくプレッシャーをかけているのだろう。

……まあ、並みのウマ娘なら怯むぐらいはするだろう。感覚は解る。そら、プレッシャー返した。

「うぐッ！」

彼女から放たれていたものを自分のもので塗りつぶす。なめるんじゃねえぞ、若造。

破裂音。

スタートだ。私に吞まれて遅れてスタートした彼女は先行策で来

るみたいだ。

ま、今日は観察に来てるんだし、本気だけど全力でやるのは勘弁してあげましょうかね。

ちようど彼女の前につく感じで、直線までは見させてもらいましうか。

ふくん、まあ近くで見た感じ、そこまでかな？

いや、まだジュニアから上がったばかりのクラシック級の子だったら強い方か。

さて、そろそろ中盤ですかね。まあこんなもんなら来る意味がなかったかも……

お？ 中盤から上げてきたな。思ったよりも加速している。

早とちりだったみたい、この子は後半戦に強い感じだな。ま、抜かさせる気はないけどね。

さ、最後の直線。まあ見るものはあつたし、特別に全力。見せてあげましょうか。

どんだけ食らいつけますかね。

—————

セクレタリアト、世界最強のウマ娘。

教えてもらうまでは知らなかったけど、私の目標に立ってる人。

とっても強いだろうけど、負ける気なんてない。

自分のできるすべてのことをする。スタート前には力を込めて周

りに……

「うぐッ！」

何！ このプレッシャー！ 怖い、怖い！ どうしよう！ 助けて！

破裂音

気がつけばすでにセクさんは前にいた。

マズい！ 早く私も！

明らかに遅れた！ どうする、どうする……。

とりあえずはうん、先行策で行くんだよね。頑張つてセクさんの後ろに付くんだ！

よし、何とかついていける。

セクさんは何度かこちらを確認してるけど、私は気にしないで走るんだ。

よし！ 残り半分！ ここでゴルシさんから教えてもらった技でスパートを掛けて、最近練習してたスタートの時と同じようにプレッシャーをかけて走る！

これで少しでも差を縮め……られない。

私が加速したら、セクさんも加速してる！

どうしよう、追いつけないかもしれない。

ほんとはもうちよつと脚を溜めるんだけど、セクさんについていくためにあんまり残ってない！

でも、諦めない！ 直線での加速は得意なんだ！
直線、ちよくせんで……

直線に入った途端、急に離れるあの背中。

私が急激に遅くなった気がする。でも私の足はさつきと同じ。いや、さつきより速くなってるはず。

なのになんで遠ざかっていくの！

このままじゃだめだ！

星のように走る自分を幻視する。

背中が小さくなる。

空を駆ける自分を幻視する。

背中がもっと遠ざかる。

体中に残ったすべての力を足に込める。

赤い髪ははるか向こう。

ああ、勝てないや。
ごめんなさい、スズカ先輩。私、負けちゃいました。

(マスクデータを公開します。)

(汎用イベント『初めての敗北』が発生しました。)

(一時的に成長率が減少します。)

(また、敗北を克服した時に効果が反転し、上昇します。)

(セクレタリアトとの模擬レースに敗北したため、分岐シナリオが確定しました。)

(特殊シナリオ『混沌した世界』に分岐します。)

(特殊シナリオに分岐したため、国内と海外の競技レベル差が増加。)

(海外ウマ娘のレベルが上昇しました。)

(世界中に眠る英雄たちの育成開始時期が変更されました。)

(スペシャルウィークと対戦可能な時期に変更されます。)

(セクレタリアトの特殊イベント「英雄を育てる英雄」が発生しました。)

(セクレタリアトと交流したキャラクターの成長率が増加します。)

うーん、さすがにセクレタリアトとの対戦は早かったみたいです
ねえ。致し方あるまいか。

ほら、スペちゃん。負けちゃって、悔しくて辛いのは解るけど、ちや
んと前を向きましょう。

勝った人を称えて、次の戦いに向けて闘志を燃え上がらせましょ
う。

ほら、涙を拭って、精一杯の笑顔で言っちゃりましょう！

「……セクさん！ 今日には負けましたけど次は絶対勝ちますからね！」

「『OK、世界で待ってるわよ。いつでもおいで。』」

うん、ちゃんと言えてえらいですね。さ、ゴルシちゃんが慰めに来てくれますし、お胸を借りて思いつきり泣いていいよ。

—————

スペシャルウィークが背の高い方の葦毛の子の胸に顔を埋めて、わんわん大泣きしている。

……ちよつとやりすぎたか？ 悪いことしたみたいでなんだかなあ。

ま、彼女の實力も見れましたし、よしとしましょうかね。

走り終わって後ろを振り返った時、思ったより近くに彼女がいたことに驚いた。

やっぱりこの子は見込みがある、これからが本当に楽しみだ。

再戦希望で次は絶対勝つ、ね。泣いてはいたけど闘争心は消えちゃいない。

たぶん、次に戦う時にはとんでもない成長を見せてくれる気がする。

今は、負けた悔しさに自分が驚いてしまつて心が揺れてしまつてるって感じかな。

気持ちの整理を付けるためには私は不必要だろうし、さっさと退散しますか。

あら、スピカのトレーナーさんも見てたのね、一応挨拶と詫びだけ
は入れておきましょうか。

……日本にきた意味は十分あったわね。

—————

ん、スペ。もう大丈夫なのか？

この大聖母ゴルシ様の胸、もつと使ってもいいんだぞ。

そっか、大丈夫みたいだな。

ほら、これ。セクレタリアトからの伝言な。

世界で待ってるってことと、もしよかったら夏休み期間中にアメリ
カにこないかだつてさ。

あつちで一緒に練習しようぜ、つてことらしいぜ。

うん、そだな。今年のスピカの夏合宿はアメリカで、だ。

スズカもいるだろうし、あつちでみんな練習しようぜ！

わざわざ、あつちから誘つてきてるんだしいつちよ行ってみましょ
うか！

……ん？ 旅費？ 多分セクさんが出してくれるんじゃないやね？

出してくれなかったらうちのトレーナーが頑張るだろ。

PART 47

「……うん、私だって負けちゃったことはたくさんあるわ。でも大事なのはそれをどう活かすか、よ。スペちゃんだってわかっていると思うけど、その悔しさを自身の糧にするの。」

「そうね……うん。切り替えられた？　ならよかったわ。……うん、うん。私も体に気を付けるからスペちゃんも食べすぎたりしないようにするのよ。うん、なら切るわね。スペちゃんも頑張つて。」

「……後輩のスペシャルウィークからか？」

「あ、シービーさん！　ごめんなさい、うるさかったですか？」

「いや、大丈夫さ。せっかく同室になったんだ。そういうことは気にしなくてもいいぞ。……それで聞こえてしまったから聞くが、彼女は誰に負けたんだ？　今の日本でGIはなかったと思うし、皐月賞のトリアルのどれかか？」

「？」

「いえ、何でも日本に来ていたセクレタリアトさんに負けたそうです……。」

「あー、セクさんか……。あの人ね。セクさんデュエリスト決闘者みたいなところあるから、見込みある子がいたら勝負挑んじゃうんだよね。私もこつち来た時挑まれたし。」

「そ、そうなんですか。（決闘者デュエリストってなんだろう？）」

「まあ強い相手と戦いたい、つてのは私たちウマ娘の本能みたいなところあるからわかるんだけどね。でも、人を見る目は確かだし、負けて

折れちやいそうな子には絶対勝負挑まないから。彼女も立ち直ったんでしょ?」

「はい、スペちゃんも『明日からもっと頑張る』と言ってました。」

「だよね。……んじや先輩のスズカは簡単に抜かされないように早く元に戻さないとね。さ、早速私たちも走りに行こうか!」

(リハビリも思ったより早く終わり、シービーさんのトレーナーさんからの指示で全力で走ることはせずに体を丈夫にするための基礎トレをしていた。昨日でそれも終わり、今日から本格的に私の走りを取り戻していく。スペちゃんも日本で頑張ってるみたいだし、私も頑張らないと。)

「……それで、聞いていいのかわからないんですが、そのTシャツ……」

比較的厚めの白地Tシャツに達筆で大きく書かれた文字

『シービーの走りにしーびーれーたー』

「ん、これか? いいだろ。ルドルフが送ってくれたんだ。まったく、私の走りに痺れたのなら電話でもしてくれたらいいのに、わざわざTシャツにして送ってくるなんてな。」

「いや、それってダジャレなんじゃ……?」

「ダジャレ? 何がだ? さ、スズカも早く準備して走りに行こうぜ。」

(あ、気が付いてないのね……。)

その後、アメリカの友人たちに『イケてるTシャツだ!』と褒められて、ルドルフからももらったんだ!と自慢しているシービー先輩を見てなおさら指摘できなくなったスズカだった。

—————

「え〜! セクさん、スペとレースしたのか! いいないなく! ターボもレースしたい〜!」

『いや〜、ターボはまだ早いつて。私みたいに大逃げしようとするならもつとスタミナ付けなきや。』

「う〜! すつごくレースしたいけど、ターボ偉いから我慢するぞ! セクさん! ターボ走ってくるから見てて! 目指せ一着だ〜!」

『はいよ、姿勢に気を付けながらね。ズレたら指摘するよ。』

「いや〜、ターボとセクさん仲よしだねえ。ネイチヤさん、嫉妬しそっだわ〜。」

「あはは、それは大変ですね。それで、ネイチヤさん、体の調子はどうですか?」

「も〜、トレーナー、心配しすぎだよ。調子もいいし、仕上がりは万全ですよ。……さ、私もターボに追いつかれないように頑張りますよかね。セクさ〜ん、私も見てもらっていい〜?」

『OK！ おいで、ネイチャ！』

「……彼女も無事に馴染めてるようですし、二人とも順調に強くなってますね。来てもらって正解でした。さて、彼女が見てくれているなら、私は別のことをしましょう。二人の出走レースの調整に、他選手の情報収集。セクさんがスピカもアメリカ合宿に呼んだみたいですから、スピカの方に連絡と、アメリカのトレセンに2チーム分の申請を出しとかないといけませんね。」

「さ、私も頑張りますか。」

PART 48

次の日

トレセン学園、食堂。朝のこの時間帯は、生徒たちの憩いの場であるはずのこの場所に食べ物でできた山が乱立し、食堂職員の悲鳴が響き渡る。もともとウマ娘自体、普通の人より多く食べる上に、朝練帰りの子も多いので朝はその悲鳴と山の数が多し。

だが、今日は一段とそれが多い気がする。

というか目の前に反対側の人物が見えないほどの料理を盛った、山を吸引しているのではないかという速度で平らげている奴がいる。ほら、運ばれてきた時には見えなかった奴の顔が既に見えた上に皿から料理が消えようとしている。

我が学園が誇る（誇らないでほしい）フードモンスターが一人、スペシャルウィークだ。ちなみにまだオグリキャップという上がいることを忘れてはならない。

もぐもぐもぐもぐ……ごくん。

「すいませーん、おかわりいただいてもいいですか？」

「はーい、お待ちどおさま。こっちの食器は持って行ってもいいかい？」

「はい、お願いしますー！」

オグリキャップもそうだが、大食いの二人の料理は食堂職員によつ

て運ばれてくる。

何でもオグリキャップの「トレーをもつて料理を運んでいるうちにお腹が減るのでいくらでも食べられる。」という発言を基に、わざわざ運ぶ手間と奴らがお腹を減らした分の料理を作るのとどっちがいい？ ということで運ばれるようになったそうさ。

まあ食堂職員の方々はとてもやさしい方々ばかりだから、行ったり来たりするのが可哀そうだと思ってそうしているのだろう。オグリの言葉は冗談だ、……そう思いたい。

もぐもぐもぐ、もぐもぐもぐ……

「……なあ、スペシャルウィーク。どれだけ食べるんだ？」

「きよほは、うつふあよりふおたふさんたふえます！」

「うん、ちゃんと飲み込んでから喋ろうな。」

今日はいつともより彼女の箸の進みが速い。食べる量が多くなっていく気がする。

スズカに頼まれてからスズカがいなくなってブレイキが利かなくなることを危惧し、食事量を直接確認した方がいいと思いつき、あるときはこうして食事を共にしているが、やっぱり量が多い。

調理室の方から悲鳴みたいなのも聞こえてきているし、ここは食べるのをやめさせるためにも会話で時間を稼いだ方がよからう。今のうちに休んでくれよ。

もぐもぐもぐ……ぐくん！

「はいー。今日からはもっと食べることになりました！ たくさん食べて強くなりますー！」

「……食べすぎると、また太って泣くはめになりそうだがいいのか？」

「大丈夫です！ 食べた分だけ走るので実質ゼロです！」

悪魔のような言葉が聞こえ、軽いめまいのせいで会話が途切れてしまった。

その際に、料理に手を付けようとしている。

マズい、時間をそれまで稼げていない。ここはなにか繋げねば……

「ま、まあ考えているのならいい。それで何か理由があるのか？ 急に増やしたように思えるが。」

「はい！ もっと強くなりたいので、もっとたくさん食べて、もっとたくさん走ればいいと思ってやってみることにしました！」

「そうか、それはいいことなんだが、何かあったのか？」

「……はい、実は初めてレースで負けちゃいまして……。それで、何か変えないと！ と思っただんです。」

負けた？ スペシャルウィークが負けたのか……。

他のことに気を取られ過ぎて、あまり気にしていなかったがこいつはかなり強い。私も負ける気はないが、立ち止まっていると抜かされそうな恐ろしさがある。そんなこいつが負けた相手というから、高等部の誰かだろうが……。

「……それで、スズカ先輩に泣きながら謝っているときに、怒られちゃいまして……。『泣いて私に謝ってる暇があったら練習しなさい』っ

て。それで目が覚めまして、まずは食事から始めてみたわけです。」

「そうか……。それで誰に負けたんだ？ お前に勝てそうなのは高等部の奴らぐらいだろうが。」

「セクさんって方です。」

「セク？」

そんな奴、学園にいたのだろうか？

「セクってどんな奴だ？」

「えっとですね、背が高くて赤髪で……」

……ん？ 赤髪？

「……一緒に走ってた時は逃げをしていました！ ん？ なあに……。あ、そうだ、ありがとう。セクレタリアトさんです！」

「セ、セクレタリアトお!!」

こ、こいつ今、セクレタリアトと言ったのか！ あの赤い英雄と戦ったというのか！

なんて羨ましい……。って！ 日本に来てるの！ ナンデ!?

来た理由は何なのか、何故誰にも知られずにトレセン学園に侵入出来てるのか？

彼女ほどのビッグネームだ。日本に来ているとしたら学園に情報が来ていないとおかしい。しかもスペシャルウィークは勘違いはするだろうが、嘘はつかないやつだ。

と、とにかくこれは私一人だけで対応してはいけない案件だ、会長

たちと話し合わなければ……

私は生徒会室に急いで移動するために残っていた食事をかき込み、勢いよく立ち上がる。

「スペシャルウィーク！」

「ひゃいー！」

「私は急用を思い出したのでこれで失礼する、今の話の内容は絶対に誰にも言わないように。あと食事はそれぐらいにしておけ、食べ過ぎだ。返事は？」

「りよ、了解しました、エアグルーヴ閣下！」

彼女の返事を聞き、足早に食堂を後にする。

解ってはいしたが、世界は私にやさしくないようだ。

「ん、スペシャルウィークか。おはよう。」

「あ、おはようございます。オグリキャップ先輩！先輩も朝ごはんですか？」

「うん、朝練帰りだからおなか減った。そこ、座ってもいいか？」

「はい！ ぜひどうぞ！」

その後、スペはエアグルーヴの言いつけをちゃんと守り、おかわりをしなかったが、オグリキャップとスペシャルウィークが同じ机に向かい合って座ったせいで、食堂は阿鼻叫喚の騒ぎになってしまったという。

「おく！ 今日も食べてますなあ！ スペ君！ そんなに食べたらずかに怒られちまうぞお！」

「あ！ ゴールドシップさん！ おはようございます！」

「うむ、おはようなのじゃ。んでスペ、ちよつと耳貸せよな。」

—————

「……なるほど、URAは発表せずにく方針なのですね、会長。」

「そうだ。と言つてもこの話が私のところに来たのもついさつきだな。上の方針としてはどこで漏れるかわからないので、学園にも伝える気はなかったようだ。」

「まあ彼女ほどのビッグネームですから、来日していることが知られると厄介な記者たちが大挙してやってきそうですしね。話は解るんですが……。」

「私も同じようなことを言ったのだが、上としてもアメリカから『国外にいることをばらしたくない』というお願いがあつたみたいでな、慎

重にせざるを得なかったそうさ。」

「なら、仕方ない……のですかね……？」

「といっても、彼女がスペシャルウィークと練習でもレースをしたことは想定外だったみたいでな。慌ててこちらでうまくまとめてほしい、と話が飛んできたというわけだ。」

「うまくまとめろって、どうすれば……。」

「彼女の方にも注意というか、正体をばらさないように、という連絡は行っているようだし、所属しているカノーパスでは口外しないようにしているようだから大丈夫だろう。」

「では、スピカの方は？」

「なぜかは知らないが、ゴールドシップの方から『口外しないように言っというたから大丈夫だぜ』と、今さっき連絡が来てな。しかもちようどグルーヴが食事を終えた後にスペシャルウィークに伝えたそうさ。」

「……何者なんですかね、アイツは。」

「まあ彼女のことだ。そういったもの、としてとらえておけば大丈夫だろう。……それで、話は変わるが、エアグルーヴ。セクレタリアトと勝負を試してみたくはないか？」

「急ですね。……したくない、と言えば嘘になります。」

「実はだな、彼女が帰国する時期は3月末の予定だそうさ。来日理由はカノーパスでの指導であり、彼女が走ったのはスペシャルウィーク

との一戦だけ。……わざわざ日本に来てもらったのに一度も同年代の私たちとレースをせずに帰るのは色々ともつたいなと思ってるね。帰国ギリギリになるが、3月末に模擬レースという形で勝負を挑もうと思う。」

「……なるほど。」

「あちらが受けてくれないと始まらない話ではあるが、場だけは整えたいと思う。表向きは高等部上位陣での技術交流会、裏ではセクレタリアトとの対戦。あまり人は呼べないが、あちらから許可をもらえた時に学園内で一般公開できるように撮影機器だけは準備しておこうと考えている。まだ企画段階で粗削りだがどうだろうか？」

「……いいですね。やりましょう。」

「同意してくれてありがとう。自分でもあまりよろしくないということとは解っているのだけだね。」

「戦ってみたいという欲求を抑えきれなかった、と。」

「そういうことだ。」

「まあ、私も同じ気持ちなので解ります。出走するメンバーは私が選びましょうか？」

「ああ、実力者たちを集めてくれ。彼女への連絡と会場の準備は私がやっておく。」

『へえ、面白そうじゃない。こっちから挑もうかと思ってたけど手間が省けたわね。』

「ん〜？ セクさん、何見てるの？」

『ターボか、挑戦状だよ。』

「お〜！ 挑戦状！ 見せて見せて！」

「ネイチャさん、聞いてもいいですかね？」

「ん、どしたのトレーナー？」

「いえ、すごく今更ですが、ターボさんって英語できましたっけ？ ネイチャさんができるのは知ってるんですけど……。」

「あー、私も疑問に思って聞いてみたんだけど、言葉の意味はよくわからないみたいだけど何となくで話してるみたいよ。雰囲気で解るんだって。」

「……エスパーか何かですかね？」

「ま、ターボだから。でいいんじゃない？ 私もそれで納得したし。」

「そういうものなんですかねえ？」

「そういうものなんですよ。」

PART 49

『私のためにわざわざレースを開いてくれるなんてありがたいがどうね、ルドルフ。』

『いや、礼には及ばないさ。私たちとしてもあなたと勝負ができることに感謝しているしな。しかしだが、芝の2000で、という指定だったが、それでよかったのか?』

『いいのいいの、こっちの主流は芝なんですよ。私はどっちでもできるし。……にしてもすごいメンバー集めたねえ、これは面白くなりそうだ。』

『ははは、まあ挑ませてもらうよ、セクレタリアト。』

『OK、かかっておいで。』

—————

職員の人からもらった参加者が記入された紙とゲート前で準備している先輩たちを見比べる。

観戦者か、競技者か、どちらの私の感情か分からないけど口角が上がるのを自制できない。

『出走メンバー』

セクレタリアト

シンボリルドルフ

エアグルーヴ

マルゼンスキー

ナリタブライアン

オグリキャップ
タマモクロス
スーパークリーク
ゴールドシップ
ヒシアマゾン
フジキセキ
ビワハヤヒデ
ウイニングチケット
ナリタタイシン
メジロライアン
メジロドーベル
マチカネフクキタル
アイネスフウジン

「うわ、すごい人ばかり。こんな夢のようなレースを見られるなんて私ら幸せだよ、ターボ！」

「……………」

「ん？ どうしたの、ターボ？」

「…………ターボ、今集中してるから。ごめんネイチャ。」

「あつ…、その、私こそごめん。黙っておくね。」

セクレタリアトの指導を受けていた、という理由で私たち、カノープスはこのレースの見学を許されていた。本当なら出走メンバーと撮影を行う職員しか見ることができなかったレースだけど、セクさんが私たちに見て欲しいといったらしく観戦出来ている。

学園の最高メンバーと言っても過言ではない人たちが参加する

レースということではしゃいでしまったが、ターボは違った。非常に集中してレースを見ようとしている。

セクさんからターボに対してある課題が出されていた。それは等速ストライドの習得。

私は体質的に全く向いてないらしく、それを取得する時間をかけるより基礎能力を上げて、最後の直線での加速力を上げた方がいいといわれ挑戦していなかったが、ターボには素質があつたようだ。

未だにうまくできてないみたいだけど、このレースでターボは何かをつかもうとしている。

そうだ、私も浮かれてる場合ではない。この観戦で何かつかまないと。

私の走り方から考えると注目すべき人は会長やオグリ先輩、ブライアン先輩あたりだろうか。

見て盗めるもの全部もらっていかなくちゃ。

—————

『んじや、ターボには私の必殺技を教えちゃおっかな。』

『おく！ 必殺技！ すごくカツコイイ！ どんなのどんなの！』

『その名も、”等速ストライド”！』

『コ、コンスタン……？』

『あ、さすがに伝わらんか。南坂、私も日本訳わからんから教えたつて。』

「ターボさん、”等速ストライド”ですよ。高いスタミナと強力な足のバネ、それと神がかった歩幅の調整によって生み出された彼女だけの技術です。」

「お〜！　なんかすごそう！　……でも難しそうだし、ターボできるかな？」

『大丈夫、大丈夫。このセクさんが教えるんだよ！　それにターボが出来そうになかったら私も教えないって！』

「そうか……な。うん、ターボ頑張ってみる！」

『それで、ターボに目指してほしいのはあなただけのストライド技術。私の技術は言ってしまうえば私用に改良してしまったもの。あなたの糧にはなるだろうけど、最適にはならない。ターボのための、ターボだけのストライド。さしずめターボストライドかな？　時間もかかるし難易度も高い、けど完成すればあなたは爆発的に強くなれる。どう、やってみる？』

「ターボの……、ターボのためだけのストライド。ターボストライド。」

『そ、とりあえずは私が等速ストライドを生み出した状態、その一歩手前まで習得する。そこからは自分で調整。途中までは私も手伝えることはあると思うけど、国から早く帰って来いって言われてるから長居はできないし、最後の調整は自分でしかできない領域になってく

る。』

「……ターボやってみる！ ターボもみんなに勝ちたい！」

『いい返事ね。じゃとりあえず、やってみようか、まずは私がどういった形で走ってるかなんだけど……。』

ターボはまだ、セクさんに言われた一歩手前。それが全然できてない。

とつても難しかった。セクさんやトレーナーにそんなに簡単にできるもんじゃないといわれたけど悔しい。

セクさんはこのレースのあとにアメリカに帰っちゃう。

夏の合宿でアメリカに行くまで会えない。

当分教えてもらうことはできない。

ならこのレースを、目に焼き付けるんだ！

—————

今回のレースを開催した理由、単に私が世界最強に対してどこまで通用するのか、というのが気になって挑んだ、そのことも確かにある。強い相手と競い合いたいという気持ちは嘘ではないが、もう一つの理由に日本の競技レベルを引き上げたいというのがある。

このレースに参加してくれた者たちが、世界に自身がどれだけ通用するのかを肌で感じ、さらに成長してもらいたい、このレースを見た者に世界に挑もうとする気概を持ってもらいたい。そう思っている。

なぜ、そのようなことをしようとしているかというと、

私たち、日本のウマ娘が世界と比べ弱いと思われているからだ。

国内のレベルは確かに低くはないが、日本のウマ娘が海外に出たとき、その勝率は大きく下がる。確かに芝やダートの違い、気候の違いなども理由として上がるだろう。確かにそれは大きな要因だ。

しかし、ではなぜ海外からやってきたウマ娘たちに国内のレースで負けるのか。慣れ親しんだ土地を離れてわざわざ遠征してきた彼女たちが格段に強いことは解る。しかし、それにしても、だ。

日本が世界に誇るウマ娘の祭典、ジャパンカップ。世界中から強者を集めて行うため、「世界一のレース」「ウマ娘のオリンピック」などともいわれるこのレース。日本で開催されており、私たちに有利なはずなのに開催されてから勝てたのは私の一勝だけ。他のウマ娘たちが弱いとは言わない、むしろ私と並び、競い合ってくれるよきライバルたちだ。

三冠ウマ娘になり調子に乗っていた私を叩きつぶしたあのジャパンカップで負け、その再戦に燃えていた私が勝った次の年のジャパンカップ。勝利を収めることはできたが、その年は運よく海外から有力ウマ娘がやってこなかった年であり、私としても満足のいくものではなかった。

私がまだ学園に入ってから間もなかったころの第一回ジャパンカップ、勝利したのはアメリカからやってきた成績が目立たないウマ娘だった。あの日からずっと、私たちは「日本のウマ娘は永遠に世界に勝てないのではないか。」と言われ続けてきた。

言い返したいんだ、私たちは強いって！

私たちは十分世界に通用するんだって！

このレースは彼女にとっては単なる力比べなのだろうが、私たちは違う。

アメリカ最強に対して、日本がどこまで戦うことができるか、食らいつくことができるか。

もし、及ばなかったとしてもまだ次がある。私たちの世代がダメだったとしても、スペシャルウィークやテイオーたち、次の世代がある。

「会長、大丈夫か？　また何か考えているようだが。」

「……オグリキャップか、いやすまない。私としたことが余計なことを考えていたようだ。ありがとう。」

そうだ、今は今後のことを考えている場合ではなかった。

目の前の勝負に集中しなければいけない。

相手は挑んだことがないような高い壁、雑念があれば超えられるものも超えられなくなる。

意識を切り替える、今の私は「皇帝」でも「会長」でもない。ただのシンボルドルフ、ただの「挑戦者」だ。

さあゲートに向かおう。

目指すのはただ、ゴールのみ。

—————

全員がゲートに収まる。

私はいつも通り大逃げする。その戦法に変わりはないが、同時にターボに一つの完成形を見せようと思っている。

さ、今日もやりますか。

ゲートが開く。今回は最初から全力だ。

どこまでついてこれるかか、見せてよね。ルドルフ。

—————

ゲートが開いた瞬間、前に赤髪が既にある。

やはり、最強の名は伊達ではないようだ。スタートからして違う。

私は彼女についていくためにも先行策を選び、中央に位置するように動く。

等速ストライドと言ったか。

中距離の2000mだが、ピッチがスプリンターのそれだ。

普通なら掛かっている、そう表現するのだろうか彼女のスタミナには関係ないのだろう。

これについていくとスタミナを大幅に削られて最後の直線辺りでスタミナ切れを起こしてしまうのだろう。

作戦としてはついていかず、スタミナ切れを起こすまで待つのが最

善だが、相手はセクレタリアト。

彼女の背中を見ていると、あの時の敗戦を思い出す。

第4回ジャパンカップ。

先頭にいたのはイギリスからやってきたベッドタイムだった。

私とカツラギエース先輩がどんなに前に行こうとしても抜かせなかった。

あの時の悔しさが、調子に乗っていた自分への怒りが、湧き上がってくる。

セクレタリアトの背中と、あの時のベッドタイムとの背中が重なる。

なぜか、彼女の背中に嘲笑われている気がする。お前はその程度なんだな、と。

解っている、自分の不甲斐なさがそう思わせていると。

ああ、やってやる。ついてやってやる。

普段より早く、足を使い始める。

位置は残り1000mといったところ、前にいたマルゼンやフウジンを抜かし、前に行く。

私は、シンボリルドルフだ！ 負けてたまるものか！

—————

「すっぴん……。」

思わず口にしてしまう。

レース進行はセクさんの圧勝になる、そう思っていた。

でも、でも違った。

レース中盤から会長が急激な追い込みを見せて、それにつられるように後方に位置していたオグリ先輩やブライアン先輩たちが追いついてきた。なんだか、すごい執念みたいなのを感じた。すごかった。

結果としては一着セクレタリアト、4バ身ほど離れて二着シンボリルドルフ、クビ差で三着オグリキャップ先輩だったけど会長の走りは、うまく言葉にできないけど、一着になるよりもすごいものがあった。

ほんとにすごかった。……うん、私が目指すべきもの。解った気がする。

私もあんなふうに、会長みたいに走ってみたい。

—————

『いや、私があれほど追い込まれるとは。こりや鍛えなおさないといけないね。』

『……あなたにそこまで言ってもらえるとは。光栄だな。』

『いや、ね。正直日本はそこまでかな？　と行ってたけど私が甘かったよ。ごめんね。』

『……そうか。それでなんだが……。』

『うん、このレースの公開のことですよ。いいよ、どんどんしちやつて。こんなにもいいレースをしてもらったんだもの、広めなきや損ですよ。』

『いいのか？ てつきり公開は控えるように、と言われると思っていたのだが。』

『んー、いいのいいの。どうせ、いつかバレるし、婆さんから怒られるのは確定してるからいいでしょ。』

『そういうものなのか？』

『そういうもん、そういうもん。ま、いいレースのお礼つてことで。』

「セクさんくく！」

『あ、ターボが呼んでる、ちよつと行ってくるね。また勝負しようぜ、ルドルフ。』

「会長、手を見せてください。」

「グローヴか。どうした救急箱なんて持って。」

「その、血が……。」

そういわれて、自身の手を見る。どうやら強く握りしめすぎたせいで血が出てしまったようだ。

……私もまだまだ、だな。

「ああ、すまない。気が付かなかったよ。」

「手当てをしますので、動かないでくださいね。」

「すまないな、頼む。」

届かなかったが、これで終わりということではない。
今回は負けたが、次は勝たせてもらうぞ。

PART50

ウララさんも地方遠征ばかりでほとんど一人部屋のようになってしまっている。

そんな一人ぼっちの部屋で、トレーナーさんから頂いたレース雑誌をペラペラとめくりながら眺める。

『怪鳥エルコンドルパサー、快勝！』

『グラスワンダー、皐月賞への第一歩！』

『セイウンスカイ、トライアル無事勝利、次は皐月だ！』

皆さんが出走するのは知っていたが、順調に勝利している。

私もトライアルではないが無事重賞に勝利し、皐月賞への出走はできるだろう、彼女たちと競い合えるのが楽しみだ。そんなことを思いながらページをめくる。

「有力ウマ娘予想、へえ。こんなものもあるのね。……あ、私も載っている。」

今回の有力ウマ娘ということで見開きを6分割されて、私たちの名前が載っている。

スペシャルウィーク、エルコンドルパサー、グラスワンダー、セイウンスカイ、トウカイテイオー、そして私。

世間ではスペさんはホープフルS以降出走していないため注目度が幾分か下がり、雑誌では私たちは均等にスペースを分けられているが、私たち、挑む側からすればスペさん対私たち、という構図だろう。

ずっと貴方に負けている。そんな気持ちでいっぱいだった。

そんな私を、変えてやる。

絶対に勝ってやる。

—————

ほいほい皆様おはようございます、今日もスペちゃんとういニングロードを走っていきましようね。

現在は3月後半まで時間が進みまして、皐月賞間近となっております。

前回のセクさんとの敗戦が1月の後半ぐらいだったので2か月分もカットしたということですね。

育成状況としてはスキル【逢魔時】をアクティブにしましてスピード練習を重点的にしようと思ってたんですが、何故かスペちゃんの食事が徐々に上昇してしまい、「太り気味」の対処に追われたのでそこまで成長できてません。悲しいなあ……

▽スピード：C

スタミナ：B

パワー：B+

根性：C+

賢さ：C

▽スキル

【シューティングスター】Lv. 2

【汝、皇帝の神威を見よ】Lv. 2

【空駆ける英雄】Lv. 1

【不沈艦、抜錨オツ！】Lv. 1

【ゲートの支配者】

【食いしん坊】

【逢魔時】

（【未脚】）

ま、結構見れるものにはなってきたので大丈夫でしょう。他の子たちがどれほどなのか把握できてませんが……。それとこの【未脚】で

すが、セクレタリアトとのレース後に発現しました。時間がなくてア
クティブにすることはできませんでしたが、秋までには取っておきた
いですね。

あ、そういえば他キャラのステータスの見方について言ってます
でしたね。

こちらのゲームではアプリ版と同じように、レース直前のパドック
でのみ他キャラのステータスを確認することができます。前回の
ホープフルでも見ることはできましたが、ライバル枠がいなかったの
で確認しませんでした。

次回の皐月賞ではライバル枠がいっぱい出てくるでしょうし、ちや
んと確認しますのであしからず。

んで、今スペちゃんが何をしているのかというところ……、

レース前のインタビューを受けてます。アニメ版でもあったあれ
ですね、レースの枠番なんかを抽選した後に勝負服を着てインタ
ビュー受けてます。やっぱり、スペちゃんは人気みたいで記者の方々
の熱意が違いますねえ！

ちなみに史実と同じ、8枠18番の大外でした。ま、仕方ないね。

あ、スペちゃん。返答はミーの考えたものをお願いね。

▽「スペシャルウィークさん！ クラシック三冠の第一歩となる大
事なレースですが、どのような意気込みをもっと挑まれますか？」

あいあい、そうゆうのね。まあいつも通り頑張って勝利しまさあ！

強い人ばかりだけど頑張りますっせ！

「はい、出走なさる方は強い方ばかりですが、いつも通りの実力を出せ
るように頑張りたいです。」

「今回のレースで一番注目している選手はどなたでしょうか？」

うん、ここは出走する皆さんということにしておきましょうかね。あ、スペちゃんが言いたい子のことがあったらそれでもいいよ。

コクコク

「今回のレースでは同じクラスのグラスワンダーさん、エルコンドルパサーさん、キングヘイローさん、セイウンスカイさんや、同じスピカのトウカイテイオーさんも出走します。皆さん強い方ばかりですので油断できない、そう思います。」

「スペシャルウィークさん、こちらもよろしいでしょうか。……では、前回のホープフルSの勝負服と違い、背中に星を付けていらっしやいますが、どのような意味でしょうか？」

ん、これは普通に言っていていいですかね。どうぞ、スペちゃん。

「……私が誰かの星になりたいと思って付けることにしました。ウマ娘としての大一番、GIレースで勝利して、誰かの星になれたときは、自分が星で在り続けられるよう、誰かの希望で在り続けられるように、応援してくださいった方にも、私と競い合ってくださいった方にも、光り続けられる星で在れるように。そう思って付けることにしました。……すいません、纏まってない上に長くなってしまっ……。」

「……なるほど、そうなのですな。」

「まあ、私を見てくれてる人は星をたくさん増やしてほしいみたいなので、多分大舞台のレースで勝つとまた背中に星が増えると思います。どれだけ私が星を背負えるか、ですね！」

うん、満点ですね！ いい回答ができたスペちゃんをほめてあげま

しょう！ ん、そろそろインタビューの時間が終わりそうですね。
他の方のインタビューもあるみたいで時間も押していますし、お立ち
台から降りて次の方に変わりますよね。

—————

「おう、スペちゃんお疲れ様〜！ にしても背中の星にそんな意味が
あつたとは！」

「あはは〜、なんか恥ずかしいですね。」

「にしても、スペちゃん。すつごく緊張してたね〜。ガチガチですつ
ごく硬かったじゃん。全部カタカナで話してるかと思つたよ！ 前
回のホープフルでもそうだったし、実はスペちゃんインタビュー苦手
だなあ〜？」

「もう、テイオーさん。やめてくださいよ〜。」

「おうい、テイオー。そろそろお前の番だぞ。準備しとけよ〜。」

「あ〜い、了解〜。んじや、スペちゃん。このテイオー様のインタ
ビューを見て勉強するといいいよ〜！」

「はい、頑張ってくださいね、テイオーさん〜！」

「……なあ、スぺ。」見てくれてる人”って誰だ？」

「うーん、家族みたいな人っていうか、なんていえばいいんだろ。でもとつても良くしてくれている人です！」

「そうか、まあなんだ。もしよかったら今度会えるか聞いてくれ。」

「……………はい！ わかりました。聞いておきますね。」

スぺの話しぶりからして、かなり長い付き合いの人なんだろう。スぺがチーム練習後に追加で練習してるのは聞いていたし、多分その人が指導していたんだろうな。

その人に師事しないでわざわざスピカに参加してるのは……、もしかして相手方は中央の免許を持ってない人なのか？ スぺの地元は北海道と聞くと現地のトレーナーなのかもしれん。

とにかくスぺがオーバークにならないように調整する必要があるだろうし、すでにトレーニングメニューが決まっているのならばこちらでも設備の使用申請とかで、できることはあるかもしれない。

まあ顔合わせて話してみないことにはな。

(いつも一緒にいるのに、ね。)

PART 5 1

北海道 日高

「写真を置いて、っと。おし、これで大丈夫かな。」

さ、二人ともスぺの大舞台が始まるよ。

一緒に見ようか。

—————

皐月賞。

中山の芝、2000の旅路。

クラシックの初めにして、最も速いウマ娘が勝者と呼ばれるもの。

様々な者たちの思惑をはらみ、

「大丈夫ですか？ ネイチャさん。」

「うん、いける。行ってくるねトレーナー、ターボ！」

「ネイチャなら絶対に勝てるぞ！」

「セイちゃん、作戦の方は頭に入ってますか？」

「うん、ばっちり。掴んでくるよ。」

「行つてきな、お嬢。」

「……はい！」

「勝ちに行け。」

「はい、もちろんです。」

「エルが世界最強だつてこと、証明してやりマース！」

「おっしや、スピカ。行くぞー！」

「おー！」

今、始まる。

—————

「「「スペちゃん(さん)」」」

「あれ、みんな。どうしたの？」

「せっかくですから宣戦布告でもしようかと思ひまして。」

「そゆこと、負けないよ。」

「クラシック三冠路線の大事な初戦、勝負ですよ。スペちゃん。」

「いくらスペちゃんが強くても、ワタシが勝ちマース！」

「……うん！ 私も負けないよ。勝負だね！」

「ネイチャはいいの、何か話さなくて？」

「私？ いやいいよ。彼女とは接点ないしね。それこそテイオーは言

わなくていいの?」

「ボクはいつも言ってるようなもんだしね。大丈夫だよ。」

「そういうもんですか。」

(まあ私としてはあそこにいる人たちに注目されることは避けておきたいし、話しかけない方がベストだよね。)

—————

『さあクラシック初戦の大一番！ 皐月賞が始まります!』

『最も速いウマ娘が勝つといわれていますが、今回はどのようなレースになるとお考えですか?』

『今年は今までにない豊作の年、と言っていていいでしょう。ジュニア級覇者のスペシャルウィークを始めとして、無敗中のウマ娘が合わせて7人もいます。トライアルで圧勝したエルコンドルパサー、グラスワインダー、セイウンスカイもそうですが、キングヘイローやトウカイテイオーも注目したいところですね。今回の人気順も出てはいますが、現在上げたウマ娘たちは非常に僅差ですし、そこまで参考になりませんね。』

『なるほど、大変予想が難しいレースということですね。ちなみに一番人気はスペシャルウィーク、二番人気にエルコンドルパサー、三番人気にトウカイテイオーとなっております。』

(ふくむ、ホープフルSで勝ったおかげが一番人気ですね。ま、人気なんてスペちゃんにはそこまで関係ないですし気にせんでええでしょ

う。さ、久しぶりの公式戦、頑張りましたよ、スペちゃん！)

！　コクコク。

(見た感じライバル枠の皆さんは得意ステータスがD＋かC、それ以外がDぐらいですかね。クラシック初期ではかなり強い方ですが、事故が起こらない限り大丈夫でしょう。それで今回大外の8枠18番です。ですから外からぶち抜いていきましょう。壁ができて前に行けない、なんてないように外を走ることを意識していきましょう。)

……………？

(そういうえば今回から【ゲートの支配者】解禁ですけど使います？　ですか。うーんどうでしょう？　コメ欄の方々から称号達成のためにもダービーで使った方がいい。つてご意見も頂いてましたし、そうしますか？)

……………コク。

(あー、セクさんにプレッシャー返しされたからちよつと使うのが怖くなってる感じですか。確かにそのこと忘れてましたね。ではこのレース後にその感覚をリセットすることを目標に入れておきましょう。んじや、今日は普通に走りましょうか。……………そういうえば師匠以外の同じクラスの子と公式レースで走るのは初めてですかね。楽しんでいきましょう！)

「はー。」

『さあ各ウマ娘、ゲートに収まりました。』

(……あれ、プレッシャーがこない。トレーナーの話ならもう使ってもいい、って話なんだけど……。もしかしてまだ温存してるのかな？
うん、なら好都合かな、まだアレを気にせずスタートする自信はないし。)

『いま、一斉にスタートしました。いいスタートを切れたのはセイウンスカイといったところか。』

(よし、うまくできた！ わざわざゲートに縛られて練習したかいがあったよ。このままペースを乱さずに先頭を維持しなきゃ！)

(セイさんは逃げ、エルさんとテイオーさんは先行。グラスさん、スペさんは速度を落としてるから差し。私は言われたとおりにグラスさんとスペさんの前に位置できるように走る。壁になりつつ後半に位置が悪くて加速できない、なんてことがないようにしないと。)

『先頭に行くのは依然としてセイウンスカイ、3、4バ身後ろにエルコンドルパサー、トウカイテイオーが来ています。また後方集団にはキングヘイロー、グラスワンダー、スペシャルウィークが来ている。』

(うくん、思いっきり真後ろに付かれていますね。気にせず走るのが最適デスがやっぱり気になります。)

(ゴメンね、エルコンドルパサー。先行策で勝つために、最後まで脚を残さないよね。)

(スペちゃんは……後ろですか。外側につかれていますし、ちよつとマズいかもかもしれませんね。前もキングさんがいますし、これは無理やりコーナーで抜かす必要があるかもしれません。)

『レース進行はセイウンスカイが飛ばしてしましてかなりのハイペースといったところ。さあ先頭がちょうど折り返し地点につきまして、先頭は依然としてセイウンスカイ。』

(ん、にやび。そろそろ中盤ですね。ちよつくらペース上げてきましよう、スペちゃん。行きますよ。)

「はい、スペシャルウィーク、行きます！」

▽【不沈艦、抜錨オツ！】を発動！

▽【逢魔時】を発動！

『おっと、スペシャルウィーク！ 折り返し地点から爆発的な加速を始めたあ！』

(ツ！ スペちゃん、思ったより仕掛けるのが早い！ ……これは無理やりにもついてかないと置いてかれる！ ハイペースなせいで脚を残せるかわからないけど、ついて行かなければ！)

『スペシャルウィーク、キングヘイローを抜いた！ グラスワンダーもそれに続くツ！』

(スペさんだけでなく、グラスさんにまで！ どうする？ 作戦では最終直線まで脚をためる予定だけど、本当にこれで勝てるのか？ 最後の直線だけで足りるのか？)

『キングヘイローも続いて加速していきます！』

『かなりのハイペース、そこに加速です。スタミナが最後まで残るか不安ですね。』

(……………ここだ。)

『スペシャルウィーク、徐々に速度を上げて先頭を抜かそうとします。おっとここで先頭のセイウンスカイが最終コーナーに入ろうとしているところ！』

(後ろから来てますネ。セイちゃんが思いつきり飛ばしてるせいでそこまでスタミナが残ってませんが、抜かされるわけには！)

(スペちゃんが上がってきてる、そろそろボクも仕掛けないと……。前のレースで編み出した技、使うなら直線で。真後ろに居続けても位置が悪いし、前に出ないと！)

『ここでトウカイトイオーがエルコンドルパサーを抜いたあ！』

「ッ！」

『スペシャルウィーク、スペシャルウィークここでさらに上がってきた』

たあ！ 暴力的な加速う！ 彼女もエルコンドルパサーを抜いてトウカイテイオーと並ぶ、並ばない！ 並ばない！』

（まだ、まだ直線で追い返せる、焦るな、焦るな！ そこで仕掛けるんだ！）

（テイオーちゃんて終盤3人目ですかね？ んじゃ会長のスキル、行っちゃいましょう！ あとついでに固有の方も行っちゃいましょうか。）

∨【汝、皇帝の神威を見よ】を発動！

∨【シユートイングスター】を発動！

『スペシャルウィーク、さらに後続を突き放し先頭のセイウンスカイに迫る！』

（マズい、予想よりもかなり速い！ スペちゃん対策で無理やりハイペースにしたせいでもうほとんど足が…。）

『スペシャルウィーク先頭に躍り出たあ！ そして加速はいまだ止まらず！』

（スペちゃん、ギア上げますよ。）

…コク。

∨【空駆ける英雄】を発動！

『スペシャルウィーク独走状態、陰すら踏ませません！ ああっと加速だあ！』

『後ろからは何にも来ない！ 後ろからは何にも来ない！ 後ろからは何にも来ない！』

—————

(足を回せ！ もつと動け！ もつと動け！ ボクはまだまだいけるんだ！ 大差負けなんてやらせるもんか！)

『ここでエルコンドルパサー、トウカイテイオーも加速し始めました！ 2番手はいつたい誰の手に！』

(負けない負けない負けない！)

(脚はまだ残ってる！ せめてこの中で勝利を！)

『スペシャルウィークに連れられたグラスワンダー、キングヘイローも2番手争いに加わっている！』

(逃げろ、逃げるんだ！ 動け、私の足！)

『セイウンスカイ、必死に逃げる！ このまま逃げ切れるのか！』

(……うまくいった！ バレなかった！ これなら、これだけ脚を残せば！ 十分勝負できる！)

『……………！ 上がってきた！ 上がってきた！ ナイスネイチャが上がってきて、2番手争いに加わる！ いつの間にか上がってきたのか！』

「……………え。」

—————

『スペシャルウィーク、今独走でゴールイン！ クラシック三冠のはじめを華々しい大差勝ちで収めました！』

『……………大きく遅れまして2着にトウカイテイオー、3着にナイスネイチャ。 セイウンスカイ、グラスワンダー、キングヘイローはまとまってゴールイン、写真判定となります。』

『……………今、掲示板に出ました！ 4着にグラスワンダー、5着にキングヘイローとなりました！』

「スピカでワンツーフイニツシユじゃん。桜花賞に続いてやってんねえ！」

「二人とも、おめでどう。お疲れ様。」

「トレーナーさん。ありがとうございます…。」

「お、スぺく？ 勝った時はもつと無理やりにも喜んでぞく！」

「ちよ！ ゴールドシップさん！ 持ち上げないでくださいい〜！」

「お疲れ様でした、テイオーさん。」

「マツクイーン。……………クソツ！ 次こそ、次こそ勝って見せるから！」

「ええ、私もお手伝いします。あの技、もつと極めましょう。」

「ネイチャ〜！ 3着だったけどすごかったぞ〜！」

「……………ありがとう、ターボ。出来ることは全部やったし、運もよかった。

……………でもやつぱ悔しいや。」

「ネイチャさん、それをうまくバネにしましょう。あなたならやれます。」

「うん、……………ありがとう。トレーナー。」

「あ！ そうだ！ セクさんもテレビ電話で一緒に見てたんだよ！
それでねそれでね……………」

「入賞おめつとさん、お嬢。」

「トレーナーさん。私は……………、もうしわ」

「謝んなや。」

「ですが、私は！」

「お嬢、誰にでも負けはある。だがな、俺に謝んのは頂けん。お前のことだから俺の経歴に傷がつく、なんて思ってたんだろうが、そんなもんどうでもいい。勝てなかったのは俺の責任だ。」

「しかし……。」

「気にすんな、それよりも次のこと考えるぞ。ダービーまで時間が無い。次こそは、だろ。」

「お疲れ様、セイちゃん。」

「……うん。」

「何かつかめましたか？」

「……うん、でも悔しい。」

「そうだね。今は、思いつきり泣いていいよ。」

「うん、ありがと。」

「次はもつと練習して、作戦考えて、今回得たものを絶対に生かしましょうね。」

「お疲れ様だ、グラス。いい走りだった。」

「……ありがとうございます。」

「これで終わりではない、次につながる負けだ。……私もできる限りのことをやろう。」

「……はい。私も、もつと頑張ります。」

「それでエルはどこに？」

「さつき、顔を洗いに行くと言っていました。」

「そうか、すまないが待っていてくれるか。行ってくる。」

—————

逃げるように手洗いに駆け込む。

洗面台に両手をかけ、倒れそうになるのを防ぐ。

座ってしまえば立てないから、倒れてしまえばもう動けないから。

体重を前に預け、無理やり足を立たせ続ける。

このままじやいけない、どうにかして切り替えないと。顔を洗うためにマスクを外す。

マスクがあっても、マスクがなくても変わらない私。

溢れそうになる何かを止めるために無理やり顔を洗う。

手に貯めた水を顔に強く触れさせ、そのままにする。

手を顔に触れさせたまま。

手で押さえておかないと何か出てきてしまうような気がして無理やり抑える。

足音が聞こえた。

急いで外していたマスクをつけなおす。

たぶん、おハナさんだろう。

出来るだけ鏡を見ないようにその場から立ち去る。

「ごめんなさい、トレーナー！ ちょっと目にゴミが入ってしまった。洗いに行ってみました！」

—————

「勝つって、難しいね。今まではただ、走ることが楽しかったけど、みんないろいろなものを背負って走ってるんだね。……勝てたとき、後ろを振り向いたらみんな、悔しそうだった、苦しそうだった。」

(……私に彼女たちの気持ちはわからないけど、スぺちゃんがそんな

顔をするのは駄目だよ。スペちゃんはみんなに勝ったから、このレースで走ったみんなの気持ちを背負う必要が出てくるんだよ。それはとっても大変でしんどいことだけど、とっても大事なこと。」

「そうだよね。それで私は星を背負うんだ。」

（星はキラキラしてまぶしいもの。スペちゃんはみんなのためにも、背負わせてもらってるものをきれいに見せるためにも、思いつきり笑わないとね。）

「うん、私。頑張る。ウイニングライブ、思いつきり笑顔で頑張るよ。」

（いつてらっしやい、スペちゃん。頑張つてね。）

PART 52

『……では、今年の皐月賞解説に移っていきましょう。

まずはスタート部分からですね。

クラシックに入ったばかりの時期ですのでゲート関連がうまくいかないことも多い皐月賞ですが、今年は目立ったミスをする子も少なく、そろってよいスタートをとれていると言えます。

なかでもこの後、ハイペースでレースを引つ張ることになるセイウンスカイがよいスタートを切れていると言えますね。映像でもわかるように、頭一つ抜けていいスタートが切れています。逃げ策だとスタートを失敗して先行寄りの位置になってしまい、後々大変になる、ということもあり得たでしょうからこれはいいポイントですね。

その後、折り返し地点まではセイウンスカイがかなりのハイペースでレースを牽引、後続のウマ娘たちには苦しい展開でした。彼女の考えとしては、今レースには差し策、後半戦で脚を残して戦う子たちが多いことも考えてのものでしょうが、作戦は正しくとも結果が振るわなかったということになってしまいました。

また、この先頭集団の中ごろにいるトウカイテイオーですが、うまくエルコンドルパサーの後ろに付くことでスタミナを温存していますね。エルコンドルパサーもそれに気が付いているようでしたが、動じず自分の走りをしています。ここで変に動いてしまうとペースを崩したり、位置が悪くなってしまうこともありますのでよい選択でした。

折り返し地点、ここから今レースの勝者、スペシャルウィークが動

き始めます。今回、大外ということでもかなり外側に位置しながら走っていました。その不利を気にせず、逆に誰もいない外側を利用することです。いと順位を上げて行っています。

また、ここでグラスワンダー、キングヘイローもそれに続いて速度を上げて行っていますね。ここで速度を上げていないと後半で埋もれていた可能性もあったでしょうから正しくはありません。ですが、先ほども述べたようにかなりのハイペースで進んでいたレースでしたのでスタミナの温存が難しくなっていることもあり、難しい選択だったといえるでしょう。

そして、ここ。三着になったナイスネイチャの動きを見てみましょう。キングヘイロー、グラスワンダーの後ろにうまく隠れながらゆつくりと加速し始めているのが解ります。前評判でそこまで人気が高くなかった彼女ですが、注目されなかったことを逆手に取り、残り200m付近までその存在感を消していたのが勝因と上げられるでしょう。

後半戦に移ると、スペシャルウィークに抜かされた有力ウマ娘達が置いていかれないように加速していく、といったレース運びになります。トウカイテイオー、エルコンドルパサーですね。

スペシャルウィークはハイペースを何のその、最後まで独走状態でゴールイン。

その後はかなりの混戦となっています。

トウカイテイオー、グラスワンダー、キングヘイロー、セイウンスカイ、エルコンドルパサーが塊となってゴールに向かい、その少し後ろにナイスネイチャ。末脚でトウカイテイオーが何とかバ群を振り払い、二着。ナイスネイチャは塊の間をうまく抜けて、うまくスタミナ管理をし三着。ここでグラスワンダー、キングヘイロー、セイウンスカイがなだれ込んで、エルコンドルパサーがほんの少し遅れてゴー

ルインとなっています。

前評判にてかなり人気に分かれ、珍しいレースとなってしまいました。結果としてはスペシャルウィークの圧勝という形に終わりました。今後、スペシャルウィークの独走となるか、他のウマ娘たちが食らいつくのか。非常に楽しみな一年になりそうです。

では、次のニュースです。URAがタイムオーバーの制度を見直す。と昨日公式に発表しました。理由としましてはレコードタイムの大幅な短縮を行ったサイレンススズカ、スペシャルウィークやハ……』

息抜きのためにテレビをつけていたが思ったより長く見ていたようだ。

電源を落とし、時計を確認しながら並べていた資料をまとめ始める。

エルコンドルパサーとグラスワンダーだが、今のところは何事もなくダービーに向けた調整をしているように見える。いや見せているというべきか。今のところはルドルフやグルーヴに面倒を見てもらいながら、何とか精神的負担を減らせるようにやってみてはいるが、そこまで結果はよろしくない。

何をしても彼女のことを考えてしまうのだろう。本来なら何かと気分転換をさせるのだが、目を離れたすきに何か爆発してしまう、休みなのにオーバーワークになりケガを誘発する、などの危険があるので得策とはいえない。こちらで何とか管理をしているがどこまで持たせることができるか……

なんとしても次回のダービーでは彼女との差を縮めさせないとい

けない。自分が少しでも前に進んでいる、差が縮まっっていると想わなければ折れてしまう可能性も出てくる。どうにかして手を考えなければならぬ。

……：そいえば学園の方から動画データが送られてきていたな。確か”例”のレースだと思いが、どうしようか。

あの高い壁にぶつかっていく、というルドルフたちの思いは彼女たちに響くだろうか？ このデータは高等部のスターたちの技術を盗める貴重なデータでもあるし、二人に見せてみるとするか。この動画の研究という体で、休ませることもできるだろう。

—————

ハローエブリワン！ 投稿者だぞ！ 今日の実況始めていくゾイ！

今回は無事臯月賞に勝利いたしましたして、三冠ロードの第一歩を歩み始めていたところですね。

いや〜スペちゃん、お疲れ様でした、それとおめでとうございます。見事な大差勝ちでしたねえ！

ですが、今後は全く安心できません。ここからどんどんライバルちゃんたちが強くなってきますので注意が必要ですねえ！ ……に、してもライバル枠でもないテイオーちゃんやネイちゃんやんが掲示板に入ってきたのはどうしてじゃろ？ もしかして裏でなんかヤバエイ！ イベントでも回収しちやいました？

ま、まあ、スペちゃんとわたくしは最、強、ですからあ〜（イキリ紫まな板）

裏で回収しちやったガバもパワーでぶっ壊してやりますタイー！

と、いうことで、裏で起きてしまったイベントは確認しようにも方

法がありませんし、その断片を知るために学園中を走り回るのも時間がもつたないので早速練習だあ！

スペちゃんにはとにかく速度が足りない！　なのでスピード練習していきましようねえ。

〽「お！　こんなところにいたのか、スペ！」

お、ゴルシちゃんじゃん。どうしたん？　今からスピード練習しにちよつくら走りに行こうと思つてたんですが。

〽「にやるにやる。練習もいいけどゴルシちゃんの雄姿もちゃんと見ないと駄目だぜ。今日はゴルシちゃんが前出てたレースの鑑賞会だ！　他の奴らはもう部室に来てるし早く来るんだぜ！　ん？　それともゴルシワープで移動するか？　多分　いしの　なかにいる状態になると思うけど。」

それなんのトラップですかい!?　ま、まあ何かのイベントでしょうし、ゴルシちゃんのスキルの経験値も頂けるみたいでしょうからちゃんと行つときですか。

〽移動中……

部室に着きましたね。お、皆さんお揃いで、お待たせいたしました。

〽「よし、全員そろつたな。ゴルシの参加したレースを見るってことで集まってもらつたが、まあ見てもらった方が早いだろ。」

視聴後☆

……………なあにこれえ？

「トレーナー！ おみあげ買ってきたよ！」

「おー、たくさん買ったね。」

「うん！ みんな落ち込んでたから、いっぱいあげるの！」

「そっか、ウララは偉いなあ。……そうだ、これから東京まで時間かかるし、この動画を見といてくれる？」

「いいよ〜！ あ！ レースの動画だ！ 会長さんたちが走ってる！」

PART 53

ぷいぷい！ みなさまこんにち大明神。投稿者です。

前回は衝撃的なビデオを見せられましたね、うん。スペちゃんは”すごい!”、”カッコイイ” ”私もあんな風に走ってみたい!” 感想だったんですけど、わたくしはねえ、うん。どうしようかと。

短期的に考えればスペちゃんのスキル育成や新規スキルの入手に非常に役立ちそうでうれしい映像なんです、うん。ちゃっかりゴルシちゃんとトレーナーさんに確認を取りまして映像を頂きました。それと皐月賞の賞金でお部屋にパソコンを設置したのでいつでもその映像を見ることはできます。

あ、スペちゃんあんまり遅くまでパソコン見てたら明日に響くからそろそろやめましょうね。

「はーん。」

ま、経験値の宝庫ではあるんですけどもね。内容があれでして……。

序盤から大逃げかましてるセクレタリアトとそれに何とかついていつている日本勢。中間地点過ぎたあたりでこのまま圧勝かと思いきや、会長をはじめとしたヤベー奴らが速度アップ。ゴルシちゃんもちゃっかり後方で抜錨。そのままあれよあれよと会長が3人抜きまして固有スキル発動。やっぱ本家は違うのか猛烈な速度でバクシン、したと思ったら続いていたブライアンやオグリも普通に速度上げて続いていく。

たぶんなんか日本勢にかなりのバフを掛けるスキルでも使ったのだと推測しますが、そのままみんなで猛追してゴールイン。差は4バ身とはなりましたが、あの31バ身差のセクレタリアトにそれだけついていける時点でヤバイのら。あとちゃっかり5着に入ってるゴ

ルシちゃんもやばいのだ。

ま、結論を言ってしまうと……。

なんでセクレタリアト相手に結構いい勝負してるんですかね、会長？

いや、いいことなんですよ。元々日本は海外とのレベル差が大きすぎて「海外ウマ娘には勝てない。」なんていわれてたのでそこところはいいんです。でもね、スペちゃんクラシック後のシニア級でぶつかる可能性があるの。

これ、勝てるん……？

普通に考えて会長とかシャドーロールの怪物とか葦毛の怪物とか、負けたら絶対次勝つために頑張りますやん。ステータス上がりますやん。シニア級での難易度上がりますやん。しかも挑戦するって言っちゃった今年のジャパンと有馬どうすんの。

いくらこれまでがんばってくれてるスペちゃんでも彼女たち相手に戦って勝つのは結構難しいですよ……。

うーん、どうしたものか。

作戦といたしましては、ケガ率を低下させるこれまでにお世話になりまくっていた「鉄人」様だよりにかなりのオーバークワークによつてドラゴンボールみたいな超回復目指してやってみるぐらいしかない気がしますよね。

もちろん、上のヤベー世代が出走しないレースを狙う、つてのも作戦にはありましたが、そんなの見たく無いですし、スペちゃんもよく思わないでしょうから却下です。

と、いうことで練習方針、チャートを次回までに練り直しておきます。次回からは練習地獄になっちゃうかもしれないのでそこんこ

よろしく。

……スペちゃん〜！　もういい時間やからはよ寝んなさい〜。

「ふえー！　ほんとだ！　お、おやすみなさい〜。」

はい、お休み。んじゃ、今回はこんなところで、また次回お会いしましょう〜。

—————

き、気まずい……。

時刻はお昼時。今日もみんなでお昼を食べようとしていつも通りの席に座ったけど、どうしよう、この何とも言えない雰囲気。

絶対に無理に笑ってるエルちゃんに、異様に静かで目が座ってるセイちゃん。グラスちゃんはなんか殺気立ってるし、キングちゃんがお葬式帰りみたいなテンション。

いつもお昼はこの5人で食事することが多くて、今日も何も考えずにいつもの席に座っちゃったけど、失敗だったかも……。いや、でも急に違う人とご飯食べるようになったらそれはそれで避けてるみたいになっちゃうし……。

今は無理やりエルちゃんと会話できてるけど、微妙に会話がかみ合っていないし、このままだと会話が途切れて沈黙になっちゃう。

だ、誰か助けて……。

「た、だいま〜。お〜！　みんな一緒だね！　私もここで食べていい？」

「『「ウララちゃん（さん）！』』」

「お、お帰りなさい。帰ってきてたのですね。」

「うん！ さつき帰ってきたの！ あ、これおみあげね〜！」

うわ〜、すっごく大きいリュックからどんどん出てくる……。UF
Oみたいなマスケットの人形や木彫りのワンちゃん。カツオ？の
フィギュアに提灯？。しかも全員分ある。

「あとお菓子もいっぱい買ってきたよ！ スペちゃん用にも一杯買っ
てきたからね〜！」

「わ〜！ ありがとう！ これ食べ終わったら早速頂くね！」

「スペちゃん……、文字通り山みたいなカレーを食べた後でまだ食べ
るの……?？」

「ん？ まだまだ足りないからおかわりするけど、何かおかしいかな
?？」

「いや、おかしいデシヨ普通！ そんな食べられませんテ！」

「ふふ、そうね。スペさん、かなり食べ過ぎではなくて?？」

「そうだね〜。まあ〜たお腹がぼんぼりんになりそう。」

「お〜、ポンポコリン！ スペちゃんはたぬきだったの！」

「む〜、ひどいですよみんなあ〜！」

そう言ってみんなで笑い合う。少し前までの雰囲気とはすごい違いだ。

……ありがとね、ウララちゃん。

それで、話も進み、ご飯がおいしく、たくさんおかわり＋ウララちゃんから頂いたお土産のお菓子（一番大きいサイズ）を全部食べちゃったと。

「……はい。」

それで、無事、「太り気味」獲得で、おなかがポンポコしてるわけですね。

「……はい。」

……ハア。ま、練習方針とか考えてて席を外してた私も悪いんだろうけどね、スペチャン。

「ひゃー！」

ハシリマシヨウネ。

「ひゃい！ 行ってきますー！」

PART 54

トレセン学園 服飾課

「……はい！ それでお願いします！」

「解りました。あとはこちらでやっておきますので完成すればお部屋の方に送らせていただきますね。」

「お願いします、それでは失礼しました！」

「先輩、あの子ってスペシャルウィークちゃんですか？」

「そうそう、勝負服の調整で来てたの。」

「そういえば皐月賞前のインタビューで背中に星を増やすって言っていましたね。」

「うん、その星のことだけど、多分これからもっと星の数増えそうだなね。」

「あー、確かにあの強さならどんどん増やしそう。そういえば課長が『シンザンの再来だ！』なんて言って騒いでましたもんね。……そうするとやっぱり大幅に変えちゃう感じですか？」

「そうなのよねー、あんまり重さを増やしすぎるのはあれだけど、もともと背中面積が狭いタイプの勝負服だから学ランみたいにならんと面積広めるのも考えてる。あとは取り外しできるマントとか。今のところは星の中に星を入れることでごまかすつもりだけど、大幅に変えるなら、申請のこととか考えて数か月は預かつかないといけな

いかも。」

「あー、少しでも重量変わると規定引つ掛かって再申請ですもんね。自由にやらしてほしいよな、全く。」

「うむうむ。……そういえばさ、できたら紫のジグザグ模様を追加してほしいって言われたけど理由わかる？ 彼女の先輩とかの誰かでそんな意匠してた子いたっけ？」

「紫ジグザク？ どうでしょ？ 少なくとも私が持たしてもらった子にはいませんでしたね。でもそれしようとしたら……。」

「うん、間違いなく再申請。」

「ですよー。」

「ま、今回は無理だけどクラシック明けの冬の時期にまた新勝負服として仕立て直すことになりそうですなあ。その時に合わせて背中の改造もしていきましよう。さ。仕事仕事。あんたもはよ始めなよ。」

「へい。」

—————

（どうです？ スペちゃん、加重トレーニング用のおもり増やしてみました、それで動けそうですかね？）

「む、むう……、ちよつときついかも。」

（そつかく、ちよつと重くしすぎたかも……。うん、なら今日の練習は走

らずに歩く感じでいきましょう。その重さに体を慣らししていく感じですね。併走やマシンを使った練習の時はいつも通りのおもりの数でいきましょう。)

「はい。いつちに、いつちに、いつちに……。」

「ヤッホー、スペちゃん!」

「ごきげんよう、スペさん。今日は走らないんですね。」

「テイオーさんに、マックイーンさん! はい、今日は歩いて頑張ります! ちよつとおもりを増やしすぎちゃいまして……。それに慣れるためにもまずは体を慣らそうと思ってます。」

「うえ、また増やしたの。よくそんなので動けるなあ。」

「なるほど、いつもなされている加重トレーニングですわね。……そういうばスペさんは夏の合宿でも使われていた棒状のおもりを使っているのですか? もしよろしければわたくしが使っている通常より重い蹄鉄を使ってみますか?」

「蹄鉄、ですか?」

「はい、お婆様に勧められました。見た目は普通の蹄鉄と同じですが、重さは段違いです。どうですか?」

「……………はい。うん、ちよつと今の私には合っていない気がしますし、膝への負担も大きそうなので遠慮させていただきますね。んじゃ、私は練習に戻りますね! 行ってきます。」

「がんばってね、スペちゃん。」

「お気をつけてですわ。」

「ねえ、マックイーン。ボク、ちゃんと喋れてたかな？」

「ええ、大丈夫でしたよ。」

「そっか、ふいふ。うん、何とかなつたかな。いや、どうしてもスペちゃんの前にいると顔が硬くなっちゃってね。引きずるのがよくないのは解ってるんだけどな。」

「テイオー……。」

「そんな心配そんな顔しないでよ。大丈夫、だからさ。……さ、マックイーン。ボクたちも負けられないように練習しないとね。今日も付き合ってくれるんでしょ！」

「……もちろんですとも、いくらでもお手伝いいたしますわ。それと、テイオー。」

「うん、なあに？」

「いつでも頼ってくださいね。」

「うん……、ありがとう。」

PART 55

「つまり、菊花賞。3冠阻止のためにダービーを使いたいということ？」

「うん。その作戦で行きたいと思う。どうかな、トレーナー？」

練習終わり、この時期の子たちにとっては明らかにオーバーワークとなる量のトレーニングを終わらせた後、セイウンスカイに真剣な顔で相談された内容はダービーを捨てるという決心だった。

「臯月賞でも、誰からも注目されてなかったナイスネイチャが伏兵として私たちを抜いていった。あれで解ったんだ。人は予想外のことが起きると動揺する。特にレースという極限状態にある時、その一瞬の際は馬鹿にできない。だから、今度は私がそれを……」

「セイちゃん、本当にわかってるの。あなたにとってダービーはたった一度だけのレース。そんな選択は……」

「うん、解ってる。私にとって一生に一回だけの大事なレースだっことは。でも、でもね。トレーナーにダービートレーナーをあげられないのは申し訳ないけど私はスペちゃんにどうしても勝ちたいんだ。同世代に比べてどうしても実力で劣ってる私がどうにかして彼女に勝つにはこれぐらいしないと、ね。」

「セイちゃん……。」

そうだ、トレーナーである私が何を弱気になってるんだ。彼女がここまで覚悟を決めて、ダービーをただ一つの一勝にかけようとしているんだぞ。それを、それを、私は何をしているんだ。私がするべきはここで燻ることか？ 超えられない壁の前で蹲ることか？

違う、違うだろ。私の教え子がどんな思いをもつてこの決断を下したのかを考えろ。

私の、私のできることを、それ以上をあなたのために。

「ええ、解りました。セイちゃんの決断、全力でサポートさせていただきます。任せてくださいよう！ 私の持てる限りを、私のすべてをセイちゃんのために使います。」

「トレーナー。うん、ありがとう。」

「気にしないでください！ さ、今日はもう遅いですし門限も近いですよ。さ、早く帰って休んでおいで。」

「……うん。お疲れ様でした、また明日ね。」

セイちゃんの顔が今にも泣きそうなことは解っていた。

私を心配させないよう、自分の気持ちに蓋をするように無理やり笑っていた。

彼女に二度とあんな顔をしなくて済むように。彼女が勝利をとれる道を探さなくては。

—————

私は自身の思いを整理するために、東条トレーナーに頼み、学園の道場を貸し切ってもらった。対価として道場の掃除を任されたがちょうどいい。自分を見つめ直すのに掃除は最適だった。

道着で身を包み、座して薙刀を前に置く。

学園に来てからできていなかったが、私の精神統一だ。

自身の深層に潜り込み、本当に私が望むものを模索する。

日常の風景、友人たちとの交流、初めての勝利、圧倒的な敗北、悔しさ

思い浮かぶ余計な感情を排除し、根幹を探す。

ダービーウマ娘、…違う。三冠、…違う。海外G I制覇、…違う。

私が望むものは、ただ一つの勝利。スペシャルウィーク、スぺちやんに勝利すること。

彼女はいい友人であるが、同時にライバル。超える壁でもある。

忘れられないあの模擬レース。どうしても勝てない、超えられないと思わされた。

同時に私の闘争心に火がつけられた。私にとって挑むべき強者が現れたことは素晴らしいことだった。

それなのに私は何をしていた。ただ一度負けたぐらいでめそめそとして、その敗戦を後に引いた。

私は恥さらしだ。

あのような態度は挑む側として、レースをするものとして不適切。勝者は決しておごらず、敗北したとしても首級がそのような態度な

らば末代までの恥。

ゆっくりと息を吐き、座を解く。

立ち上がり、体に染み込んだ型をなぞる。

彼女との勝負は一度きりのものではない。

勝てるまで、勝つまで、私は挑み続ける。

そして、敗者となったときは敗者に相応しい態度を。

そして、勝者となったときは勝者に相応しい態度を。

型をなぞり終わり、構えを解き、ゆっくりと息を整える。

雑念は消えた。あとは邁進するのみ。

—————

「……にしても変な被り物してんのに腕は化け物って何者なんだろ
うな。スピカの坊主も変というか異様な耐久力してるし、ウマ娘と同じ
ように癖のある奴はトレーナーも強いんかね。」

今日はお嬢の友人であるハルウララってやつとダートで併走練習
を指示している。キングヘイローはダートはできないが練習には
ちょうどいい。ハルウララもかなり高く能力がまとまっているし、練
習相手としてはこれ以上ない相手だといえる。

「キングちゃん〜！ 早く早く〜！」

「ウ、ウララさん。ちよつと待ってください…。」

苦手なダートとはいえこの時期のウマ娘としては非常に高いレベルで纏まっているといえるお嬢を楽々と追い抜いてまだ息切れなしか。……ちよつと休ませるか。

「お二人さん！ そろそろ休憩だ、水分補給しとけよ。」

「は、はい。思ったよりきついですわね。」

「お〜！ 休憩だ〜！ お水お水！」

「にしてもハルウララ、だったか？ お前さんも速いねえ。さすがニューダートクイーンって言ったところか？」

「ほんと、すごいですよね。」

「……ぷはあ！ お水美味しい！ ん？ なにかウララのこと話してたの？」

「いや、あんさんがすごいなって話をしてたんだ。そうだ、すまんが前とお嬢の分のスポーツドリンクを買ってきてくれないか？ つりは好きに使っていい。」

そう言ってお嬢と話すためにウララに多めに紙幣を握らせ購買へ向かわせる。

「うん！ わかった！ 行ってくるね〜！」

「それで、どうだ。うまくいけそうか？」

「……焦燥感、というのでしょうか。ウララさんのおかげで心は軽くなりました。ですが何かをつかめたかというところ……」

「そうか。……ま、気にすんなや。実力はちゃんとついてきてる。気を張りすぎたら勝てるもんも勝てなくなるし、もう少し気楽にやってもいいんだぜ。」

……思ったより自信を無くしている。いや、それも仕方ない話なのかもしれないな。うまく自信を付けさせるためにも短距離でGI狙わせてみるか？ NHKマイルは出走登録時期が過ぎちゃったし、ダービーに出ることも考えると控えておきたい。なら夏明けのスプリントーステークスだが……、それまでお嬢はもつのか？ それ以前にあのバクシンオーが出走するのは確定している、必ず勝てるとは言い難いレースだな。と、なると難しいな。

あとはどこかと合同練習させる方法もあるが……、今のところ実力的にもウララが最適か？ リギルやカノープス、緑川のところでもできるように頼み込んでみるのもいいかもしれん。

まあ色々考えてみたがウララとやらせるのが一番よさそうだな。適性はダートだが実力は申し分ないし、お嬢の精神的負担をおそらく無意識のうちに減らすように動いている。彼女のトレーナーに聞いた話だと近いうちにまた地方遠征に向かうみたいだが、それまではウチと合同練習できるように頼んでおこう。

「たっだいま〜！ はい、キングちゃん！ スポーツドリンク買ってきたよ！」

「ありがとうございます、ウララさん。」

「はい、あと帽子のおじいちゃんにも！」

「お、おう。ありがとよ。……そっか、傍から見たらもうじいなんだなあ……。」

「あれ、おじいちゃんどうしたんだろ？」

「あ、黄昏てますね。ああいう時は声を掛けると逆に傷つけてしまうのでそっでしていただけると……。そういえば今日はウララさんのトレーナーさんが見えておられませんかどうか？」

「えくとね、今日は確かたづなさんとお出かけしてるって言ってたよ！ あ、それと昨日は桐生院さんともお出かけしてた！」

「え……、それは色々と大丈夫なのですか？」

パタリ。

中にいるものを驚かせないようにゆっくりとドアを閉め控室から観客席に戻るため、移動し始める。

仕上がりは上々。彼女と張り合える、とまではとても言えないが食らいつけるまでは成長してくれた。そう、肉体面だけ見れば、だが。ほとんど私が関われない部分、精神的な面ではかなり危うい。この日までそれを解決してやることができなかつた。同室のグラスは自身で何とか立ち治り、外側からでもうまく干渉できるまで回復してくれたが、エルはそうではなかつた。私から言ってしまうと負担になってしまう可能性を考えルドルフやグループ、ヒシアマゾンに頼み込み、気分転換などを色々させてみたが駄目だつた。

先ほども口は笑っていたが、目は怯えていた。

彼女が何に怯えていたのか、詳しいことは解らないが推測することはできる。

推測でき、その対応を行ったとしても取り除くことができなかつた恐怖。

もう今の私には祈り、応援することしかできない。
どうか、どうか彼女の心が救われますように。

—————

鏡を見ながら勝負服を整え直す。

GI、ダービーという晴れ舞台、キレイにしておかないといけない。

……最近は鏡を見ることが怖くて見れてなかったが今日ばかりはそう言っただけじゃない。

無理やり顔を向け、鏡を覗く。

弱弱しく、今にも壊れそうな私がそこにあった。

こんなのは私じゃない。

マスクの紐をもう一度きつく結び直す。

鏡を中からこちらを見てくる、私でなく『私』はこういった。

「世界最強はこの私、エルコンドルパサー。」

—————

（いやー、ダービーてのはすごいですねえ。人の集まりもやばいですし、よっぽど注目されてるなあ。にしてもよかったですね、スペちゃん。広告のチラシとかにスペちゃんが走ってるのが使われていますし、今回も一番人気。）

「うん、本当にすごいよね。使ってもらえたのはありがたいし。」

（ま、今回もそこまで緊張せずに、いつも通り走れば大丈夫ですよ。前回より皆さん追いついてくるでしょうが本格的にヤバくなってくるのは菊花賞ぐらいから。）

「私はいつも通り気にせず走ればいいんだよね、……わかった。」

(……最近のエルちゃんたちのことで色々思うところがあるのは解るけど、今はレースに集中しよう。あとのことは終わってから、ね。)

—————

『さあ、一国の宰相になるよりも難しいといわれるダービー制覇！

その栄冠を手に掴むのは誰なのか！ 最も運のよいウマ娘が勝つといわれる東京優駿ではありますが今年に限っては違います！ 世代にたった一人であれば絶対的な王者になっていたであろう者たちが結集し、ダービーという王冠を手に入れようとしています！』

『一番人気には皐月賞ウマ娘、スペシャルウィーク。ジュニア王者でもある彼女はこういった走りを見せてくれるのか。二番人気にはトウカイテイオー、皐月賞では二着となりましたが今回はどうなるか！ 三番人気にはエルコンドルパサー、前走の皐月賞では難しい結果となりましたが実力は確かです。』

『さあゲートの準備が整い、続々と収まっていきます。』

(トレーナーにも言われたけど今回の目的は周りに私がついていけないと錯覚させること。前回の作戦でハイペースで逃げたことをうまく使って今回も大逃げする。私が大逃げしかできなくていついたら後半の勝負で力尽きてしまう、私についていたら駄目だということ植え付けるんだ。)

「さあ、私情を殺せ。」

(あく、さすがに今回はかなり警戒されてるね。スペシャルウィークさんやテイオーに比べればましだけど視線が痛いや。やっぱり今回は前みたいに伏兵はできないか。ま、期待してなかったから大丈夫。

今回は正真正銘私自身の実力で勝負する。）

「やってやる。」

（理解はしていましたがそこまで注目されてませんね。ま、いいでしょう。ウララさんがあれだけ頑張って地方で活躍しているのです。私が、キングが輝かなくてどうするのか。私の勝利を信じてくれた、応援してくれた人たちのためにも。）

「見せてあげましょう、王者というものを。」

（冷静に實力差を考えると未だ届かず、しかしながらそれに諦め全力で戦わないのは愚の骨頂。出走するからには本気で、全力で。）

「グラスワンダー、参ります。」

（マックイーンに手伝ってもらって出来上がった”あの技”、体に負担がかかりすぎるから使いすぎないように注意されたけど、出し惜しみをしてスペちゃんに勝てる相手じゃない。元々ボクが考えていた”テイオーステップ”、それとボクの”負けない気持ち”で無理やり前に行く。本当は分けて使うようなものなんだろうけど一緒に使う。皐月賞の時はまだ出来上がってなかったけど今ならできる。）

「よー。」

（さ、今回も作戦は変わらず差し。3枠5番と内側からの出走ですが、進行としましては中盤まで後方。ここで無理に内側に行くぐらいならコーナーで外側に行ってしまうのも手です。ま、そこらへんは臨機応変に、です。それで中間地点超えてからは加速していく感じでいきます。スキルも忘れずに使っていきますよ。……あ、それとバ群に囲まれないように注意していきましょね。）

「(コクコク) 頑張ります!」

『さあ、各ウマ娘。全員がゲートに収まりました! 様々な思惑を背負ったダービーが、今、始まります!』

(あ、「ゲートの支配者」のトラウマ消しするの忘れてた。今回使えないじゃん。……ま、何とかなる……か?)

—————

『一斉にスタート! 前走の皐月賞と同じようにセイウンスカイ! いいスタート!』

(よし! うまく出れた! ここから前回よりも速度を上げていく! 前回より私は成長したんだ、速度を上げてもスタミナは持つはず!)

(セイさんは大逃げ。……前回のようにハイペースで進むと後半でスタミナが持たなくなる。周りもついていけないようですし私もそうしましょうか。)

『セイウンスカイがただいま独走状態! 他の面々はこのハイペースについていかず後方からレースを窺います。大きく離れて後続には先行策をとっているトウカイテイオー、エルコンドルパサーが来ている。』

(んー、さすがに同じことを二度もさしてくれないか。後ろに付かれ

ちやったや。でも今回は前と比べてこの集団のペースも遅いし、今のボクならスタミナは十分残せるかな。)

『後方集団にはキングヘイロー、スペシャルウィーク、ナイスネイチャ、グラスワンダーと固まってきている！ 先頭のハイペースに飲まれず歩を進めていきます！』

ありや、セイちゃんがターボ師匠してますね。ターボエンジン搭載しちやったのかな？ ステータス見た感じこのペースで進んでいるとスタミナ切れちやいそうですね。まあ夏開けたら普通にこのペースで走り抜けそうですね……。ま、今日はこのままゆっくりペースで行きましょう。

コクコク！

お、先頭が折り返し地点を通りましたね。んじゃ、そろそろ準備始めますよ〜！

—————

(そろそろ、ですね。折り返し地点過ぎたところにスペさんは加速し始める。)

(問題はついていくか、いかないか。)

(まあここでついていかずに最終直線で差す、そのイメージが全く湧かないからやらないんだけど。)

『ここで後方集団が折り返し地点にたどり着き、ツ、ここでスペシャルウィークが加速！ それにつられて後方集団も加速！ 皐月賞と同

じようにスペシャルウィークが後続を引き連れて前へと進みます！』

さ、ここからどんどんスキル使っていきますよ〜！

∨【不沈艦、抜錨オツ！】を発動！

∨【逢魔時】を発動！

（ツ！ やつぱりここだね。……ここで抜かされないように速度を出すのもいけるけど、やつぱり最終直線で勝負するしかない。そこで全力を出すためにもスタミナはできるだけ残しておかないといけない。ボクの脚を、”技”を使うならそこだ。ここは堪えないと。）

『スペシャルウィークが率いる団体が先頭集団のエルコンドルパサー、トウカイテイオーを抜いて加速していく

！ おっと、ここでエルコンドルパサーも負けじと加速していく！』

『スペシャルウィークを先頭とした集団がセイウンスカイに追いつこうとしています！ かなりのハイペースで彼女の一人旅となっていました！が、ここで終わりとなってしまおうのか！』

（作戦ではここで埋もれることで私からのマークを外して、私のイメージを大逃げしかできない注目しなくても大丈夫なゴ、って変更させるのが目的だったんだけど……、ただで負けて、抜かされるなんて気に喰わない。）

『おおー……ここでセイウンスカイ！ 追い抜かれまいとここで力を振り絞り速度を上げてきた……、がここで抜かされた！ 現在先頭はスペシャルウィーク！』

『現在スペシャルウィークが先頭！ 最終直線に入ろうとしている！ 後方が続いていた集団を引き離し独走だ！ おっと、ここで静かに後方で待機していたトウカイテイオーがスタート！』

(よし！ ここだ！)

【究極テイオーステップ】

【最強はボクだ！】

(最終直線こそボクが勝負すべきところ！ スペちゃんとの差はかなり離れてるし、加速もすごい。でも諦められるもんか！)

『トウカイテイオー、ぐんぐん速度を上げていく！ スペシャルウィークが続いていた集団に迫り追い抜かそうとしている！』

「ハア……ハア……、くっ！」

(体力がキツイ。脚が全然残ってない。ハイペースで大逃げしたのは皐月でも同じだったけど、距離の差はやっぱりか。ダービーは皐月賞よりも長いってことは解ってたつもりだけど思ったよりキツイや。しかもスペちゃんについてきたみんなは比較的体力が残ってるような感じ、多分直線じゃ私はついていけない。残している体力の差から絶対に沈んでしまう。……ここまで、かな。ハイペースで大逃げして、沈んでしまう。そう見せれたはずだし目的は達成できたはずだけど、悔しいや。)

「なんで……………」

—————

ん、そろそろ最終直線ですね。既定の3人抜いてますし、スキル使っただけじゃいけませんよ。

◇【汝、皇帝の神威を見よ】を発動！

◇【シューティングスター】を発動！

◇【空駆ける英雄】を発動！

ほいほい、スペちゃん加速していきますよ！

……………ん、後続が皐月賞の時と比べてかなり近づいてきてますねえ、これは夏を挟んだ菊花賞難しくなりますなあ。

ま、今回は普通に大丈夫そうですね。

はい、ただいまスペちゃんがゴールしました。後続と7バ身差で勝利です。

大差勝ちとはいきませんでした。が称号に必要な5バ身差以上であるため大丈夫ですね。

んじゃ、ウイニングライブに行ってみましょう！

—————

一着 スペシャルウィーク

二着 トウカイテイオー

三着 グラスワンダー
四着 キングハイロー
五着 ナイスネイチャ
六着 エルコンドルパサー
七着 セイウンスカイ

結果はこのようになった。

実力だけを考えればエルはグラスよりも上、いくらこの世代の者たちが強かったとしても、運が悪かったとしても、掲示板にのるぐらいはできたはずだった。

だが、それは叶わなかった。
体は出来上がっていつているとしても精神は追いついていなかった。

レース直後、私は入賞したグラスをほめることよりもエルの方に駆け寄ってしまった。まだよかったのはグラスも彼女の異変を感じていたため私と共に彼女を心配してくれていたことだが。

エルは何も話してくれなかった。

そして……………

「東条トレーナー！ 東条トレーナーはいらっしやいますか！」

「グラスか、どうした、そんなに慌てて。」

「エルが、エルが部屋にいないんです！」

レースの次の日、エルは学園から消えていた。
彼女にとって大事なマスクを残して。

PART 57

私は何をしているのだろうか。

わからない。

—————

「グラス、とりあえず落ち着け。」

「でもっ！」

「慌てたところでエルが見つかるというわけではない。とりあえず昨日は自室にいたんだな、その時から今に至るまでを話してくれ。」

おそらく、グラスの錯乱具合から学園側に連絡などはしていないだろう。

彼女の話聞きながら学園と生徒会の方に連絡し、人手を集めておかねば。

「……昨日は就寝時には一緒にいたんです。それで起きたらとなりのベッドで寝ていたはずのエルがいなくて……、洗面台のところに彼女のマスクがありました。……あ、あと！ エルの靴がなくなっていたので寮内にはいないと思うんです！」

「わかった。とりあえず学園側と生徒会の方に連絡を入れておいた。グラスはエルがいそうなところを探してきてくれるか。」

「は、はいー」

そう言つてグラスは飛んで出ていった。

……学外に出ていることも考えないといけない。

警察に連絡する必要があるな。

そう考え私は電話を手取る。

どうか無事でいてくれよ、エル。

—————

(んじや、朝練いきましようかね。今年の夏合宿はセクさんの御好意でアメリカ行きが決定してますからそつち向けの調整とかもしておきましょう。ま、何をするのかと言いますと加重トレーニングの一時停止ですね。)

「え、やめるの！ 確かに今日はスーツもおももしないように、つて言つてたけど。」

(そうそう、まあ、なぜかという走法の調整が主になります。スペちゃん、ダービーの時、体が異様に軽くなってませんか？)

「そういえば確かにすつごく軽かったなあ、羽が生えたみたいだった。」

(そうなんですよねえ、スペちゃんの走法は一般的なタイプ。ま、トレーナーさんやスズカ先輩に教えてもらったのはそれなんです、

身体能力向上によって大跳びになりかけてるんですよね。スペちゃんに合った走法は一般的なものが一番合っていたので今まではそれでよかったんですが、このままアメリカで走ってしまうと芝の違いと慣れない走法によってさすがのスペちゃんでもケガをする可能性が出てきます。()

「ふえー！ ほんとう？」

(マジマジのマジなんですよね、というわけでアメリカ合宿までに大跳び走法を身に着けるか自分流にアレンジする、のどちらかをしてしまいましょう。)

「それで今日は制限しないで走るんだね、わかった！」

(ま、詳しいところは大跳びの先輩であるテイオーちゃんやトレーナーさんに教えてもらいながらやっていきましょう。今日は自分がどうなっているのかを再確認していく感じですよ。……ん、あれは？)

「スペちゃん！」

「あれ、どうしたのグラスちゃん？ すごく急いでるけど。」

(ありや、ずっと走ってた感じですね。息も絶え絶えですし、トレーニング用を持ってきていたお水をお渡ししましょう。ほらスペちゃん、お渡しして。)

「飲みます？」

「わ、私は大丈夫だから。そ、それよりもエルを見てない?」

「エルちゃん? 見てないけど……。」

「朝起きたときからエルがいないの……、そうだ、屋上! ごめんस्प
ちゃん、エルを見たら連絡して!」

「……………」

(あなたのせいじゃない。)

「でも! ……でもね。」

(きっかけはあなたが思っている通りかもしれない。そしたら、どう
するの? 今、あなたがすることはここで立ち止まること?)

「……………ううん、ちがう。」

(なら、探しに行かないとね。友達として、ライバルとして。)

「うん。」

――――

周りを、自分を騙し始めたのはいつからだっただろうか。

私は「世界最強」だと『私』に言い聞かせた。

まあ、もう終わったことだが。

今日の朝、マスクをしないまま鏡を見てしまった。

私が封じ込めていた『私』が、その感情が限界だったみたいであふれ出てしまった。

不安、焦り、そして恐怖。 苦しかった。

今の自分が本当に『私』なのか、という不安。

スぺちゃんたちに全く勝てない焦り。

自分が世界最強どころか何者にもなれず消えていくかもしれない恐怖。

全部あふれ出てきた。

気がつけば私は走り出していた。

ただひたすらにこの場所から、この気持ちから逃げたいと思った。

ただがむしやらに走り続けた。

気がつけば、海。崖の上から水平線を一望できる場所にたどり着いていた。

私は、ただ、海を見ていた。

何かが変わってくれることを、どこか期待しながら。

—————

いた！ エルちゃんだ！

（スペちゃん。先にグラスちゃんに連絡を送りましょう。……それとなんと声をかけるのか、考えてますか？）

………わからない。もしかしたら私の言葉がエルちゃんを傷つけてしまうかもしれない。

彼女の夢を阻む私なんて見たくないかもしれない。

（自分の思うまま、しっかりと思いを伝えなさい。大丈夫、あなたの思いはちゃんと伝わる。）

うん。

「……エルちゃん、隣。いいかな？」

もう日が沈みそうなころ、そこにいたのはスペちゃんだった。

「スペちゃん……。」

「よいしょ、つと。うくん、夕日がきれいですね。」

「そう、ですね。」

「いや、勧められてきましたけどいいところですね、ここ。好きになっちゃいました。」

「……なんで。」

「あ、そうだエルちゃん。のど渴いてませんか？ さっき買ってきた……。」

「何で来たんですか!」

なんで、なんでこんな私を追ってきたんですか。

私と対極にいるあなたが、

私みたいな嘘つきで弱くて何もできない落ちこぼれを

マスクで隠さないと何もできない私を

世代の頂点に立ってるすごいあなたが

なんで私なんかを見つけてくれたんですか。

「だって、友達ですから。」

「え……。」

「エルちゃんがどう思っているのかはわからないけど、私はね、エルちゃんと一緒に走るのが楽しかったんだよ。エルちゃんが一緒にいてくれたことはすごくうれしかったし、楽しかった。レースだけじゃなくてね、クラスで一緒に話してくれたり、遊んでくれたり、色々一緒に過ごしてくれた。」

「トレセン学園に来るまで、ウマ娘の友達がいなかった私は、すごく救われたんだよ。ウララちゃんに、グラスちゃんに、キングちゃんに、セイちゃんに、ターボちゃんに、そしてもちろんエルちゃんにも。」

「だから、さ。また一緒に走ろうよ。」

「でも……、マスクがないと何もできなくて、あつても何もできない私にスペちゃんと一緒に走る資格なんて。」

「資格なんていないよ。」

彼女が私の手を引き、立たせる。

「私は、エルちゃんと走りたいんだ。」

そう言っただけで彼女は私の手を引き走り出す。

とてもゆっくり、ゆっくりと私の手を引くあなた。

それにつられて動き出す私の脚。

スペちゃんがこつちを見ながら笑いかけてくれる。

なんだか暖かい、な。

それで、なんだか楽しい。

気が付けば、私たちは思いっきり走っていた。

そうだった。私は最初、走るのが好きだったんだ。

最強であることの夢を持つ前、ただ、誰かと走ることが好きだった。

目標を目指すうちに忘れていた根本を思い出した。

なんだか、がむしやらに、むちやくちやに、ただ思うままに走っていると悩んでいたことが、苦しんでいたことが、馬鹿らしく思えてきた。

「スペちゃん！ 行きますヨ〜！」

「お〜！」

ただ、思いっきり走る。あの時、走ることを覚えたときのよう二人で思いっきり走った。

走るのが、楽しいね。
ありがとう、スぺちゃん。

――

それから、色々大変だった。

思ったより私は遠くまで来ていたらしくおハナさんの車でやってきたグラスと、おハナさんに「どこまで行っているのか」と、泣きながら怒られた。

怒られちゃったけど、二人のやさしさが伝わってきてありがたかった。

たらふく怒られた後、グラスちゃんから部屋に置いてきたマスクを渡してくれた。

これまで、このマスクは私の仮面だった。

弱虫な自分を隠すためのマスクはいっしか心の内から湧き出てくる負の感情に蓋をするものにならった。

でも、今は元の理由で、ううん、新しい自分であるために、もっと強い自分であるために。

そして彼女の隣を、その前を、その先を走る私になるために。

慣れたはずの動作が、どこか新鮮に思えた。
いつもよりマスクの紐を縛る手に力が入る。

さあ、高らかに宣言しよう。

「ワタシが、ワタシこそが！ 世界最強！ 史上最強の！」

「エルコンドルパサーーーーーーッ!!!」

(マスクデータを公開します。)

(エルコンドルパサーが特定のイベントを経験したため固有スキルが変化します。)

(エルコンドルパサーの固有スキル【熱血☆アミーゴ】が【プランチャ☆ガナドル】に変化しました。)

(エルコンドルパサーが特定イベント『原初の思い その先へ』を経験したことにより、これまでに発生していた成長率低下、レース時確定調子低下が消去されます。)

(エルコンドルパサーの特定イベント『再臨！ 飛翔！ エルコンドルパサー！』が発生。現在スペシャルウィークのライバル枠として設定されているため、【対スペシャルウィーク○】を獲得しました。)

(【対スペシャルウィーク○】をすでに獲得しているため【対スペシャルウィーク◎】に変化しました。)

(お久しぶりですね。ここだけ見ればエルちゃんだけ強化されてるように見えますが実はダービー前の時にエルちゃん以外は勝負服入手時の星3固有スキルに切り替わってるんです。ちよつとタイミング的に入れにくいかなあとおもってやってなかったのでここで言うておくわね。んゝ、にしてもスペちゃんも強くなってきてるし周りもい

い感じ。彼女に任せてよかったわねえ。……ん、そろそろ会議の時間か。3人もいるから1人ぐらいサボってもいいと思うんだけどなあ。ま、仕方ないね。)

PART 58

▽スピード：C+

スタミナ：B

パワー：A

根性：B

賢さ：C+

▽スキル

【シューティングスター】Lv. 3

【汝、皇帝の神威を見よ】Lv. 2

【空駆ける英雄】Lv. 1

【不沈艦、抜錨オツ！】Lv. 1

【ゲートの支配者】（使用不可）

【食いしん坊】

【逢魔時】

（【未脚】）

（【率いるもの】）

（ステータスの上りはダービーも超えましたし予定以上、って感じでいいですね。これから、というか夏の間はスキルの充実、成長に当たった方がいいかもしれないなあ。最終的に頼りになってくるのはスキルですしお寿司。たまくにどうしようもないステータス差をスキルでひっくり返してくる子たちのことを考えたらそっちの方がよさそうですね。真似てしましましょう。）

（それと、エルちゃんを迎えに行った後に生えたこの【率いるもの】ってなんだ？）

「ねーねー、何してるの?。」

(ん、スぺちちゃんですか。今後の予定を考えていたの。見る?)

「うん! ……」技” っていえばいいのかな? その練習が多いんだね。」

(そうそう、基礎的な力はついてきましたしそっちメインにしようと考えててね。あ、それとチーム練習の時はフォーム再築をメインでやっていくようにトレーナーさんをお願いしといてくれた?)

「あ! ……………。」

(……その顔は忘れてましたねえ? そんなんだからトレーナーさんを「俺、いるのかなあ……。」なんて悲しませちゃうんですよ。)

「そうなの!?!」

(そうそう、しくしく陰で泣いてましたよお。……ま、そこは嘘ですけど。強くなることに、走ることに夢中になるのはいいですが、こういったトレーナーさんや友達との関係をないがしろにしたらだめですよ。)

「わかった!」

(ま、そういうわけで早速トレーナーさんに相談してきなさいな。「走法が崩れてきちゃったけど自分じゃ直し方がよく解りません。このまま新しく走法を確立するか、そのままにするか、大跳びに変えた方がいいのか」って言ってるね。あのトレーナーさんのことだから、もう色々と考えてくれていると思うよ。)

「はい。行ってきますー!」

「と、言うわけで、走法が崩れてきたからどうかしてほしい、ってことだな。」

「はい！ よろしくお願いします、トレーナーさん！」

スぺのフォームが身体能力、この場合は行き過ぎた過重トレーニングのせいだろうが、そのせいで入学したときに覚えた走法が合わなくなってきている、か。……把握はしていたが俺に振られるとは、な。

あれからスぺのもう一人のトレーナーについての話は進んでいない。ちよくちよくスぺに確認を取っては見るが、何か考えこんだ後に『たぶん無理』という内容の返答がいつも返ってくる。まあそういうった秘密主義のトレーナーはいないことはないが連絡すら取らせてくれないのはなんでかねえ？ もしかして俺、嫌われてる？

スぺのチーム練習後の自主練にも時間がある限り顔を出すようにしていたが、その内容はスぺの異常なほどの体の丈夫さに裏付けされた内容であつたし、もし俺がメニューを提示するならば同じものにしていただろう、というものばかりだった。

まあいつもそんな感じであちらさんの指示にそつてやっているようだったから今回の件もそうなると思つてたんだが……

「……スぺ、一応聞くがあちらさんはなんて言つてたんだ？」

「？ ……！ はい！ トレーナーさんをお願いします、だつて。」

と、言うことは任された。ということかね。

テイオーとマックイーン、スカーレットとウオツカ。あいつらは自分たちでどんどん高め合っていくし、ゴルシは好き勝手走るし。

ちよつと俺いるのかなあ？ って思ってたところだったんだ。ちよ
うどいい、ちよつくら頑張ってみますかね！

「おーし、やるぞお、スぺえ！」

「おー！」

—————

んでき、最近出番なくて哀しみのゴルシちゃんだけどき。

スぺ、なんかグルーヴのおやつさんが呼んでたぞ。生徒会室に来て
ほしい、ってな。

ゴルシちゃんみたいになんかイタズラでもしたのか？

ほら、生徒会室に花火設置したり、ダートで砂の城作ったり、ター
フでニンジン栽培し始めたり……

あ、もしかしてプールにゼリーのもと、でも入れてゼリーパーティ
でもしたのか？

「ふえー！ してませんよ、そんなこと！ でもなんでだろ？ なんか
悪いことしちゃったかなあ？ ……あとゼリーは普通にやってみた
いです。」

さw
まくた家電でも買ったのか？ ほれ、例の炊飯器とかレンジとか、

「むー。私も学習しましたからもう買ってません！ せいぜいカタロ
グ眺めてるぐらいです！」

と、いうことは隙をみてまた何か買うつもりだったんだなあ？

「ギ、ギクツ！」

アハハ。ま、今回はお怒りの閣下、ってなわけじゃないみたいだし。気楽に行つていいと思うぞ。

ほれ、ダツシユダツシユ。

「は〜い。行つてきます。」

そういえばゴルシちゃんの宝塚記念終わったらアメリカ合宿だよな。

……ちよつとなんか用意しておこうかな、面白そうだし。

PART 59

(にしてもグルーヴに呼ばれるなんて何でしょうね？ わたくしも呼び出される理由なんて知りませんし、なんかわたくしが知らないうちにスペちゃんやらかしちゃんたんですかねえ？)

「な、何もしてませんよ！ ……たぶん。」

(ま、行くだけ行きましようね。 ……ん、あれは。)

「お、スペちゃんじゃん。スペちゃんも呼ばれたの？」

「セイちゃん！ はい、エアグルーヴ先輩に呼ばれて。」

「と、言うことは授業中に寝すぎてお叱り、ということはなさそうだねえ。うん、よかった。」

「よかった、じゃありませんよセイちゃん。」

「グラスちゃんにエルちゃんも！ 二人とも呼ばれたの!?!」

「そうなのデス！ ……グラス、私もちよつと危ういので言わないで頂けると……。」

「エルもちゃんと授業受けましようね、もうノート貸してあげませんよ?。」

「ウ！ 努力します。」

「あら、ごきげんよう。皆さんも呼ばれたんですか？」

「キングちゃん！　ということはみんな呼ばれたんだね！」

「ええ。にしてもこのメンバーが呼び出される、ということは……。」

「「レース」」

「みんなと走れるなんて楽しみだね！」

「ええ、本当に。……血が滾ります。」

「フッフ、再誕したエルコンドルパサー。見せてやりマース！」

「ま、キングの立つ舞台に相応しいのかは解りませんがやるからには全力で！」

「みんな気張りすぎだよ、……気持ちは解るけど、ね。」

「ん、どうしたお前ら、そんなレース前みたいな顔して……、まあいい。集まっているならちようどいい、入ってくれ。」

「ブライアン先輩！　はい、失礼します。」

レースと意気込んで闘志を燃え上がらせていた私たちを待っていたのはレースではなかった。

死屍累々、ある意味死にかけているお二人と生徒会室なのに思いつきり食事をしている人だった。

タマモクロス、スーパークリーク。そしてオグリキャップだった。

「おえぶ……ヤバイ。何やこれ……いまだに腹ん中に残ってる。なんも食う気にならんぞ……。」

「オ、オグリちゃんはよくまだ食べれますよね……。」

「ん？　そうか？　確かに昨日はたくさん食べたけど、いつも通りだぞ……。」

「急に呼び出してしまつて申し訳ない、知つているとは思うが生徒会長のシンボリドルフだ。集まってくれてありがとう。」

「あ、どうも。」

「本来ならグルーヴが対応するはずだったんだがゴールドシップのイタズラの対応で追われているみたいでな。私が代わりというわけだ。……まあ早速本題なのだが、君たち5人には大食い大会に参加しても

「らいたい。」

「お、大食い大会、ですか？」

「うむ。実はだな、ここにいる3人が参加するはずだったテレビ局が主催する大食い大会があったのだがその連絡がうまくいっていなかったようだな、別の局の大会にすでに参加してしまっていたのだ。まあそのせいでここで二人がやられてしまっているというわけだ。」

「す、すまんなあ。う、ヤバ、声出したら出てきそう……。」

「本当にごめんなさいね。……ウ、わたしも。」

「二人ともそんなに食べていただろうか？ 不思議だ。」

「そろそろ君は自分の食事を自覚してくれ、オグリキャップ。食堂からのお声が上がってきているんだ。……まあそれは後で話すとして、このように二人とも出場できなくなってしまっている。君たちがクラシックの大事な時期、というのには理解しているのだがあちらからの強い希望でな。この3人がだめならば君たちに参加してほしいということだ。」

「そ、そうなんですな。」

「どうだろう、ゴールデンタイムで放送されるらしいし、かなり有名な番組だそうだ。君たちの新しいファンの獲得にもつながると思うのだが……。」

「はい！ はい！ 私、やりたいです！ 大食い大会出たいです！」

「「ス、スペちゃん!」「」」

『さあ始まりました春の集大成、今日ばかりは脚ではなく胃袋で戦っていたいただきます！ 春の団体戦！ 大食い大会の開催でございます！』

『今回の出場者たちにご出場頂きましょう！ クラシック戦線を戦い抜いたこの5人組が登場だ！』

「いっぱい食べます！」

（ちゃーとないなった。たいじゅうこわい。こんにちはふとりぎみ、さようならすぴーど。）

「とりあえず恥じない戦いをしようかと、はい。」

「エルも頑張りますヨー！」

「キングとして挑まれた勝負は買いますわ！」

「正直スぺちゃん以外のわたしらがなんで参加してるか、わけわかんないんだよね。」

『今回の出場者であるスペシャルウィーク選手は学園内の大食い大会であるオグリキャップ選手としのぎを削った実力者と噂されています！ 注目の選手です！』

『さあお待ちせいたしました！ この大会を初めてご覧になる方のた

めにも、忘れちゃったという方のためにも、今大会のルールをご説明いたしましょう！ ルールは簡単食べる側と作る側の暗黒デスマッチ！ 一時間の時間制限の中でどちらかが倒れてしまった方の負けとなります！ なお、調理側は勝負開始一時間前から調理と材料の搬入を行っております！』

『今回の調理陣として胃袋たちに挑戦する方々は、なんとドリームチーム！ 日本全国のトレセン学園から腕利きの強者たちが集まっております！ それでは今回のチーム代表を務める、あのオグリキャップ選手と毎日壮絶な戦いを繰り広げ覚醒したカサマツトレセン学園食堂料理長にお話を伺っていきましょう！』

「今回は各地の学園食堂で戦い抜いてきた猛者、各地のトレセン食堂の看板を背負った16名が集まっております。」みんなをお腹いっぱい笑顔にする”このためにも今日も全力でおいしいものを作っていきますよ！」

『調理側の意気込みも聞けたところで、そろそろ調理側に残された準備時間である一時間が無くなるうとしています！ このタイマーが0になった瞬間、もう一度一時間タイマーが起動し、壮絶な戦いが繰り広げられることでしょう！ さあ厨房から続々と料理が運ばれてきております！ ファイターたちの目の前に所狭しと並べられていく料理たち！ すでにこちら側からでは顔が見えなくなってしまうました！』

『さあタイマーが再スタートしようとしています！』

『……3, 2, 1, スタート〜！』

はい、え〜とここからはわたくしが解説というか進行というか？

まあやらせていただきます。あ、投稿者ですよ。はい、今回のイベントはですね所謂ファン獲得イベントなのですが引きがよろしくなかったようで大食い大会になっちゃいました。完全にコメデイ枠として扱われてますよね、スペちゃん……。運が良いと写真集の発売だったりミニライブ開催だったりいろいろあるはずなんですけどねえ？ スペちゃんの有り余る食欲がこの惨状を引き起こしてしまつたようで、はい。

ま、実況していきましようか。

今回はなぜか団体戦、ライバル枠のみんなと、まあ黄金世代5人衆となぜか各地にいるトレセン食堂職員との対戦です。ほら、例のチャーミングなカサマツ料理長も参戦していますね。

今回のチームでスペちゃん以外に戦力になりそうなのはグラスちゃんとエルちゃんぐらいですかね？ グラスちゃんは最近スペちゃんにつられて食事が上がってきているみたいですし、エルちゃんはもともとの食事が多めで、最近覚醒してくれたみたいなので頑張ってくれると思います。キングちゃんは例の5分アニメの方でキング盛り、を平らげていましたが今回戦力になるかどうか……。王者の意地に期待ですね。おそらく戦力外なのはセイちゃん。マウンテンと化した料理たちにちよつと顔を青くしてるので難しいかもしれませんね。

ま、スペちゃんは完全にお太りになられるのもう吹っ切れまして。

パクパクですわ〜！、してるマックイーンと減量がんばってください。

—————

「む！〜 どこかで馬鹿にされた気が……。」

「どしたのマックイーン？ あ！ どうせゴルシじゃない？」

「いえ、さすがにすべて彼女のせいではないでしょう、きっと別の方……。」

「待てえーっ！！ ゴールドシップツ！」

「そうカツカするなよエアグルーヴのダンナ。せいぜいトレーニングプールにゼラチン入れて固めただけじゃないか！ なんも問題ないだろ？」

「問題しかないわ、このたわけが！ 今日こそおとなしくお縄につけえい！」

「でもさでもさ、オグリキャップにシロップでも持たせて突撃させれば大丈夫じゃね？」

「……………確かに、か？」

「隙あり！ じゃあな、とつつあん！ あばよ~~~~~!!!」

「くっ！ やられた！ 待てえいツ！」

「いえ、ゴールドシップでしょうね。」

「だよね。」

と、言うわけで大会の実況をしていくのですが、各選手ペースが違いますね。

我らがスペちゃんはスピードなんか気にしない。おいしいものは味わって食べる！ を実行しています。おそらくですがこれは前回の大食いでオグリンに敗北したことから学んでおいしく食べた方がたくさん食べれる、を実行しているようですね。君の胃袋と満腹中枢はイカれてるの???

グラスちゃんとエルちゃん、キングちゃんはスピード重視のようでありあえず目の前の山を減らしてしまおうという魂胆のようです。満腹中枢が仕事してしまう前にできるだけ逃げたい作戦のようですね。

セイちゃんはもとの胃袋や大量に積まれた料理たちに圧倒されていくらくそままで速度は出せていません。ここからうまく抜け出すことができるのか、期待ですね。

ま、まあ恐ろしいことに味わっておいしく食べているはずのスペちゃんの消費スピードと速度重視したはずのみんなとのスピードがそこまで変わらないというのは悪魔たん……ですね。

スペちゃんの個性：「大食漢」が「暴食」になりそうで怖いですね、七つの大罪が始まりそうです。

時は進みまして試合も終盤戦。

はい、そこ。描写サボった、なんて言わない。

残り時間10分となったところ、いまだ健在なのはスペシャルウィークただ一人ですね。

30分経過ごろまでは何とかみんなついてきてたんですけど、最初にセイちゃんが寸胴鍋クラムチャウダーに敗北。続いて二度目の対戦となったキング対キング盛りに、キングちゃんが敗戦し一勝一敗で敗退。

その少し後にグラスちゃんは大好きなはずの和菓子を攻めていましたが、もう当分見たくない、と残し敗退。エルちゃんも得意な辛口料理と激戦を繰り返していましたが辛さと量のダブルパンチでカウントをとられ、そのまま机に伏せてしまい敗北。

そんな周りの惨劇に、ここにいる誰よりも多く食べているだろうスぺちゃんは「まだそこまで食べてないのになあ、なんでだろ？」なんてことを考えながらバクシンしている感じでございます。

そして、気になる厨房の調理側なのですがほとんど死屍累々。残っているのは16名中たったの2名、毎日オグリとスぺの二大巨頭を何とかさばいている中央スタッフと最近里帰りしたらしいオグリキヤップと互角の争いを繰り広げたカサマツ食堂料理長。両者ともに疲労困憊という感じですが目は死んでおりません。本来チームで対応しているはずの相手ですがたった2名で戦線を維持しています。

「おかわり！」

おっとここでスぺちゃんの悪魔コール！

気が付けばテーブルにはお皿の山、料理はすべて彼女に平らげられてしまっている！ 調理陣が必死に補給していたはずの料理が既に彼女のお腹に収まってしまっていた！

ここで間髪入れずにトレセン名物ニンジンハンバーグが飛び出したあ！

どこのトレセン食堂に行っても存在している人気メニューの超ド級
バージョン、合計5キロだあ！

しかし、あーっと！ 解説している間にもうすでに皿が半分がブ
ラックホールに吸い込まれたあ！

いったいこいつの腹はどうなっているのか！

おっと！ ここで厨房から連絡です！

今のハンバーグでこの大会のために用意していた食材がなくなっ
てしまったようです！

そして現在の時間は55分！ ……ということはある！

調理チーム逃げ切れず、食材という体力をすべて食い尽くした勝者
は！

！
黄金世代チームです！ 半分ぐらいスペちゃんが食べていたけど

と、いうわけでスペちゃんが大きいお腹をさらしながら司会者の方
に勝利コールをされているのをバックに今日はここまでとなります。
次回からはお待ちせしましたアメリカ合宿編ですね。

うん、それまでに絶対に太りまくっているスペちゃんの体重を絞っ
ておきます。

では、またお会いしましょう。

PART 60

ハイ、皆さまお久しぶりでございます。投稿者ですよ。今日もね、スペちゃんと一緒に頑張つていきましょう、そうしましょう。

えー、本日はですね。夏合宿、アメリカ出張編！、の間、何をしてくのかと、その準備をしていこうと思います。そうそうスペちゃん、わたくし皆様に説明しているのでパスポートの受け取りに行つてきてください。この前申請しに行つたときに説明したから覚えてますよね？

「はい、行ってきま〜す！」

……大丈夫ですかね？ ま、申請自体は終わらせてますし、もろもろ必要のものを持つて行つたはずなので大丈夫ですよ。

んじや、アメリカにいる間の方針を説明してきまショータイム！
今合宿の目標は3つ。

- 1, セクレタリアトからトラウマになつてしまい使用不可になつて
いる【ゲートの支配者】のトラウマ消しに付き合ってもらおう。
- 2, 海外遠征の経験を積む。
- 3, 現地にいる日本勢を探す。
- 4, 太らない!!!

の三点です。ん？ 四つあるつて？ んなもん知らねえ！

というわけで一つずつ解説していきましようかね。

一つ目、トラウマ消しですが、前回までこれをするのを思いっきり忘れていたというガバをやらかしていたのでそのリカバーに走ります。今回のアメリカ合宿に呼んでくれたのはセクさんですし、トラ

ウマにしゃがったのもセクさんです。なのでご本人に手伝ってもらってもらいましたよねえ！ と、いうわけです。あと普通に彼女滅茶苦茶強いので、一緒にトレーニングしてもらおうとも考えています。次の菊花賞ではスペちゃんのゲート技が火を噴くぜー！

お次の二つ目！ 海外遠征の経験積みです。シニア後になります。がスペちゃんには世界中のG1レースを荒らしに荒らししてもらって予定ですので、海外の経験というのはとっても大事。アプリ版にはなかったコンディションですが「時差ボケ」、「気候合わず」などのバッドコンディションが引き起こされたり、各地の芝に対応できなかったりと海外遠征にはいろんな不安が付きまといまいます。んで、今回の合宿でできるだけこういった経験を積んでほしい、というところがあるんですよね。

特にですが今回は海外芝に対しての理解を深めてもらうつもりです。先ほど調べてみたところ、今回お世話になる予定のセクさんが所属しているトレセンですが（アメリカさんはとっても広いので日本と言う中央レベルのトレセンが結構数があるそうです。ちなみにスズカ先輩がお世話になっているトレセンと同じところみたいですよ。）、色々な芝のコースがあるみたいでして、軽めとか普通めとか重めとかが集められた室内練習場みたいなのがあるみたいでして、そこで頑張ってもらおうかなあ、と考えております。やっぱり土地があつて金がある米帝は違うなあ、と。

んで、三つ目。こちらでも海外遠征時に必要になりそうなやつですね。これは単純に海外遠征時にサポートしてくれそうな人を探しておく、ということになります。海外遠征の時期になってしまうとスペちゃんの能力もほとんど完成しているのでトレーナーさんはいらないんですが、レース登録などの管理をしてくれるマネージャーさんが必要になってきます。まあわたくしがやってもいいのはいいんですがやっぱり本業の人がいいでしょうと言うことですね。

現在お世話になっているスピカトレーナーさんは国内に残るスピ

カメンバーのために離れられませんし、実はですが国内でフリーであるそういった海外で対応できる技能を持つている人がほとんどいなくてですね。(と、言うのも日本勢があんまし海外に出て行っていないのが理由になります。まあこの時期日本は海外で勝てないといわれてましたし、縮こまってしまるのは仕方なし。)

というわけで海外で見つける必要があるわけですねえ！(例の構文)

ま、でもこの目標はそこまで重要じゃありませんし、運が良ければ見つける。という感じですかね。

「最悪わたくしが担当できますからね。」

んで、最後。 太らない。

コメント欄の方で気が付いていた方も若干んにや、いましたがアメリカの食事はやばたにえん、です。

カロリー爆弾がごろごろしてます。

まあもちろん節制したり、その分動いたりはするんですけど、やっぱりアメリカの食事で育ったアメリカウマ娘と違って、スペちゃんはそういった食事になれてないと思います。

つまり、「んくちよつと物足りない！ カロリー高いけど食べちゃえ！」になってしまう可能性がマシマシなんですよねえ。……なんか言ったらマジでそうなる気がしてきたな。頼むから毎食毎食「太り気味」連発とかやめてくれよ(n敗)。

んま、こちらでできる限り注意喚起して、後はトレーナーさんとかスズカ先輩に何とかしてもらいましょう。

わたくしにスペちゃんの暴食を止める力はないので……。

こーんな感じですかね。ま、色々ありますが頑張っついていきませう。

んじゃ、また次回。でわでわ。

（あ、スぺちゃんにあっちで手に入らないかもしれないから今使ってる靴と蹄鉄を多めに買って持って行かせないと。帰ってきたら一緒に買いに行きませんかねえ。……そういえばあっちの芝用に蹄鉄も変えないといけないのかな？”知っている”けど実際どうかは私にはわからないからなあ。一応そういったことも調べ直しておかないとね。一応あっちでも買えるように予定よりも多めに換金させておかないと……。）

—————

ピスピース！ ウマ娘宣伝担当の……、あ、いけね。こっちじやまだやってなかったわ。

ま、とりあえずゴルシちゃんどうぞ！

今日はだな、スピカとカノープス（マチタン、イクノ加入済み）で行くアメリカ合宿について説明していくぞ！

ちなみにカノープスは重賞ウイナーが二人も出てきた、ってことで例の二人が加入したみたいだぞ。後輩、ってことになるけどこの世界の時間軸は色々狂ってるから、まあそこらへんは仕方ないな、うん。

んでさんでさ、アメリカに行くんだけどよ。やっぱり乗るならカプコン製の飛行機だよな！ ヘリコプターに乗ろうと思っただけどさすがにアメリカまではいけないみたいだからおとなしく飛行機にした

ぞ！ ゴルシちゃんてば、えつらあいく！！ 道中何が起きるか知らんけど。

セクレタリアトから送られて来た飛行機のチケットは普通で面白くなかったから、ゴルシちゃんだけ特別に変えておいた！ なんか行き先が静岡とかラクーンとか書いてあったけど、最終的にはアメリカにつくみたいだし大丈夫だろ！

いや、ゴルシちゃんだけ楽しそうな特別便なんて、全くワクワクが止まんないぜ！

んで、アメリカ合宿なんだけどき。なんでも8月を丸々使つて行みたいでな。一応交通費とかはセクさん持ちで、宿泊地とかはあつちのトレセンがいろいろしてくれるみたいだな。たぶんあつちにある日本ウマ娘寮とかに入るんじゃないかね？ スズカとかシービーとかに会えるから楽しみだよな。

あ、言うの忘れてたけどここで言う”投稿者”はシービーのこと知らないからスゲーびっくりしそうで楽しみではある。まああいつ、結構おめめ節穴、みたいなどこあるから仕方ないよな。とんでもねえ見落としてっし。

「あ！ ゴールドシップさん、こんにちは！」

「お？ スペじやねえか！ パスポートか？」

「はい。出来上がったそうなので今から受け取りに行くところです！
あ、それと宝塚記念三連覇！ 本当におめでとうございます！ す
ごいですよね！ 三連覇なんて！」

「いや、照れるでゴルシ。」

「次は凱旋門賞を目指すんですよね！ うわー、すごいなあ！ わたしもいつか走ってみたいなあ。」

「うんうん、スペなら2年後ぐらいに走ってると思うぞ。……あ、それと凱旋門でゴルシちゃんに金賭けるんだったらやめといたほうがいいぞ。」

「ふえ？　なんでですか？　それとお金？　賭ける？」

「いや、ほんとだったら爆発しそうなもんを無理やり押さえつけて宝塚勝つちまったからな、多分次ぐらいにはゴルシちゃん耐えきれずに爆発しそうな気がするのよ。一応凱旋門までなにも走らない予定だったから、な。」

（『おおーっと、どうしたゴールドシップ！　凱旋門という大舞台なのにゲートから一歩も出てこないぞ！　何故か両手をあげて万歳している！　すでにゲートは開いている！　走ってくれゴルシ!!!』）

（「……なんか走る気失せたでゴルシ。」）

「むむ!?　なんか今みえちまったぞ!?　あいつフランス観光に行っただけとか言われちまいそうだ！　こうしちゃいられねえ！　この未来を回避するためにもタイムトラベルすつぞ！　さらばだ、スペ!!!」

「ふえ????」

そういつてワームホールのものを急に開いてゴルシちゃんは未来に消えていった。

彼女を見た者は…

「あ、そうだ。アメリカに行く前に今使ってる靴と蹄鉄買い込んでよ。んじゃ。」

閉じかけたワームホールを無理やり開き直し、顔だけ出してそういつた彼女は、今度こそ未来に向かった。

彼女を見た者は、もういない。

と、書こうとしたが彼女のことだ。明日には帰ってくるだろう。

「あれ？　なんかメモみたいなのが落ちてる。」

『ゴルシちゃんからみんなへ。ネタ注意、だぞ☆』

いまさらである。

ちなみに未来改変を起こし、未来ゴルシは凱旋門を普通に走れたよ
うだ。

PART 61

いや、最近の飛行機は思ったより快適ですねえ！ あ、投稿者です。

現在われわれスピカ&カノープスはアメリカ行きの飛行機の中で。カノープスの方もいつの間にかフルメンバーになってますし、結構な大所帯ですね。

あ、それとなぜかゴルシちゃんだけが違う飛行機に乗っていきましてけど何なんでしょうね？ その飛行機カプコンって書いてたけど大丈夫なんかな？

あ、そうそう。ゴルシちゃんと言えば面白いことがありまして。今年行われていたゴルシちゃんも出走していた宝塚記念のことなんですけど……。

わたくしもスペちゃんと呼びに行っていましたがああ、あのゴルシが120億事件を引き起こしてはいませんでした。つまり三連覇クンですね。……お前本当にゴルシか？ 真面目に走らないことよりも真面目に走った後の反動の方が怖い彼女ですが……、スペちゃんに被害が出ないことを祈りましょう。

なんか最近祈ってばっかだな、私。

それでね、スペちゃん。

いくら約一月ぐらい日本食からおさらばするって言ってもラウンジであんなにワシヤワシヤと食べなくてもいいと思うの。

(うー！ でもスズカ先輩から食べといたほうがいいって……。)

まあ、ね。確かに出発前の連絡とかで色々喋ってるうちにそんな話

してましたけどもねえ。あつちでまともな日本食にありつけるか解りませんからそう言ってくれたんだと思いますけどね……。体重管理する側の気持ちも、ねえ。トレーナーさんがまた顔に手を当てて「あちやく」って顔してましたよ。

(いや〜、照れますね〜)

いや褒めてねえし。……ま、あつちについたらかなりの減量練習&食事メニューになるので覚悟しておいてくださいよ。

(え〜!)

はい、そこ! 文句言わないの。

—————

「ターボ、アメリカに行くのも初めてだしみんなと旅行行くのも初めて! う〜、ワクワクしてきたあ!」

「ほらほら、他のお客さんもいるから静かにしなきゃ。でもあたしも初めてだし興奮しちゃう気もすごく解るんだけど、さ。」

「……それにしても面識のない私たちが参加してもよかつたんでしよ
うか?」

「そうそう、なんか悪いなー、つて。」

カノープスの新しいメンバーであるイクノダイクタスとマチカネタンホイザが不安そうに尋ねてくる。先輩後輩、つて感じはあんまり好きじゃなくて、同級生みたいに接してたから忘れてたけど、二人は

セクさんと面識がなかったんだった。

「大丈夫だと思うけどなく。それにダメだったらわざわざ二人分のチケットなんて用意しないでしょ。」

「そうそう！ セクさんいい人で太っ腹だから大丈夫！ そうだよなトレーナー、……って、あれ？ どこ行った？」

「先ほどスピカのトレーナーさんにあちらに着いてからの相談、という事で移動されましたよ。……ですが入ったチームの最初の合宿がアメリカで、招待してくれたのがあのセクレタリアトというのはなんというかすごい恵まれていますね、私たち。」

「だよな。うー、ちよつと緊張してきた。」

まあ確かに私も初めて会った時は色々緊張してたけど、結構フレンドリーだしそこまで心配しなくてもいいと思うんだけどねえ。

前走の日本ダービーの結果はよろしくはなかった。全力を出したと胸を張って言えるレースではあったが5着。皐月賞での3着がまぐれ、伏兵効果、世間にいろいろ言われた。

自分でも理解はしている。私たちの先頭を走っている人たちに私が太刀打ちできるものがないということ。今はまだよくてもこれから引き離されることは目に見えている。

だけど、こんなところで諦めるのは間違ってる。

わざわざ呼んでもらったんだ。結果が見えていたとしてもやれるだけやってみなくちゃ、ね。

—————
ところ変わって日本トレセン学園、美浦寮の一室。

「くえくえ、今日も疲れたデース。ただいまマンボく。」

「ほらエル。自室について気が緩むのも解りますが大きい声を出したらだめですよ。もう遅い時間ですし。」

「おっと！ そうでしたネ。 マンボも静かにしてますし、アタシもそうしなければ！ ……そういえばマンボのご飯がまだでしたネ、ちよつと待つててくださいヨク。」

そう言いながらペットである鷹のマンボのエサを取りに行ったエル。臯月賞が終わったときから、特にダービー直前まで見ることできなかつた元気なエルが見れてうれしく思う。

この前なんか無表情で淡々とマンボにエサをやり続けるエルを見たときはなんて声かければいいかわからなかつたんですもの。彼女が追い詰められてしまうほどまで、何もできなかつた自身を恥じ入るばかりですが、元の彼女に戻ったことを喜ぶくらいは許されるでしょう。

「おおく！ 今日はいつもよりガツガツですネ！ 待たせてたみたいでごめんね、マンボ。」

エルに元気がなかつた時、彼も心なしか元気がなさそうでしたが今は違うみたいです。

「そういえばエル、そろそろ合宿時期が迫ってるけど準備はできてるの？ 去年みたいに前日に準備を手伝うのは嫌ですよ、私。」

「さすがに今年はダイジョウブですって。もう準備は進めてマース！」

「ほんとですか？ 直前に泣きつかれても手伝いませんよ。」

「うっ、それは困るのデスガ……。あ、そういえば今年はセイちゃんも合宿場の方でするみたいですヨ。なんでもレース勘を鍛えるのとおその設備を使いたいから、って。」

「あら、そうなのですね。確か彼女が所属しているチームは情報の秘匿とかで別の場所で行うのが恒例だったと聞きますが何かあったのですかね？」

「うーん、たくさん人がいるところがいい、って言っていましたケド、何でしょうね。エルにはサツパリ。」

「まあ一緒に練習できるのはうれしいですし、今は単に喜びましょうか。……ということは私達とセイちゃんは学校の合宿場、キングちゃんは去年行った場所と同じところ。スペちゃんたちスピカはアメリカですか。」

「海外合宿なんてすごいですよネ。これ以上差を広げられないように頑張らないと。……でもおハナさん不思議そうにしましたよね？」

『どこからそんな金出してるんだ？』って。」

「スピカは部費のほとんどが食費とゴールドシップ先輩の後始末に使われている、って有名ですもんね。ほんとにどこから出してるんでしょう？。」

ほんと、不思議ですよネ。おハナさんも『あいつの飲み代立て替えてやったの何回目だったけ？』って愚痴ってましたし、スピカトレー

ナーさんは資金繰りに苦勞なされているイメージがあつたんですが……。あちらに何か伝手でもあるのでしょうか？

「そういえばエル。今年もマンボにはついてきてもらうのですか？」

「いえ！ 今年のマンボはお留守番です！ マンボのエサを作つてくれる食堂の方が面倒見てくれるんデス！」

「ああ、道理で。マンボのエサが最近豪華になつたのはそれででしたか。」

「帰つてきたときにスペちゃんみたいになつてないか心配ですが、あの人なら安心して任せられマス！」

まあ案の定というべきか、合宿から帰るとマンボは太っていた。アメリカから帰つてきたスペちゃんも心なしか丸くなっていた。二人して大笑いしてしまったことは秘密である。

—————

（お、空港が見えてきましたね。ほらスペちゃん窓見てみ。）

あ、ほんとだ！ うくん、やっぱり日本と違う感じがするなあ。北海道から東京に来た時もすごい！ つて思ったけどなんだかそれ以上な気がする。

（ま、経済規模が違いますし、そんなもんじやないですかね。……それとスペちゃん、英会話はちゃんと頭に入れてきましたか？）

うっ！ ちよつとまだ不安です。

(ま、まだ2年生ですし大丈夫ですよ。トレーナーさんやスズカ先輩がある程度ついてくれるでしょうし、最悪私が出張りますから安心しなさいな。)

おう、なら安心だね。アメリカ観光楽しむぞ〜！

(観光もいいですけどちゃんと練習もするんですよ。)

解ってるって！ 私、負けないもん！

(セクさん。)

うぐう！ あ、あの人はちよつと……。

(はいはい、プレッシャー返しされたので苦手意識持ってるのは解りますけどこの合宿の間は色々とお世話になりますからちよつとしますんですよ。)

は〜い。

(ちよつと調子乗り始めてる、のかな？ この合宿がタメになるといいんだけど……。)

PART 62

「セクさんだあ！」

素晴らしいながらこちらに向かって走ってくるターボ。

まったく、変装して迎えに来てるから気を付けてほしいところだけど、まあそれが彼女のいいところだしね。

半年前よりも速くなっている足で全力タックルしてくるターボエンジンを受け止めるために姿勢を低くする。

今日は待ちに待った“彼女たち”が到着する日。自分の教え子であるターボとネイチャ、その後輩たち。迷惑をかけたお詫びとして呼んだスピカ、そしてスペシャルウィーク。

彼女たちがどこまで成長しているか、純粋に楽しみだ。

同じチームメイトということでのうちのトレセンに留学しに来ているスズカも連れてきたが、物静かな雰囲気彼女の耳としっぽがしきりに動いていることを見るに正解だったようだ。主戦場が芝の彼女とはそこまで話したことはなかったが、彼女の知られざる一面を見れたようだ。

思っていたより大きめの衝撃に驚きながら片足を少し後ろに下げて力を逃がす。何とか後ろに倒れることだけは避けられたようだ。よくドラマとかで見る受け止める側を中心としてくるくる回るのをしてやろうと思ったができなかった、無念。

「セクさん久しぶり！ 元氣してた!？」

『相変わらず元気だなあ、ターボは。もちろん元気にしてたよ。』

「もう、ターボ。結構強めなタツクルでしたけど大丈夫でしたか？」

『お、ネイチヤも久しぶり。大丈夫、鍛えてますから。それよりネイチヤはいいの、飛び込んでこなくって？』

「わ、わたしはいいですつてえ、恥ずかしいですし。」

『む、そりや残念。』

ターボにつられてネイチヤ。その他の面々も集まってきたようだ。隣にいたはずのスズカも少し離れたところでスピカメンバーに囲まれている。……もう少し時間がかかりそうだし周りにそこまで人もいない。なら私たちももうちよつと話し込んでもいいかな。

—————

たぶん、このチームのことだから空港についたらすぐに囲まれると思つて連れてきてもらったセクさんから離れてたけどやっぱり正解だったみたい。

案の定囲まれちゃいました。

昔はこういった騒がしいのは好きではなかったけど、スピカのはまた別ね。

頼りないけどちゃんと私たちを見てくれるトレーナーさん。

いつも競い合っているウオツカにスカーレット。

日本で見た時よりも何周りも強くなっているテイオーにマツク

イン、

そして

「お久しぶりですスズカ先輩！」

スペちゃん。

明らかに強くなっている。ともに走らずとも見ればわかる。先輩で、彼女より長く走っているはずの私が危機を覚えるほどに。

確かに以前の私、留学する前の私なら確実に負けていただろう。だが、私も確実に階段を上がっている、強くなっている。

今すぐにも彼女と競い合いたい気持ちはあるけれど、今はするのとじゃない、よね。

「久しぶりね、スペちゃん。」

今は再会できたことを喜ぼう。競い合うのはまた今度だ。

「そういえばゴールドシップは来てないのかしら？」

「なんだか違う便に乗ったみたいで、現地集合らしいです。」

「ええ…？」

—————

どもどもみんなのアイドルウマ娘、ゴルシちゃんだZO！

実は今日から実況風小説の中で実況をやってやろうとしたけど感想欄でさすがに怒られそうだからやめておくのだ。おら、もつと褒めろよ。

ちなみにやろうとしたのは静岡三部作とバイオな危機のラクーンの奴を実際に体験しながらやろうとした。

さすがにクロスオーバーのタグ付けしないとイケなさそうになるから止められたんだよな……。

んでき、いまさら？　なんだけどお前たちの言う走者くんちゃんの本体ってどこらへんでオープンしたらいいんだろうな？　一応作者の頭の中覗いてみたところブレブレだったのがようやく固まったみたいだったから出そうと思ったら出せるんだよな。

予定では今年の有馬記念のところぐらいで出すつもりらしいから待てる奴は待つて、待てないやつは「オラ、あく出せよ。」ってあいつの尻蹴っ飛ばしたらいいんじゃないかねえの。私知らんけど。

あ、それとお詫びなんだけどテイオーのケガフラグのこと全く持つて失念していたみたいで申し訳ないのでゴルシ。本来はダービー後にしようと思っただけでエルの描写してるうちに全部忘れちゃってたんだよな。

これも全部自分の身の丈に合わない群像劇に手をだした投稿者つてやつの責任なんだ……。あとで溶鉱炉に沈めとくから許してやつてな。

まあそのせいで次の菊花賞はすっごく荒れそうだよ、ということを感じておいてくれよな、とのことだぞ。

んじゃ。またな。次回のためにちよつと用意がんばったのでちや

んで見てくださいな。明日も同じ時間に投稿するらしいぞ。

PART 63

「こちらがこのトレセン学園校舎でございます。我々は夏合宿の間のみの滞在となりますのでほとんど行くこともないかと思いますが、担当トレーナーがこちらの職員室にすることもあるかと思しますのでとりあえずはそこまでのルートを頭に入れておけば大丈夫かと思われまます。」

ほへー

「お次はこちら、室内練習場です。と、いつでも日本の物とは違い、ドーム内にあるターフ、と言えば解りやすいでしょうか。そのままでは育成しにくい各地の芝を取り扱っております、ここだけで世界中の芝に対応できると言っても過言ではありません。海外レースに興味のある方は担当トレーナーを通じて本部の方に連絡していただければ使用できると思われます。またチームでの練習は割り振りが決まっておりますので先ほどお渡ししたパンフレットの方をご覧くださいませ。」

そうなんだー！

「あちらは屋外練習場。日本にあるものと似ておりますがこちらはダートの割合が多いのが特徴です。ダートも砂と土などのバリエーションもありますので初めて見る方も多いのではないのでしょうか？日本では砂が一般的ですもんね。ちなみにこちらのトレセン学園はダートに強いウマ娘が多く在籍しているせいか特にダートに力を入れている練習場とも言えますね。」

すつごーい！

あ、どうも投稿者です。

現在アメリカに無事到着し、スズカさんやセクさんとも再会できたのでこちらのトレセンを見学させていただいております。本来ならスズカさんやセクさんが引率しながら紹介してもらおう予定だったんですが、空港から出ると急に出てきた葦毛のキレイなお姉様が待ち構えておりまして、彼女に連れられて見学しております。

「日本トレセン学園のスピカ、カノープス御一行様、お待ちしております。今回引率を担当させていただきます”船金”と申します。よろしくお願いいたします。」

空港にわざわざ全員乗れる中型バスと運転手と引率のお姉さん用意してるとはセクさんも準備いいですねえ(すつとぼけ)、まあセクさんもスズカ先輩も『あれ、そっちで何か用意してくれてたのかな?』て顔してましたけど。

(ねーねー、あのお姉さんどこかで見た気がするんだけど知ってる?)

ん? スペちゃんあの人わからんの? まあ周りのみんなほとんどわかってないみたいですけど……、あ、スピカトレーナーさんは解ってるみたいですね。

(うん、知り合いだったっけ?)

まあ確かにキレイにおめかししてますもんね。服もどこで手に入れたのか観光会社の引率のお姉さんですし、髪型も後ろで纏めて話し方もまともですもんね。

ま、ぜんぜんわからん状態のスペちゃんをほつとくのも悪いですし教えちゃいましょうか。あ、解っても声上げたりしちゃだめだぞ。た

ぶん最後にドッキリ成功！ とかすると思うので。
とりあえずあのお姉さんの髪を下した状態を想像しましょう。

(うん。)

お次にサングラス。

(うん?)

最後にあの何とも言えない特徴的な帽子。

(帽子?)

あとはお洋服を真っ赤に染めればはい完成、ゴルシちゃんですね。

(ふえ、ゴルシ先輩なの!?)

そうそう、ゴルシちゃん。まともにしてたら誰かわからんウマ娘ラ
ンキング堂々1位の彼女です。

今日は引率の方に化けてなんかやらかすつもりですね。

「では最後に滞在中の宿泊施設となります海外寮のご説明をさせていただきますね。こちらの建物は寮、という名はついておりますが実質的には海外からやってくるウマ娘たちの宿泊施設になります。皆様のように短期の留学や年単位の長期留学の方もここを使用されます。今月の団体宿泊予定はスピカ、カノープスの皆様のみとなっておりますが、個人で宿泊されている方もいらっしやるので、他の方のご迷惑にならぬようお願いをつけます。」

「ちなみに、となりますが現在日本から留学されている方はサイレンススズカ様、ミスターシービー様のお二人となります。スズカ様はこ

ちらにいらつしやるようですので後ほどシービー様にもご挨拶なされるのはいかがでしょうか。」

「ファツ！ シービーおんの!? デジマ!?

ふえ、こんなこともあるんですね。はい、このようにルドルフと同時期、以前の英傑の皆様は基本的に海外の各地にランダムで散らばっています。まあ理由としましてはいまだに国内でのドリームシリーズの開催がなされていないことと海外で腕試しじゃ！ してる人が多いからですね。海外遠征時に会えたらいいなあ、程度に思っていましたがまさかここで会えるとは……、これは予定の書き直しですねえ！

ちなみに会長は生徒会長として学園を引っ張るのとURRからのお願いによって国内に留まっているそうです。まあスターみんなが国外に行っちゃうと困るもんね。ん？ マルゼン？ すまない、チョベリグさんのことは良くわからないんだ……。なんであの人まだトレセンに在籍してるんですかね？ スペの祖父母世代なんだけだなあ。

「それでは、私からは以上となります。皆様がよき時間を過ごされることを勝手ながら祈らせていただきます。」

「あれ？ ゴルシ先輩は参加しないんですか？」

「「「「「えっ?」」」」」」

あ、スペちゃん口に出ていますよ。

「え、あつ！ そ、その〜。」

「フツフツ、ばれてしまったのは致し方なし！ そう、引率の“船金

「とは仮の姿！　そう、私の正体とは！」

着ていたおベベを思い切りつかみ、勢いよく投げ捨てる！

「そう！　完全無敵のゴールドシップ様のご登場だ！」

そこには何故か真つ赤な勝負服に身を包んだゴールドシップの姿が！

と、いうわけ？　今回はここまでです。

華麗な登場に拍手しているカノープス＋セクさんとなんか余計なこと言ってみたみたいでスピカメンバーの襲撃を受けているゴルシちゃんを背にお別れです。

あ、そうだスペちゃん。セクさんと一緒に練習できないか今のうちに頼んどいてください。

出来るだけ早めに目標を達成してしまいたいですしね。

ではは〜。

PART 64

「あら、フクキタル。何見てるの？」

「ああ、ドーベルさんですか。今年のダービーを、ちよつと。」

「ど、どうしたのフクキタル！　すごく元気がないけど!?!」

「あはは、すみません。レースとか、走ることに関してならまだよかったですですけど。……ほんとはこんなこと言ったら。いえ、思うことから駄目な気がするんですが、……彼女がうらやましいな、と。」

フクキタルが見ていたのは今年、ミスターシービー、シンボリルドルフ、ナリタブライアンに続いて新しく三冠になろうとしているスペシャルウィークの動画だった。

それを見るフクキタルの顔は私が見たことのないような顔をしていた。

ただ、すごくつらそうな顔だった。

シラオキ様、私、私たちの魂の御先祖様。

辿った道は違うけど、あなたと私は似ている。

だから考えてしまう。

「彼女がよくて、何で私は駄目なんですか。」

もう自分の中で区切りがついたと思っていたけどそうじゃなかったみたい。

お姉ちゃん、あなたは私を見てくれますか？

—————

『んじや、早速始めましょうか。申し訳ないけど付き合える時間はそこまでないからペースはやめで行きましょう。』

『はい！ よろしくお願いします！』

『それで、練習内容は……、ゲート内、というかプレッシャー関連か。私とのレース時に私がやらかしたプレッシャー返しが原因でその後うまく使えなくなった、と。……なんか本当にごめんなさい。そこまですぐとは思わなくて……。』

『い、いえ！ 私の問題なので大丈夫です。』

『そう言うなって。明らかに私が原因だし、おもいつきし迷惑かけてるからその改善全力で手伝わせてもらうよ。それじゃあ私との練習はプレッシャーのかけ方の再習得とプレッシャーをかけられた時の対処法。あとあの時みたいにプレッシャー返しをされたときにどうするか、つてのをしていきましょうか。』

どうも皆様ごきげんよう、投稿者ですぜ。きょうはスペちゃんガセ

クさんと一緒にプレッシャー関連のスキルについての再履修をしているところを裏に始めて行きますね。

ちなみに表記が変わっているところから解ると思いますが現在会話で使われている言語は英語です。いくら成績がいい方だといっても現在中学2年生のスペちゃんにはちよつとばかり英会話、しかもこういうたレース関連の専門用語とかも出てくる場では理解できないことも多いのでわたくしの方からもいくらサポートしてます。

こういった言語関連のサポートはある程度の英語成績を修めたまま高等部に上がれば改善されますが、まあそこまで我慢ですね。実はシニア級2年目から海外遠征を始めるのもこういった理由があったり……。このサポート普通に英語に対する理解が求められるのでつらたんなのです。

ま、そんな話は置いてプレッシャーについての説明がまだだったと思うのでしていきましようか。

現在発見されているのは3種類。全体散布型、一点特化型、反撃型の3つです。

全体散布型はスペちゃんが保有している【ゲートの支配者】のようなレース出走者全員に影響を与えるタイプのスキルですね。こちらは分散するため威力が出にくかったり、対応されやすかったりします。が全体攻撃なので便利です。有志諸君(wiki)の調査の結果、総合ステータス差によって効果に差が出る【ゲートの支配者】も例にもれず回数を重ねることに効果が薄れていきますね。

お次は一点特化型。例としてはアニメでもあったマックイーン対ライスでの“ついていく”戦法ですね。自身ができるプレッシャーの容量をすべて一つにぶつけるわけですから効果も大きいです。対応もされにくいです。ただ、その相手がキャラ固定、となったりしやすいので使い勝手は悪め。ライバル枠の子たちや特殊な進め方をしているプレイヤー以外は持っていたり使用しているところはそんな

に見ません。あとスペちゃんに取得してもらうことは多分ないと思います。

最後に反撃型。スペちゃんがセクさんに食らったやつです。相手からプレッシャーをかけられた時、と使用条件は限られますが効果は非常に高め。スペちゃんがスキルを使用不可に追い込まれるほどなのでそういったデバフも撒ける高性能だったりします。ま、その分習得難度も高めですね。

んで、今合宿でスペちゃんにやってもらうのはトラウマを克服してもらっただけの予定でしたがセクさんも結構乗り気みたいですし、プレッシャー関連のスキル獲得とプレッシャーになれる作業の両方を手伝ってもらいましょう。

と、いうわけでよろしくオナシヤス！

『……なるほど今やってるのは全体にかける感じか。んじゃ、それメインでサブにプレッシャー返しね。』

うむうむ、いい感じで指導してくれていますね。このままほっといても大丈夫そうです。

その間にわたくしはスペちゃんが渡された夏合宿の間のスケジュールの確認でもしておきましょうか。

ではでは皆さんこの辺で、次回はスペちゃんがスズカ先輩と併走の約束をしていたのでそこら辺からだと思えます。

それではごきげんよう！

録画終了、つと。

早めに予定決めとかないとスぺちゃんも困るだろうし早速確認しましょうか。

なんでもセクさんが色々考えて作ってくれたみたいですしちよつと楽しみですね。

ん、最終日の夜にキャンプファイヤー、ですか。楽しそうでいいんですけど……。

火、火だよなあ。

さすがにあれの前でいつも通り話せる気はしませんし、別行動かな。収録も何かでごまかそう。

スぺの方も何か理由を付けて不参加にしてもらいましょう。

PART 65

「ここは……」

気が付くと草原、小高い丘の上。見慣れた故郷の地。

小さいころに何度も走り回った私だけの遊び場で練習場。

「懐かしい、なあ。」

口からこぼれ出た言葉に驚きながらも、自身が既にホームシック、というものになっているだろうかと思案する。まだアメリカに来てから数日でこれだ。この先私は大丈夫だろうか。

そんなことを考えながら昨日までのことを思い出していると、ふと自分の手に目が行った。

手が透けており、うつすらと輪郭を保っている。着ていたはずのジャマもいつの間にか勝負服だ。

「ああ、いつものか。」

”私”の記憶。私が見たこともないその記憶を見る時間が始まったことを理解する。

ここでの私はただの傍観者。こちらから出来ることは何もない。

ただ、流れに身を流すのみ。

「おねーちゃん！ おねーちゃん！ はやくはやくー！」

小学校に入る前ぐらいの私だろうか。

写真でしか見たことのない小さな私がこちらに向かって走ってくる。

「お！ スペは速いですねえ。 こりや将来は私らみたいにスプリンターですか？」

栗毛のどこか私に似た女の人がちらに向かって歩いてくる。”
お姉ちゃん”らしい。

「だっておかーさんのごともで、おねーちゃんのもうとだもん！
……それですぷりんたーってなに？」

「ん？ キャンペン母ちゃんや私みたいに短い距離を走るウマ娘のことさ。」

「??？」

「ふふ、まだちよつと難しいか。ま、とつても速いやつのことだよ。」

「じゃあわたしもすぷりんたー？」

「ああ、もちろん。それにもしかしたらもつとすごいステイヤーになれるかもしれないぞお。」

「じゃあわたしもすていやーになる！ ……でもおねーちゃんはとつてもすごいのにすていやーじゃないの？」

「はは、私はちよつと無理かなあ。スペにはまだ距離の違いなんてあんまわかんないだろうし、たぶんどつちを見てもすつごくくない！
で終わると思うぞ。」

「むー！ わたしわかるもん！」

「ははは、怒んなくて。それに今度見に来るんだろ？ 中央と違って地方はそんなにデカくはないけれどどここと違っていろんなウマ娘たちとも会えるし、でっかいレース場もある。ま、楽しみにしてるといえよ。」

そう言いながら栗毛の女性は小さい私の頭を撫でた。

……なぜだろう。”見たことのない”記憶のはずなのに私はこれを知っている。

夢という形で思い出そうとしている。

でもなぜかこれ以上近づくと駄目な気がする。

私はこの先を、自分がなくしてしまったものを知りたいはずなのに”私”はそれを強引に止めようとしている。

気が付けば体が前に進もうとしていた私をこちらにとどめるように”小さい私”が泣きながら私の服を引っ張っている。この先にあるものを恐怖しているのだろうか。必死に私の服を持ち、行かせまいと引っ張り続ける。

目の前には私の姉がいた。

触れることのできない私たちが、感じることでできなかった暖かさがゆっくりと私を包み込む。

「無理に思い出す必要はないよ。」

いつも私を導いてくれる声を聴きながら私の意思に反して、私の目は閉じていく。

イヤだ、もつとここに居たい！ お姉ちゃんの暖かさをもつと感じ

たい！

「さ、もう起きる時間だ。スペは、今、を生きている。無理に過去を知る必要はない。……ただ、つらくなったらいつでもこっちに来ていいんだからね。」

目が閉じ意識が暗転しようとしている。

イヤだ！ 忘れてしまうなんて！ もっところに居させてほしい！

目の前にいる人の顔がかすみ、誰だか解らなくなっていく。

ゆっくりと世界が閉じ、まっくろになった。

「ッ！」

勢いよく体を起き上がらせる。ここは……

(お、スペ。よく寝たみたいだね。……ん、どうしたの？　なんか変な夢でも見たの？)

そっか、今はいつものトレセンじゃなくてアメリカに合宿に来てるんだっけ。

「ふわあく、おはよう。うん、なんかすごくいい夢を見た気がする。どんなのだったかは覚えてないけど……」

(ま、夢なんてそんなもんでしょ。さ、今日は朝からセクさんとの秘密特訓にスズカ先輩と併走の約束もあるんでしょ。わざわざお願いしてるのに遅れちゃったらダメですし、横で寝てるスズカ先輩を起こさないように準備していきましょう！　あ、スズカ先輩にちゃんと書置きしておくですよ。)

「はい。」

アメリカに来てからわざわざ同室にしてもらったスズカ先輩を起こさないように静かに動き始め、日本とは違ってすごく大きい部屋に戸惑いながらも用意を進める。

にしてもすごく幸せな夢を見ていた気がするんだけどなあ……。どんな内容だったんだろ。

(ミス、スペー！　ハリーハリー！　時間迫ってますタイ！)

「え！　ほんとだ！　急がないと！」

—————

【サイレンススズカ視点】

海外という舞台は思っていたよりも広くて、大変だった。みんなに見送られて一人でやってきたアメリカ。

シービー先輩やアメリカでできた友人たちのおかげで寂しくはなかったけどどこか物足りなかった。

やっぱりスピカ、隣にスペちゃんがいなかったせいだろうか。

彼女が入学してからほとんどの間、一緒に毎日練習していたせいか、隣に彼女が走っていないと違和感があった。

スペちゃんと一緒に走っている今だからこそ理解できる。

自分では普段通りに走っていたとしてもどこか抜けている。

シービー先輩のトレーナーさんにそのことを指摘されたとき、その理由をわからずに進んでしまった私はアメリカで最初に走った復帰レースで4着だった。復帰明けて体がああの時の速さに到達できていなかったということもある。だけど一番の理由は私が集中できていなかったということだ。

自身を奮い立たせる、負けたくないという気持ち。私の新しい走る意味を与えてくれたスペちゃんが近くにいないことで、これほどまでに力が出せないとは思わなかった。情けなかった。

本当なら復帰レースに出たということはすぐにでもスペちゃんに知らせるべきだった。

でも私の惨めな姿を見られたくなくて言うことができなかった。彼女に電話することができなかった。情けなかった。

そんなうじうじしていた私を見かねたのか、シービー先輩は私を引つ張って寮内のテレビまで連れて行ってくれた。そこにはスペちゃんも、皐月賞に出走している映像が流れていた。

強かった。すごかった。

一緒に走っていた時と比べて格段に強くなっていた。中盤からのごぼう抜き。

止まっていた私を後ろから思いつきり前へ押し出してくれたような衝撃だった。

私が止まっていたらスペちゃんはすぐに私に追いついてしまう。

追いついた時、そこで私が今のように立ち止まっていたらスペちゃんは どう思うのか。

考えずにはいられなかった。

次の日から私はいつもよりも練習に気が入っていたと思う。

あの天皇賞で辿り着いたその先をもう一度見ることができるよう、見続けることができるように。

何よりもスペちゃんの前を走り続けることができるように。

止まっている暇はなかった。もつと私も頑張らないとね。

—————

「ふわあ〜！ やっぱリスズカ先輩は速いですね！ ケガする前よりも速くなってませんか!？」

「ふふふ、ありがと。スペちゃん。でもどうかしらね。自分ではあの時の出せていた速度よりはやっぱり遅いかな、と思っているの。もつ

と頑張らないとね。」

「うわあ〜！ やっぱりスズカ先輩はすごいや、私も頑張らないと！」「それにしても、スペちゃんも私がこっちに來る前よりすごく速く
なつててびっくりしちやつた。」

「えへへ、褒められちやつた。」

「……ごめんなさいね。復歸レースのことを言わなくて。」

「もう！ スズカ先輩つたらそのことはもう大丈夫だつて言つたじゃないですか。私もセクさんに負けちやつたからおんなじです！ それに負けちやつたからあの約束はなし、つてことにはなりませんからね！ ……ですよね？」

「……ふふ、そうね。来年の秋の天皇賞。楽しみにしておくわ。」

「はい！ 私も今から楽しみです！」

「あ、”トレーナーさん”からスズカ先輩に逃げのコツを聞いておくように、つて言われてたんでした！ いいですか、スズカ先輩？」

「ええ、いいですよ。」

スピカで逃げ策をするのは私ぐらいだし、スペちゃんの中盤からの
追い上げで、後半ではほとんど逃げみたいになるからその理由は解る
のだけれど。

何故かトレーナーさんのところに違和感を感じた。

……まあ、いいかな。ちよつと噛んじやっただけかもしれないし。

PART 66

【ミスターシービー視点】

「なあ、スズカ。あそこにいるちっこいルドルフみたいなのがトウカイテイオーでその横にいる茸毛がメジロマックイーンで合ってるよな？」

「ええ、そうです。」

「そっか。……ん？ スズカ。未来の三冠ウマ娘さんが呼んでるみたいだぞ、急に呼び止めて悪かったな。」

「いえいえ、大丈夫です。スペちゃん、そんなに呼ばなくても聞こえてるわよ〜！」

そう言いながらスズカはスペシャルウィークのところへ向かっていった。

にしてもあれがテイオーとマックイーン、ね。確かにルドルフが目をつけるのもわかる子だし、メジロ家の最高傑作なんて噂されるのも解る。でも……

視線をテイオーとマックイーンからスズカとスペの方に変える。

スズカに逃げのコツを教えてもらっているらしい彼女。

確かに皐月とダービーを勝ち、三冠に王手を掛けているだけはある。軽く見ただけだが、すでに完成しているといってもいい成長度の上はまだ底が見えていない恐ろしさもある。まだ日本にいたときに初めてルドルフを見たときの感覚と似ているが、それ以上かもしれない。そんな恐ろしさすら感じる奴だ。

私らのような三冠ウマ娘が出た年はそれ以外に目が行きにくくなる、つていうので『三冠が出た年はそこまで強い娘はいなかった』なんて抜かす奴は一定数いるが、今年はそんな奴らも押し黙るだろう。

世代が違えば三冠、無理だとしても最低一冠は取れる奴らがごろごろいる。はつきり言つて異常だともいえるこの世代、その頂点に立ち続け、他と比べれば頭一つとびぬけているスペシャルウイーク。

ほんと、なんでこんなことになってんだらうね。

そして、わざわざ海外にまで来て練習しているあそこの二人。

トウカイテイオーは皐月、ダービー共に2着。今最もスペシャルウイークに対抗できると思われるウマ娘。しかしながら長距離のレースの出走経験が乏しく、長距離レースとなる菊花賞ではどうなるかわからない。

メジロマツクイーンはクラシック三冠路線での出走はないものの、長距離重賞への出走経験が多く、そのすべてのレースで素晴らしい成績を収めている。メジロ家特有の天皇賞への思いは彼女にも受け継がれているようで、特に春の天皇賞に向けた調整をしているように見受けられる。経験値稼ぎとして神戸新聞杯からの菊花賞のルートをとるようである。

レース前のスペシャルウイークを映像でしか知らないのもあるが、どうもスペシャルウイークは調子に乗っている、いや気が抜けてきているというべきか。彼女が出走したレースすべてで圧勝しているのもあるだろうが、自身が負けるわけがないという自信を超えた何かがあるように感じられた。少なくとも私やルドルフとは違い、何をしても三冠を掴み取ってやる、という感じではなく、三冠など通過点と言っているかのような……。

まあ直前に整えるタイプなのかもしれないが、今考える限りあの二人がひっくり返せるとすればその油断について、彼女が動揺しているうちにゴールしてしまうというのが道だろう。

それを成功させるために必要な実力を手に入れるために、ライバルと言える競い合える仲間と共に頑張っているのだろうが……。

「ッ！」

スパートを掛けるときに明らかにテイオーの左足がブレている。踏み込みの時に力を込めすぎているせいか、その力に足が耐えきれない。合宿中に何度も見たが、彼女の関節の柔らかさは異様なほど。それは十分強みになるが今ではケガを誘発する原因になりかねない。今すぐにでもやめさせ、安静にさせておかなくては。

テイオーに向かって走り出そうとした時、彼女の瞳に目を奪われた。

決意と共にどんな手を使ったとしても目標を達成しようとする戦士の目。

私が戦って勝ってきたライバルたちと同じ目、執念の意思。

ああ、こいつは駄目だ。私が言ったら逆効果になる。

G I以外の重賞にしか勝っていない奴と三冠、そんな奴が今の彼女に声をかけてしまえばさらに追い詰めてしまうかもしれない。彼女の顔つきを見るにケガの可能性を把握していないのであろう、そんな

ときに横から急に出てきた奴が自身の思い当たらない不安を言ったとしても、それは効果がない。逆に舐められていると感じさらに厳しいトレーニングをし始めてしまうかもしれない。

やるならば違う方法で、少なくとも今のスパートを何度もやらせるとテイオーは壊れる。

私は手短に自分の感じたことをスピカトレーナーにメールで送った後、彼女たちのものに向かうことにした。

「……………」

「よ、お二人さん。調子はどうだい？」

「シービーさん！」

「よせやい、さん付けなんて。普通に呼び捨てでいいよ。」

テイオーさんとのレース形式での練習後、息を整えながら水分補給などを行っていた時にやってきたのはミスターシービーさんでした。日本のレース界でたった五人しかいない三冠ウマ娘、その三人目。現在アメリカで活躍しているということは知ってはいましたが私たちがお世話になるここに滞在しているとは知りませんでした。

一緒に練習できると知り、少しでも彼女の技術を盗んで帰ろうと思っていました。が向こうから話しかけてくれるとは驚きです。いったい何の御用でしょうか？

「いや、二人の練習を見てたら昔を思い出しちゃってね、熱くなってきた。それでき、トレーナーにはこっちのサマードリームも終わったしあんまりハードな練習はしないように言われてただけ、二人と本気で走ってみたくなくてね。どう、やる？」

私達の目指すべき先輩、その方からのお誘いです。それに二人で今度色々教えてもらいに行こうと話していたところですからちようどいいですわ。それに、断る理由が思いつきませんもの。

「ぜひ！　こちらからお願ひしたいくらいですわ。」

「うんうん！　ボクたちから教えてもらいに行こうとしてたからありがたいよね！」

「よし！　じゃあ早速走りに……、あ、お前らさっきまで全力で走って休憩中だったよな。うん。……そうだ。休んでた時に全力で走らせたらオーバーワークになってしまふよな。だからちよつと趣向を変えてやってみるか。……お前らの目標は打倒スペシャルウィークだろ？」

その名前を出されたとき、隣にいるテイオーの雰囲気明らかに変わった。そういう私も彼女に及ばないながらも心のどこかでスイッチが入った音がする。

「お！　いいねえその感じ。あいつのやり方は先行もできるが基本は差し。ここにいる私も追い込みで二人とも後半にかけてレースをひっくり返すやり口だ。それでこれから後ろから追い抜かされた時にどういった行動をとるべきか、という感じでやってみようか。どっちかというと思考メインの練習だから追い抜かされた時にスパートを掛けてついてくる必要はない。ただ頭を使ってどの道が最適なのかを探る。」

なるほど、思考メイン。後方からくる驚異にどのように対処するべきかを考える練習ですか。

「どうだ、こちとら三冠馬。こつちじや成績は振るわなくてもクラシックの若造に劣るなんてことはないぜ。……やるか？」

相手は三冠、そしてアメリカで戦い抜いてきた猛者。思考メインというわけですから追い込み、差しの作戦をとったときどのように動かれれば厄介か、そこも教えていただけるのでしょうか。

こたえは勿論、YESですわ。

あなたももちろんそうでしょう、テイオー。

PART 67

日本 トレセン学園 生徒会室

「すまないグローヴ、少し一人にしてくれないか。」

書類を持ってきてくれたグローヴに席を外してもらい、目の前に置かれていた紙にもう一度目を通す。

来年度より開催される国内ドリームシリーズの知らせだ。

現在日本ではドリームシリーズは開催されていなかった。

私が生まれる前になるが、本来ならトウインクルシリーズが始まったと同時に開催される予定だったドリームシリーズは、それまで行われていたレース関連の利権をまとめるために予算を使い切ってしまった、その開催は後送りとなってしまったという歴史がある。

その後、ジャパンカップなどの新規レースの開催や海外枠規制の緩和、クラシック登録におけるオグリキャップ騒動の解決などに手が追われていたらしいが、ついに開催できるようだ。

今までは国内のトウインクルシリーズの登録を破棄し、海外のドリームレースに出走するか、登録を残したまま学園に居座るかのどちらかしかなかった。国外に出ず、学園の広告塔、もしくは学園の運営に携わるために残っている私やマルゼンには朗報ともいえるだろう。

初めての海外遠征でケガをし、そのまま国内に止まる道を選んだ私は、ケガが癒えた後も残っている。

日本の誇るスターを国内にとどめておきたいというURAの意向と学園をより良い物にしたいという私の思いが重なったゆえの決定だったが、シービーたちが海外に挑むのを見送るたび、もう一度挑戦したいという気持ちを抑えるので必死だった。

ドリームシリーズはトウインクルシリーズと比べ海外ウマ娘に対する規制も甘く、様々な強者が集まってくるのは明白、今から競い合えるのが楽しみでならない。

そう、これだけならそうだった。

問題はもう一枚の紙。

「現在、トウインクルシリーズに登録されている方々の中ではシニア級で一定以上の活躍をなされた方は自主的に出走を取りやめる、という風潮がありますが、今年及び来年のシニア級レースにおいてはそれを無視していただいても結構です。ドリームシリーズに上がってしまったトウインクルシリーズのレースに出走することはできませんのでよく考えて出走登録をよろしくお願いいたします。しかしながら優先権はシニア級三年目未満の方々にあるということをご留意ください。奮ってご参加ください。」

ああ、なぜこんなことを書くのだろうか。

理由は解る、初めて開催されるドリームシリーズ。

どれほどまでに人気を集められるかわからない。

人気を集められなければ、いくら我々が求めたとしても資金面で限界が来てしまう。

それを回避するための策だ。トウインクルシリーズで活躍したウマ娘をドリームシリーズに上げることでファンたちの興味を引かせる。そのための起爆剤。

本来なら私は出走しない。

権利はあってもほとんど引退したようなもの。

このまま生徒会長として年を越し、来年のドリームシリーズに備える。

それが”正しい”道なのだろう。

だが、頭にあの時の敗北が浮かんできて、さつきから何をしても離れようとしていない。

クラシックの時、初めて負けたあの光景。シニア級でシービーと競い合っていた満たされる時間の中になぜかある不満。世界に出て肌で感じた壁の高さ。

そして

セクレタリアトとのあのレース。

あれからずっと心の火は燃え続けている。

ジャパンカップ、どうしようもなくレースに出たい。

今を走る子供たちの場を奪ってしまう。

絶対に間違った選択、決して褒められることではない。

しかしながら……。

気が付けば私の手は電話に伸びており、URAに繋いでいた。

「はい、シンボリルドルフです。……はい、その件でして……。」

「今年のジャパンカップへの出走登録は可能でしょうか？」

「……………」

えーと、セクさんと一緒に練習してるから二つ目の目標はいいとして、二つ目の目標の海外芝に慣れるってのはチームで練習するから問題なし。三つめは一応シービーさんとも会えたから大丈夫ってことにしておこう。

今のままが一番いいもん。わざわざ変えたくない。

せっかく手に入れたチャンス。自分から手放すなんてしないし、それ以前に一緒にいる時間が減るのは嫌。

負けてしまった時のことを考えてのことだろうけど、そもそも私にその後はない。考えてもいない。

私の大本、走る理由、レースに出る理由はその一つ。

「スペちゃんん、ご飯行きましよう。」

「はーい、今行きまーす！」

いや、終わってしまった時のことは考えても意味がないよね。私達が一緒にいる限り負けることなんてありえないんだもん。

ええーと、あとの目標は太らないようにする、か。

……できるかな？

太ったらまた怒られちゃう。

と、とりあえずは今日のご飯は少なめに……

「今日のメニューには私のお気に入りの料理が出るらしいの。スペちゃんも気に入ると思うわ。」

「ほんとですか！ 楽しみだなあ。」

PART 68

「ふう、こんなものかしら？ 私がどんな風に思いながら走ってるか、まで言っちゃったけどためになったかしら？」

「もちろんです！ すっごくためになりました！」

「そう、それならよかったわ。……でもなんで逃げの練習をしたの？ 色々やってみたらわかるだろうけどスペちゃんに逃げ策は向いてないわよ。確かにこういった他の作戦に対する理解を深めておく、つてのは大事だと思うけど本番で使えるまで練習する必要はあったのかしら？」

「えへへ、最初はスズカ先輩みたいに先頭で走ってみたい！ と思って少し練習してたんです。それですぐに私には向いてないなあ、つて解ったんですけど次に出走する菊花賞でもしかしたら使うかもしれない、つておね、”トレーナー”さんに言われまして。それでスズカ先輩に教えてもらおうと思ったんです。」

「うーん、トレーナーさんがスペちゃんに逃げかあ。何を考えているのかしら？」

「そ、それよりももう一度走ってもらってもいいですか？ 今度は私、差しで走りますね！」

「……そうね、走りましょうか。でも作戦はさつきと同じように逃げで行きましょう。レースで使うんだったらちよつとでもうまくなつとかないかね。」

「はい、よろしくお願いしますね、スズカ先輩！」

(練習終わり、夕食前ぐらいにでもトレーナーさんに聞きに行きましようか。スペちゃんに合わない作戦を練習させて、普段なら私に何か言っけきそうなのに何も無いのはちょっと不思議。……まあ理由は聞いてみればわかる。今は練習に集中しましょう。)

—————

どもども、皆さんお久しぶりでございます、投稿者ですぜ。

なーんかそんなに時間空いてるはずなのにすっごく久しぶりな感じですしお寿司。ナンデじやる？

ま、私の時間間隔が狂っちゃったのは置いておくとして、今日も今日とてスペちゃんをアルティメットにしていきますよ！ バリバリ！

現在スペちゃんは次走の菊花賞のために逃げの練習中です。実際最後まで逃げ切るのか、それとも途中でスピードを落として先行、差しの位置まで下がるのかは、その時のレース次第ですがまあ練習しといて損はありません。元々のスペちゃんの逃げ適正は全く持ってないGでございましたがせめて二段階、Eぐらいまでは上げておきたいですよ。普通ならCぐらいまでは無理をしても欲しい！ って感じですがわざわざ一つのレースのためだけにそれをするぐらいなら他のステータスやスキルを伸ばした方がウマ味なのでそうするつもりです。ウマだけに。

ちなみにこういった距離適性の成長はDまでは結構すくすくと育ちます。今回みたいにその作戦のスペシャリストやトレーナーに師事を仰いで一月くらい練習していればDぐらいすぐです。しかしそれ以上となると結構時間がかかりますのでわざわざ時間を使って練

習する意味がなくなってくるんですね……。やっぱりこういうた本来の作戦をどうにかするためにはアプリ版と同じように継承で何とかしないといけません。

ということでもスペちゃんにそろそろ逃げの練習をやめるように指示を出しましたが……。スズカ先輩に阻まれてしまったようですね。完全に御好意での提案ですので断るわけにはいきません。ここは逆にこちらからお願いしてやってもらいましょう。ではそのように、スペちゃん。

(はい。)

あ、それとスペちゃん、そろそろ私のこと”トレーナーさん”呼びするのやめくり。こちらら免許持っていないヤブトレーナーなのでさすがにそう名乗ってると思われるのは恥ずかしいタイ！ しかもスズカ先輩たぶんスピカトレーナーさんと私のことごっちゃになってますよ。変に誤解されて迷惑かかっちゃうかもしれないしそう呼ぶのはやめておきましょうか。

(わかった！ ……でもそれなら何て呼べばいいのかな?)

あ、そうですね。今まで無理に呼ばないようにしてもらってましたけどそろそろ面倒になってきましたもんね。どうしましょ、ここは単純に投稿者で行くか、それともコメントで頂いてる走者で行くか、……というか私RTAしてないので走者じゃない気がするんですけどなんでいつもこう呼ばれてるの???

(ん、なら走者って呼びたい！)

おっとスペちゃんもそちら側だったか……。私の味方どこ……。ここ?

(あれ、だめだった？ 私たちずっと一緒に走ってるし、そっちの方がいいかなって思ったんだけど……。)

……よし！ これからわたくし走者で行きましょう！ 動画初めの挨拶もそっちにする！ RTAじゃないけど！

今日から私は、富士山だ！ お米食べろ！

改めてこれからもよろしくね、スぺ。

(はい！ こちらこそよろしくお願いします！ ”走者”さん！

……ちなみにお米食べろってことはもつと食べていいの？ 食事制限解放？ ほんとに？ たくさん食べていいの!?)

そ、それはやめてもらえると助かります、はい。

で、では皆さんお元気です。

録画終了、つと。

……スぺ、フリじゃないからね。食べ過ぎたらだめだからね。

ただでさえこっちの食事のせいで体重増えてきてるんだから、節制しないとだめだからね。解ってる？

(もく、解ってるよ。”お姉ちゃん”。)

PART 69

『よし！ じゃあやるよ、スぺ！』

『はいー！』

まずはゲート全体に意識を集中させる。

自分の位置、全体の把握。

今はセクさんしかないけどダービーの時を思い出しながら、ゲート全体にプレッシャーを掛けて押し込める！

……よし、できた！

あとはセクさんが返してくるプレッシャーを

「ツー！」

耐えて！

ガゴン

走り出す！

……できてる？ 使えるようになってる？

『セクさん！ 私、できてましたか!?!』

『できてたできてた！ おめでどう、スぺ！』

うんうんよきかなよきかな。仲良しなのは美しきかな。

あ、どうも。改めまして走者です。今日もよろしくお願いします。
んー、なんか最初の挨拶で投稿者って名乗らないと違和感あります
ね。まあ両方使っていきましょう。

んでご覧になってもらったので理解していただけたと思うのですが、無事【ゲートの支配者】の復活に成功いたしました。これで安心して菊花賞に出走できるね！ 非常に荒れそうで色々大変そうですけど楽しみですタイ！

＜スピード：B

スタミナ：B+

パワー：A

根性：B

賢さ：B

＜スキル

【シューティングスター】Lv. 3

【汝、皇帝の神威を見よ】Lv. 2

【空駆ける英雄】Lv. 2

【不沈艦、抜錨オツ！】Lv. 2

【ゲートの支配者：改】

【食いしん坊】

【逢魔時】

【プレッシャー耐性○】

【末脚】

（【率いるもの】）

と、こんな感じて使用不可の文字も消え、支配者君もなんか進化しとるし、セクさんのプレッシャーを毎朝強烈に受け続けたおかげかプレッシャーに対する耐性まで手に入れちゃいました。スペちゃんよう頑張った。

というわけでなんか進化しとったスキル説明をば、なんか後ろに”改”みたいなのが付いて超異次元サッカーのアニメみたいになりますが、単純にこれ、強化されたみたいです。何でも一度使えなくなったスキルが厳しい練習を重ねることで進化して帰ってきた！ということらしいです。なんかスポコンみたいだな。

と、言ってもお前ほんとに中学生？ の髪型で妹トラックに引かれてブチぎれたンゴ、な炎のストライカーの代名詞なシュートみたいにそれほんとに強化されてる？ ということはないらしく結構大幅につよなってるみたいです。これはおいしいですねえ！

またこちらの「プレッシャー耐性○」というのは検証班の方々によるとデバフスキル、アプリ版での赤色スキルを食らいまくるとたまに入手できるスキルだそうです。効果はそこまで高くないようですがマスクデータであるらしいプレッシャー関連のデバフスキルすべてに対応できるみたいでとつても汎用性が高い良スキルみたいです。

そういえばアメリカ合宿のおかげで色々ステータスも上がってきていたことをお伝えするのも完全に忘れていましたね。ご報告をば……、特筆すべき面はスピードがやっとBまで上がったことでしょうか？ 元々「太り気味」を連発していたおかげでスピードが伸びないというやばたにえん、な状態でしたが何とかBまで。これで最高速度が足りなくて追いつけない！なんてことは少なくなるかなあ、と思います。

欲を言ってしまうえばスピード、スタミナを今年中にAまで引き上げたいなあ、なんて思っていましたけどたぶん両方は無理かなあ……。でもまあ直近の問題である菊花賞は大丈夫でしょうね。アメリカ合宿の練習効率が結構高めなのはスペちゃんのステータスの上りからも解りますし（上昇率が控えめに見えるのはステータスをあげれば上げ

るほどランクアップが難しくなるからですね、テイオーとマツクイーン、後ネイチャあたりも気を付けた方がよさそうですね。ライバル枠じゃないですしそこまで警戒しなくてもいいのかなあ。

でもまあどんなに頑張ってもC+までが菊花賞時点での他キャラクターの限界でもあります。シニア級に入るともっと急激に上げてくるお化けもいるにはいますが今回は気にしなくてもいいですし安心していきましよう。

ちゃんとした作戦もありますし、ね。

ま、とにかくセクさんありがとナス！

『ううん、いいのいいの。原因はもともとアタシだし、頑張ったのはあなただもんね。……にしても思ってたよりも早く終わっちゃったけど、明日からどうする？ 私の時間は空いてるし、もしよかったら練習に付き合おうけど？』

？』

おっとろ?! これはウマすぎないイベントかなあ!?

どうやら思っていたよりもセクさんの好感度が高かったみたいですね。普段の 昼頃の練習を見ている感じ基本的にカノープスの手伝いをしていたので、スペちゃんの練習に付き合ってくれたのは謝罪の意味合いが強いのかなあ？ と思っていました。がそうではなかったようですね。断る理由もないですしやってもらいましよう！

練習内容は……そうですね、菊花賞後はジャパンカップや有馬にも殴り込みをかけますから、その時のことも考えてスキル系統の練習を手伝ってもらいましよう。

というわけでセクさんどうかな？

『なるほど、差し系のスキルの習熟ね、いいわよ。ん〜そうね、結構い

い時間だしご飯でも食べながら話しましょうか。私のお気に入りの店がこの近くにあるし、連れてってあげる。』

え、ちよつとそれは嫌な予感が……

『はい！ 行きたいです！ 私お腹すきました！』

うん、だよな。知ってた。

—————

『お待ちせいたしました！ 当店自慢のストラスバーガーです。』

う、うわあ……、なにこれ。え、これを朝から食べるの？ え？

『どう、スペ？ 結構いい感じでしょ。シービーとかに紹介したときは何故か引かれたけど大きくておいしそうでしょ。実際美味しいし、たまにこれ食べるのがいいんだよね。』

い、いやそれはそうなんですけど、ちよつとこれはいかなものかと……。ちよつと片手間に調べましたけどこれ色々とヤバいですわよ。人前で重さ1.3kgの1万kcalの脂肪分700gの化け物ハンバーガーみたいなのですが、ウマ娘用ってことで色々サイズとか重さとか上がってません、これ……、え、ほんとにこれ朝から食べるつもりなの？

いや、アメリカウマ娘と日本ウマ娘じゃ食生活の違いというか、何というかこっちの食事にうまく対応できなくて太っちゃうじゃないですか。スペちゃんも今現在そうですし、アメリカ代表みたいなセク

さんがペロリだったとしてもスペちゃんには……たぶんペロリか。でもカロリーの吸収率とか色々ヤバそうですし……

と、とりあえずスペちゃんここはセクさんには悪いけど撤退した方が

『うわあ！ おいしそう！ いただきます！』

あ（即死）

『お気に召したようにより、にしても食べながら話すつもりだったけど今は食事に集中してるみたいだし後でいつか。今後の練習とか日本のニューダートクイーンとかの話聞きたかったんだけどね。……ま、私も食べますか。』

（にしても桜の女王、ハルウララ、ね。いったいどんな子なんだろう？）

—————

『今、この大井に桜吹雪が巻き上がる！ 他を寄せ付けず今一着でゴール！』

『確定しました、一着にハルウララ。二着と大差をつけての勝利となります。二着には……』

『いやあ、素晴らしい走りでしたね。一番人気で一位。後半にかけての後方集団からのごぼう抜きは目を見張るものがありました。日本のダートは芝に比べてそこまで知名度がないですが、彼女のおかげで活気がうなぎ上り。そんな感じがしますね。』

『他の子も例年なら充分一位である可能性があったのですがね、彼女の強さにはかなわなかったようです。芝のスペシャルウィーク、ダートのハルウララ。今年のクラシック戦線はどちらもいかに一強を倒すか、というものになりそうです。』

「うわあ！　すごいすごい！　ねえ見てよトレーナー！　みんな私のことすごいって言ってくれてるよ！　とくつても頑張ったおかげかな？」

泊まっていたホテルのテレビで、自分のことを話してくれた番組を見て、思わず後ろを振り返る。

「あ、そうか。トレーナーさんはお買い物に行ってるんだったね。うんどうしよう、すつごく見てほしいんだけどなあ。あ、そうだ！　キングちゃんに聞いてみよう！」

おんなじお部屋のキングちゃんに今見てたテレビを今一緒にいないトレーナーさんにも見せてあげたい、って送るとすぐに返信が来た。ネットに上がってるかもしれないから探してみたら、もしくは録画、だって。それとトレーナーさんと一緒にいないことをすごく心配されたよ。

「買い物に行ってるみたいだからお留守番中、だ、い、じよ、う、ぶ、つと。これでいいね！　……それにしてもなんで目覚まし時計買いに

行くんだらう？　もしかしてトレーナーって寝ぼ助さん!?　今度お寝坊してたら起こしてあげなくちや!」

ハルウララは自身がそこまで朝に強くないことを完全に忘れてそんなことを考えていた。

PART70

あ、どうも。投稿者です。

今日も一日頑張って行きましょうね。あ、きょうもいちにちがんばるZOOI!

と、言うわけで起きろスペ! もう朝日上がってんぞ! 起床ラツパぷつぷくぷく!

「ふえー! ……お、おはようございます。」

うむ、おはよう。さあ、とつと顔洗って準備整えてきなあ!

「はい。」

んじや、スペちゃんの朝の用意が終わるまで、ちよつとだけお話。先日何故かコメント欄でお前紫色のまな板じゃね? というお言葉を頂きました。正直、お前さんブチころがされてえのか? と思いましたが私は冷静だったのでその場は我慢できました。

ですが、ね。私宛に荷物が届きまして、例の紫さんのそれどんな服? という下着なんかシャツなんかよく解らん紫の服とウサギさんパーカー、あと紫の女性用カツラを頂きました。

うん、ひとこと言わせて。

いったい私にどうしろと?

いや、ね。わたくしスペちゃんに比べれば確かにはないですよ、ええ。確かにスペちゃんよりもないです。でもまな板呼びはどうかと思うんですよ私。オラ、しっかりと見ろよこつちを! つつましいながら

にちゃんとおあるんだよこちとら！ 誰が逆Aカップじゃ！ むしろそれ挟れてるじゃねえか！ アニメ制作時に注意書きでB70、大きくし過ぎないでください、なんて書かれない側なんだよ！ わたしやあ、スズカとは違うんだよ！ 確かに同じ栗毛だけどなあ！ ある方ミーで、ない方スズカ。ARE YOU OK？

ふう、失礼。ちょっと私の逆鱗に触れてしまったようで、騒いでしまいました。謝罪いたします。あ、あと私をまな板呼ばわりしたやつは後で校舎裏に来ること。

んじゃまあ、一応頂き物ですので例の紫コスに着替えまして……、うん。サイズピッタリなのが変に腹が立つ。おっと、スペちゃんも朝練に行ける服に着替え終わったようですね。

あ、そうだスペちゃん。今全身に加重トレーニング用のおもり付けてるでしょ。そのおもり抜いといて。

「え、うん。わかった。(今日は使わないのかな?)」

ああ一応使うのでなんか袋にでも入れておいてください。んじゃ場所移動しまして。

はい、ここ洗面所ですね。スペちゃんこれに乗ってください。

「え……………」

はい、体重計です。自分を知るといふのは大切ですしね、というわけです。べこべこ言わずに乗れ。

「いや、でも最近頑張ってレンシユウシテルカラ……………」

乗れ。

震える影がゆつくりと機械に覆いかぶさっていく。そういえば移動の途中で靴下脱いどいて、って言われたのはこのためであったかと思いつながら自身の両足を体重計の金属部分に合わせるスペシャルウィーク。

口では言い訳をしていたが、自分でも思い当たる節はあったのだろう。その顔はまるで有罪判決を今から受けようとする被告人の顔。ああ、神は死んだのか。

両足を乗せ終わり、瞬きの間。死刑判決にも等しい悪魔の電子音が鳴り響き、数字が浮き上がる。この時ばかりはウマ娘特有の動体視力を恨んだスペシャルウィークであった。

そこに表示されていたのは自身の適性体重よりも大幅に増加している数。体重：増、である。

口が裂けても微増などとは言えない数字。むしろ”増”では収まらないかもしれない。

彼女はそれを見なかつたことにし、機械の誤作動だということを神に祈りながらも一度先ほどと同じ行動を繰り返した。

結果はわざわざ書き記さなくてもいいだろう。

そう、思いつきり太っていたのである。

▽スペシャルウィークは【太りすぎ】を取得していた！

スペシャルウィークは友に教えてもらった曲のプロモーションビデオを思い出していた。

「どうって。」

(いや、そりやあれだけ食べれば太るに決まってるでしょう。日本じゃいっぱい練習したから大丈夫！ で何とかなっていたかもしれないけど、いや何とかなっていないかったか？ まあ日本とアメリカの食事、特にカロリーの桁が違ってくるものをあれだけ暴飲暴食したらそうなりますやん。)

「うう、だって……。」

(だってじゃありませんよ。朝にカロリーお化けバーガーをセクさんのおごりで食べたと思えば、お昼にまた食堂でたらふく食べて。夕食に急に現れたゴルシちゃんに連れられて、スピカメンバーと一緒に食べに行ったステーキハウスでも意味わからんほど食べてたでしょう。)

「うう、美味しかったし……。」

(はあ、こっちで多少太ることは覚悟してましたけどこれ菊花賞までに元に戻せるかなこれ？ ……まあ止められなかった私に責がないとは言えないし、頑張つていきましようね。)

「は……。」

(ほらしよんぼりしない！ 胸張って、お腹は引っ込めて、頑張つていきましよう！)

その日からスペシャルウィークの食事は前日より明らかに減っており（しかしながら一般的ウマ娘からしたら多め）みんなに心配されましたが、スペの「減量中です……。」の悲しそうな一言によって、そりゃあれだけ食べればそうなるな、と思われたとき。

スズカ先輩は「減量中でも私より食べる量多いのはどうゆうこと???」と頭の中でハテナマークが乱立していたが顔には出なかった。
めでたしめでたし。

PART 71

もう慣れてしまった病院内を歩き、姉上のいる病室へと歩く。

結局あのレース後、私は中央への切符を手に入れていたのにも関わらず地方に残った。

結果的に私のことが心配だったからという理由で地方に残った姉と同じ道を選ぶことになったが、私は後悔していない。離れた北の地にいてもいやでも聞こえてくるあいつの名声、スペシャルウィークの覇道。

当時は原型を保てないまでに心を折られてしまったゆえの決定だったが、それでよかったのかもしれない。あれから私もいくらか成長したとはいえ、アレに勝てる気は全く持ってない。

ああ、もう着いたみたいだ。姉上はどうしているだろうか。

「失礼します。」

「ん？ ああフロート。もうそんな時期なのね、いらっしやい。」

定期的に姉上の見舞いに来ているが、今日もいつも通り。ベッドに寝かされた姉上がこちらを見る。

「今日は調子がよさそうですね。安心いたしました。」

「ええ、あなたも、あの妹ちゃんも頑張ってるみたいだし、私も頑張らないとね。たとえばもう走れないとしてもできることはたくさんあるし、こんなところで寝てるだけなんて性に合わないわ。」

「……ええ、姉上の復帰を心よりお待ちしております。」

こんな会話を何度しただろうか。姉上は例の火事でケガをするとはなかったが、施設が古く、木造であったこともあり、一酸化炭素中毒で今も寝たきりである。医者からはもう姉上が立てる可能性はほとんどないと言われている、生きてともに話ができるだけでありがたいが何故私の姉上はこうなってしまったのか。そんな思いに頭の中が支配されていく。

なぜ、私の姉上はこうなってしまったのか。なぜ大好きだったターフで走る姉上の空に靡く青い髪がもう見られないのか。

「……ほら、そんな悲しい顔しないの。せつかく救ってもらった命ですもの。ちゃんと歩けるぐらいにならないと彼女に申し訳ないわ。だから大丈夫よ、すぐに良くなる。……ほら、せつかく来てもらったんですもの。今のトレセンのお話をしてくれるかしら、フロート？」

ああ、そうだ。こんな顔を見せるために来たわけじゃなかった。

「はい、申し訳ありません。では新しく建てられた校舎がようやく完成したという話を……。」

「ああ！ やつとできたのね！ ふふ、ボロボロだったあの校舎と比べて新造だからキレイでしょうね。それとちゃんと彼女の像はできてるのかしら？」

「ええ、キャンディさんの像も完成していました。こちらに来る前にも少し見ましたが、かなり多くの花が供えられていましたよ。」

「それは良かったわ。私達の命の恩人ですもの。像を建てるのは彼女は恥ずかしかって嫌がりそうだけどそれぐらいさせてもらわないとね。ちよつとただけだけとお金出したし、気になっていたのよ。」

オースミキャンディ、姉上たちの命の恩人。私の家族を救ってくれ

た人物。

その命と引き換えに、寮内にいたすべての人たちを救い出してくれた私たちの恩人。

「はあ、今でも彼女がもういないなんて信じられないわ。……でもあいつのことだから霊にでもなつてそこらへんほつつき歩いてるかもしれないわね。」

—————

「ふいふ、ただいまあふ。」

「ふふ、今日もハードだったわね。」

「ほんとですよお！ いつもよりご飯食べられないから腹ペコですつごく疲れちゃいました！」

「いや、スペちゃん十分食べていると思うわよ……。」

「ええ、そうですかあ？」

お姉ちゃんから言われた減量プラン。菊花賞に向けて何とか体重を落とすために初めて食事制限。今まではみないふりしてたけどさすがに私もやばいと思ったので、すつごくイヤだが従っている。一応日本に帰ったら好きだけ食べてもいいチートデイっていうのを用意してくれるみたいだからそれまで何とか頑張らないと……。

「やっぱり食べ過ぎだと思っわよ、うん。……それにしてもスペちゃん逃げも結構できるようになってきたわね。あとはスペちゃんなりの走り方を見つけていく感じかしらね。」

「うくん、色々教えてもらったんですけどやっぱり私はそこまで得意になれないかなあ、って。スズカ先輩みたいに最初から最後まで全力で逃げてるのに、最終直線でまた加速するなんて私出来ないですもん。」

スズカ先輩と話しながらお姉ちゃんが置いて行ったメモを見る。

練習の途中から調べものがあるって言ってこの学校の図書館に向かったみたいだけど、まだ時間がかかるみたい。「寝る時間までには帰ってくるし、心配しないように。あと夕食は食べ過ぎないこと！」って書いてある。

むう、言われなくてもわかってるもん。

いつも私のために色々調べてくれてるのは知ってるけど、何度も言わなくてもいいのにな。

「ふふふ、まあそんなにすぐ出来たら私何してたんだ？　って話になっちゃうもんね。スペちゃんが今後どんな走り方をするのかはわからないけど知っておくだけでもためになると思うわ。」

「まあそうなんですけどね。」

そんな風にスズカ先輩と話していると……

コンコン

「あら、誰か来たみたいね。空いてるわ、どうぞー！」

そこにいたのはこちらの合宿で一緒に練習することになったカ

ノープスのターボさんとネイチャさん。その後ろにはテイオーさんとマックイーンさんもいた。

「おお〜！ スペもスズカもいるな！ こんな部屋になってるんだ！」

「ターボ、スズカさんは先輩なんだから……。」

「ふふ、気にしなくていいのよ。それでみんなどうしたのかしら？」

「はい、何でもセクさんの予定が変わったみたいで、最終日にする予定だったキャンプファイヤーを今日やるみたいなんです。それで呼びに来たんですよ。テイオーとマックイーンはそこで会いまして、一緒に行こうってなったんです。……まあターボが逸つてもう火を付けちゃったんですが……。」

「間違えちゃった！」

キャンプファイヤーかあ、そういえば見たことないなあ。

「あら、そうなのね。わざわざ呼びに来てくれてありがとう。スペちゃん、行きませうか。」

……
なんでだろ。なんだか行ったらいけないような気がするんだけど
……
でも、みんな誘ってくれてるし、行った方がいいよね。

「はい。行きませう！」

「まだ明るいうちに見せてもらった時には、大きいものを用意してく

ださっていたようで見づえがありましたわ。もう暗くなってきたので、さらにキレイに見えるでしょうね。」

「へー、そうなんだ！ にしても、なんでターボは火を付けるタイミングを間違っちゃったの？ もしかしてボクたちがいないうちに独り占めしようとした？」

「む〜！ そんなことターボしないもん！」

「いや〜、単に間違えちゃったみたいで。これで火を付けるんだよ、ってセクさんが説明してる時に『こうするのか？』って火を付けちゃったんですよね〜。」

「そうなの。でも大きいものはちゃんと火が付くまで時間がかかるっていうし、ちようどよかったかもね。」

そんなことをみんなが話しているのを聞きながら一緒に歩いていく。

どうしてだろう、何故かさつきから悪寒が止まらない。

こんな時、不安になったときにいつも横にいてくれる姉はいない。

ううん、私だって子供のままじゃない。自分で何とかしなくちゃ！

たぶん今感じているのも気のせいだよね！

「お、見えてきたよー！」

いつの間にか下を向いていた顔を、その声に反応させて前に向ける。

目の前に写ったものは、炎だった。

「おお、壮観ですなあ。」

赤い赤い、真っ赤な火。

全てを奪い去っていく火。

パチパチと何かが弾ける音が私の記憶を呼び覚ます。

悲鳴、怒号、皆のせき込む音。

真っ暗な夜に嫌なほど真っ赤に照らす燃え上がる校舎。

ああ、今学校の一部が崩れ落ちた。

誰かのうるさい泣き声が聞こえる。

知らない男の人たちがホースを持って水を掛けている。
結果は何も変わらないのに。

小さい私は燃え盛る火の中に走り出そうとしていて、それを止めようと知らない誰かが必死になっている。

今にも崩れ落ちそうで、真っ黒に燃えている校舎に人影が見える。栗毛の女性に抱きかかえられながら、気を失っている青い髪の女性が出てきた。

栗毛の女性は青い髪の女性を近くの誰かに預けると、ゆっくり、ゆっくりと幼き私に向かって歩を進める。

そして、私の前にたどり着く前に倒れてしまった。

抑えられていた私は、無理やりそこから抜け出し、姉に向かって走り出す。

ああ、お願いだから泣かないでほしい。

こけそうになりながらもなんとか姉の前に辿りつけた私。

幼い私はその場に蹲り、姉に向かって泣き叫ぶ、必死の声をかける。

お願いだから静かにしてほしい。

震える姉の手が私の頭に向かう。

自然と、幼い私の泣き声はなくなっていた。

大好きな姉の手は真っ黒になっていて、いつもは力強い手が凄く弱弱しく見えた。

そんな手が私の頭にのせられて

「ごめんね、スぺ。駄目なお姉ちゃんで。」

私の頭に置かれていた姉の手は、そのまま地面に落ちていた。

「お、お前ら遅せえじゃねえか！ゴルシちゃん待ちくたびれ……、おい、スぺ！」

「あ、ああ………、何で、何で、何で、何で！」

”何か”を封じていた枷が壊された気がする。

気が付けば私の世界は真っ暗になっていた。

――

スpegが倒れた後、パニックになりかけた周りを何とか宥めながら保健室まで連れてくることができたが……、まるでお通夜だな、これは。

「おいおい、おまいら。そんなに落ち込まないでいいんだぜ。誰にでも苦手なもんはあるし、今回は運悪くあたっちまったようなもんだって。ほら保険医の人もじきに目を覚ますって言ってたじゃねーか。」

「でも、スpegちゃんのあの感じ、ただ事じゃないような。何か触れてはいけないようなものに……。」

「でももかかしてもないって。スズカもそんなに考え込むなんての。……ほら、多分減量中で疲れがたまってたんだって。」

「でもー!」

スズカの口を手で無理やりふさぎ、椅子に座らせる。これ以上喋らせたらどんどん悪い方向に進んでいってしまうからな。ちよつとばかり荒くなってすまねえな、またこんど何かで謝らせてくれや。

「さ、今夜はもう遅いし、自分の部屋に帰ってさっさと寝た方がいいぜ。スpegのことは私から見とくし、目を覚ましたらちやんとメールかなんかで連絡するしな。」

雰囲気にな？まれそうだった中等部の奴らをまとめて保健室から連れ出す、さつき連絡して飛んできたスピカとカノープスのトレーナーと、火の処理をし終わったセクが、ちよつと部屋の前に到着しているようだし、こいつらのことは任せよう。

私は、スズカの方を何とかするか。
たぶんスズカは自分のせいでスぺの何らかのトラウマを再発させてしまった、って考えてるんだろうな。

スズカの隣に椅子を運び、腰かける。
なにか声をかけてやるかより、隣に誰かいた方がいいはずだ。

「っ……………あ、あ……………」

「スぺちゃん！」

「あ、あれ……………ここは保健室？　なんで？　さっきまで練習してたはずじゃ……………」

……………ん？　視線がこっちに？

ああ、なるほどな、まったく損な役回りだぜ、こんど何かおごれよな。

「おう、スぺく！　練習中に倒れてしまうとは、勇者として恥ずかしいとは思わんかね、うん？　無理な食事制限が祟って倒れてしまったのであろう。」

「ふえ？　そうなんですか？」

「うむうむ。まあ疲れもたまってるだろうし、今日はこのままここで寝といたらいいんじゃないの？　手続きは私がしといてやるよ。んじゃ、おやすみく。」

「あ、おやすみなさい！　ゴルシさん！　スズカさんもおやすみなさいー！」

「……………ええ、おやすみなさい。また明日ね。」

スズカを連れて退室する。

パタンという音と共にドアが閉まる。

「ゴールドシップさん、今のは…………。」

「たぶんあいつにも時間があるんだろう。まったくなれない嘘つきやがって…………。まあスペの中で整理が付くか、納得が出来れば私たちに話してくれるだろ。」

—————

「ありがとうございます、二人とも。」

ああ、何で今まで忘れてたんだろ。

まだちよつと記憶に穴があるけど大体は思い出した。

「私のせい、だよね……。」

……ううん、悩んでる場合じゃなかった。

最近気が緩んできていたのは確かだし、女神さまからのおしかりだよね、きつと。

私に負けられる選択肢は最初から存在してないんだ。

私のためにも、お姉ちゃんのためにも、もつと前に進み続けないと。

PART 72

おいつス〜、投稿者ですよ〜。今日も頑張っつていきましょうねえ！

今日は時間が飛びに飛びまして日本に帰る日になっちゃったので現状の確認の空いてしまったところのご説明をしようと思えます。え、何で飛んでるかだつて？ いや〜申し訳ないのですが、録画自体はできてたんですけど私のテンションがだだ下がり状態だったのでお蔵入りになっちゃいました。すまぬ、すまぬ。

と、いうのも私が資料整理や育成方法を色々調べて目を離してるうちにスペちゃんやんが倒れちゃったみたいでして……、なんでも疲労がたまり過ぎてたとか。おそらく急に初めたダイエットとかそういういったものが負担につながったのかなあ、と思います。

滅茶苦茶反省しましたね。スペちゃんの体の丈夫さを過信しすぎた結果でしょう。

その後、スペちゃんには太りにくく、また筋肉が付くような食事を沢山とるように、まあ減量作戦の方針転換ですね、そのように指示をいたしました。体重の落ちる速度は緩やかに、おそらく菊花賞までに適性体重に戻すことは叶わないでしょうが、こちらに変えさせていただきました。

また、これは初めてだったのだから驚いたのですが、最初の内は無理やりにも今までの減量を続けようとしていたので、録画を回している途中でしたが、ちよつと本気で怒って辞めさせました。

基本的にこちらの指示を聞いてくれましたし、食事に関しては止めても無理やりたくさん食べてたので彼女の中で何らかの変化があったのですが、一度倒れるまで疲弊してしまうメニューを続けさせるほど私は愚かではありませんので、やめさせたわけですね。

ま、そんな感じですかね。

あ！ それとこのお蔵入り期間中に不思議なことがあったんですが……

○スペちゃんのお食事メニューとかこういうのを食べてください、っていう指示はスペちゃんが受け取った後にスペちゃんが自分でそのメニューを出してくれる店を探したり食堂の人に頼んだりしてるのですが（私がお店を調べることもあります）、なんか基本的に皆さん、スピカ+カノープスメンバー+セクさんが妙にやさしかったんですよね。こういうのが食べたいんだけどお店知ってる？ ってセクさんに聞きに行ったらほとんど何でも連れて行ってくれました。あと皆さんスペちゃんに妙に気遣っているというかやさしさに溢れているというか……、何故なんでしょうね？

○今合宿の最期にキャンプファイヤーをやる予定だったみたいなんですけど、いつの間になくなってるとるんですよね。何故だか皆さん忘れていいのか話題にも上げないですし……、確か予定表が配られたときは楽しみにしてそうな子が何人もいた気がするんですけど、皆さんサッパリなんですよね。まあ私としてもそういうのは苦手だったんで助かりますが。

ってな二点、あるんだけどスペちゃん理由わかる？

(……………ううん、わかんない。)

うくん、スペが解らないんだったらどうしようもないし！ この件は置いておくとしましょう。

ちなみにステータスはこんな感じですよ。

▽スピード：B

スタミナ：B+

パワー：A+

根性 : B
賢さ : B

▽スキル

【シューティングスター】 L v. 3

【汝、皇帝の神威を見よ】 L v. 2

【空駆ける英雄】 L v. 2

【不沈艦、抜錨オツ!】 L v. 2

【ゲートの支配者:改】

【食いしん坊】

【逢魔時】

【プレッシャー耐性○】

【末脚】

（【率いるもの】）

スタミナが一段階上がりましてB+に、あとセクさんとの朝練（【ゲートの支配者】再習得後）で【末脚】を無事アクティブ化できました。アクティブ化が結構手厚く教えてくれたので、【末脚】の次の段階、【全身全霊】への熟練度が溜まって予定より早く習得できそうでありがたいですねえ！

と、まあ今回はこんな感じでしょうか。

今回はまたまた飛びますが、何かイベントを拾わない限りは菊花賞まで時間を飛ばしていいのかなと思ってます。

んじゃ、また。次の動画でお会いいたしましょう。

—————

「スペちゃん、ほら！ ロイヤルはちみー！ こっちでも展開してるみたいだからみんなの分買ってきてよ！ もちろんスペちゃんの分は特大だよ！」

「……大丈夫です。お気持ちだけありがたいいただきますね。」

「スペさん？ ほら、いかがでしょう？ 最近あまり休みが取れてないようだし、一緒にスイーツバイキングでも行きませんか？ この近くで行われる無料チケットを家の方から送られてきたので、ぜひ。」

「……すみません、練習があるので。また、感想教えてくださいね。」

「……最近、ずっとあんな感じね。……本当にどうすればいいのかわからない。」

テイオーやマックイーンに誘われてもすべて拒否しているスペちゃんを遠めに見ながらゴルシと解決策の見えない会話を続ける。あの日から、確実にスペちゃんはおかしくなってしまうた。

「ほらほら、スズカ。お前まで暗くなっちゃってどうすんだよ。スペだけじゃなくてスズカも慰めに行かないといけなくなったら、さすがのゴルシちゃんでも過労死しちゃうぜ？」

「……そうね。私まで沈んでちゃだめよね。」

「うむ、それでよし。……にしても顔は笑ってても言葉に覇気がなくて、雰囲気も暗い。食事もちよつとずつだけど確実に減っていつてる。明らかに無理してるのを必死に隠そうとしている、って感じかな。」

「元々いつも明るい子だったから、周りも異変に気が付いて何かしやうとしてくれてるみたいだけど……。」

「無理そう、なんだよな。スズカは同室だけどなんか進展はあったのか?」

私は首を横に振る。一緒の部屋だからその分私とスぺちゃんの会話は多い、けどスぺちゃんの異変を解決できそうな手がかりを得ることはできなかった。

「気分転換になりそうなものに誘ってみても全部断って練習しようとしてるもんな、かといっていつもみたいは無理やり連れていく訳にもいかないし。」

(やっぱり家族の問題にアタシらが口出しするといいいことないんかね。にしてもウチのトレーナーがスぺの親御さんに連絡して色々知ることができたのはいいんだけど、ちよつと重すぎるんだよ。本当は私達まで知る必要はなかったんだろうけど、下の奴らが心配の方が勝って突撃して聞き出しちまったせいで空気も重いし……。)

—————

(スぺ、本当にどうしたの? あれからずっとおかしいよ。)

「……そう、かな? いつも通りだと思うけど。」

(練習時はずっと真剣だけど、いつもみたいに楽しくやってないし、何かに追われるように、食らいつくようにやってる。食事だつてもうやめたのに無理な減量をしてるし、友達から誘われた遊びも全部断って

練習、練習。どこがいつも通り?)

「……大丈夫だって。それにお姉ちゃんもわかってるでしょ。次はクラシック三冠最後の菊花賞、絶対に負けられないってことは。」

(解ってるんだけどねえ。……お姉ちゃん心配だよ? そりやお姉ちゃんस्पेमみたいにGI走ってないし、三冠まであと一步のプレッシャーなんてわからない。でも日常生活を犠牲にして、今までのもの全部投げ捨ててまで取りに行くもんじゃないでしょ。)

「でもー!」

(でももかかしもない! スペが焦らなくてもこのお姉ちゃんがしっかり考えておりますので大丈夫だって。スペは難しいことなんも考えずに前に楽しく進めばいいのです! ……あ、イヤなこととか自分でやりたいこととかあつたらちゃんと言うのよ。)

「……うん。ありがとう、お姉ちゃん。」

(よっしゃ、ならいいぞい。あ、それとテイオーちゃんとかマツクインちゃん、あとスズカ先輩とかゴルシちゃんにごめんなさいしてきなさいね。スペちゃん結構そっけなく返してたから心配してると思うよ。)

「そうなんだ……、解った。行ってきます。」

(お、ならさっそく行ってきたまえよ、若人。それと、お口がひん曲がってますよ、ほら笑って笑って!)

お姉ちゃんの手が私の口に触れる。感じるはずの、感じたいものの、姉の指の暖かさと感触はいつまで待ってもやっこない。

私の目には姉の指が間違いなく私の口に触れているのにも関わらず。

私は姉のために無理やり笑顔を作った。

どう、ちゃんと笑えてる？

(うむー・ いい笑顔！ んじゃ、いつてらっしやい！)

「うん、行つてきます。」

そうだよね、みんなを、お姉ちゃんを心配させたら元も子もないよね。出来るだけ、出来るだけいつも通りにしないといけない。

出来るだけ笑つて、出来るだけ明るく。

うん、出来る。

……レースに絶対はないんだ。

どれだけ私が頑張つたとしても、お姉ちゃんが付いていてくれるとしても、絶対に勝てるとは言えない。

お姉ちゃんの言う通り菊花賞は勝てるかもしれない、でもその次は？

私はできるだけたくさんG Iで勝たないといけない、それも無敗で。ジャパンカップや有馬記念はシニア級の人たちも出走してくる。私の有利性は菊花賞まで、そこからさらに勝ち進むには無理をしても前に進まないといけない。

……お姉ちゃんが私と離れる時間帯は解つてる。それに私が一人になりたいって言つたら絶対に一人にしてくれる。

その間に練習しよう。

絶対に負けられないんだ。

PART 73

ほい！ 日本に帰ってきた投稿者ですよ。

うむ。スズカ先輩と別れの際に、再会と再戦の誓いを胸に、我が故郷に帰ってきたわたくしたちですがね、ちよつとイベントが起きたみたいなんで録画回してます。

今現在はスペちゃんが菊花賞に向けての減量と調整中。(ちなみに菊花賞は体重・微増で臨むことになりそう。スペちゃん勝負服の後ろちゃんと閉まる?) 同じスピカメンバーではテイオーとマツクイーンが菊花賞トライアルや出走条件を満たすために賞金稼ぎのために重賞を出走。他黄金世代メンバーも同じ感じみたいです。

あと特筆することと言えば、ゴルシちゃんが凱旋門賞に出走登録していたことが発覚したことです。

……何やってんだオメー。

スペちゃんからの又聞きでタイムワープして凱旋門賞が何とか、つて聞いてましたがマジで出るとは思わなかったぞ……。さすがに凱旋門賞ということですけどもは将棋とか麻雀とかを練習中になっているゴルシちゃんですが、最近はかなり真面目に練習してるのでいつか空から隕石でも落ちてきそう毎日震えております。

まあ、それはおいて、なんで録画回し始めたかというと、マツクイーンの出走するトライアル、神戸新聞杯の応援に来た時、何故かライスシャワーも出走していたんですよ。

入学以降全く音沙汰のなかった、というかスペちゃんが関連するレースに出走していなかったので空気になっちゃった彼女ですが、ここで登場です。

ま、それだけならふえく、そうなんだ。で終わりなんです

なんか目に青い火灯ってるんですよえ……。

んで完全にパドックでスペちゃんのことずっと見てるんですよえ……。

個人的にお目々こわたんなんでこっち見ないで欲しいのですが、よく見るとアニメの時のマックイーン天皇賞春三連覇のレース時よりも火の大きさが小さいように思えます。まだ発展途上で、成熟しきってないということですかね？

んでき、スペちゃん？

最近お外走ってる時、誰かが後ろからついてきてることとかあった？

（んく、考え事しながら走ってることが多いからよく解んないけど、後ろからマスクとサングラスをした人が走ってくることはあったよ。）

あゝ、なるほど？

なんか”ついていく”認定されてたようです。

全く持つて原因がわからん！ ライスとスペ全く接点なかったんだけど！

レースの結果としてはマックイーン一着でライスちゃんは4着でした。レース中は多分ついていく対象がいなかったので火が灯ることはなかったのですが、今後どうなってくるかわからない感じですね。トライアルには負けてしまったため、彼女が菊花賞に出てくることはないでしょうが、来年の天皇賞春では立ち向かってくるかも

れませんし、注意しておく致しましょう。

さて、話は変わりますがスぺ。わざわざ関西まで我々はやってきたわけです。

しかも同志マックイーンが走ったのはあの、神戸新聞杯、聖書デイリースポーツ発行元が提供。
もう、おわかりですね？

「???

なんと！ まだわからないのですか！

同志マックイーンのカバンをご覧になって！

明らかにレースに必要な黄色いメガホンと背番号6のユニ、キャップが入っているのですよ！

もう、おわかりですね？

最近絶好調でここ最近全く見れてなかったリーグ首位をキープしてくれているあのチーム。

その聖地、甲子園が近くにあるのですよ！

しかもなんと今日はホーム！

私も同志マックイーンと同じように、抜かりはありません。

スぺちゃんのおかばんの中にメガホンとユニ、キャップを放り込んでおきました。

準備いいでしょ？

「……うわ、ほんとに入ってる。」

最近ちゃんとしたお休み取ってないですし、行きましょ？

「……自分が行きたいだけなん」

「あらー！ あらあらあらあら!! スペさん！ そのメガホンにユニフォームは！ あなたもファンでしたのね！」

背後にはいつの間にか、制服の上からユニフォームとはつぴに身を包んだマックイーンさんが立っていた。あれ、さっきまでウイニングライブしてたはずじゃ……？

「マ、マックイーンさん、これは……」

「ええ、解りますとも、解りますとも！ スペさんの出身は北海道、その地で阪神を応援するのは大変でしょう！ でももうご安心ください！ なにしろわたくしもれっきとした虎女ですわ！ そして今日は聖地甲子園でのゲーム！ さあ参りましょう参りましょう！」

その後、半ば強引に甲子園球場に連れていかれた私は姉とマックイーンさんの大声の応援を隣で聞きながら観戦した。

確かに面白かったし、お休みにもなったけど、なして???

—————

【トウカイテイオー視点】

最近、何か動いてないと不安に押しつぶされそうになる。

ボクがなりたかかった会長みたいな絶対。

最強のウマ娘になりたい、って夢はスペちゃんのせいで……、うう

ん。ボクが弱かったせいで成し遂げられなかった。

スペちゃん与会った時、そうなることは予感していたけどそれが目の前に迫ってくると何とも言えない気持ちになる。

気が付けばスペちゃんはボクがなりたかった会長とおんなじ、無敗三冠に手が届きそうになっていて、ボクがなりたかったものになろうとしている。

でもボクはなんだ？

勝てたのはせいぜいGⅡGⅢの重賞。ボクの目指していたものなんかじゃない。

世間で言われているシルバーコレクターにボクはなりたかったわけじゃない。

勝ちたい、勝ちたいんだ。

……でも。

前に比べてボクは格段に速くなった、強くなった。新しい技も身に着けたし、ボクが目指していた、思い描いていたものにたどり着こうとしている。

でもスペちゃんは元からボクよりも強くて、ボクよりもずっと速く成長して、ずっと強く成長して、ボクよりも多くの技を持っている。ボクよりもどんどん先に行っている。

とても追いつけるビジョンが浮かかない。

ボクは絶対でも、無敗でも、最強でもない

一体ボクは何なんだろう

……ううん、悩んでる場合じゃないね。

今のボクは何でもないかもしれないけど、これから先はどうなるかわからない。スペちゃんもまだ三冠じゃない。菊花賞が残ってるんだ。

今のボクがすることはどうにかしてスペちゃんの三冠を阻止すること。

レースでボクがスペちゃんよりも速くなったことを証明すること。

うん、考えてたら悩んでる場合じゃなかった、無理やりにも前に進まないと……。

「……大丈夫ですか、テイオー？ 急に立ち止まって何か考えていたようですが。」

「ん、マックイーンか。……ううん大丈夫だよ。よし、早速練習に行こうか。」

PART 74

菊花賞、前日

ただがむしやらに薙刀を振るう。

トレーナーさんからは必要以上に体力を減らさないように言われたが、居ても立っても居られなくなり学園内の道場を借りて薙刀を振り回している。

本当はこのように感情に任して振るうものではない、精神を落ち着かせて型の動きの通りになぞっていくものだ。

しかしながら今日は自身の感情をどうにかして落ち着けるために、研ぎ澄まさせるために振るう。

「スペちゃんは私達のことを全く見ていないっ！」

思い返せばスペちゃんと一緒に走ったレース、彼女の強さにはばかり目が行き、それに追いつこうと我武者羅に進んできた。そのせいで気が付かなかったが、この夏を挟んで自分と周り、過去を見返す時間を取ることができたおかげでようやく気が付いた。

スペちゃんはレース、勝負の時に私たちのことを全く持って敵と認識していない。ただ簡単に超えることのできる障害程度にしか見られていない。

そのことを考えてしまってから私の感情は治まることを知らなかった。

過去のレースを見返し、彼女との日常生活を過ごし、そしてトレーナーさんたちの御好意で行われたスピカとの合同練習の時に理解し

てしまった。

スペちゃんにとって私など有象無象の一人にすぎないということ。いやそれ以前に誰かと競い合う気すらないということ。

彼女にとって何かしらのレースに出走する理由はあるのだろうか、どう考えても彼女は自分と戦っている。誰かと高め合うということをしていないように思える、そう感じる。

併走でも手加減されていることもその理由だろう。全身に無理やりおもりを付け、キングさんによると全身の動きを制限するトレーニングスーツを着て練習している。ああ、手加減されている。たかが練習だと思われている。

私の心の内を支配する感情は怒りだ。

スペちゃんが私を見てくれないことに対してではない、自分が有象無象にしかねないことに対してだ。

どうしようもなく悔しい、そして自分が恨めしい、悔しい。なぜ私が彼女に追いつけないほど、気にしてもらえないほど弱いのか。

そのことを考えるとどうしようもない怒りが心を支配する。

しかもこのことに気が付いたのは最近。菊花賞までまったく時間がない。

スペちゃんに追いつこうにも強くなる時間が足りない。

自分の愚かさに狂いそうになる、なんでもっと早くから死に物狂いで追いかけなかったんだ。

ただ無言で薙刀を振り続ける。

自身の感情を整え、その向きを一つに向けるために。

無駄な感情を切り落とし、ただ私のことを見てもらうために。

肉体はまだ完成していない、ならばせめて精神だけでも一つに整える。

その後、深夜までグラスワンダーはその獲物を振り続けた。

—————

ヤハロ〜！ どもども、投稿者ですぜ。

今日はやっとこさ菊花賞ですな。スペちゃんの大事な三冠が掛かったレースですが、実はそこまで心配していませんよ。ステータス的にも色々他のこにも勝ってますし、スキルも豊富です。ちなみにただいまこんな感じですよ！

＜スピード：B

スタミナ：B+

パワー：A+

根性：B+

賢さ：B

＜スキル

【シューティングスター】Lv. 3

【汝、皇帝の神威を見よ】Lv. 3

【空駆ける英雄】Lv. 2

【不沈艦、抜錨オツ！】Lv. 2

【ゲートの支配者：改】

【食いしん坊】

【逢魔時】

【プレッシャー耐性○】

【末脚】

（【率いるもの】）

ステータスは前発表した時よりもそこまで増えてませんが、ルドルフ会長のスキルが2から3に成長しました。……今回の作戦的に最中直線に加速する【空駆ける英雄】をあげたかったです。間に合いませんでした。ま、今後役立ついいでしょ。

にしても未だにアクティブ化されていない【率いるもの】ってなんのスキル何でしょうね？ 実はwikiとか検証班の方に聞いてみたくんですけど結局わからなかったんですね。名前に何かのバフスキル何でしょうが、全くわかりません。

……ま、今回のレースには関係ないでしょうし置いとくと思いますか。

さ、それでは今回のレースの作戦をお話していきましょう！ スペちゃんにはもうお伝えしましたが、復習のつもりでちゃんと聞いてください。

「はいー！」

では早速。

まず最初のゲートで【ゲートの支配者・改】を使いまして、全員ゲートを失敗させます。そしてスペちゃんは悠々とスタート。いつもならそこから速度を下げて差しの位置に下がりますが、今回はやはり爆逃げ致しましょう。本来のスペちゃんは逃げなんてできませんが、スズカ先輩のおかげで何とかレースに使えるぐらいになりました。適性値としてはDですかね。んで、そのままスペちゃんの多めスタミナを頼りに逃げまくりまして、最後のコーナーあたりで疑似的2の矢を行います。そこからはいつも通りです。

ま、こんな感じですけど何か質問ありますか？

「ないよ〜。」

うむ、よろしい！ あ、あとレース展開、スキルの利きが悪かったり、思ったより他の子が付いてきた場合は、どんどん後ろに下がって先行や差し策に移していくつもりなのでよろしく。んじゃ、やっていきましようか。イクゾー！

「おー！」

—————

『さあ今年もクラシック三冠レース、最後の大一番、菊花賞が始まるうとしていきます！ なんとと言っても注目はクラシック三冠を無敗で王手をかけているスペシャルウィーク！ どのような走りを見せてくれるか楽しみですね。』

『彼女にとっては無敗三冠を掛けた非常に大事な一戦となりますが、彼女が今まで出走したレースはどれも中距離レース。菊花賞の3000mにどこまで対応できるかが勝敗を決めそうですね。』

『他出走者としては皐月、ダービー共に二着となったトウカイテイオーやステイヤーとして名高いメジロマツクイーンが出走しており、スペシャルウィークに初の黒星を付けてやろうと狙っています。』

『確かに二人ともよい仕上がりますが、私としてはグラスワンダーにも注目ですね。パドックでの気合の入りが非常によく、好走が期待できそうでした。あとはエルコンドルパサーあたりでしょうか、これまではそこまで成績は振るいませんでしたが、彼女自体高レベルで纏まった力を持っています。夏を経て一皮むけたようですし、期待ですね。』

後はキングの距離適性的不安が話され、またスペちゃんの話に戻っていった。

よし！ 全く注目されてない。

いままで私は無理に大逃げをして、そのことをみんなの目に焼き付けた。

菊花賞に出走するために出たレースでも大逃げで無理やり勝てたという風に走った。

周りはみんな私が大逃げしかできないと思っているはずだ。レース展開としてはどうせ私が大逃げするからそれに引きずられないように無視する、後方で待機するという方針を取ってくるはずだ。

まあ、もちろん大逃げはするけどね、ただし途中でしつかり休ませてもらいますけど。

このために全部のレースで周りに刷り込ませた、全部ここで勝つために。

スぺちゃんに比べて単純な力じゃ太刀打ちできない、だからこそその策。

………いける、いけるはずだ。

前評判では全く気にされてなかったし、みんなの評判も良くなかった。日常生活でも『せっかくクラシック登録してG1出れるぐらいは勝たせてもらった。どうせ勝てないだろうけどまあ出ておこう』みたいな雰囲気でごせた。誰からも私が本気でスぺちゃんを止めようと思っていないはず。

そうだ、バレてないはず、バレてないはずだ。それなのに………

さつきからどうやっても止まらないこの体の震えは何なんだ。

『現在順調にゲート入りが進んでいます。例年ではどのレースでも何人か嫌がる子も出てくるんですが、今年のクラシック三冠レースでは特にそのような子は出ていませんね。』

(吸って、吐いて、吸って、吐く。……よし、余計なことは考えるな。ボクは走れる。調子もいいはず。)

(初のGⅠですがこれほどまでにゲートが緊張するとは……、いえ、どのような結果となろうともメジロ家に恥じない走りを。そして多くの学びを得れるように走りましょう。勝てるならば勝ちたいですがいまだ私は成長途上、春の天皇賞のためにも学びを得れることに集中しましょう。)

(ダービーで折れてしまった私、それを救ってくれたのはスペちゃん。うん、今日は恩返しだ。誰からも逃げないで、誰にも負けない。私ができる全力でスペちゃんに勝つ！それが私のできる恩返しだ！目指すはスペちゃんよりも前！)

(距離適性、ええそうでしょう。確かに私は長距離に向かない。……ですがそれが諦める理由にはならない！私だって何もしないでここに立ってるわけじゃない！今日こそ私がキングであることを証明して見せる！)

皆さんやはり素晴らしき面構え。この一戦を戦い抜くにふさわしいライバルたち。

しかしながらこの私もここにいる誰よりも精神を研ぎ澄ませてきたという自負がある。

絶対にスペちゃんを追い抜き、追い越すという意味がある。

ですが……

なぜ、そのような顔をしているのですか、スペちゃん！

『さあ全員ゲートに収まりました！……今、スタートです！』

ゲートが開いたその瞬間、私のすべてが何かに食い殺された。

—————

私は、この技があまり好きではない。

お姉ちゃんという「ゲートの支配者・改」はこれまでのゲートが開く前から私のプレッシャーをゲート全体にゆつくりと充満させて、プレッシャーに満ちたゲートによってスタートを遅らせるというものではなく、ゲートが開いた瞬間にプレッシャーをゲート全体に向かって解き放つという技だ。

これまでのものがゆつくりと充満させていくものに対して、新しいものはゲートが開いたその瞬間に私の持てるプレッシャーをすべて叩きつけるというもの。非常に攻撃的な技。

正直に言うことができるならば使いたくない。ずっと封印してもいいぐらいだった。

私がしたいのはこんなことせずに、正々堂々と一緒に走りたいということだった。

でも、勝つためには使わないといけない。

言うなればこの菊花賞は次のジャパンカップ、有馬記念に向けた練習。シニア級の人たちに万全に使えるように同じ大舞台で練習しないといけない。

「だから」

こんなことしないと、絶対に勝てないという自分の力のなさに
こんな技に頼らないと勝てない、と思ってしまう私の弱さに

「ごめんなさい。」

—————

『ど、どうした！ スペシャルウィーク以外ゲートから出てきません！』

(か、体が……)

(マズいマズいマズいマズい！ 動け動け動け動け！)

(全身が鉛のように重い！ 体が何かに縛られているように硬い！
動けない！)

『何か問題が起こったのでしょうか！ あ、今走り出しました！』

『トウカイテイオー、メジロマツクインが大きく遅れましたが何とかスタート、それにつられてエルコンドルパサー、セイウンスカイ、キングヘイロー、グラスワンダーと順にスタート。それ以外の子はまだ

出てきません!』

『現時点、後続と非常に大きく離れまして先頭はスペシャルウィーク。独走状態です。』

(だいぶ前に一度食らったから何とか動けたけど、それ以上にこれはマズい! 前よりも威力が上がって一瞬気がなくなってた!)

(アメリカ合宿でスズカ先輩に逃げを教わっていたのはこのためでしたか! 見たところ差は10馬身以上、どうにかして差を縮めないで勝負にすらなりません!)

『おっと、ここでセイウンスカイが大きく加速した! 先頭に追い付くために大逃げを開始です!』

(先に出た子がいたから何とかつられて動けたけど、どうしたらいい!?! どうすれば最適だ?! 今まで考えていた作戦は全部壊された!

どうすれば勝てる、どうすれば抜かせる! 考えろ! 考えるんだ私!)

—————

観客席、ここには菊花賞で出走するメンバーのトレーナーの一部が集まっていた。

年長者であるキングのトレーナー、赤田が情報共有と観戦を提案し集まった形になる。

ここにいるのはスピカトレナー、担当はスペシャルウィーク、トウカイテイオー、メジロマツクイーン。リギルトレーナー、東条。担当はエルコンドルパサーとグラスワンダー。それにセイウンスカイを担当する緑川だ。

正直言つて雰囲気は最悪だった。レースが始まる前までは同業として、ライバルとして色々談笑をするぐらいだったのだが、あのスタートのせいで崩壊した。

「ブラフ、だと思つてただけどなあ……、一本取られたねえ。」

俺は確かに『逃げができることはブラフだ。』と言つた。そう考へて行動した、しかしながら奴さんはこつちよりも賢いようであえて苦手な作戦であろう逃げを使つてきた。

一流、その一部が使用するプレッシャーを使った技術。デバフなんて言われる技術で確かルドルフがレース中に使つていたことを記憶している。

今回俺たちが見せられたのはそのゲート版だろう。見た感じゲートが開いた瞬間に合わせてプレッシャーを掛けることで出遅れを生させる技。元々身体的能力の差が大きいスペシャルウィークとそれ以外に対して凶悪な効果を發揮したといえる。

しかも俺が担当しているお嬢はスタミナは何かあるが長距離にはどうしても向いていない。何とか人並みに届かせることはできだが、生まれ持った才能が長距離には向いていなかった。……いや、それ以上にあの子は短い距離の方が向いているといえる。

まあ完全に読みで負けた俺なんかよりも悲愴な顔をしているのが緑川だ。おそらくだが今までの無理な大逃げはこの菊花賞のためのブラフだったんだらう。そのために努力してきたものが全部ひとりにつぶされちまつたと言うのは、な。

—————

『いまだスペシャルウィークの独走状態！ 強烈な逃げと共に後続と大きく差を離れています！ まさに一人旅！』

お、一人旅って言われてますねえ。聞いた話によると実況でとあるワードで自身が紹介されるのがスキルの入手に繋がったりもするみたいですが、まあ今回入手できたとしても逃げスキルでしょうし、スペちゃんにはそこまで関係ないですね。

んじや、ちよつと後ろを見てみますか。あ、スペちゃんはこのペースで走り続けてくださいね。ちよつとばかりハイペースでキツめですが頑張つてクレメンス。

(コクコク！)

え〜とですね。現在後続と7馬身程離れまして二番手にセイちゃん。その後ろ3馬身程離れて団子になってトウカイテイオー、メジロマックイーン、残りの黄金世代のみんなという感じでしょうか。その後ろはちよつと離れすぎててどんな感じか解りません。

皆さん大逃げ中のスペちゃんに追いつくためか、かなり無理して追いつけてきてますね。思ったよりゲートスキルが凶悪だったせいでみんな出遅れしてしまったのが原因でしょうが、こちらの思うつぼとどうか作戦通りになりそうです。

ざつと見た感じ皆さんのステータスもよくてC+といったところ。平均してみるとCぐらいなので何かこちらの知らないスキルなんかをぶつけられもしない限り負けることはなさそうですし安心ですねえ！

ん〜、どうしましょう。スペちゃんスタミナの方はどうですか？

このまま逃げたままゴール出来そうですか？ 無理そうならここから速度を落として一度抜かせてから抜き返すこともできますけども

…

(大丈夫っ！)

お、いいお返事！ なら最後まで逃げ切りますよお〜！ バクシン
バクシンー！

—————

一步前に進むごとに差が縮まってるのか、それとも離れていったしまってるのか全く分からない。普段よりも長い距離、そしてスペちゃんのスタート。思っていたよりも精神にかかる負担がキツイ。

ああ、駄目だ。周りをよく見て考えないと。こんなところでへばつてたら何者でもなくなってしまう。

スペちゃんは依然先頭、ボクとの差は8, 9バ身ぐらい、2番手のセイウンスカイがそこから6バ身程後ろ。ボクたちのところはマツクイーン、エルコンドルパサー、ボク、キングヘイロー、グラスワンダーが順に固まっている。全体的にスペちゃんに追いつこうとして速度をあげてるからハイペース。

意識を集中させてよく見てみると差は少しずつ縮まってる。良かった。

……でも間に合うのか？ ちょうど今スペちゃんが2000m過ぎたぐらい、残り1000m。これで間に合うのか？ スペちゃんの真骨頂は最後の直線での爆発的な伸び、たとえ逃げをしていたとしてもあのスペちゃんだ。絶対に直線で伸びる。

駄目だ、絶対に間に合わない。

ここは無理をしても前に出ないと勝てない、その可能性すら消される。

また大差負けしてしまう。

普段は最後の直線辺りからしか使わないけど、やるしかない。
距離が長くなりすぎるとボクの脚が持たなくなる可能性があるか
らできなかった。

でもやるしかない。勝つためにはやる。

ボクが、絶対になるために、会長みたいになるために！

＜『絶対は、ボクだ！』

＜『究極ティオーステップ！』

無理やりだけど、やるしかない！

『あつつと！　ここでトウカイテイオーが上がってきた！　上がってきた！　のこり1000m付近でトウカイテイオーが加速です！　エルコンドルパサー、メジロマツクインを抜いて3番手に躍り出た！』

よし、よし、まずは二人を抜かせた！　行ける！　このまま前に！

『トウカイテイオー、前に上がっていきます！　今セイウンスカイも抜かし、先頭のスペシャルウィークに食らいつく！』

いける！　いける！　いつもよりも調子がいい！　このままいけるんだ！　抜かせるんだ！

カクン

「え……………」

—————

『トウカイテイオー減速！ トウカイテイオー減速！ 故障発生か
！』

(あっ……………)

(ん？ どうしたのお姉ちゃん？)

(…………いや、今は気にしないで。ただ前を見てゴールまで走り抜けて。)

(…………、わかった。)

菊花賞 レース結果

- 一着 スペシャルウィーク
- 二着 グラスワンダー
- 三着 エルコンドルパサー
- 四着 メジロマツクイーン
- 五着 セイウンスカイ
- 六着 キングヘイロー

競争中止 トウカイテイオー

今レースは非常に珍しく、また難しく、悲しいものとなった。

スペシャルウィーク以外の非常に大きな出遅れ。それまで先行、差しを中心にして走ってきたスペシャルウィークの大逃げ。またスペシャルウィークのシンボリルドルフに続く無敗三冠の達成。そして、それまでシルバークレクターであった皐月賞、ダービー二着だったトウカイテイオーの左足首骨折による競争中止が起きたレースであった。

国内ドリームシリーズの開催が発表されたこともあり、トウインクルシリーズを牽引する新たな三冠ウマ娘が誕生したのは喜ばしいことだが、その好敵手になり得たトウカイテイオーの故障が発生してしまうのは悲しい限りである。彼女のいち早い復帰を祈る。

また、これまでレース後のアピールとして指を皐月賞では一本、ダービーでは二本としていたスペシャルウィークは三冠達成時に三本の指を立てるアピールをするものだと思われていたが、トウカイテイオーの事故のためにそれを自粛したと思われる。

PART 75

「…………お姉ちゃん。」

(ん…………？ ああ、テイオーちゃんね、左足首の骨折みたい。ちゃんと見てないからわからないけどたぶん元通りに走れるようになるまでに3か月ぐらい…………、多分次に戦えるようになるのは大阪杯ぐらいになるかな？)

「そうなんだ…………。」

(…………そうだ！ こんどお見舞いに行きましょう！ ほら、この前はちみー頂きましたしお返しにはちみー＋αでみんな誘っていきましよう。)

「…………うん、やめとく。何となくだけど私が会いに行ったら駄目だと思うし、トレーナーさんに頼んでなにか持って行ってもらうことにする。なに送ったらいいかわからないからお姉ちゃんに頼んでいい？」

(そう…………ですか。 んじゃこのお姉ちゃんが選んどいてあげまさあ！ あとちゃんとメッセージカードぐらいは自分で書くんですよ。)

「うん。…………お姉ちゃん、次はジャパンカップだけど何かしないといけないことはある？」

(ん、早速？ まだ菊花賞終わってすぐだし、少しぐらい休んでも)

「お姉ちゃん。」

(……………んじゃ、ケガに気をつけてやりましようか。次は元通り差し策に戻すんでそのつもりで。あと練習はスキル関係の強化と最大速度を上げるためにスピード練習を重点的にやっておきましょう。)

「わかった。」

—————

「セイちゃんー!」

ん、ああ。トレーナーさんか。全然気が付かなかったや。

……………そうだ、ちゃんとしないと。

「アハ、アハハ、ゴメンね、トレーナー。セイちゃん全く歯が立たなかったよ、一緒に考えた作戦も、積み重ねた準備も、何もかも全部ダメだったや。ホントに、ホントに……………」

ああ、どうしよう。笑おうとしてるのに、頑張ってるのに、どうしようもないや。

私がかうまく走れるように、出走するレースの子たちの情報全部そろえてもらって、その子たちに勝てる作戦用意してもらって、それでその作戦が失敗しても勝てるだけの能力を得られように指導してくれて、全部整えてもらったのに、何も返せなかった。

目標にして、それに向かって全部整えてた菊花賞ですら勝てなかった、届かなかった。

「ホントに私、ダメな子だよ。こんなに用意してもらって、場を整え

てもらって、いっぱい時間かけてもらって、それでもちゃんとスタートすらできないで、しかも結果はギリギリ掲示板。もうこんなダメな」

「セイちゃん、いいんだよ。」

顔が、保てなくて、どうしても顔に笑顔にできなくて、心配かけたことなく、でもどうしようもなく泣きたくて、どうにもならないようなぐちゃぐちゃな顔。

そんな顔を見かねたのか、トレーナーが私を引き寄せて抱きしめてくれた。

私の顔はトレーナーさんの胸の中。

もう見られる心配はない。

「泣いても、いいんだよ。 心配しなくて、いいんだよ。」

それから先はトレーナーの胸の中でひたすら泣きじやくったことしか覚えてない。

—————

「……お嬢、大丈夫か？」

「ええ、悔しいですがピンピンしてますともー！」

今、私はどうしようもなく腹が立っていた。あの自身の身を削るようなトウカイテイオーの走りではなく、それを見た自分自身にだ。そもそもなぜ、あの時スタートを失敗してしまったのか、あの程度、とはとても言えないようなプレッシャーだったが、あのような出遅れを

防ぐ術はあつたはずだ、何故その対策を取れていなかったのか。なぜトウカイテイオーのような自分の体を削ってまで勝ちに行くような精神がないのか、なぜ自分にはそんな身を削ってまで前に行くような技術がないのか、それをできるだけの素質がないのか、そしてなぜ私は距離が長くなればなるほど弱くなってしまうのか。なぜ長い距離が走れないのか。

母は走れた、長距離なんて軽く走れた。なのになんで私は短くないと走れないのか。

母は勝てた、GIに勝利し名を挙げた。なのになんで私は何をしても勝てないのか。

恥ずかしい。

優れた母に恵まれ、育てられたのに結果を出せない私が。

優れた師に恵まれながらも、その恩を返せない私が。

そして同室のウララさんに合わせる顔がない。

優れた成績を出しながらも、全く振るわない私のことを気にかけてくれていた彼女に申しわけない。

ああ、本当に、本当に！

「キングヘイローー！」

「ッー！」

「とりあえずお前さんは落ち着くべきだ、ほれ深呼吸。」

……確かに少し気が逸っていたかもしれない、言われたとおりに深呼吸を始める。

「よし、とりあえずは俺の話が終わるまでは深呼吸し続けてくれ。お嬢はちよつとばかし滾りすぎてたようだしな。最初に俺から言えることは、本当にすまなかった。スペシャルウィークの逃げはブラフだというように決めつけて対処することができなかった。」

思わず、私が負けたのは私自身のせいだ、と口にしようになるのを目でやさしく止められる。

まだトレーナーの話は続くようだ、聞かなければ。

「……今回勝てなかった理由は上げようと思えばいくつかあるが、そのすべてが俺の指導不足によるものだった。お前さんの時間を無駄にしてしまったことは、本当に申し訳ない。」

「だから、次の勝負までに今回のレースで思いつく限りの対策をお嬢に指導したい。だから、これからお嬢のトレーナーをやらせてくれるか?」

……トレーナーにそこまで言わせてしまった。

いや、でもトレーナーのおかげで落ち着いた。私は私のあるがままに。

それ以外できないのだから。

「ええ、もちろんですわ! こちらからお願いしたいぐらいですとも!」

—————

「エル!」

「あ、おハナさんですか。オ、そんな心配そうな顔しないで大丈夫ですよ。ちよつと落ち込んでますけど前みたいにどうしようもなく

なっちやったわけではありませんカラ！」

「……そうか、私じゃ頼りないかもしれないんが何かあったら何でも言うてくれ。」

「ハイ！ それとおハナさんは全然頼りなくないですよ！ あと、私なんかよりもグラスのことを気にかけてあげてください。私が話しかけても気が付けないぐらい思いつめていたようでしたから。………あ、それとちよつとマスクが濡れちゃったので取り換えてきますね！」

「そう、か。ではまた後でな。」

ダービーの後、何とか立ち直れたエルだが、今回の敗戦でも少なからずダメージを受けてしまっているようだ。だが、前回の時よりも回復はできている、エルの目は前を見ることができていた。

とりあえずはエルのごときは大丈夫そうだ。だが彼女も言っていたようにグラスの様子がおかしいらしい。おそらくだが彼女の控室にいるのだろう、急がなければ。

今回のレース。私は2着だった。？一着のスペちゃんとは5馬身差。

これまでの結果を考えるに差は縮まってきたるように思える。

そう、思えるだけだ。

もつとよく考えてみる、私。スペちゃんの選んだ作戦はなんだ、あのゲートでやられた凶悪なプレッシャーのことを忘れたのか、そもそも彼女は私を見てくれていたのか、一人の敵として見ていてくれたのか！

否、彼女の目には私なんか映っていないかった。それ以前に出走した面々が個人として見られていたかも怪しい、ただの有象無象としてしか見られていなかった。

そもそもスペちゃんが今回取った作戦は逃げだ。今までのレース、そして本人から聞いたことがあるから解る。彼女が一番得意とするのは差しだ。つまりこの菊花賞では本気を出されていない。私があのプレッシャーの中から抜け出せたのも先に誰かが出てくれたおかげで、それにつられてスタートできたに過ぎない。

何もかも、何もかもスペちゃんに私を意識させるには、何もかも足りない。

力が足りない、速度が足りない、技が足りない、心が足りない。

……いえ、これはスペちゃんが教えてくれたのね。

私に何もかも足りていないことを教えてくれたのね。

ええ、ええ、それならば、彼女がそう思っていないくても私は彼女が求めるまでに上り詰めないといけない。彼女と戦い、競い合えるまで自身を鍛え上げないといけない。

まだ、私には甘えがあった。それを教えてくれたのね、スペちゃん。

全身に力が入る、何かが燃える音がする。

その後、東条トレーナーが見たグラスワンダーは、強く握締め過ぎた手のひらが血で真っ赤に染まり、全身に青い燃えるようなオーラを醸し出しながら静かに笑っていた。

—————

「失礼しますわ、テイオー。」

あの後、テイオーはレースを中断し、そのまま病院に運ばれた。スぺさんや私のウイニングライブがあったため一緒についていくことはできなかったが、トレーナーさんがついていってくださったようだ。

「ん？ ああマックイーンか、いらっしやい。何もないけどゆっくりしてってよ。」

「あら、大嫌いな病院にいるのに思ったより元気そうですね。」

「アハハ、まあ入院するのは半月程度って話だしそれまで我慢するよ。マックイーンみたいにお見舞いに来てくれる人が多いし、なんやかんやでやることあるから退屈はしそくないしね。」

解っている、テイオーが無理していることぐらい。でも私が心配しているところを見せつけられることは彼女は望んでいない。私達は

いつも通り、軽口を言い合えるぐらいの関係でいいのだ。

「……全治三か月だった。リハビリも考えたら大阪杯出れるか出れないか、つてところ。」

「そう、ですか。」

「また、離されちゃうよね。せつかく追いつきそうになってたのに……。あ！　そういえばさ、マックイーンはどうだったの？　ボクは早く使いすぎて足やつちやたけど、マックイーンはいつも通り最終直線で使ったんでしょ？」

「あのね、テイオー。それ私以外に言うのはやめてくださいまし。何にも言えなくなってしまうすわ。」

「えへへ、ごめんごめん。」

「もう！　……あなたと同じように私も自身の中にある二つ目を引き出し、それをレース中に同時に使うということはかなり前にできるようになっていました。ただ、その負担の大きさからあなたとの練習ぐらいでしか使っていませんでしたが……、やはり負担が大きすぎますわね。レース後、軽い痛みを感じたため当家の主治医に相談したのですが、やはり長時間の使用、そして多用は避けるべきだと言われました。」

「やっぱりそうなんだね。」

「ええ、ですが効果。その加速力の大きさは絶大。いまだ使いこなせませんがこれを完全に使いこなせるようになれば必ずスペさんを追い抜くことができる、そう確信できるものでした。菊花賞で使ってみて、再確認できたと言えます。」

「……そっか。ではではそんなマックイーンにプレゼント！ ボクがレース中に何回か使ってみてたのは知ってたでしょ。その時の感触とか、ボクなりの考えとかをノートにまとめてみました！」

テイオーからノートが手渡される。

これは、なんとというか……

「ボクが諦めてマックイーンに後を託した、そう思ってるでしょ。も、違うんだからね！ ほら、ちゃんと中身見てみて！」

そう言われてノートを開く。彼女の字で所狭しと書きこまれているが、それはノートの見開き片側だけ。もう片方は白紙だ。

「左側はボクの。右側はマックイーンね。それでさ、ボクが書いた疑問とか、思いついた改善点とかも書いてるからマックイーンがやってみてその感想を右側に書いてよ。それで、開いちやった三か月をこれで巻き返す。マックイーンもボクのデータや考えた知識が手に入るし、同じようなことしてるからwin-winだよね。」

「……ふふ、そうですわね。ぜひ、やらせていただきますわ。しかしながらこんなドッキリみたいなのはやめてくれませんか？ わたくしったらテイオーが腑抜けたことしだしたと思っぴつぱたきそうでしたわ！」

「ええ、ひどいなマックイーン！」

そう言いながら私たちは笑いあった。やはり、私達はこれぐらいの方がいい。

「ああ、忘れていましたわ。こちらスペさんからのお見舞いの品です。詳しくは知りませんが地元のお菓子みたいですよ？」

「へく、まあスペちゃんジャパンカップに有馬記念の連戦コースמידいだし忙しいのは解るけど、ね。……あ、なんかメッセーじカードみたいなのが付いてる。なにになに〜」

『待っています。』

「……………へえ。」

「これはなおさら早く治さないと、ね。」

PART 76

「それで、お嬢。次はどうする?。」

菊花賞での敗戦の翌日。私は練習の前にトレーナーさんからとわれた。

「お前さんも解ってるとは思いますが今年残ったGIはジャパンC、マイルCS、有馬の三つ。ドリームシリーズの件で上から狙ってくる奴がいるだろうが、お嬢ならどれでも出走自体はできる。……だが、俺としてはどれか一つに絞って欲しいってのが本音だ。ただでさえオーバークワーク気味なんだ、これ以上の負荷はお嬢の今後を考えれば許可しにくい。」

深く、頷く。私はスペさんのように体が異様に丈夫、というわけではない。トレーナーが言う通り、今の練習量を続けたまま二つのレースに出走するのは不可能なんだろう。

「お嬢のことだ、マイルには出ないんだろ?。」

「はい。」

今年の成績、GIでの成績は負け続けた。しかしながらそれが理由で皆との勝負を避けるのはキングのすることではない。

「と、なるとジャパンCか、有馬になってくるが……。俺としては有馬を推したい。このままのペースで行くと菊花賞の疲れが抜けきっていないままの勝負になる可能性が高い、距離は多少長くなるが出来るだけ完全な形で挑んだ方がいいと思ってる話だ。」

……確かにこのままジャパンCに出走するのは難しい。準備期間が少なく、疲れを残したまま、そして成長できないまま挑むのは避けたい。

「……はい。それでお願います。今度こそ、勝利を！」

今度こそ、今年最後の大舞台で。

私を思ってくれた人のためにも、私自身のためにも、スぺさんに勝利する！

—————

「大丈夫、切り替えられる。まだ策はある。」

そう、自分に言い聞かせる。

全部を掛けた菊花賞。ダメだったけど、まだ何とかなる。ダメだったことが次につながる。

「幸い、まだ私の策はバレてない。もう一度見直したけど私の大逃げはいつものまま。バレてない、評判でもそういわれている。」

そうだ、あの時はとにかく前に進もうとしていたが、世間にはそれが私が「見せて」いた私と何ら変わらない。まだ私には道が残っている。

「……と、なると最大の問題はスぺちゃんのプレッシャー。ゲートが開く瞬間に叩きつけるあの暴力ともいえる技。どうにかしてあれを耐え切って先頭を維持し続けたいといけない。」

と、なると今の私に必要なのはあのプレッシャーを気にせずスター

トできる強靱な精神力とスペちゃんの大逃げよりもさらに前で逃げ続け、スペちゃんが後ろに下がらざるを得ないほどのスピード、それを維持するスタミナ。

「改めて上げてみると、やること多くてやんなっちゃうね、あはは……………、遠いなあ。」

考えるとどうしても時間が足りない、けど私にとって時間は敵だ。

「どう考えても私じゃおいてかれる。どうしても伸びしろ、ううん成長の早さが足りない。」

私が単純な力量だけで勝負しない理由、それは自身とスペちゃんとの力の差もあるけど一番の理由は成長速度の差だ。

私が一歩前に進むとすでに他のみんな、特にエルやグラスがさらにもう一歩前に進んでる。スペちゃんはもともとの差が大きすぎてわからないけど、エルちゃんたちとの差が離れてないところを見るに速度は同じかそれ以上。

歩幅や速度が違う相手に挑み、勝つには策を用いるしか方法はなかった。

「トレーナーさんから渡されたデータ。これがホントになあ…………。」

データと作戦に重きを置いている私のトレーナーさんが用意してくれたもの。それは私達同世代、特に有力ウマ娘の現在の力量と成長速度についてまとめられたものだ。もちろん私のデータもある。

これを見ていると嫌でも思い知らされる。

これからさらに差が広がることを。

スペ、エル、グラスの三人の成長速度が徐々に上がっていること、そして私とキングが遅れ始めていること。そして自分だからわかるど

うやっても超えれそうにない壁の存在がもうすでに見えかけていること。またこの三人にそれが全く持つて見えていないこと。

そうだ、私が置いて行かれるのはすでに「決まって」いる。

来年、シニアに入る頃じやもう追いつけない、私は本当に有象無象に成り下がる。

私が求める基準に何とか辿り着きそうで、今までの策がピツタリ嵌ったときにだけ勝利を手に入れられるギリギリのラインが年末の有馬記念。そこが私のタイムリミット。

「やるしか、ないよね。」

まずは菊花賞で使い切ってしまった体力の回復、その回復の間に、他の強化を考えれば時間的に精神を鍛えておかないと間に合いそうにない。

—————

「二人ともジャパンカップへの出走登録、か……。」

「ハイ！ グラスは一人にしてほしいみたいなのでワタシがまとめて言いに来ましター！」

「……そうか。」

「ワタシもグラスも今の目標はスペちゃんですが、いつかは世界に飛び立ちたいと思ってます。なので世界からの色々な強い方が集まるジャパンカップは挑戦しがいがあります。スペちゃんは有馬も出る

みたいですが、ワタシたちが全力で勝負できそうなのはどちらか一つだけ。なのでこっちにしましター！」

「だが、いいのか？ 知ってるとは思いますがドリームシリーズの件で、ルドルフの出走が決まっている。」

「モチロン知ってます！ でもそれが逃げる理由にはなりませんシ、会長さんと戦えるのはうれしいし、楽しみデス！」

「……了解した。エルの方の出走登録はこちらで進めておこう。だが……。」

「……グラスは多分。ワタシの時より難しいと思います。たくさん気にかけてくれたから何か返したいですけど、多分ワタシじゃ駄目なんだと思うんです。」

「……解決のカギになりそうなスペシャルウィークの方もスピカの奴に聞いたが、精神状態がいいとは言えないそうだ。おそらく今無理に合わせると、すれ違い爆発する。……とりあえずこちらでできる限りのことをしてみる。エルも無理をしないで欲しい。」

「はい、よろしくお願いします。」

スペが取り返しのつかないところに行きかけているのは解っている。

だけど私にはそれを回避させる術はない。

私の契約とスペの契約は別物。

私の契約はスペの疑似トレーナーになることだけ。

それ以外の物は求められなかった。

スペの目標や契約はスペにしかわからない。

私の内容は伝えることができたが、スペの契約は違う。

その内容を私は知らない。

私にできることはない。

私には縛りが多い。

出来ることはトレーナーとしてのことだけ。

それもすごく限定的。

なんとか例外も見つけることができたがほんの少し。

私はほとんど見ていることしかできない。

私はあなたに触れられない。

出来ることは、

せめて、気づかせてくれる人のところに連れていくぐらい。

他人に任せることしかできない私を許して。

PART 7

『ゴールドシップ、凱旋門挑戦。』

世間ではスペシャルウィークの無敗三冠が注目されていたが、国内の目は外にも、海外にも向けられていた。ダービーは落としてしまったがクラシック二冠ウマ娘。また史上初の宝塚記念三連覇をなすなど国内でも有数のウマ娘である彼女が凱旋門に挑戦しようとしていた。

彼女の普段の行い、またはレースでのハプニングなど、稀代の癡ウマ娘として名高く、熱狂的なファンが数多くいる彼女にしては珍しく練習の時から全力で準備し始めたこのレース。

彼女のファンたちはこう言った。

『今回のゴルシはマジだ。』

とまあ、色々言われてるみたいだよな、ゴルシちゃん。

正直真面目にやるのは久しぶりだったからきつかったけど仕上がった。

今回ばかりはアイツのためにもガチでやる。

このレースがアイツに響くかどうかは解らねえけどやるだけやる。たとえ負けたとしてもバトンは渡せる。

うし、覚悟完了！ やつるぞ〜！

『君が、ゴールドシップか？』

お、考えているうちにあつちから来てくれたんだな。

『おうおう、そうだけ！ ゴルシちゃんって呼んでくれよな、ブロワイエ。』

何の因果か私を知る元々とかなり違うこいつ。

こつちじや欧州三冠達成済み、芝の欧州最強、ブロワイエ。

凱旋門二連覇をかけてのレース。

あっちも本気の本気、仕上がりが半端ねえ、な。

『わざわざ日本からフランスに来てくれてありがとう。良いレースにしよう。』

……………へえ。 わざわざ来てくれてありがとう、ねえ。

スぺ、悪いけど台詞もらうぞ。

『うんうん、そうだな。一緒に頑張ろうな！ ……それと最後に。』

『La victoire est
調子乗んな』

—————

『レースは終盤最後の直線！』

『先頭はブロワイエ！　すでに全部差し切って先頭！　欧州最強は伊達じゃない！』

『……あつと！　ゴルシワープ！　ゴルシワープだ！　ぽっかり空いた穴に差し込んで二番手に躍り出た！　そのままブロワイエを猛追！』

『並んだ！　並んだ！　ゴールドシップ、ブロワイエ並んだ！　日欧最強決定戦！』

『どっちだ！　どっちだ！　どっちだ！　今並んだままゴールイン！
掲示板はまだか！』

『………！　今出ました！　ブロワイエ一着！　ハナ差でゴールドシップ！　ゴールドシップあと一步のところですが届きませんでした！』

「ほら、見ろよこれ。すつげえ惜しいだろ。」

「え………？　何でいるの???　だってこのレース1時間前の?????」

「そりゃ、ゴルシちゃんだからワープぐらいするよな、うんうん。にしてもスペ、もう結構遅い時間なのになんで走ってんの？」

「それは……。」

「ま、それはいいけどな。ふあゝゝゝ、にしても『調子乗んな！』って言って負けちまったし、直前のインタビューで『ゴルシちゃんの赤は日の丸の赤だ！　ま、かるゝく勝って来るぜ！』ていつて負け負け、う

「ん世知辛いぜ！」

「そう、ですか……。」

「んでき、ほれ。凱旋門で出走してたやつらと来年度出走しそうな奴らのデータ。あとそれ以外の欧州で目ぼしい奴のデータ、ロンシャン競バ場とアスコット競バ場データと走ってみた感想な。」

「……………」

「おう？　なんで、って顔してんなあ。……来年走りに行くんだろ、K G V I & Q E Sと凱旋門賞。」

「ツ！　……誰にもまだ言っていないのに。どうして知ってるんですか。」

「そりや、ゴルシちゃんだし、うむ。後輩が来年春秋計6冠プラスこれを取りに行こうとしてるんだったらそりやあ手助けするわな。ホントは海外なんて行く気なかったのをわざわざ変えて調べてきたんだぜ。」

「それで……」

「ま、思ったより楽しかったし、これからフランス観光してくるからそこらへんは気にすんな。……………それでき、最近色々ため込んでんだろ？　私は他の奴らと違ってトウインクルシリーズにはもう出ないし、喋ってもいんじゃないか？」

—————

完全に思い出したのは最近。だけどずっと同じことを考えてた。忘れていたのは最初の大きなきっかけ、別に忘れていたとしても考えればすぐわかる。

いつの間にか、ため込みすぎていたのかもしれない。

私のことを考えてくれていたゴルシ先輩に言われたせいかな、もう我慢できなくなっていたせいかな、

少しでも吐き出してしまいたかったのかもしれない。

学園近くの深夜の公園で、二人でベンチに座りながら、口からあふれ出るものをそのまま吐き出す。

「私が走る初めてのきっかけはお姉ちゃんでした。」

ゴルシ先輩は横で静かに聞いていてくれている。

「お姉ちゃんが走っていたのはもうだいぶ前、私が小学生になる前くらいでした。地方の小さな学校でしたけどお姉ちゃんはその学校のエースで、ずっと一番だったんです。」

「小さかった私は、お姉ちゃんのこと大好きで、憧れてて、一緒に走りたい、ずっと一緒にいたい、そう思ってたんです。」

「それで、あの日……。幼かった私はそう思ってたんです。お姉ちゃんに住む学園、そこはどんなところなんだろう、って。それで、それで姉に無理を言っただけ体験入学させてもらえることになったんです。すごい姉の妹だから、人の少ないあの学園では入ってくる人の

量も限られてましたから、期待されて、大きくなったらあの学園に入って欲しい、て。」

「いま思えば、あの時行かなければ何か変わっていたのかもしれない。……でも、行った方がまだよかったのかも。……その体験入学した日、姉の過ごししてる寮がどんどころか知りたかった私は、姉と同じ部屋に泊まらせてもらうことになりました。」

「それで、その時、その時……か、火事になったんです。ぜんぶ、ぜんぶ燃えてしまつて……」

あの光景が頭に浮かび始める。震えが止まらなくなる。震えで口が動かなくなる。

「あ……」

私の背にゴルシ先輩の手が添えられる。

「あ、ありがとうございます。……それで、私とお姉ちゃんがいた寮が燃えてしまつて、全部なくなつてしまつたんです。」

「姉は、私と同室の方を外に出して、他の人を助けるために寮へ戻りました。火事の中、火の中に飛び込んで……。すごいすよね、そのまま他の人全部救っちゃうんですもん……。ひどいことを言っている自覚はありますが、出来れば他の人のことなんて気にしないで自分が助かる道を選んでほしかった。……姉は、お姉ちゃんは寮にいた最後の人を助けて、私の目の前で倒れて、そのまま息を引き取りました。」

「そのあと、なにも考えられなくなって。世界から色が消えたみたいだった時に。信じてもらえないかもしれないけど女神にあつたんです。」

「……信じるよ。」

「ありがとうございます……。それで、それが何なのかもわからず、ただ救われたい、姉と一緒にいたい、そう願ったんです。」

「そしたら、無敗の三冠ウマ娘になることを対価に、姉がそばにいてくれるという契約を持ち掛けてきたんです。私は、それで姉が生き返ると思つて、その難しさのことも解らなかつたので飛びつきました。」

「それで、私の目の前現れたのは死んで霊になった姉。その時考えていた生き返った姉ではなく、ただ目を閉じて何もしゃべらない姉でした。その時女神が言っていたのは『成果の前貸し状態であるので色々制限をつけさせてもらう』。私が成長するのに必要、練習の指示、所謂トレーナーさんみたいなことを私に対してする時だけ目が覚め、私に話しかけてくれるというものでした。」

「私が求めていたのはそんなものじゃなかつた。ちゃんと生きた姉と触れ合いたかつた、話し合いたかつた、一緒に走ってほしかつた……。そう伝えると、さらに条件を付けくわえられました。『姉を生き返らせたければ生涯無敗であること、そしてシニア級春秋六冠、そして凱旋門に勝利すること』というものです。その時の私はレースのことなんて何も知らなかつた、どんなに難しいかなんて知らなかつた。ただ、ただお姉ちゃんと一緒にいたかつただけなのに……。」

「それで、何とか今までやれてきました。お姉ちゃんのおかげで手に入れられた無敗三冠の称号、やっと一つ前に進めた気がしました。」

「……でも、でもですね。すごい不安なんです。今私がどれだけ頑張っても届かないことがあるかもしれない、何かのケガで走れなくなるかもしれない、それに今が私の上限でこれ以上速くなれないかもしれない。セクさんと走って思い知らされました、世界の話を聞いてどうしようもなく不安になりました。……でも、それ以上にあの女神が信用できないんです。」

「私が契約してしまった女神と違って、何故か姉は他の女神との親交があるみたいで、その女神のおかげで姉と会話できる制限もすごく軽くなったんです。……でも私と会ったあの神は信じられない。なんでもそもそも私の目の前に現れたのか、なぜ私の願いを聞き入れたのか。考えれば考えるほど怪しく思えるんです。」

「姉から聞いたんです。『トレーナーに必要な知識やそれ以外の知識を色々教えられた』って。なんでそんなことする必要があるんでしょうか……、私にはなにか私が原因で、あの女神の思惑で姉が、私の目の前で殺されて、その弱ったところをうまく懐柔しようとした。そうとしか思えないんです。」

「私が原因でお姉ちゃんが殺された。そう、考えてしまうと……」

「そう、か……。あまり思いつめるなよ、スぺ。」

「……はい。それで、姉を通じて私を育てさせる、その意味を考えているとたぶん、あの女神は私にレースで倒させたい相手がいるのではないかと、って。それで、出来るだけ早くあいつが提示した条件をクリアして、あいつが倒させたい相手をレースで倒して、それで、認めさせるつもりだったんです。言い逃れできないよう、ちゃんと姉を生き返らせるように約束させるつもりでした。」

「相手は本当に神かどうかわからないけど力はあるはず、力関係であっちが上な限り、本当に姉を生き返らせてくれるか信用できなかったのでそうするつもりだったんです。……姉の立てた予定では凱旋門はシニア級の二年目だったんですけどね……。」

「あ、すみませんゴルシ先輩。纏まってない上にずっと話し続けちゃって。」

「ん、そのことは全然かまわないぜ。……ま、またなんかあったら話聞かせてくれよな。相談にも乗るし、私もちよつと気になったことあるから色々調べてみるわ。」

「えへへ、ありがとうございます。……なんだか色々聞いてもらえたおかげかちよつとすつきりしました！」

「お、そりゃあいい！ でももう結構いい時間だから早く寮に戻って寝な。ゴルシちゃんはまたワープしてフランスに荷物取りに行くから。」

「はい！ じゃあおやすみなさい！ 日本に帰ったときのお土産期待してますねー！」

「おう！ じゃあの。」

本当に、ありがとうございます、私じや何もできなくて。

「気にすんなって。ま、ホントに気にするんだったら生き返ったときにでもラーメンおごってくれや。」

PART 78

『さあ、トウインクルシリーズの大舞台、世界に誇る芝レース。2400という長くも、短くもある旅路がここ、フランスのロンシャン競バ場にて始まろうとしております。』

『今回の最有力ウマ娘、一番人気は欧州の覇者、ブロワイエ。欧州三冠をなしとげた彼女が二度目の制覇を狙っています。パドックでのパフォーマンスでもこのレースに対して非常に集中していた様子でした。』

『この競バ場に来ているほとんどの方が彼女の勝利を見に来た、といっても過言ではないでしょう。我々日本人サポーターからすれば完全なアウェイですね。』

『そうですね、そして二番人気に推されていますのは我らがゴールドシップ。ブロワイエ以外にも素晴らしい成績を残しているウマ娘はいるのですが、彼女の前では少しばかり霞んでしまう。彼女が出走しなければ我々わざわざフランスに来てまで実況できませんでしたし、ぜひ勝ってほしいですね。』

『レース前の意気込みでも普段彼女が言わないような『私の赤は日の丸の赤、みんなの思いを背負って走ります。』と発言していたぐらいですし、このレースに対して非常に強い思いを抱いて挑んでいると言えますね。なんでも聞くとところによれば凱旋門のために真面目に練習していたとのこと。』

『それは……、次の日槍が降ってきて驚きませんね。と、言っても彼女の思い入れは私達にも解ります。いまままでこの凱旋門にはスピードシンボリやメジロムサシ、シリウスシンボリなどの強者たちが挑みますが結果はよくありませんでした。今回こそ、今回こそ良い成績を

掴み取って欲しいといったところですね。』

『現在、ゲートへの移動が始まったようです。』

『日本のサポーターからの声援が凄いですね、まあゴルシちゃんですし納得です。私も解説の仕事がなかったらあそこにいましたし。』

『わかる。』

—————

「頑張つて〜！」

「ゴルシ！ ゴルシ！」

「お前ならいけるぞ〜！」

パドックからゲートまでの移動、わざわざ日本からフランスに来てくれた奴らの声援にこたえるため軽く手を振る。まあいつもならぎりぎりまで近づいて簡単なパフォーマンスぐらいはするんだが今日はなし。

ま、『調子乗んな』って言った手前ガチでやらんとな。

言わなくても本気でするつもりだったけど。

『さあ、ゲートインが始まっております。』

誘導に従ってゲートインが始まる。前評判ではほとんどブロワイエの二連覇ムードだったが、ここに集まってる奴ら全員がそれを食い止めよう、食い破ろうとしている。

ゲートの雰囲気、張り詰める思い。
誰が発したのかはわからないがいくつものプレッシャーがゲートにまき散らされる。

へへ、燃えてきた。

やろうぜ、『世界』

—————

レース展開としては序盤、中盤は特筆すべきものはなかった。

一番人気に押された欧州覇者、ブロワイエの作戦は差し、対抗ウマ娘として挙げられたゴールドシップの作戦は追込。両者ともに後半戦で勝負を仕掛けてくる作戦だ。

周りもそれを理解していたため逃げ、先行策を取った他のものもペースを落とし、最後のギリギリまで体力を残す方針で進んだ。

このレースにセイウンスカイのような策を巡らすタイプの逃げ策を扱うものがいれば展開も変わってきていたのかもしれないが、今年の出走者の中にはいなかった。

全員が自身の力量に誇りを持ち、全力で、最速でゴールを駆け抜けようとしていた。

レースが大きく動き出すのは1200m付近。

最後尾でこれでもかと体力を温存していた不沈艦が動き出す。

▽「不沈艦、抜錨オッ！」 L.V. 6 を発動！

大地を踏み鳴らす、巨人がごとき足音と共に。

—————

おっしやイクゾー！

『来た来た来たあ！ 不沈艦抜錨！ 最後尾ゴールドシップが折り返し地点を過ぎたあたりで大爆発！ スパートを開始！ いつもの大まくりだ！』

ありや？ ありやりや？

あゝ、こいつはちよつと難しいか？ 前言撤回しちゃいませよ。こつちが速度上げた瞬間にブロワイエの奴も加速し始めてる。それにつられて全体のペースが上がりやがった。まったくいつたいどんな察知能力してんだか。

これに出走してる全員がブロワイエの動向に注目している。逃げも、先行も、差しも、追込も。そのせいであいつがペースを上げれば周りも上げる。

あちらさんがこつちを見てくれてんのは光栄だがちつとばかりこのままペース上げられるとどうなる解らない。本当ならここらへんで全部抜き去って先頭に出たいところだが……、パスだな。

追いかける側の爆発力と、そもそもゴルシちゃんが追いかけるのいやってことでここはまだキープ！

と、言うことでゴルシちゃんこれ以上スピード、あげません！

『おっと。ここでゴルシにつられたかブロワイエも加速開始！ 先頭向かって発進です！』

—————

……？ 来ないな。

二番人気にも推され、わざわざ私に勝利宣言までしてきたのだ。確か、ゴールドシップ。少しぐらいは気にしていたのだが……、まあその程度だったか。

追い込みということだ。警戒はしていたのだが、仕掛けたであろう瞬間に合わせてこちらもペースを上げたのだが上がってくる気配がない。

作戦という可能性もあるが、まあその時はその時だ。全力を持ってそれを叩き潰す。それだけのこと。

さあ、万物よご覧あれ。これが私の走りだ。

『ブロワイエ速い！ ブロワイエ速い！ これが欧州覇者のスピードか！ 前に位置していたすべてを抜き去りました！ 先頭だ、先頭に躍り出た！ ここで最終コーナー！ 現在彼女の独擅場！』

よし、パターンが決まった。現在先頭で後続とのスピード差は大きい。
後はコーナーを曲がり切った後で、残りの直線走り抜けるだけだ。

そんな時、先頭に立ち安心したせいで集中が少しとけてしまったからであろうか。

声が、聞こえた。

「こ、こ、だ！」

—————

『レースは終盤最後の直線！』

『先頭はブロワイエ！　すでに全部差し切って先頭！　欧州最強は伊達じゃない！』

『……あつと！　ゴルシワープ！　ゴルシワープだ！　ぽっかり空いた穴に差し込んで二番手に躍り出た！　そのままブロワイエを猛追！』

『並んだ！　並んだ！　ゴールドシップ、ブロワイエ並んだ！　日欧最強決定戦！』

『どっちだ！　どっちだ！　どっちだ！　今並んだままゴールイン！』

掲示板はまだか!』

『……………! 今出ました! ブロワイエ一着! ハナ差でゴールドシップ! ゴールドシップあと一步のところですが届きませんでした!』

私はただ、掲示板を見上げていた。
危うかった。

油断していたのももちろんあるだろうが、このレースがもう少し長ければ。例えば3000ほどであれば私は完全に負けていたかもしれない。

そう思えるほどの追い上げだった。

しかしながら結果は結果、何とか勝てた。これを糧にして新しい一歩を進むとしよう。

さて、いい勝負ができた礼でも彼女に……

「うわああああああん、ま〃け〃た〃ま〃け〃た〃、く〃や〃し〃い
〃〃〃〃〃つ!」

……………ええ、なにこれ。

いや、さつきまですごく真面目そうな顔で走ってたよね、君。
すつごく好戦的なお目々してたよね!

なんで芝の上の転がって暴れながら号泣してんの!

え、これ私だけ幻覚見てるとか……、あ、よかった周りも引いてる。

「……………ふう、スツとしたぜえ。お、すまんなブロワイエ。ゴルシちゃんこうやって泣きわめくことで頭を冷静にすることにしてんだ。今決めたけど。」

「そ、そうか。それはなによりだ？ ……私は君に謝らないといけない。正直に言ってしまうと君とここまでよい勝負ができると思っていなかった、悔っていたよ。」

「ん？ ああ、それぐらい別にいいぜ。あたしや挑戦者ですもんし仕方ねえしな。それにいいレースできたからゴルシちゃん大満足。」

「そうか……、ありがとう。」

「それに私なんてまだまだ、日本にはもつと強い奴とかいるぜ。ルドルフ会長とか。」

「ふふ、私とギリギリの勝負をした君がそこまで言うとはよっぽどなんだな、君のおかげで日本について興味がわいてきたが、俄然そうなった。……まあそれはさておき、いいレースだった、ありがとう。」

「おう！ ……こちらこそだ！ ……また走ろうぜ！」

日本、か。

……確か来月末にジャパンカップがあったな。

面白そうだ。

—————

「……………はい、そうですか。……………いえ、わざわざありがとうございます。………
す。それでは。」

「会長、どなたからの電話でしたか？」

「ああ、グルーヴ。URAからだよ。……………あのブロワイエがジャパン
カップに出走するらしい。わざわざそのことを連絡してくれたわけ
だ。」

「あのブロワイエが！……………今年のジャパンカップは大変なことにな
りそうですね。」

新旧無敗三冠に欧州三冠。

「ふふ、ふふふふふ。ああ、本当に、本当に楽しみだよ。」

PART 79

(なにこれえ。……は？ マジでどういこと???)

ゴルシ先輩から手渡されたデータをお姉ちゃんに渡した後日。私が出走するジャパンカップについて特集を組んでいたレース情報誌が発売されているようなので買って来た。

お姉ちゃんに頼まれたもので一緒に見てたんだけど、そこにはシンボリルドルフ会長と私の無敗三冠対決、それに先日の凱旋門でゴルシ先輩に勝ったプロワイエさんが出走登録をしたということが書いている。

雑誌では夢の三冠対決だ！ って書いてあるけど……

(なして????? いや、まあ仕方ないのかもしれないけどね。なんで？
うくんどうしよう???)

まあ自慢の姉は思いつきり錯乱しているが、いつも通りちよつとおふぎけが入っているのも解るから大丈夫なんだろう。私たちが合わされば負けるレースなんてない。お姉ちゃんが言ってることは全部正しかったし、これからもそうなんだ。あとは私がお姉ちゃんの考えでくれているレベルまで早く辿りつくだけ。

「それで、お姉ちゃん。なにか練習とか変えた方がいいのかな？」

(うくんどうしましょう。やっぱりスペは今年の有馬も走りたいんだよね?)

「うん、必要だと思うし、走っておきたいかな。」

(りよ。なら……、そうですね。有馬との連戦になるときつめのトレーニングやりすぎると故障の原因になり得ますし今やってるトレーニングのままでもいいですよ。スキルレベルの経験値をうまく稼いでいきましょう！)

「うん、わかった！」

(ん、なら私は普通にブロワイエの研究でも始めますかねえ。スペちゃんのメニューは出来上がってますしこちらを進めておいた方がいいでしょう。にしてもなんでブロワイエのデータだけ念入りに用意されてると思ったらこれが理由だったんか……。マジでゴルシって何者なんだ???)

「……あ、そういうえば今日トレーナーさんに呼ばれてたんですね！お姉ちゃんちよつと席外すね。」

(ほくい、いってらっしやくい。)

—————

「それで、何の御用ですか、トレーナーさん？」

「急に呼び出して悪いな。んでなんで呼び出したかっていうとスペの今後についてちよいとばかし気になることがあってな。その確認だ。」

「確認ですか？」

「おう。スペの次走はジャンパカップ。その次に有馬記念、だよな。」

「はい、その予定です。」

「それでシニア級に入ってからは大阪杯、天皇賞春、宝塚記念の春シニア三冠。夏の間はK G V I & Q E S、凱旋門賞を挟んで、秋シニア三冠の天皇賞秋、ジャパンカップ、有馬記念に挑む、つてのでいいんだよな。」

「はい、この前ゴルシ先輩に言われて出した資料にもそう書いてあったと思うんですけど……、あ！　もしかして私何か間違えてましたか？」

「いや、もらったもんはちゃんとして書いてたんだがそれ以外に気になることがあつてな。……このままの予定で行くと全く休みがなくなるだろう？　そいつがちよつと気になってな。わざわざ書いて出してくれたからそのことは理解してると思うんだが……」

「はい、理解の上です。」

「まあそれならいいんだが……、ま、そんなお休みが少ないスペには大き目の休みを取ってもらおうと思つてな。有馬のあと大阪杯まで三か月近く間が開くだろう。なんで来年の正月にはスペの実家に帰ってもらうことにしました！　拍手〜！」

「え？　ええ……」

「ちなみに学校側の許可と、スペの親御さんにも来年の正月は帰らせますつて連絡してあるから変更はなしだぞ！　ま、最近頑張つてるしゆっくりしてくるといい！」

「は、はあ。わかりました。」

（なんだかすごいハイテンションだなあ……。久しぶりだし、あつち

でも走れるからまあいつか。」

「んじや、連絡も終わったしもう帰ってもいいぞ。あ、あと最近オーバークワーク気味だからしつかり休んどけよ。」

（明らかに最近のスペはオーバークワーク気味。初めてのシニア級との戦いだから焦るのも仕方ないが、ケガだけには気を付けないと……、出来るだけ練習時に横にいるようにしなければ。……にしても急いで用意した帰郷計画だったが、思ったより何もなく受け入れられてよかった。最近のスペを見ると受け入れずに無理やりトレセンで練習しそうなもんだが、なにか心境の変化があったのか？ ……まあいい、とりあえずスペの親御さんにできるだけ地元にいるときは練習させずに休ませるようになってことと、あとスペのもう一人のトレーナーにも手紙書いておこうか。たぶんスペに渡しておけばちゃんと届くだろうしな。）

—————

「では、お願いしますね、東条トレーナー。」

「ああ、解った。ジャパンカップの出走登録はこちらでやってもらう。」

「ああ、やっと一緒に走れるのですね！ 今度こそ、今度こそはあなたの隣に！ あなたの前に！ ふふ、ふふふふふ。」

「……あの、なんだ。な、何かあればすぐに言うんだぞ。」

「ええ！ ええ！ 解っていますとも！ それでは失礼いたしますね、私はもっと速くあらねばなりませんので。」

ああ、レースが楽しみで、楽しみで仕方ない。どうにかなっ

いそうだ。

やつと、やつと私があなただの隣を走れる存在だと証明できる！
自分の体へのダメージなんか、痛みなんかもう感じない。

ただ、あなたの先に。アナタノマエニワタシガハシルトコロヲ

だから、待っててね。

スペちゃん。

PART 80

ここにやにやちわく！ 投稿者ですよ！ スペちゃんに走者呼ばわりされたのがいまだに受け入れられてなくて名乗りが変わらない愚か者ですタイ！

だって僕ちんRTA走者じゃないのに……。ま、そんなことは置いて今日も元気にイクゾー！

んで、今日は何からといいますと、皆さまお待たせいたしましたのジヤパンカップですね。個人的な思い入れも結構あるのでなんとしても、まあ実況の目標的にも勝っていききたいレースです。

しかしながらちよいとばかり難しいレースになってくるのも事実。今までスペちゃんが走ってきたレースはどれもジュニア級、クラシック級と同じ世代同士で戦うものでしたが、このレースからは自分よりも上の世代とも戦わなければならなくなっています。今までスペちゃんが「鉄人」からくる他の人よりも長く練習できた時間や小学生から積み上げてきた時間というアドバンテージが通用しなくなってきましたし、単純にレース経験の多さからくるスキルの充実具合も危うい時があります。

でもまあそんなじよそこらのウマ娘では我らのスペちゃんにはかなわないんですけど……。今回はちよつと話が変わってきました……。主な出走者紹介！

現在無敗記録更新中！ 世代No. 1の無敗三冠ウマ娘！ スペシャルウィーク！

未だ続く伝説のロード！ 無敗三冠にして七冠ウマ娘！ シンボリルドルフ！

欧州三冠、凱旋門連覇！ 芝の本場、欧州の最強ウマ娘！ ブロウイエ！

不退転、不死鳥！ あとなんか最近雰囲気ヤベー！ グラスワンダー！

史実ではレート国内最強の134！ ここからの爆発力未知数！
エルコンドルパサー！

………なんじゃこのクソゲー???

こんなん勝てるわけないだろ！ いい加減にしろ運営！

まあそれでも勝たなければならぬのがこのレース、頑張るのはスぺちゃんですがわたくしも微力ながら全力で、作戦もちやんと考えてきたのでバッチし応援していきましょー！ イクゾー！

「お〜！」

ん、そろそろパドックへの移動みたいですね。 んじゃ行きますよスぺちゃん。

「はい。」

あ、それと怖い物みたさ、かもしれませんがスぺちゃん含めて先ほど挙げた方々のステータスを見ときましようか。 まあ今見てもできること作戦の手直しぐらいしかできないんですけど単純に気になるので……、それではホイ！

【スペシャルウィーク】（絶好調）

✓スピード：B+

スタミナ：A

パワー：A+

根性：B+

賢さ : B

∨スキル

【シューティングスター】Lv. 4

【汝、皇帝の神威を見よ】Lv. 3

【空駆ける英雄】Lv. 3

【不沈艦、抜錨オツ!】Lv. 3

【ゲートの支配者:改】

【食いしん坊】

【逢魔時】

【プレッシャー耐性○】

【未脚】

【率いるもの】

現在のスペちゃんはこんな感じ、スキル系統はそこまで伸ばすことができませんでしたが、スピードはB+にできてます。まあ一月しかなかったので仕方ないですね。あとなんか昨日まで色が薄くなつてた【率いるもの】がアクティブ化されていますね。なんででしょう？

【ブロワイエ】(不調)

∨スピード:S

スタミナ:S+

パワー:S+

根性:S

賢さ:S+

∨スキル

【Je suis les circonstances】Lv.

6

【コーナー回復】

【ハヤテ一文字】

【一陣の風】

【全身全霊】

【乗り換え上手】

【位置取り押し上げ】

【独占力】

【差し焦り】

【末脚】

【対スペシャルウィーク○】

【エルコンドルパサー】（好調）

∨スピード：A+

スタミナ：B

パワー：A

根性：B

賢さ：B

∨スキル

【プランチャ☆ガナドール】L v. 3

【直線巧者】

【千里眼】

【スタミナキープ】

【テンポアップ】

【先行直線○】

【対スペシャルウィーク◎】

.....んんんんん

????????????

なにこれえ？

と、とりあえず上から整理していきましよう。

まずブロワイエ。ステータスの方は欧州覇者というだけあって、そ

れ相応のS乱立。スキルの方も金色スキルばっかですし、固有もLv.6。それにプラスしてプレツシャー耐性まで持つていらつしやる。見た感じ作戦は前評判と同じように差しで、最終直線辺りでブツ飛ばしてくる感じですね、ハイ。唯一希望が持てそうなのは調子が不調気味つてところくらいでしょうか。

次にルドルフ会長。ステータスがS多めのお化け。最強に近い固有スキルもMAX。スキル君もいいところ持つてますし、それよりも特筆すべきなのはデバフ系スキルの多さ。全範囲に対してデバフ掛けてくるとか君ホントに皇帝？

それともっと意味不なのは同世代のグラスちゃんとエルちゃん。……君らいつの間にそんなに強くなったの？ 菊花賞の時君らよくてB届くか届かないかぐらいだったよね?? なして??

あとスキルとしてスペちゃん対抗用スキルがなんか知らないうちに生えてますし、あとグラスちゃんの調子のとこ塗りつぶされてますし、なんじゃこのレース！

と、とりあえずなんで同世代組がつよなってるか調べなければ、多分なんかのスキルが発動してるんだと思うんですけど……

！ これですな。ルドルフ会長の【神聖皇帝軍】。効果の方は……

▽【神聖皇帝軍】

自身の出走するレースにおいて、レースに他国籍の選手が出走しており、その選手の実力が自身より大きい、もしくは同程度の時に、自身を含めた自身の所属する国家に属する対象を大幅に強化する。【率いるもの】の完全上位互換。効果は効果が及んだ人数の分だけ増加される。

またこの効果は【率いるもの】系統のスキルを持つている者には効果が及ばない。一軍に二将もいらず。

……あく、なるほど。グラスちゃんやエルちゃんが超強化されてる理由はこれみたいです。会長のスキルで日本所属のウマ娘を底上げしてみんなでブロワイエやっつけるぞ〜！ っていうスキルみたいです。効果読む感じ会長も強化されてるみたいです。と、いうことはブロワイエさんあのステータスが素なのね……。

まあそんなことよりももつと面倒なのが「率いるもの」のせいです。ぺちゃんにバフが掛かってないことですね。テキストとステータス見た感じ、おそらく「率いるもの」も自国出走者の数だけバフがかかるものみたいなんですけど会長に全部取られた上に、スペちゃんはスペちゃんに資格持つてるからバフの対象外といったところでしょうか。

おそらく、受け取れる対象が二人、この場合は会長とスペちゃんについて、バフの条件となる人はどちらかにしか所属できないという制限の中でスキルの格が上の「神聖皇帝軍」に全部持つてかれたという感じでしょうか。

今後スペちゃんが成長すれば「日本総大将」みたいな感じで会長とも対抗できたんでしょうけど……、今は話しても仕方ないことですね。

ま、今まで壁みたいな壁がなかったですし、このぐらいの難易度の方が動画的にもありがたいよね！ 多分ルナティックとかインフレノみたいな感じだろうけど、私のスペちゃんが負けるはずないんだ！ わたくしの考えた作戦とスペちゃんしかない固有スキル系統の多さで勝利してやる！

—————

パドック入り。いつもと違ってお姉ちゃんはさつきからずつとぶ

つぶつ言っている。内容はこのレースでの私の動き方、作戦。

私が弱かったからお姉ちゃんに迷惑をかけてる。私が強くないからお姉ちゃんに本当は考えなくてもよかったことを考えさせてしまっている。

もつと、もつと死に物狂いで練習すればよかった。前に進めばよかった。

ゴルシ先輩に勝ったブロワイエさん、みんなが憧れているルドルフ会長、この二人を全く寄せ付けないぐらい私が強くないといけないかった。

……今思い悩んでも何も変わらない。体の調子はいいんだ、あとはもつと集中すること。お姉ちゃんの指示を十全にこなせるようにしないといけない。ゲートに入る直前までには整えないと。

「すまない、少しいいだろうか。」

「！ ルドルフ会長！ ……どうしました？」

「いや、少しばかり君が入れ込み過ぎている気がしたのでな、声を掛けさせてもらった。ああ、集中していたのならすまないことをした。」

「い、いえ。大丈夫です！」

「そうか、ならよかった。……多くは語るまい。悔いのない、いいレースにしよう。全力で行かせてもらう。」

「はい、私も全力で。」

「……ふふ。いやすまない、うれしくてね。欧州の覇者であるブロワイエと競い合えるのも楽しみだが、君と競い合えるのも非常に楽しみ

だ。……それとすまないが彼女、グラスワンダーに声をかけてやってくれるか?」

「グラスちゃん、ですか?」

—————

ふふふ、ふふふふ。ああ、ああスペちゃん。

いつからこの時を待っていたのか、もうわかりませんね。

でも、そんなことはどうでもいいのです。

ただ、私と本気で走って欲しいだけ。

ただ、私のことをちゃんと見てほしいだけ。

ちゃんと私、強くなりましたよ。

ちゃんと私、あなたに届きますよ。

それに私、今日はどうしても調子がいいの。まるで羽が生えたみたい
に体が軽いの。

だからスペチャン

モットワタシノコトヲミテ……

「グラス、ちゃん?」

「! ……スペちゃん! ああ、すみません。私としたことが気が付
かないで……」

「ううん、いいよ。……それよりも大丈夫?」

「ええ！ ええ！ 大丈夫ですとも、心配させたようで申し訳ありません。……スペちゃん？」

「どうしたの？」

「今日は、全力で、私と戦ってくださいますか？」

「？ うん、もちろん。一緒に頑張ろうね！」

……笑顔を持って返礼として、その場から立ち去る。

やっぱり見てくれてない。

スペちゃんの目にはルドルフ会長とブロワイエさんしか映ってない。

ワタシなんて他の有象無象といっしょなんだ。

ワタシなんかスペちゃんの視界に入らないんだ。

ああ、ああ。

本当に、タノシミデス。

イツシヨニガンバリマシヨウネ、スペチャン？

—————

『さあ、ついに、ついに始まるうとしております！ 今年のジャパンカップはヤバイ！ この一言でこの東京競馬場に集まったのはなんと22万人！ 限界までパンパンに人が集まっております！ 指定席の方は法外な値段が付いてしまったようで、URA方も対応で色々

と大変だったようです。まあそんなどうでもいいことはおいておきまして、レースの方に注目いたしましょう！』

『一番人気に押されましたのはやっぱりこのウマ娘！ 皇帝、シンボリルドルフ！ 夢の七冠馬が今日、ジャパンカップのためだけにここ、東京競馬場に降り立ちます！ 皇帝の伝説はまだ続きます、さあ、次の八冠目へ！』

『二番人気は欧州覇者、ブロワイエ！ 日本ということで一番人気を皇帝に奪われてしまいました、その実力は肩書以上です！ 欧州三冠・凱旋門連覇！ 彼女の新しい勝利の杯はジャパンカップでしょうか!?!』

『三番人気に押されましたのはスペシャルウィーク！ メイクデビュー、ホープフルS、クラシック三冠とここまで無敗記録を更新中の彼女。一番人気のシンボリルドルフと夢の無敗三冠勝負となりましたが未だ彼女はクラシック級。シニア級の二人と比べるとやはり不利に思われてこの人気となりました。』

『さあ本当にどうなってしまうのでしょうか、新旧無敗三冠ウマ娘に欧州三冠ウマ娘、三冠だらけのレジエンドレース！ もう実況なんてしてる場合じゃないかもしれません！ さあどうなる！ 正直誰が勝ったとしても納得できるぞー！』

『さあ、ゲートインが粛々と進んでおります！』

(……よし、決めた。勝負のしどころは中盤からの最終直線。一番注意すべきはルドルフ会長。ブロワイエは不調であることでの実質的ステータスの低下を考えれば会長よりは注目度を下げているはず。)

「大丈夫、お姉ちゃん？」

（お!? 心配させてしまいましたか？ 大丈夫ですって。んじゃ、作戦発表！ 最初にゲートでプレッシャーかけまして、そのまま後方で差し位置でキープ。中盤過ぎあたりからゴルシちゃんのスキルで加速しまして、最後の直線でドン！ といういつも通りの真っ向勝負で行きましょう！ 多分ここで練習してない小技に頼ったら負けます。タイマン勝負デイ！ けっぱるべ〜！）

「うん！」

お姉ちゃんが決めた作戦は私ができる最適解。私が持てるすべての技を出し切れる作戦になった。

大丈夫、大丈夫だ。私は勝てる、勝たなくちゃいけない。

（स्प、【ゲート】はスタートを遅らせるんじゃないやなくてスタミナや精神力を削るために。）

ゆっくりと頷く。

ルドルフ会長やブロワイエさんは明らかに私より強い、出来ることは全部しないと。

—————

『今、ゲートが開きました！』

私と一緒にスタートしたのは会長にブロワイエさんにグラスちゃん。ちよつと遅れてエルちゃん。あとは他のシニア級の人たち。本来ならゲートが開く瞬間に全力でやるけど、今日はゲートの瞬間じゃなくて、ゲートが開く少し前からプレッシャーを掛けて精神力を削る方法にしたせいか、スタート自体は前の菊花賞より普通になった。

ルドルフ会長とブロワイエさんに対応されたのは仕方ないかもしれないけどグラスちゃんにすでに対応されたのは驚いた。お姉ちゃんがグラスちゃんの様子がおかしいって言ってたのはこのことだったのかもしれない。エルちゃんも菊花賞の時よりも効いてないということは、やり方を変えたからといっても次はもう通用しないかもしれない。次は……、いや次のことは今考えるべきじゃない、今はレースに集中しないと。

ルドルフ会長とエルちゃんは先行、グラスちゃんとブロワイエさんは差し。私も全力を出すために差しの位置に下がる。後はこの位置を保ちながら折り返し地点まで体力を残しておかないといけないんだけど……

「ッ……」

アメリカ合宿でセクさんと練習したおかげかそこまできつくはないけどプレッシャーを掛けられた。出所は……たぶんルドルフ会長。軽く周りの顔色を窺うと全体的に速度が下がっている。影響を受けてないのはブロワイエさんくらいだ。

『現在シンボリルドルフは集団の中央より少し前といったところ、プロワイエ、スペシャルウィークは後方で機を窺っている感じでしょうか。』

『今日は先行策のシンボリルドルフですが、これまで先行策を使ったレースでの彼女と見比べると若干位置が後ろ目ですね。これまでは自分でレースを引っ張る代わりに多くスタミナを使ってしまうという感じでしたが、これはスタミナをうまく残していますね。強敵であるプロワイエやスペシャルウィークを意識してのことでしょうか？』

『さあ、レースは進みまして現在先頭が折り返し地点に差し掛かりました。ペースは若干速めといったところ。そろそろ仕掛け始める子がいてもおかしくない状態です。』

そろそろ私も折り返し地点に到着する。

スピード上げても大丈夫だね、お姉ちゃん？

▽【不沈艦 抜錨オツ！】Lv. 3 を発動！

▽【逢魔時】を発動！

ゴルシ先輩に教えてもらった加速をしながら【ゲート】の時と同じように周りにプレッシャーを掛けて前に進む。

『おおつとここでスペシャルウィーク加速だあ！』

あとはこのまま先頭まで走り抜けて、誰も追いつけないまで離してしまえばいい。

お二人がどれだけ強くてもここで全力を尽くして距離を稼げば抜
かれない！ 勝てるんだ！

ルドルフ会長を抜かして、前へ、さらに前へ！

『現在先頭変わりましたしてスペシャルウィーク！ そしてそのまま最終
コーナーへ！』

ああ、また差が離れてしまいましたね。

ふふ、もう離しませんよ。

〈【精神一到何事か成らざらん】L.V. 3

〈【独占力】を発動！

〈【■■■■■■■■■■】を試行！

〈成功！

〈【あなたのためだけに】を発動！

〈【独占力】の効果がスペシャルウィークに集中！

「なっ！」

—————

様子見、まあ正確にはブロワイエと勝負のために速度を落としてあ

えて後ろに下がったが……、すごいことになっているな。同じチームに所属しているとはいってもグラスワンダーのことを詳しく知っているというわけでもないし、彼女、スペシャルウィークとグラスワンダーの関係性もよく知らないが……

私とシービーのような関係なのだろうか？ 明らかにグラスワンダーはスペシャルウィークにだけ勝とうとしている。しかしながらスペシャルウィークの方は気にかけてはいるが注目しているのは私やブロワイエ、といったところか。プレッシャー系統の技でスペシャルウィークの速度を落とし、その分だけグラスワンダーが加速する。

……いや、思うところがないと言えば嘘になるが今はこのレースに集中しなければ。

！ この視線、ブロワイエか！

感じた視線の元に目を向けると欧州覇者がこちらを見つめていた。これは、挑まれている？ いやこちらが挑む側か。まあどちらにせよ勝負を仕掛けられているのは違いあるまい。

受けて立たせていただく！

〈【汝、皇帝の神威を見よ】Lv. 6 が発動！

6 が発動！
〈【Je suis les circonstances】Lv.

『さあ、競い合おうか!』

—————

『現在先頭のスペシャルウィークが減速……、あつと! ここで速度を落として後ろに下がっていたシンボリルドルフとブロワイエが始動! そしてその前にはグラスワンダー! 三人が一斉に加速して先頭に食らいつきます! ここでスペシャルウィークが最終直線に入ったあ!』

まずいまずいまずいまずい! 体が重い!

後ろから射殺するような視線! 体に絡みつくようなプレッシャー

!

だめだ、ここで減速したら間に合わなくなる!

背後から加速してくる足音がもう聞こえるんだ! どうにかして逃げないと!

こうなつたら無理やりにも……!

∨【シューティングスター】L v. 4 を発動!

∨【汝、皇帝の神威を見よ】L v. 3 を発動!

∨【空駆ける英雄】L v. 3 を発動!

『ここでスペシャルウィークも加速しますが……、後から追ってきた方が速い!速い! 四者今並びました!』

思ったより速度がでない! いや違う、私が遅いんだ! 周りが速いんだ!

『ここで先頭は入れ替わってシンボリルドルフ！ ほぼ同位置にプロワイエ、グラスワンダー！』

どうすればいい！ どうすればいいんだ！
もう私に残ってる技はない！ 速度も最大限出てる！
なのに差が縮まらない！

『さあ現在三名のデッドヒート！ 優勝は誰の手に！』

……………終わる？ ここで終わるの？

こんなところで私は終わるの？

こんな、ところで……………

私はまた失うの？

赤い、赤い炎が燃え盛る。

もう二度と見たくない、けど見ないといけない。

最後の、瞬間。

泣きじゃくる私の頭に大好きな姉の

燃えて、真っ黒になって、もう思い出せない暖かさを、力強さを

『ごめんね、スぺ。駄目なお姉ちゃんで。』

「いやだ」

「いやだ」

「まだ終われないんだ」

「まだ速くなれるんだ」

頭にのせられていた手は、ゆっくりと地面に落ちる。

「うゝわゝ あゝ あゝ あゝ あゝ あゝ あゝ あゝ あゝ あゝ！」

血のように真っ赤なサルビアはとうのむかしに灰だらけ。
火種は一体何なのか、

私は何をなせますか？

∨【灰かぶりのサルビア】 発動。

—————

その炎は思い返してみると、私が纏っていた青く、私の心の黒さを表したような黒く、深い青ではなかった。

私の物よりも黒く、本来の赤い炎のように赤く、誰に向けられたのかはわからないけどもつとドス黒い炎だった。

私の、ただ自製の心がなかったゆえに飲まれてしまった狂気は、
スぺちゃんの纏ったその炎への恐怖でかき消された。

レースが終わった後にかけてくれた言葉はすごくうれしかったけ
ど、

あの恐怖は忘れられそうにない。

ただ、ただただこわかった。

『……来た！ 来た！ スペシャルウィークが来た！』

あの走りは圧巻だった。私たち、シンボリルドルフ会長、ブロワイ
エさん、私が塊になって後方から先頭を走っていたスぺちゃんを抜か
したはずだった。あの時の私は、当時の私では出せないくらいの力が
出ていたし、あの時に出走していたルドルフ会長は過去最高の仕上が
りだったと聞いている。

そのまま、私たちはゴールになだれ込むと思っていた。

抜き去って、もう過ぎ去ったこととして油断していた、私は単にスペちゃんの前を走れたことに歓喜していて油断していた私たちをまとめて抜き去ったのはスペちゃんだった。

狂気に包まれていた私、プレッシャーに耐性を持っていたはずのお二人をまとめて引きずり落とすような死の恐怖。レースで死んでしまうなんて、あの状況を、あのジャパンカップの映像を見ている限りは考えられないんですけど確かに、私はそれを感じました。

『スペシャルウィークが来た！ スペシャルウィークが来た！ まとめて引っこ抜いて今ゴールイン！』

気が付いたら私たちみんなが抜かされていて、気が付いたら私たちもゴールしていて、その場すぐには何が起こったのか、その場にいた人は誰も解らなかつたんです。私も、あの後色々このレースを見返して、スペちゃん本人から聞いて、やっとわかったことなんです。

あの時感じた死の恐怖がスペちゃんが私たちの前にいて、もう一着が決まっているという事実が私たちの前にあって、もう何が何だかわからなくなつた。脳が恐怖のせいであることを記憶に残したくない、そう思つたのかもしれない。

気が付けば、レースが終わった後にはスペちゃんが肩代わりしてくれたのか、私の狂気はなくなっていて、あのお二人もただ結果を受け入れて、『いいレースだった』というんです。

疑問に感じさせない、ただ負の感情をもっと大きな負の感情によって焼き尽くされたせいで、正の気持ち、いい気分しか残らなかつたというべきでしょうか。言葉に表してしまえばとても不思議なことです……

終わったあの瞬間は、何故か心は晴れやかでした。

『決まった！ 決まりました！ 勝者はスペシャルウィーク！ 七冠ウマ娘の皇帝シンボリルドルフでもなく、欧州三冠にして凱旋門覇者のブロワイエでもなく、日本のクラシック級のスペシャルウィーク！ 新時代の到来だア！』

「ハア……ハア……」

何、今の……、いやそれ以上に体が痛い。たぶん今のはこれ以上使ったら壊れる、もう使っちゃダメなやつ。

ああ、それ以上に体がだるい。ここで寝転がってゆっくり寝たいぐらい。

……でもまだパフォーマンスもライブも残ってるんだ。もうちよつとだけ頑張らないと。

と、とりあえず応援に来てくれた人たちにお礼しとかなないと……

「スペシャルウィーク。」

「あ、ルドルフ会長。」

「ああ、本当にいいレースだった。負けてしまったが全力を出せたせいか意外とすつきりした心持だ。ありがとう、楽しかったよ。」

「あはは……、こちらこそです。ありがとうございました。」

「む、レース直後にすまない。まだ色々話したいことはあるがまた今度にしよう。私としたことが君のことを考えずに私のことを優先してしまった、では。」

会長は……、ブロワイエさんに話に行ったのか。

あの人もこっちに来そうだったけど、フランス語解らないから助かるや。

あとは……

「グラスちゃん？」

「！ スペちゃん！ わ、わたしは……」

「ううん、大丈夫だから。私、楽しかったよ。グラスちゃんと走れてうれしかった。」

「スペちゃん……！！」

「だから、さ。また一緒に走りたいて思ってもいい？」

「ええ、ええ！ ぜひ！ 私もスペちゃんと走りたいです！」

「ああ、よかった。」

—————

(スぺー! スぺー! 大丈夫!)

「……………あつ、お姉ちゃん? ごめん聞こえてなかった。…………あれ?
? (こ)ど(こ)?」

(控室ですよ。ホントに大丈夫? さっきから話しかけてもずっと
ボーっとしてて、心配したんだよ!)

「アハハ、ごめんごめん。ちよつと疲れちゃって…………。ごめんお姉
ちゃん、ライブまでまだ時間あるよね? ちよつとだけでいいから寝
てもいいかな?」

(そんなに疲れてるんだら休ませてもらう? 有馬もあるしお休みさ
せてもらってもいいんだよ?)

「ううん、大丈夫。ちよつとだけ疲れただけだから。それにライブ見
に来てくれてるお客さんもいるから休めないよ。」

(…………ホントに無理しないでね。よっしゃ、気にしないで寝ていいよ。
時間になったらちゃんと起こすから。)

「うん…………、ありがと…………。」

PART 81

あれ……、ここは……

気が付くと真つ白で何もない空間にいた。さつきまで控室で寝ていたはずなのに……

嫌な予感がする。

「やほやほー、スぺちゃん起きましたかあ？」

確信が変わった。

こんなこと、私の意識をよく解らない空間に連れてこれそうなのは私が知ってる限り女神ぐらいしかいない。

「おく、怖い顔。かわいいのにもつたいないよ〜？」

私が見たことのない顔。たぶん私が過去に会った三女神とは別の奴だろう。

正直もう顔も見なくなかったが、あつちが呼んできたのなら私にそれを防ぐ術はない。

とりあえず余計な言質を取られないように気を付けないと。

「ん〜！ むちや警戒されとりますなあ、致し方なし。……んじや自己紹介。私は技の女神ね、一応名前もあるけど覚える気もないようだし役職名と顔だけ覚えといて。あ、ちなみに過去に君と契約した奴は力の女神。あいつ堅苦しい奴だったから色々大変だったでしょ？」

「……………」

「おうだんまり！ じゃ、私のことお呼びじゃないみたいだし、さつき

とやること済まして元に戻しましょうねえ！　ではでは、契約更改のお時間です！」

「契約更改？」

「お、初めてのお言葉頂きました！　そう、契約更改！　スペちゃんは力の奴と最初に契約した内容は覚えてる？　そう！　お姉ちゃんと一緒にいるために無敗三冠を対価として契約したよね？　それを達成できたから色々と再契約しに来たって寸法。ま、知の奴が色々とうるさくて時間掛かっちゃったのは申し訳ない。あ、それとジャパンカップ優勝おめでとね。」

「は、はあ。どうも。」

「んじや、内容ね。とりあえずはスペちゃんとお姉ちゃんの間で課されていたいろいろな制約を全部撤廃いたします！　トレーニングに関するにしか会話できないとかそんなの全部ね。いままでは“動画撮影”という名目で契約の上から契約することで撮影中だけは色々とお話してできるようにしてたけどそれも全部気にしなくてよし！　ビバ自由！」

「……………自由。」

「そう、自由！　あ、あと知の奴がまた猛反対してたけど無視した案件がもう一つ！　スペちゃんに朗報です！　シニア級にてスペちゃんが走ろうとしていたレース！　春秋計六冠とKGV I & QES、凱旋門賞！　こちらに勝てばなんとく、お姉ちゃんの復活！　オー、スミキャンデイの生き返りを確約いたします！」

「本当！　本当なの！」

「本当ですよ〜！ あ、それともしこの条件で失敗したとしてもスペちゃんのお姉ちゃんが消えてなくなるなんてことはありません！ そっちの契約は無敗三冠の方で対価はもらったしね！ …………… それで、スペちゃん。契約、しなおしますか？」

どうする、どうする。提示された条件は驚くほどいい。私にとって喉から手が出るほど欲しいものだ。だけど、あからさまに私にとって利が大きすぎる。そもそも前の契約自体なぜ私に契約しに来たのかすら意図がつかめない。

……………いや、考えても仕方ない。どうせ私の望みを叶えられそうなのはこんな手しかないんだ。

「契約、しなおします。」

「それは良かった、うむうむ。んじやここにいる意味もないし帰ってもよいですよ。目を閉じれば元の世界に戻るのですそれでオナシヤス。……………あ、それと心優しい女神サマからスペちゃんにご注意一つ。」

「君がジャパンカップで使った最後の技。知の奴は「灰かぶりのサルビア」なんて洒落た名前にしたみたいだけど、何度も使うのはやめた方がいいよ。あれは代償に君の大事なものを奪っていく。」

「今回は契約更改が遅れたことのお詫びとして代償を肩代わりしてあげたけど今度はそうはいかない。ゆめゆめ、気を付けることだね。……………じゃ、おやすみ。君の旅路に幸あらんことを。」

――

ぺちぺち

あれ……冷たい……

「おいしい、スぺく。時間ですよ。」

「…………お姉ちゃん！」

手が、お姉ちゃんの手が私の頬に触れてる。

ちゃんと触れられた感触がある。

凍てつくほど冷たいけれど、ちゃんと触れられてる。

「…………ほら、泣かないの。もうすぐライブの時間なんだから、ね。」

震えながら、頬に触れる姉の手に自身の手を重ねる。

ちゃんと、触れる。

「……………う……………うう、やっと、やっと触れた、やっと、やっと。」

「うん、うん、スペのおかげだよ。……………ありがとね、スペ。」

……………目が、熱いや。

笑いたいけど、涙があふれていく。

「ほら、昔みたいにおいで。冷たいけど、ね。」

「ううん、あったかい、あったかいよ。」

「……………落ち着いた?」

「……………うん。ありがとう、お姉ちゃん。」

「いや、にしてもいろんな制約外れてよかったよ。動画回してなくても自由に話せるようになったし、これから開いちやった8年、ちやんと取り戻してこうね。」

「うん!」

「ま、まだ動画は取るけど。……お、そういえばライブもうすぐ始まるみたいだし、行つてきな。私も観客席から見てるし、楽しんでおいで。色々なことは後で、ね。」

そういえばライブ前だったけ、時間も……、ちよつと急がないと間に合わないかも。

「わかった、……ちゃんと見ててね！ 行つてきます！」

抱き着いて泣きじやくっていた目を拭って跳ね起き、控室から飛び出る。

—————

「む、来たか。」

「すみません、ルドルフ会長！ 遅れちゃいました！」

ライブ前のステージ裏、そこにはルドルフ会長が待っていた。

「あれ、他の皆さんは？」

「ああ、グラスワンダーは足に不調を感じたため欠席、ブロワイエの方も調子がよくないらしく欠席だ。まあ奴はこっちのライブ形式をよく知らないだろうから仕方ないのかもしれないが。」

そういえばブロワイエさん来日してからほんの数日なんだったけ？

レース前は気にしてる暇がなかったけどそういえばブロワイエさんの体調がそこまで整ってなかった気がする。

「そんなわけで君と私のツートップだ。急な変更だが大丈夫か？」

「……あんまりライブの練習してなかったので不安です。」

「ふふ、ライブは苦手か。……スペシャルウィーク、君は考えていないかもしれないが、私に勝ち、そして私がトウインクルから引退する以上、皆は君が次の象徴と見るだろう。もっとしっかりせねばな。」

「象徴、ですか。」

「ああ、私と違って君の周りにはたくさんの方がいる。彼女らと共に進めるよう精進するといい。」

象徴、まわりのみんな……。

「ああ、それと。」

そう言いながら会長は自身の勝負服にある勲章の飾りを外した。

「君が背負う星のように、GIに勝つたびにその重りを忘れぬように付け始めた勲章だが、このジャパンカップの勲章の持ち主は君が相応しい。……まあ、なんだ。ドリームシリーズに君が上がってくるまで預かっておいて欲しい。その時に取り返させていただく。」

そう言いながら私の胸にジャパンカップの勲章が付けられた。

「解りました、お預かりしますね。……でも、一生返してあげませんか
らー！」

「……ふふ、そうでなくては、な。」

PART 82

- 一着 スペシャルウィーク
- 二着 シンボリルドルフ
- 三着 グラスワンダー
- 四着 ブロワイエ
- 五着 エルコンドルパサー

「イヤ、にしてもみんなすごいですネ！ ワタシだってタイムだけならコースレコードだったんですヨ？ 会長やブロワイエさんならまだ納得できるんですけど、スペちゃんやグラスにまだ追いつけないのはちよつと思うところあります！」

「病室で騒がないの、エル。」

「グラスだけの1人部屋ですし、両隣に誰もいないことは確認済みデース！」

「でも、ですよ。……しかし私みたいに走るのはやめておいた方がいいです。ダービー以前のあなたよりもひどかったですから。」

「ケ？ ひどかった自覚はあったのですネ。てっきりお口を三日月にしながら頭の中スペちゃんだけだと思っていました。色々ひどかったですよ。」

「……思い返すと少し恥ずかしいので言わないでください。……でも、あの時スペちゃんが抜いてくれずに、そのままゴールまで行ってしまうって考えると考えると、絶対にあのままでしたでしょうし感謝しないといけませんね。」

「二人ともスペちゃんに貸一つ、って言ったところでしようか。」

「エルも私もすごく大きな一つですけどね。」

「……ま、その借りはスペちゃんより先にゴールを駆け抜けて返すデース！ ワタシが先に返しちゃうのでグラスはここでハンカチでも噛みながら見てるといいデース！」

「あら、なら宝塚記念には出れそうですし、そこで私も返してもらいましょうか。」

笑い声が病室の中で響く。

「あんまり騒ぐと迷惑をかけてしまうが、今はこの時間が愛おしい。」

「ま、二人ともシニア期から海外遠征のプランはつぶれてしまいましたけど、グラスはどうします？ ワタシはスペちゃんが前言った欧州遠征についていくつもりでしたけど。」

「あら、そうなのですか。てつきり時期をずらすものだ……。」

「それでもよかったんデスけどね。どうせならあっちのライブを私達で占拠したいじゃないですか。面白そうデショ？ 欧州最高峰のライブで日本の私たちがスリートップを飾るってのも。」

「……………いいですね、乗りました。」

—————

「それで、なんで行くの？ スペ。」

「なんで、つてそれはグラスちゃんがケガしたからお見舞いに……。」

「テイオーちゃんの時は行かなかったでしょ？ それなのに何でグラスちゃんの時は行くの？」

「？ 次の有馬記念にはシニア級の人もたくさん出走するけどジャパンカップみたいに会長とかブロワイエさんとかの警戒しないといけない相手もないし、時間的にも余裕があるからかな？ それにグラスちゃん友達だし。」

「ならテイオーちゃんの方にもお見舞いに行ったら？」

「あ、それもそっか。じゃあそうする！」

……これ気が付いてないな。私のため、つていうスぺにとってキツイ目標のせいで多分、学ぶべきだったものを結構取りこぼしてしまっている気がする。

レースでの結果を追い求めているせいか、自分が周りに与える影響、どう思われているか。そしてどう対応するべきか。それ以前にちゃんとした友達との付き合い方さえ……

これも全部私のせいかな。「死人に囚われ続けるべきじゃない」つていつてもスぺはそれをひっくり返そうとしてるし、言っただとしても私の死を受け入れてないスぺにとって、私からこの言葉を言うのはどんな影響を与えてしまうかわからない。

今まで通りスぺの目標を手伝う上にスぺに友達との付き合い方を学んでもらう、とりあえずそれが私のするべきことだね。過去に区切りをつけて、もっと今を見るべきってことをどうにかして伝えないと。

「んじや、早速行きましようか！ このわたくし、スペちゃんのおかげでこれまで以上に物を触れるようになったので、スペちゃんのパソコンで近場のお菓子屋さんでお見舞い用のものを購入しておきました！ それを取りに行つてから向かいますよ！」

「おう、ありがとう！ ……あれ、お姉ちゃんいま動画取つてるの？」

「……八年近く動画用の喋り方してたからしみついてますね、コレワア。撮影するときとし終わるときはちゃんと云いますのでご安心を。」

「治つてないよ？」

「……………善処します。」

生き返れたときのために口調の改善もやることリストに入れときましよう。せめて区別だけでもしないと。

—————

「失礼します。」

「……あら、スペちゃん。いらつしやい、そんなにかしこまらないでもいいのに。」

「あはは、そうだね。……それで、ケガの具合はどう？ 大丈夫なの？」

「ええ、レース後に痛みを覚えまして検査してもらったところ右足の方にひびが入ってしまったようで、そこまでひどくなかったのですが、復帰できるのは4月を過ぎてから、多分スペちゃんと戦えるのは宝塚記念になるでしょう。」

「そっか、……あ、お見舞いにお菓子買ってきたんだ。気に入るか分からないけど、どうぞ。」

「ああ、ありがとうございます。今度のお茶菓子にしますね。」

会話が、途切れる。

白い病室はこの前の真っ白な部屋、女神とあった部屋を思い出してしまうせいか好きではない。

それ以前にこの沈黙が痛い。なにか話せるような話題……

「スペちゃん、話を。話を聞いてもらってもいいですか？ どうしても自分の中で区切りを付けたいのです。」

「……うん、いいよ。」

「ありがとうございます。……私がああのジャパンカップのレース前からおかしくなっていたこと、それについて聞いてもらいたいのです。普通ならスペちゃんに聞いてもらおうような話ではないのでしょうか……、いえ、話させてください。」

「私はただ、スペちゃんに認めてほしかった。一人のウマ娘として、レースを走るものとして、ライバルとして。……だけど圧倒的に私の力が足りなかった。どんなに頑張ってもあなたの背中、その先へけるイメージがわいてこなかった。」

「スペちゃんに勝つには、狂気に身を任せるしかなかった。……いえ、それは違いますね。私の心の弱さが招いたこと。これは違います。自身の身を顧みずに進んだ私が愚かだったのです。……ですが、死に物狂いで追いかけるというのは間違つてはいませんでした。」

「あの時、あのレースの中でスペちゃんを追い抜けたとき、やっとあなたに見せつけられた。私は他の有象無象とは違うんだって。……終わってみれば差し返され、三着。これまでの無理が祟りケガにつながる。」

「一時的とは言え、走れなくなるのはつらい。何もできなくなったこの時間でさらに離されるのが怖い。……ですが私がスペちゃんに聞きたいのは一つだけ。」

「なあに？」

「……私は本当にあなたのライバルになれていますか？ 私は他の方々と一緒に一纏めにされてないですか？ スペちゃんは本当に私のことを見てくれますか？」

「………うん、ちゃんと見てるよ。グラスちゃんのこと。」

「あら、それならよかったです。ふふふ、すみませんこんな変な話し

ちやつて。」

「ううん、いいよ。私でよかつたら何でも聞くよ。」

「ありがとう、スペちゃん。……そういえば持ってきてくださったお菓子、もう一箱ありましたよね？　まだ行くところがあるのでですか？」

「あ、うん。テイオーさんのところにも行こうと思ってて。」

「あら、そうなのですね。それなのに長く話してしまってごめんなさい。もう時間も遅いですし面会時間を過ぎてしまうといけないですから私にかまわずどうぞ。」

「ホントだ、もう結構遅いや。ごめんなんか急に帰っちゃうみたいで。」

「いえいえ。」

荷物をまとめだすスペちゃんを眺める。

「じゃあ、また。今度時間できたら来るね。」

「ええ。スペちゃんも有馬記念に向けて頑張ってくださいね。」

「うん、ありがとう！」

スペちゃんが部屋から出ていく。
引き戸が開かれ、手を振り見送る。
そしてゆっくりと閉じた。

「……………見てくれてなかった、のですね。」

—————

他の人と一纏め。有象無象。私を見ている。

グラスちゃんだけを見てほしい、ってことなのかな？

たぶん友達として、じゃなくてレースでのライバルとして、ってこと？

……………ちよつとよく解んないや。

ま、いつか。

後はテイオーさんのところお見舞いに行くだけだし、帰りはちよつと走っていいこつと。

有馬記念に出走する人で注意しないといけない人はいないみたいだし、来年から本格的に始まるシニアに向けて少しでも成長しておかないと。それに来年の夏には欧州遠征も控えてるし、頑張らないと！

……………でもお姉ちゃんと普通にお話しできるようになったし、そこまですで急がなくても、いいかな？

「今日は何話そっかな〜♪ あ、そういえばお見舞いのお菓子どんなのか知らないや。帰りに私の分買って帰ろつと！」

PART 83

【スペシャルウィーク】

＜スピード：A

スタミナ：A

パワー：A+

根性：B+

賢さ：B

＜スキル

【シューティングスター】Lv. 4

【汝、皇帝の神威を見よ】Lv. 4

【空駆ける英雄】Lv. 3

【不沈艦、抜錨オツ!】Lv. 3

【ゲートの支配者：改】

【食いしん坊】

【逢魔時】

【プレッシャー耐性○】

【全身全霊】

【率いるもの】

アホーイ！ 投稿者ですよ〜！ 今日も頑張っついていきましょータイム！

さて、先ほど見ていただいたのはスペちゃんの今現在のステータスです。時期としてはクラシック級。ジャパンカップ開けたのちの有馬記念に向けて最後の調整中と言ったところででしょうか。

ありがたいことにスペちゃん最近調子がいいらしく、練習への頑張りがいい感じですねえ！

ジャパンカップ後の変化といたしましてはまずは会長の固有スキルのレベルが上がったこと、それと【末脚】が【全身全霊】に、あと

【率いるもの】が完全にアクティブ化したようです。

……なんか強くなりすぎてない？ まあいいことですけど。あとスピードも念願のAに今日の練習でなりましたしこれは安泰ですねえ！ 強くなりすぎて鼻水出ちゃう。

んで、スペちゃん。さつきから勝負服に何してるの？

「ルドルフ会長からもらった勲章を付けてるの。ジャパンカップのライブ前にもらったんだ！」

ほへへ、そんなイベントあるんですねえ。勝負服の胸のところに勲章が輝いてカッコいいですな。

テイオーちゃんにマントあげたみたいにな、ジャパンカップで勝利したご褒美に勲章もらったみたいです。これが原因で会長の固有スキル上がったんですかねえ？

ま、速くなるならなんでもいいタイ！

んじゃ、そろそろスペちゃんの出走予定である有馬記念についてご説明していきましょう。

皆様ご存じの通りこの有馬記念、出走するにはファン投票である程度の成績を収めないといけないんですけど、こちらの方はもう大丈夫。あの魔境と化していたジャパンカップで勝てちゃいましたから人気投票えらいことなってます。二位の方と大きく差が開いて堂々一位での出走ができます。やったねスペちゃん、有馬に出れるよ！

ま、出走できること自体は三冠取れた時点で確信していたのですが、出走表明をしている方々にちよつと問題があります。

先ほどスペちゃんのパソコンを使って調べたのですがルドルフ会長をはじめとした警戒すべきシニア級の方々は出走表明をしていないですよ。会長も「トウインクルからはすでに引退したような身だ。あのジャパンカップは例外みたいなもの。」と発言してますし、なんか静かなんですよえ？

クラシック級の面々もテイオーちゃんがケガで無理。マツクちゃんも他のレースに出るからパス。グラスちゃんもケガでエルちゃんも見送り。つてな感じで人少ないんですね。出走するつて言っているのがセイちゃんことセイウンスカイとキングちゃんことキングヘイローの二人ぐらい。

最近見なくなったネイチヤやターボも出走しようとするだけできょうですけどまだ公式に何も発表してないですし、ホントに人少ないんですよねえ。

これがスペちゃんに恐れをなしてネームド君たち情報収集のために避けた！ ぐらいならいいんですけどクラシック級での勝負を捨ててシニア級で倒してやるぜ！ とかされたら嫌なんで心配です。

まああんまり言いたかないんですけど、正直この時期のキングちゃんとかセイちゃんはそこまで警戒しなくてもいい相手なんですよね。やっての感覚なのですがそのウマ娘のモチーフとなった史実馬の能力に彼女たちウマ娘も結構引つ張られているところがあるみたいで、その史実馬が活躍したレース、時期ではかなり強くなるけど、それが終わってしまえば成長率が下がると言いますか、まあぶっちゃけ警戒度が下がります。

マツクイーンやライスの天皇賞とかになると最大限の注意を払う必要が出てくるんですが、セイウンスカイの活躍した時期はもうそろそろ終わりを迎え始めますし、キングヘイローも距離という壁があります。

まあてなわけで今回の有馬はそこまで気を張らなくてもいいレースになるかなあ、と。

ま、ガバとか怖いですし、全力でやるのはやりますけどね。

「お姉ちゃん、そろそろご飯食べてくるね〜！」

あ、は〜い。あんまり食べすぎるんじゃないよ〜。

……ちよつと私情入れ過ぎて喋ってる気がするな、撮り直そ。

—————

「ハア……ハア……クツ!!」

バランスを崩し、前に倒れ込んでしまう。
暑い体に冷たいターフが気持ちいいが休んでる場合じゃない。

「お嬢！　大丈夫か！」

トレーナーさんが走り寄ってくる。
急いで立ち上がらないと。

「ッ！　……ええ、大丈夫ですとも。これぐらいで終わってしまうほど、やわでは、ありません。」

「もうオーバーワークなんか通り過ぎている！　そろそろ休め、お嬢！」

「大、丈夫です。私の体のことは私が一番解ってます。まだ、行けません。」

そうだ、解っている。これが、最後だったこと。

スペシャルウィーク、グラスワンダー、エルコンドルパサー。彼女たちに付いていけるのは、同じ距離で勝負できるのは今年が限界だつて。

既に差は開ききつている。

あのジャパンカップで嫌というほど見せつけられた。

私にはどんな好条件がそろったとしても、どんなに調子がよかったとしても。

5着だったエルさんにすら、絶対追いつけない。

努力で才能は覆せる、なんて幻想だ。才能の持ち主も、私みたいな凡才も同じように努力するんだから。

そのくせ相手は凡才が必死に追いつこうとしているときに、私達よりも多く努力している。

スタート位置が同じでない上に進む速度すら違う。追いつけないのは道理だ。

だけど、諦めたくない。

私だって才能は有るはずだ、私だって死ぬほど努力したはずだ。決して届かないとしても、こんなところで諦められるはずがない。

それに……

「最後、何でしょ。私の有馬記念。」

トレーナーさんの驚いた顔が目に入る。いつも厳格なあなたがそんな顔もできるんですね。

イヤでも解ってしまう。ここ最近、ずっと同じ資料を持っていれば。

マンツーマンで指導してもらっているのだ。その内容ぐらい目に入ってしまう。

私の、短距離への移行計画。トレーナーが『私にGIを勝利してほしい』その一心で考えてくれた計画。

トレーナーさんが席を外した時、今の現状を変えたかったのか、逃げ出したかったのか、見てはいけないと解つていながら手が伸びてしまった。綿密に描かれた計画。見た瞬間解ってしまった、私にはこれしかない、つて。

元々解っていた。私に長い距離を走る才能なんかないことだって。しかもマイルですら万全じゃない。短距離しか走れないのだって。

でも無理やり指導してもらった。私が私であるために。偉大な母の子であることを証明するためだけに。私に向いてないと知りながらも指導してくれた、中距離、長距離で食らいつけるようにしてくれた。

「自分でも、イヤなほど解っています。このまま続けても何も残せない、ただ置いて行かれるだけだつてことは。……………だから、最後まで。私が長い距離、短距離以外を走るのこれが最後。」

「私の、最後の、有馬記念。」

「これが終われば、私は短距離に移行します。」

「だから、だから。」

「どうか、走らせて、もらえませんか。」

せめて、この一戦だけは。

私の、訣別のために。ただ、全力で。

「……………」

「……………これもダメ。やり直し。」

こここのところ。セイウンスカイ、セイちゃんはずっとあの映像を見ている。

自身の実力を底上げするため、最大速度を上げるため、あのゴール板を最初に通過するための練習。その合間の休憩や移動中。暇があるときはずっとあの映像を見ている。

スペシャルウィークやシンボリルドルフ、ブロワイエなどが走ったあのジャパンカップ。

私もトレーナー業。いや彼女たちの世代を担当していなければ、新しい伝説が幕を開けたことを単純に喜べただろう。私達は歴史の生き証人になれるんだ、って。

セイちゃんはずっとあの瞬間。スペシャルウィークが最後の直線

で差し返した時の映像を繰り返し見ている。

どこかに、突破口はないか。どこかに、彼女が勝てる道はないか。

私も、最初のころは必死になって探した。

セイちゃんが勝てる方法を模索した。

正直に言ってしまうえば考えない方が幸せだったかもしれない。

結論として、不可能。

どう考えても、無理だった。

相手は走るたびにレコードを塗り替える化け物。

ただ、才能があるだけのウマ娘が勝てるわけなかった。

でも、セイちゃんは諦めてない。

私が半ばあきらめかけているのを知りながらも彼女はまだ方法を探している。

……指導する側が、先にあきらめちや、ダメだよね。

思いつきり顔を叩く、よし！

「私も頑張らないと、ね！」

「これだけ……かな？ 成功率は限りなく0に近いし、スペちやんが使ってこないっていう希望的観測に基づいたものだけど、これならいけるかもしれない。」

「……………いや、やるんだ。」

選んだのは一番最初に考えていたプラン。
菊花賞で破綻したプラン。

まだ、空は青い。

—————

練習終わりのウマ娘たちが集まるこの時間帯。騒がしいほどに活気があるこの場所。

スズカから頼まれてほぼ習慣となったスペシャルウィークとの食事。事。

何度も見たはずなのだが、やはりこいつの食事には慣れない。

既に皿が何枚も重ねられ、食堂の方がひっきりなしに新しい料理を運んできてくださる。

効率のためスペシャルウィークの隣にオグリキャップもいるせいで皿の山はどんどん積み上がる。

以前オグリのトレーナーが「二人そろってサイヤ人じゃん」などと言っていたがすでに笑えん。

「ふいふ、やっぱりスペちゃんもオグリちゃんもよく食べるねえ。おかわりここに置いとくよ。」

「ふあ、ふあふあがとうごふあいまふ！」

「ふありがふあう。」

「はあ、お前ら少しぐらいは飲み込んでから言え、口がハムスターだぞ。」

「いふえ、いいのよ、これぐらい元気じゃないと。主任も燃えてたし私も頑張らないとねえ。あ、これブルーヴちゃんのね。」

「す、すみませんわざわざ。」

「いふのいふの、二人のついでだからね。」

そう言いながら職員の方が厨房に戻っていく。いつも、というかこいつらと食事してるとご厚意で私の分まで持ってきてくださるのがあるがたいが、なんだか申し訳ない。

ふと前を見ると運ばれてきたはずの料理が4分の1ほど消失していた。お前らちゃんと噛んで食べてるのか？

「はあ、それにしても片方が過去の会長と同着。もう片方が今の会長に勝利。まったくもってどうなってるんだ？ 憧れの会長に勝った奴らが目の前でハムスターしてると……、ハア。」

なんかもう、疲れた。

んぐ。

「む、どうしたエアグルーヴ。ため息が出ると幸せが逃げてしまいうらいぞぞ？」

ごっくん。

「あれ、どうかしましたか、グルーヴ先輩？」

「……いや、何でもない。あと自分から話す時は飲み込むのだな……。」

最近の会長は「目標ができた！」とウキウキしてらっしゃったし、オグリキャップはオグリキャップで「会長が頑張ってるから私もやる」といって頑張り食事を爆増させ、スペシャルウィークはよいことでもあったのか最近ニコニコしながら食事を上げた。

私はなんか、疲れたなあ……。

「ハア……、とりあえず私も食べるか……。」

「そういえばオグリ先輩は有馬記念出ないんですか？」

「ん？ ああ、私は去年出たしな。ファン投票でかなりの人に入れてもらったが有馬記念には出ない。今はドリームシリーズに向けて調整中ということもあるが……どうしてだ？」

「いえ！ 単に気になっただけです！」

「そうか。まあスペがドリームに上がったときは勝負しよう。……この唐揚げおいしいな。」

「……………ですね！」

PART 84

「おお！　すごい人だね、トレーナー！」

「だね。みんな彼女を見に来ているのかな？」

最近はずっと地方のレースに出てもらっていたせいか、ウララの中
央に対して持っている情報は少ない。せいぜいテレビで見ただけだ
だろう。彼女がこのままダートで走るか、それとも芝でも走るのかは
彼女の意思次第なので解らないが、絶対にこのレースは彼女の糧にな
るだろう。

「やっぱりみんなスペちゃんを応援してるのかな？　ウララはみんな
に勝ってほしいけど、誰か一人を選ばないといけないとすれば……、
やっぱりキングちゃんかな？」

「同室でお世話になってるからかい？」

「うん！　大事な友達なの！」

地方で走ってもらっていたせいで大事な友人たちとの時間が少な
くなくなってしまったことは完全に私が悪い。最初はレース間隔をつか
むために地方で走ってもらっていたが、途中から目的が変わってし
まっていた気がする。来年からは長く中央に残れるようなプランを
組もう。

—————

「ふ、ふん、ふん、ふ〜♪」

んじや、今回もなんかご機嫌なスペちゃんと一緒に有馬記念走ってきましよう！ ステータスは前回お見せしたものとそこまで変わらず、のままなので今回省きましたが周りと比べて頭二つ分以上実力差がある感じですよ。また今回出走してるのもネームドの中からだとキングヘイロー、セイウンスカイのみと同じ世代の子ぐらいしか注意しないといけない子がいないので比較的安心していけるでしょう。

あ、申し遅れました、投稿者です。今回もよろしくお願いしますね。

さて、同世代、それもライバル枠のお二人が相手となってきますが、正直そこまで気にしなくてもいいですよ。まあなぜかと言うといくらライバル枠の補正が掛かっていても史実、という名の補正にはかなわず、時間が進むごとに彼女たちの成長率はやっぱり少なくなっていくですよ。

セイウンスカイ、キングヘイローともに菊花賞あたりから怪しくなってきました、シニア級になると全くついていけないようになってしまいます。まあキングには短距離があるんですが、セイちゃんは正直どうなるか解りません。史実では皐月、菊花と二冠馬でしたが、今回はスペちゃんが取っちゃったのでマジでどうなるんでしょう。

まあ勝負の世界ですし、こればかりはわたくしにできることはないです。正直スペちゃんの方から接触したとしてもいい方向に転ばないのは明らかでしょうから、こればかりは神頼み、ですね。

「むう〜。」

おっと。スペちゃんの嫌いワードが出てしまいました。すまぬすまぬ、この部分カットしておくゾイ！

さ、それでは有馬記念に向かいますか！ 作戦としては王道の差しで行きましょう！ いつも通り後方で待機しておいて、中盤辺りから全部抜いて引き離す！ これ、鉄板！

あ、あと今回のレースはセイちゃんがいますので、彼女が変に逃げてもペースは崩さないように一定を保ちましょう。結果的に先行位置になってしまいかもしれませんが、そんなときやそんな時です。

現状のセイちゃんでは有馬を全速力で逃げ切る、みたいなスズカ先輩みたいなことはできませんし、必ずどこかで息を整えてきます。そこを突く感じですね。

キングちゃんは同じ差しの戦法を取ってくるので実力差で勝負していきましよう。

ま、ステータス二人ともよくてB、平均してC＋ぐらいなので問題なし！

んじゃ、レッツ、有馬記念！ ゴー！

「お〜！」

—————

『年末の大一番。あなたの夢、私の夢は叶うのか。……という私たちが実況の決まり文句を吐いたところではありますが、実質ここに訪れた大半が彼女のことを見に来た、と言っても過言ではないでしょう。実況の身でありながら避けるべき発言だと思いますが、私もそうです。』

『実際彼女の実力は頭一つ以上飛び出ていますからね。今年度は来年度から始めるドリームシリーズのためか、ファン投票で上位に入りながらも出走を回避したウマ娘が多くいます。優秀な成績を収めた子たちばかりですが、少しながら荷が重い、と言ったところでしょう』

か。』

『さあ、満を持しまして、お待たせいたしました！ 一番人気の登場です！ もちろんこのウマ娘、スペシャルウィーク！ 無敗三冠に合わせましてホープフルSとジャパンカップ、合わせて五つの星を背負い、六つ目の星を手に入れます！』

「……………」

菊花賞の時は単に注目されてなかったことを喜んでいただけ、二度も続いて、それ以上にレース場全体がスペちゃんの勝利を望んでるみたいなすごい状況だと、ちよつと思ふことがあるよね。

私もここにいるんだぞ〜！、つてさ。

ま、そんなことしても負け犬の遠吠え、何も変わらないだろうからやらないけど。

実力差が離れているのは理解してる。ついていくことが出来なくなりかけているのも理解してる。

けどね、もう負けたくないんだ。

ねえ、スペちゃん。いっぱい勝ったでしょ？ たくさん星背負ったでしょ？

無敗三冠になったでしょ？ シンボリルドルフ会長に勝ったでしょ？

時代の頂点って呼ばれるようになったよね？

ねえ、もう十分じゃない？

もうたくさん、勝ちすぎるほど勝ったよね？

そろそろ期待が重くなってきたんじゃないの？

今年最後。一つぐらい、私に譲らせてあげるよ。

だからさ、その重みってやつを私に体験させてくれるよね？

ねえ、そこで鼻歌歌いながら、自分の勝利を疑ってない、傲慢スぺちや
ん？

—————

私を担当してくださっているトレーナー、赤田さん。

彼、縁のウマ娘として一番初めに挙げられるのがあのシンザン、伝説だ。

シンボリルドルフという今の英雄、そしてスペシャルウィークさん
でさえあの方には届かないと言われるほどの伝説、化け物と言っても
いい。そんな方が私の先輩にあたる。

赤田さんが担当なされたウマ娘は彼女を筆頭にして誰もが輝かし
い成績を収めた。

誰もがGIを勝利していた。

そんな、素晴らしい、先達たち。

だが、私はなんだ？

どんなに頑張っても掲示板が精いっぱい。

他重賞は勝てても、GIはどうしても勝てない。

出来ることは全部やった、教えられたことはすべて糧にできたはずだ。

だけど、スペシャルウィーク。スペさんに勝てるイメージが全くわからない。

彼女の前に出ることがどうしても考えられない。

自分の適性を無視し、自分の才能のなさを無視し、

私はあの母の血を引いてるんだ！ あのトレーナーに師事を仰いでるんだ！

そうやって自分を無理やり鼓舞しながらここまで来た。

それも、今日で終わり。

こんなことは口が裂けても言えないが、私はどこか、この現状に対するさを感じていたのかもしれない。

トレーナーさんが私の短距離への移行を考えていると知ったとき、初めて心に抱いたものは、

安心

だった。

裏切られた、見捨てられた。やっぱり私はそっちなんだという納得。

そんなもの全部打ち捨てられていた。

ただ、安心してしまった。

これ以上あそこで戦わなくていいんだ。自分の身を削りながら戦わなくていいんだ。

もう超えられない壁に挑まなくてもいいんだ。

そう、安心したのだ、このキングが。

自ら敗北を受け入れたのだ。どうせ何をしても勝つてこない。それならば挑まない方がいい。

諦めたのだ。

……諦めた？

……ふざけるな。

ふざけるなよ、私！

何のためにお前は走っている！

母に自分を認めさせるためか？ トレーナーの名誉を傷つけないためか？

違うだろ、違うだろ私！

私が、私であるために。

私が、『キング』であることを証明するために！

絶対に諦めずに、そこに到達するために！

母やトレーナーはそのおまけにしか過ぎない！

全部が全部、私のため、私のために彼女に勝ちたい！

絶対にスペシャルウィークに勝つことを諦めない！

自分が周りより劣っていることも、成長速度が劣ってきたことも、スペシャルウィークとの実力差がかけ離れていることも、全部全部知っている。そんなこと百も承知だ！

だけどそれが私が諦める理由にならない！

私に『諦め』なんて文字必要ない！

心を研ぎ澄ませ、私。

王者をここに証明するんだ。

—————

えくと、セイちゃんは大逃げするけどスタミナ調節のために一息入れるからそのタイミングで、キングちゃんは私と同じ作戦らしいからそこまで気を付けなくてもいい、だよな。

たぶんセイちゃんが今までしていた無理な大逃げはブラフで、どこかのタイミングで大逃げに見せかけてゆっくり休憩するつもりだった、ってことかな？

お姉ちゃんが言うことだから正しいんだけど、セイちゃんがそんな策士さんだなんて知らなかったや！ 確かに何で大逃げするのかなあ？ と思っただけどそういう理由だったんだねえ。

ま、どうでもいいかな？

じゃ、頑張って勝つぞ〜！

『さあ、各ウマ娘順にゲートに入っていきます。』

あ、そういえば前の菊花賞のときも、今回の有馬記念の前も同じこと言われたよね。何度もお姉ちゃんが注意してくれる、ってことは結構大事なのかな？

『各ウマ娘、ゲートに収まりました！』

スズカ先輩やターボさんも逃げだし、今後セイちゃんみたいな戦い

方をする人がいるから注意してくれたのかなあ？ それとも世界？
……このレースで対応の仕方覚えておきましょう、ってことかなあ？

『今、スタートです！』

……あ、プレッシャー掛けるの忘れてた。

PART 85

『スペシャルウィークが少し遅れてスタート、それ以外はきれいなスタートとなりました!』

『彼女がスタートを遅らせるのは珍しいですね。得意なイメージがあつたんですが……、まあ彼女は差し策なのでこれぐらいの遅れはそこまで問題にならないでしょう。』

『さて、先頭は勢いよく飛び出しまして、セイウンスカイ。今回も彼女は大逃げで行くようです。』

よし、よし! 来なかった! 来てたらそこで終わってた!

どんだけ練習しても、誰にお願いしてもあのゲートのプレッシャーをすり抜けられる確証が持てなかった!

あのプレッシャーを再現してもらうことができなかった、あの状況を作り上げることができなかった!

対策のしようがなかった!

それが来なかった!

完全に舐められているのに思うところが無いと言えば嘘になる、でも!

こっちはそれを前提に考えてた! いける、いけるぞ!

普通ならレース前に気が入ってなければ声かけてた! もっと本気になって欲しいっていうと思う! ケド!

今のスペちゃんも別、何が何でも勝利を掴み取る!

『ああっと！ セイウンスカイさらに加速！』

『これまでのレースよりペースが速い感じですね。彼女のレースを見る限り大逃げのさらに先、後半に入るまでにできるだけ後続と差を開けておきたいというわけでしょうか？』

『これに合わせてか、後続はそろってペースを下げていますね。』

『彼女についていけば潰れてしまう、その判断でしょう。』

—————

「……………あ、すごい。ホントになった。」

「……………あ、すごい。ホントになった。」

……………どういうこと？

出所はスペさん。今回は“アレ”も来ず、逆に彼女が出遅れたが……………、もしや何かの作戦？

いつも、普段のスペさんはどこか天然さを感じる方だがレースでは

完全な別人。

菊花賞のプレッシャー、大逃げで嫌というほど解らされた。考えているのが本人ではない可能性もあるが、それを実行できている時点で普段の彼女ではない。

そのこと自体は理解していたつもりだったが、今の一言は何？

出遅れを引き起こしたせいで彼女は私より後方。見て確認したわけではないがおそらく差し位置の最後方、追込位置に入るか入らないかと言ったところだろう。

さすがに彼女がレース中に話しかけてきて周りを惑わす、というのはいらないはずだ。と、なると口から零れ落ちた、うっかり出てしまった言葉になる。

『ホントになった』ということは……、このレース展開のこと？ セイさんの大逃げのこと？

……もしかして彼女の大逃げはブラフ。

そのことを理解した瞬間、私の横を、外側に

風が吹き荒れた。

――

よし、よし！ 後ろに何も来てない！

みんなついてきてない！ もちろんスペちゃんも！

後はここでできる限り休んで、後ろから来そうになつたらもう一度加速。そのタイミングさえミスらなければ勝てる！ ここが正念場！ 頼む、頼むから気づかないでくれ！

このまま私はペースを落とすんだ！ 休むんだ！

最大速度じゃかなわない、スタミナでも叶わない！

だから何としてでもこの距離というアドバンテージを離したくない、離しちやいけないんだ！

ド、ド、ド、ド

……………なんで。

ド、ド、ド、ド、ド

何でももう、足音が、

ド、ド、ド、ド、ド、ド、ド、ド、ド

何でもう、真後ろにいるんだよ！ スペちゃん！

—————

へく、こんな感じになるんだ。

確かに、このまま周りのペースに合わせてゆっくり走ってたら結構ぎりぎりだったかも。

でもお姉ちゃんに教えてもらってるし、スタートで思いっきり失敗しちゃったからこれ以上やらかしちゃうのはいけないよね。ちよつとだけ速いかもしれないけど中盤に入る前に位置を押し上げておこなかな？

よい、しよつと！

『ここでスペシャルウィークが加速します！』

『現在セイウンスカイが先頭でかなりの差が離れていますし、それを嫌ったのかもしれないね。』

キングちゃんが何か考えている、そんな顔を横目で見ながら速度を

上げる。

あ、でも私が前に行こうとしてるの見たら速度上げたのかな？ 加速した音が聞こえるや。

え、と先頭のセイちゃんとは大体何バ身ぐらいだろ？ 結構離れてる。

でも、ちょうどセイちゃんが中盤過ぎたぐらいだし、このまま私もいつもの加速したらいけるね。

……ん？ それなら別に追いかけてなくても良かったの？

『現在先頭にセイウンスカイ、大きく離れて加速し始めたスペシャルウィーク、その後ろにキングヘイローと続いています。』

あ、でもバ群に吞まれて前に進めないかもしれないかもしれないからこの状態の方が良かったのかも。

さ、そろそろ中盤だ。

◇【不沈艦、抜錨オツ！】L V. 3 発動！

◇【逢魔時】 発動！

始めるよ、お姉ちゃん。

『おっと、スペシャルウィークさらに加速う!』

ダメだ、もう後ろに足音が! 真後ろにスペちゃんが!

ナンデ! なんでもう後ろにいるの!

休んでいる暇なんてない! 全速力で逃げないと追いつかれる!
私にスペちゃんを差し返す能力なんてない!

抜かれたらそこで終わりなんだ!

私はまだ何も残せてない!

まだ、終われないんだ!

『セイウンスカイ逃げる! セイウンスカイ逃げる! その後ろから
スペシャルウィーク、スペシャルウィークだ! スペシャルウィーク
猛追! 差がどんどん縮まってるぞ! そのまま最終コーナーに
なだれ込む!』

コーナー! 駄目だ!

減速しないと曲がれない! でも減速したら絶対に追い抜かれる
!

曲がれ、曲がるんだ、このままの速度で、そのままの勢いで!

減速せず、無理やり重心を内側にずらす。
足首に痛みを感じるけど、気にしてる場合じゃない。

∨【アングリング×スキージミング】Lv. 3 発動！

「負けるかあああああああああ
”!!!!」

「……………」

∨【シューティングスター】Lv. 4 発動！

∨【汝、皇帝の神威を見よ】Lv. 4 発動！

∨【空駆ける英雄】Lv. 3 発動！

『スペシャルウィーク！ スペシャルウィークだ！ セイウンスカイを抜かし、先頭に躍り出る！』

『スペシャルウィーク！ そのまま後続を突き放す！』

『スペシャルウィーク独走か、スペシャルウィーク独走か！』

『後ろからは何にも来ない！ 後ろからは何にも来ない！ 後ろからは何にも来ない！』

『ようやくキングヘイローが上がってきたか！』

『スペシャルウィーク、これは強い！ これは強い！』

『今、一着でゴールイン！』

『スペシャルウィーク、圧勝です!! これで六冠目！ 今年度無敗を貫きました！』

有馬記念

一着 スペシャルウィーク

二着 キングヘイロー

三着 セイウンスカイ

PART 86

「アハ、アハハ……、はあ。」

なんだかもう、乾いた笑い声しか出ない。

鳴りやまない鼓動。無理した足首からの痛み。

そんなもの全部気にならない。

ただ、もう笑うしかできない。

大歓声の中、観客に向かって手を振っている彼女を横目にターフに寝転がる。

「疲れた、なあ……。」

肉体的にも、精神的にも、もう疲れちゃった。

あのままじゃ追いつけないことが解ってて、どんなに頑張っても追いつけないのが解ってて、

彼女に勝つためにあれだけ時間をかけて、しんどい思いをして、周りに迷惑かけまくって、

それでも、これならいけるかも、って思ったものでも単なる実力差

で壊される。

ホントなんだろうね。こんな最悪な現実。

アレが才能って奴なら私はソレを恨むよ。

「セイさん、肩。貸しましょうか？」

「……………ああ、キングか。ありがと。……………ごめんね、立てるけどその気にならないの、引き起こしてくんない？」

そう言うと、すぐに私の手を握り立ち上がらせてくれた。

……………ホント、自分もつらいはずなのに、よく私なんかのこと気にかけてくれるよね。

私が足首痛めてるのを知って、わざわざ肩貸してくれるもん。

彼女に体重を預けながら、色褪せたターフから去る。

当然、見たくないかもしれない。

「届きません、でしたね。」

「……………だねえ。」

ただ、歩を進める。

足首の痛みはもう引いてる。

でも、まだ自分で歩く気には、前に進む気力は出てこない。

「このまま、ずーっと勝てないのかなあ。どんなに努力しても、どんなに頑張って作戦を考えても、どんなに、どんなにやったとしても、……………やっぱり届かないのかなあ。」

「……………」

「もう、私たち。このまま置いて行かれるのかなあ……………。何やっても勝てなくて、勝負にならないで、どうしようもなくて、でも勝ちたくて。」

「こんな、こんな思いするなら、……………もう最初から走らない方が」

「黙りなさいー!」

「ええ、そんな口を利くならさっさと黙りなさい！ ええ、そうでしょうとも！ 何やっても私たちは届きませんでした！ 多くの方々に迷惑をかけ、時間を使い、出来る限りのことをして挑んだ！ でも負けた！ 誰の目から見ても完敗です！ 影すら踏ませてもらえませんでした！」

「でも、でも！ これぐらいどうでもよいこと！ ええ、どうでもいいんです！ どんな負け方をしても、どんなに周りに迷惑をかけたとしても、私たちは走った！ 必死に挑んだ！ あなたはそれすらも否定するのですか！」

「どんなに弱音を吐いても、どんなにつらい思いをしても、どんなに失敗し、負けたとしても、それがすべてを諦める理由にはなりません！ そうでしょう！」

「なのに、なのにあなたはもうあきらめるのですか！ あの程度の負けが何だというのです！」

「思っていましたとも！ 私たちに勝ち目なんか最初からないんだって！ でもね、それでも立ち向かうあなたはその有様はかっこよかったです！ 無理難題に立ち向かうため、全部の可能性を考えるあなたを見ていた！ ほとんどゼロに近い可能性に掛けて、全力を出せるあなたに憧れていた！ 私にはそんなことは怖くてできない！ ただ、愚直に前に進むしかできない私の憧れだった！」

「それを！ それを何ですかあなたは！ もう諦めるのですか！ もうおしまいなんですか！」

「ただの軽口なら許します。ですが！ その言葉の続き、本心からのものだったとしたら………」

「……もういい。もういいよ、キング。」

—————

「アハハ、あらキングちゃん？　もしかして信じちゃいましたかあ
〜?」

貸していた肩を振りほどき、軽く飛んだセイさんが目の前で笑いかけ
てくる。

少々、無理やりな笑顔だがさっきまでの見てられないような顔で
はない。

「……ハア、もしかしてまた何かのドッキリですか？　だとしたらかなり恥ずかしいのだけれど。」

「二シシく、カメラが回ってなかったことに感謝するのですな。」

ま、そういうことにおきましよう。

本心を言いすぎて恥ずかしかったのは事実ですし。

「それにしても足首の方は大丈夫なのですか？　痛めたようにしていましたが？」

「んん、さつきから痛くないし、大丈夫じゃない？」

「いつから？」

「肩貸してもらってからぐらい？」

「最初からじゃないですか！」

少し、大げさに怒ってみると「わくいキングちゃんの怒りんぼ」なんて言いながら逃げていくセイさん。

ふふ、まあ私たちはこれぐらいの方がいいのかもね。

「さて、私も控室に戻りますか。」

「ま、でも結構きてるのは確かなんだけどね。」

キングのおかげで少しは持ち直したけど、やっぱりねえ。

ちよつとスペちゃんとか戦いたくはない、かな。

「正直今の段階で勝てる方法なんて全くないし、負ける前提で挑むのはイヤ。かといって今の私にできることなんてないしなあ……。」

控室に移動しながら色々と考えてみる。私はキングみたいに短距離はできないし、マイルもできるちゃああできるけどそこまで得意じゃない。中長距離適性の私は国内にいる限り絶対にスペちゃんとぶち当たる。

「これから私もシニア級だし、上の先輩たちと得意じゃないマイルで勝負するのも無理ですしなあ……。」

出来るなら私の得意な距離で勝負したいけど、スペちゃんも勝負するのは私が勝利を確信できるまで当分したくない。と、なればどうするのが正解なのか。

そんなことを考えていたらもう控室の目の前に来ていた。

「キングに諦めるのやめまゝす。つて言ったようなもんだしもう一度ダメになっちゃうまではやるのは決定。でも何をやるか、考えませんとねえ。」

モチロン、続けるなら彼女に勝つのを諦めたなりなんかしない。だってあのキングの憧れ、セイちゃんですもの。

そんなことを考えながら控室に入る。

普段なら「ただいま〜！」なんか叫びながら入るだろうが、そこまですぐに元気がない。一応この後ライブあるし、おいてあるドリンク呑んでちよつと休憩しとかないと持たないよねえ。

ま、ズタボロのセイちゃんですけども有馬に出れるぐらい応援してもらってるし、ライブぐらいはきれいにこなしませんとねえ。うむむむ。

「あれ、なんだこの封筒。」

ドリンクの隣に結構大きい目の封筒が置いてある。

中身は……、私のパスポートと香港スチュワーズカップの出走登録受付完了されている書類。ちゃんと私用に翻訳もされている。

「確か、マイルだけど……香港三冠のはじめ。」

香港三冠。私にとつたら全部ちよつと短いけど、海外G I、取れた

らスペちゃんと同じ三冠。

「……………ニシシ、いいねえトレーナー！ 最高だよ！ これ全部取って、スペちゃんに負けないぐらい成長して！ それで全部が全部、これまでのことまとめて返してやる！」

さあ、スペちゃん、首ちゃんと洗って待っててよ。

次の秋シーズン、ちゃんとお返ししてあげるからねえ！

—————

「いや、ライブすごかったなあ、ウララ！ この前のジャパンカップはプロワイエやグラスワンダーが出れなくて残念だったが、今回の有馬はすごかった！」

「……………うん、そうだね、トレーナー。」

「……………？ どうかしたのか、ウララ？」

「ねえ、トレーナー。私って来年の有馬記念で走れるかな？」

「有馬記念かあ、ウララが来年もっと活躍できればファンの方がもっと増えて投票してくれるんじゃないかな？　そしたら出走自体はできるとは思うけど……、芝と長距離。ちよっとウララには厳しくないか？」

「……………そっか！　ううん、大丈夫！　ウララやれるよ！」

「おう、そうか。なら今年は芝、長距離の練習を含めたメニューにしよ
うな。」

「うん！」

PART 87

有馬記念、ライブあと

「二人とも、ライブお疲れ様！ 今日はいつもとより楽しく踊れた気がするよ！」

「おく、それはようござんしたなあ、スペ殿。……そういえばこの前有馬終わってすぐに帰郷するとか言ってたけ？ そっちの準備は大丈夫なの？」

「……………あ、忘れてたあ！ ヤバイヤバイ、そういえば飛行機のチケットもう買ってもらってたんだっ！ ご、ごめん二人とも！ 私もう帰るね！」

そう言っつて、慌てながらスペさんは控室に戻っていった。

レース時の彼女と普段の彼女の差を解らされる天然というかおつちよこちよいというか、まあどこか抜けている。それを見せられた。

「それで？ わざわざスペさんを帰らせて、何か言いたいことでもあったのですか、スカイさん？」

「ん〜？ 何のことかなあ、キング〜。私はただスペちゃんに教えてあげただけだよお。」

……つれませんわね。まあ普段の彼女らしいふるまいですし、もう心配する必要はないと遠回しに言っているのでしょうか。まったくややかしいですわね、スカイさんは。

「あ、そうだ。キングにだけは言っておこうかな。」

「? なんですか?」

ライブ衣装のまま、こちらにスカイさんが顔を向ける。

先ほどまでのどこかふざけたような表情は消え去っている。

「私、日本を離れるんだ。」

「行先は、香港。トレーナーが気を利かせてくれたのか、香港三冠の道を用意してくれた。私はソレを取りに行く。三冠を、取りに行くんだ。」

「そうしたら、やっと少しだけ、スペちゃんに並べる。」

「あつちで、いろんな人と勝負して、経験を積んで、新しい世界を知って、今よりも何倍も強くなる。必ず強くなって帰ってくる。……………それで、スペちゃんともう一度勝負して、必ず勝つ。」

「キングにだけ言うのは、お礼と、誓い。キングが私のこと励ましてくれなかったら私は行かなかった。この国に留まって、何もできずに、ただそこにいるだけ。何も為せなかった。それを、止めてくれたお礼。それと必ず三冠ウマ娘になって帰ってくるっていう誓い。」

正面から見るのは、初めてかもしれない。彼女の真剣な顔。

そう、ですか。あなたは世界に飛び立つのですね。

「……………なるほど。そうやって、このキングの前で勝利宣言というわけですか。自分は香港に行って強くなって帰ってきた後にしっかりとスペさんにリベンジを果たしにくる。だからこのキングは短距離、国

内で小さくまとまっておけばいい、そう言いたいのですね、あなたは。」

彼女は大きな目標を持ち、そしてまだ勝利を諦めてない。

そのきつかけが私だったとしても。いや私だからこそ、そのきつかけを作った私自身が諦めるわけにはいかない。

トレーナーのためにG Iを勝利する、世代の頂点にいるスペシャルウィークに勝利する、

そして、彼女と同じように世界に挑戦する。全部やらなくちゃいけないのがキングのつらい所よね。

ま、望むところですが！

「いいでしょう！ あなたが世界に飛び立つというのに私が国内で止まってしまうのはキングの名に恥じる！ あなたが香港三冠というのなら私はグローバルSCをいただきましょう！ バクシンオー先輩が達成した偉業！ 同じ王なら、このキングができないはずはない！ そして、あなたよりも速く、キングらしい戦い方、勝ち方でスペさんにリベンジを果たしましょう！」

「……あは、あははは！ そう！ そうだよね！ キングならそうでなくちゃ！」

「じゃ、どっちが速くスペちゃんに勝つか、『勝負』、だね。」

「ええ！ 望むところですよ！」

「と、いうわけでトレーナー！ 出走登録と飛行機の手配をお願い致します！」

「おいおい、急だなあ。……ま、負けてうじうじしてるよりもよっぽどいいけどな。おっしゃ！ そうと決まれば早速用意するぞ、短距離の公式レースこなしながら世界の強豪たちに野良の中長距離勝負を仕掛けて成長する！ これほど面白そうな話はない！ トレーナー冥利に尽きるってやつだ！ ついでに春秋スプリントももらっていくぞ！」

「では！」

「ああ！ 初戦はオーストラリアだ！ 早く荷物纏めてきな！ 今日
の便であつちについて早めに練習の予約取り付けるぞ！」

「はい！」

「……………」

「ふう、何とか間に合ったあ。」

「いや、ごめんね。出来るだけ早く帰れた方がいいかなって思って
ギリギリの時間で予約取っちゃって。」

「ううん、いいの。とってもらったこと忘れてた私が悪いんだし。」

「うむ、確かに全く用意してなかったとは知らなんだ。ライブ終わっ
た後全速力で帰っていくもんだから周りの人ビックリしてたもん
ねえ。寮長のフジキセキさんとか、『さつき帰ってきたばかりなのに
もう行くの!?!』って顔してたよ。」

「あは、あはは……………」

「ちゃんとお土産買って帰りましょうね。もちろんいつもお世話に
なってるみんなの分も、だよ。」

「はい。」

さて、後は私がどれだけできるか、だね。

PART 88

一面の銀世界。雪だらけの地元。地平線まで続く、真っ白な世界。

「うわあ〜、なんかすっごい久しぶりな気がする！ けど……」

……いやね、うん。まあこの雪まみれの時期にわざわざ帰省するの
か、ていうね。

「……だよ。レースがあつて雪が降る時期を避けられなかった、つ
て言うのは解るけど。なんでわざわざこの時期なのかっていう。」

まあ実際見たことないとしゃあないのはあると思いますけどね。
トレーナーさんもお厚意で言ってくださったからあんまり文句言っ
ちゃだめですよ。

「はい。」

にしても、どうでしょう？ 飛行機と電車が止まらなかったのはい
いですけど、駅からどうやって帰りましょうか。実家結構奥地です
し、タクシーでも拾います？

「ううん、お母ちゃんが迎えに来てくれるみたいだから大丈夫だと思
う、さつきメール来てた。」

ま、そりゃそうか。んじゃあの軽トラでしようから荷物どう運ぶか
気にする心配もなし、気長に待ちましょうか。

あ、あれ家の車じゃない？

「あ、ホントだ。お母ちゃんく〜！ こつちこつちく〜！」

んじゃ、スぺ。私はいつも通り静かにしてるから……、私のことは最後まで言っちゃだめだからね。

「……………うん。」

一瞬、顔が曇りそうになる。

でもせつかくの帰郷、久しぶりのお母ちゃんとの再会なんだ。

私が失敗してしまった時のことも考えて、変な期待をさせてしまうわけにはいけない。

大丈夫、6年間出来たんだ。今回はそれよりももっと短い。いつも通り、無邪気なままで。

車が止まり、窓が開く。

「おお!? そこにいるのは今朝のテレビに出てたスペシャルウィークさんじゃありませんか？ どうです、オンボロですけど乗っていきま

すかい？」

「もおくく！　なにそれ、お母ちゃん！」

「あはは！　冗談、冗談！　変に辛気臭い顔してたからついね！　ほら、もうちよつとしたらまた降り始めるみたいだし、さっさと乗っちゃいな！」

「は〜い！」

いつの間にか荷台に乗り込んでるお姉ちゃんの横に自身の荷物を置き、助手席のドアを開ける。

そういえば昔はお姉ちゃんの膝の上のせてもらってたっけ。

「それじゃ、出発します！　……………それと、スぺ。」

「ん？　なあに？」

「おかえりなさい。よく、頑張ったね。」

「……………うん、ただいま、お母ちゃん。」

—————

「お母ちゃん〜！ 屋根の雪かきしてくるね〜！」

「は〜い！ 落ちないように気を付けるんだよ〜！」

スペが帰ってきた。

彼女のトレーナーさんから頂いたお手紙、何故かこの前スペと遊びに来てた葦毛の子が届けに来てくれたがその内容はスペを休ませることだった。

何でもレースで結果を出すために、ケガをしないギリギリの練習をし続けているみたいで、いくら体の丈夫なスペでもこれ以上続ければ体を壊してしまう可能性があったらしい。

来年、今はもう今年だが、スペの意向に乗っ取った出走をする場合休みを取れる期間があまりにも少ないらしく、彼女の意向をくむためにも、この期間にできるだけ体を休ませてほしい、とのことだ。

今スペがしに行った雪かきも、私が昨日一度やってしまったし、昨日の夜もそこまで雪は降らなかったので大した量ではない。変に体を動かさないのもスペにとってストレスになるだろうから行かせた。

……正直、もつと我儘言っただけ無理にでも走ろうとするんじゃないかって思ってた。小さいころから変に自分を追い込む子だったからてつきり家に着いたらすぐに走り出すかと思ってた。

そのためにスペを家に縛り付けておくための紐も用意しておいた

んだけど……、変に聞き分けがいい。『レースと練習続きで疲れてるだろうし、家にいる間は走らずにゆっくりしてな』、そういうと元気な返事一つ。それからずっと走りに行つてない。止めているはずの私が不安になるくらい、家でじつとしてる。

それで、もっと心配なのは、スペがずっと昔の写真を、アルバムを見ていること。

私もだけど、まだあの時間に縛り付けられている。

この家に、もう一人いた時間から誰も、決別できてない。

彼女が事故で私たちの前から消えてしまった時、スペは狂う直前までいった、

いやもう狂ってしまったているのかもしれない。

昔から、お姉ちゃんつこだった。唯一の血がつながった家族だったからかもしれない。

年が離れていたこともあって、もう一人の母親として見ていたのもあるのだろう。

それが、自分の目の前で死んでしまったのだ。狂うのも、仕方なかったことなのかもしれない。

その時、私が彼女を抱きしめられれば良かった、まだ私が隣にいることをちゃんと教えて上げられれば良かった。

私に頼ってくれ、私にその苦しみ、その悲しみを分けてくれ、そう
言えればよかった。

でも、出来なかった。

あいつから託された二人、スペが生まれたとき、キャンデイは小さいながらも大人びていた。

私が母親として失敗してしまった時、すぐに私に寄り添ってくれた。
た。

私が不安に押しつぶされそうなとき、横に彼女がいた。

私が困ったときに、すぐに私を助けようとしてくれたのが、キャン
デイだった。

あいつをなくしてしまった私は、無自覚の内に彼女を新しい拠り所
にしてしまっていたのかもしれない。

母親として、早く一人前になるべきだったのに。

そのせいで、頼れる人を二度も失ってしまった私は、余裕がなかつ
た。

スペのことを気にすることもできず、ただ自分が壊れないようにす
るのに精いっぱいだった。

そのせいで、気づいた時にはもう遅かった。

キャンデイのお葬式が終わり、何とか一息付けたとき、自分にやっ
と余裕ができた時。

愚かにも私は、やっとスペの顔をちゃんと見た。

……何もなかった。

スペの顔には、何もなかった。

これまで見せてくれていた、小さい時からずっと見せてくれていた感情。そのすべてがスペの顔から抜け落ちていた。……何も、なかった。

私は愚かだった。

その時、私は、自分のしでかしてしまったことに後悔した、錯乱した、してしまった。

とりあえず、何とか母親として取り繕ろうとした。

体が覚えている動作に身を任せてしまった。

何か動いているれば余計なことは考えずにすむ。イヤなことからは目を背けられる。

背けて、しまった。

その日、私が用意してしまった夕食は三人分。

私と、スペと。　あともう一人。

今は、もう、必要がなくなってしまったもの。

あの時、食卓に並んだものを見たスペの顔。
気が付いた時にはもう遅かった。

あの時、あの表情。

スペが、それを見てした顔が、忘れてくても忘れられない。

残ってしまったもう一人の食事は、すべて、スペが食べた。

スペの過食が始まったのは、その時からだった。

あれから、もう8年にもなる。

私たちはまだ、過去に縛られている。

スペがどう思っているかは解らない。でも私がこの状況から変化
できないのは単に怖いから。

今、狂わずにいられているスペに、変化をもたらしてしまえばどう

なるかわからない。

それが、どうしようもなく、怖い。

この家には過去を思い返すものしかない。
スペはまだ、姉の死を、受け入れてない。

けど、今になってそれが起きようとしている。

私の視線はスペがこの家に帰ってくる前日に届いた荷物に移る。
宛名は、『オースミキャンディ』

なぜ、今になって彼女宛に荷物が届くのか。

怖くなって、私とその荷物を開けることはできなかった。

何か、全部を壊してしまう気がして。

—————

言わずと知れたトレセン学園縁の下の力持ち、勝負服は勿論生徒の制服や体操服、ジャージなどの販売、制作を取り扱う場所だが……、今日はいつもより煩そうだ。

「ふふふふふ、出来た！ 出来たぞ〜〜〜!!!」

「……ねえねえ、さつきから先輩笑い続けてますけど、アレ、大丈夫なんでしょうか?」

「ああ、アレね。うんたぶん大丈夫。ほら、あのスペシャルウィークちゃんの勝負服の申請来てたでしょ。あいつ担当してたんだからできたんじゃない?」

「いや、まあそうなんですけどあの人確か三日前から帰ってくないですか? もしかして、三徹?」

さつきからなんか同僚が言ってる気がするが、そんなもの細事イ! この私、一世一代の大仕事、スペシャルウィークちゃんの勝負服改造が終わった後にはそんなものどうでもよいのだ!

正直眠いのでさつきと寝たいのだがそうはいかない。こいつをあのクソツタレなURAに送って勝負服申請し直さないといけない。ホントにあいつらアタシらの創作意欲をぶっ壊しやがって! なんと勝負服にウエディングドレスや水着がいけないんだ! 絶対かわ

いいだろJK!

「……………さっさとしますか。」

脳内で思いつきり叫んでたことを深夜テンション、いや徹夜しすぎておかしくなっていたと断定し作業を進める。有馬後に資料として送ってもらったやつはそのまま洗って帰すとして、わざわざ一から作り直したこいつはUR Aに申請届と一緒に提出。

あ、そういえば確か北海道の実家に送って欲しい、って申請書に書いてあったよね。前回は本人が届け出を出しに来てたけど、今回は何故かカウンターに置いてあっただけらしい……、担当の奴が席外してたんかな？

んで、うちの申請書には……、北海道の日高に、宛名は……オー スミキャンディ？ って書けばいいのか？ 親族なんかね？ まあ申請書に書いてありますし、UR Aの認可が下りた後はそのままそっちに送ってもらえるように配慮しておきますか。

—————

スpegが雪かきした後の屋根に寝転がり、空を見つめる。

真昼間のキレイな空。前からこれが好きだった。

スpegには届いているであろう荷物をお母ちゃんと開けるように言いつけている。

中身はお母ちゃんには手紙、スpegにはちよつとしたプレゼント。

開封の時に横にいるのもちよつと恥ずかしいし、スpegの雪かきが終わった後、彼女を家の中に戻して、今は屋根に私一人だけ。

「ま、いつも通り褒められたことじゃないだろうけど、そろそろ、ね。」

「最終的にどうなるかなんて誰も解らないんだ。やるなら自由に動ける今のうち。……………それに、いつまでも自分に縛られている家族を見るのって、結構しんどいんだよ、お母ちゃん。」

「今はきついだらうけど、その先はきつといいはずだから。」

「だからちゃんと、スペを受け入れてあげてね。」

スペと私のお休みは一週間。

特別な一週間《スペシャルウィーク》。ちよつと変かもしれないけど、まあ私ですし。

いいものにしないとね、スペ。

PART 89

「えっと、確か荷物届いてるからそれをお母ちゃんと一緒に開けるんだよね。」

朝、昨日の夜少しだけ屋根に積もった雪を下すのを口実にお姉ちゃんとおしゃべり。あ、もちろん仕事はちゃんとした。それで、雪かき終わった後に「あ、スペ。たぶんもう荷物届いているだろうからお母ちゃんと開けておいで」と言われたので道具とかを元のところに戻して家の中に戻る。

「にしてもやっぱり外は寒いなあ……、えっと。」

居間の端の方に置いてある大き目の段ボール箱、宛名はオーズミ キャンデーで……、送ってきたのはURA? 中身なんだろう。

あ、そうだお母ちゃんと開けないと。今はちようど……、あれ? 私のこと見てる。

「……………スペ、それ……………」。

「あ、お母ちゃん! これ開けていい?」

「……………いいの?」

「? うん。」

なぜか、不安そうな顔をしているお母ちゃんを不思議に思いながら机の上までダンボールを運ぶ。思っていたよりもちよとだけ重め。

封をしているガムテープをはがし、中身を開ける。

中身は一通の手紙と私の勝負服だった。

「手紙は……、お母ちゃん宛だね！ はい、お母ちゃん！」

—————

震える手で、何とか受け取った手紙。

宛名は私に、裏面を見て、差出人はオースミキャンディ。

何の特徴もない真っ白な封筒があの子を送り出した時の面布を思い出させる。

動揺し、ひどい顔になっているであろう私の顔は箱に入っていた勝負服の方に目を取られているスぺには気が付かれていない。

私は出来る限り心を保とうとしながら封を、開けた。

『お母ちゃんへ』

スぺのおかげで私の意思である程度動けるようになったので手紙を送ります。

最初にこんなことを書いてしまうのはあまりよくないと思いますが、

親より先に死んでしまつてごめんなさい。

二人を置いて行つてしまつて本当にごめんなさい。

今、私はスぺの守護霊のようなものになっています。

スぺのそばに居始めたのは彼女が7歳ぐらいのころですが

こんな状態にした方々との契約のせいで私の意思で何かすることができず

連絡が遅れてしまいごめんなさい。

.....

筆跡は、彼女のものだった。

私が知らない他人の文字じゃない。スペの文字でもない。

「スペ、これ……」

「わあ！ お母ちゃん見て見て！ これ新しい勝負服！」

……そっか。

昔から、キャンデイが亡くなってから虚空に向かって話すことが増えたスペ。そのことを聞いても絶対に口を利かなかった、他の話題を持ってきて話を変えようとする。今も、私から何かを隠すために勝負服の話を持ち出そうとしている。

……解るんだよ、スペ。いくら私があなたの肉親じゃないとしても、あなたが自分で立ち上がるのをずっと横で見てた。私が何とか平静を保つのに必死で、ホントならあなたのそばに居てあげないといけなかったのに。それでもあなたは一人で立ち直った。いなくなってしまうキャンデイの穴を埋めるように、自分一人で二人を表すように、……私を励ますために。

解るんだ。無理をしてるって。

「……スペ。こっちにおいで。」

「？ どうしたのお母ちゃん？」

首をかしげるスペを抱き寄せ、体温を分けあう。

「今まで、よく頑張ったね。……もう、一人で抱え込まなくていいんだよ。私もついてる。」

「……………うん。」

—————

スペが眠った後の深夜。

「本っ当に！ 私がどれだけ心配したか！」

『いや、本当に申し訳ないです。』

ぼんやりとしたあかりの中に、虚空に向かって話す女性と、意思を持って動くボールペンがあった。

『にしてもお母ちゃん、あんまり飲み過ぎたらだめだよ。今の私じゃこれみたいなものには触れるけど人にはスペ以外無理なんだから。』

「変な制約課してくれたもんだねえ、ええ！ あと祝い酒みたいなもんだよ！ 元々そんなに飲まないんだし今日ぐらいいいだろ。」

『ま、そうだね。にしてもわざわざ私の分注がなくていいんだよ。』

「ばか、アイツとキャンディの分。注がなくてどうするの！ もう二十歳超えてんだから怒られないし大丈夫、大丈夫！」

聞こえないはずの二人目の笑い声が静かに響く。

「……アイツがスペを生んだ後、死んでしまった時。キャンデイはまだ小さいのに私のこと支えてくれたよね。」

唯一無二と言ってもいい親友を失ってしまった私。友の子を育てないといけない不安。子育てなんてしたことが無かったし、アイツから任された子は二人。まだ赤ん坊だったスペに、小学生になったばかりのキャンデイ。

不安だった。

自分がこの子たちの可能性を狭めてしまいうんじやないか。

この子たちの成長を私が止めてしまいうんじやないか。

スペは自分の本当の親を知らない。キャンデイはまだ小さいのに親を失ってしまう。

私が彼女たちの母と親しかつたとしても私は他人。

母代わりになれるか心配だった。

「キャンデイは……、泣かなかったよね。」

『……薄情な娘だと思いました?』

「ううん、強い子だなあ、って。私なんか必要ないぐらいに。」

アイツの葬式の時、キャンデイは泣いてなかった。

歯を食いしばり、手を握りしめ。涙を流さないようにしていた。

……自分がこれから姉になること。新しい生活を始めないといけ

ないこと。

それを理解していた。

「私、ずっくと助けてもらってたよね。……キャンディはワガママ言わないし、仕事も自分から手伝ってくれたし、スぺのことでどうしたらいいか解らなかつた私を支えてくれた。ホントダメな母親だよ……、スぺのことも私は解ってたのに助けてやれなかつた……、スぺがキャンディの代わりになろうとすると、一人で二人分のことをしようとしていると思うと……、それを指摘してしまえばスぺが壊れてしまうような気がして……、怖かつた。」

『……お母ちゃんがいなければ、私たち二人ともここまで来れてないよ。スぺが私という亡霊に憑りつかれても、まだ普通でいられたのはお母ちゃんのおかげ。繋ぎとめてくれたのはお母ちゃんだよ。』

「……ありがとう。」

なあ、親友。私はちゃんと母親やれてるかい？

「さー！ じめじめ終わりー！ もう夜も遅いし、ウチの大食らいが控えてるんだー！ さっさと寝て朝ごはん作るために頑張らないとねー！」

『アハハ……、もうちよつと抑えてくれればいいんだけどね。』

「無理しすぎないようにちゃんと見張ってるんだよ。」

『うん。』

「私は、もう大丈夫だから。……背負わせて、くれるかい？」

『うん。……ありがとう。』

PART 90

うん、お母ちゃんもスぺも寝てるね。

……今のうちにやっときますか。

そんなことを思いながら家の壁を通り抜けて外に出る私。死んでから色々面倒なこと、まあ死んだから仕方ないんだけど色々あった。スぺのおかげでジャパンC勝ったあたりからちよつともものに干渉できようにはなつただけだね。まだまだできないことが多い。

「まあわざわざ玄関通らずに外に出たり、このさつむい景色を見ても体は全く冷えないのはいいことかもしれないねえ……。」

東京みたいに私たち人間がそこにいることを表す光は全くない、光源は空に上がる星々のみ。満天の空、星のシャワーとはこういうのを言うのかな。昔はこの空に何も思わなかったけど、府中で夜空を見上げて見える星がほとんどないことに驚いたなあ。そのせいでさらにきれいに見えるや。

「そういえばあの時はまだ意思疎通するのにも『動画撮影』って名目がなきゃできなかつたんだっけ。」

ほつんど。余計なことしてるよねえ、女神サマ方は。

「……ま、こちとら思いっきり楽しませてやるからせめてスぺの幸せぐらいはちゃんと約束してくれよな。」

さ、休憩はこのぐらいにして、私も仕事始めますか！

一回全部見返して、私たちが進むべき道を見直す。何にも残してあげられなかったんだから死んだあとぐらいいしやりきで働かねば、ね！

—————

みなさま〜！！！！（天上天下唯我独尊）

おいーす！ ウマ娘実況プレイ投稿者のぼもですよー！ ま、今まで名乗ったこと全くありませんけどね！ つまりわたくし名無しのプレーヤーでござえます。今後とも良しなに。

さてさて！ この動画シリーズも結構長くなっちゃいましたし。なんだか無茶苦茶皆様とおお久しい気がするので、こちらへんでいったん最初から見返すと言いますか、復習タイムといたしましょうか！ でも録画した日にちと今の日付見比べても全然差がないんですけどなんでこんなにおお久な気が住んでしょ？ コレガワカラナイ。

ま、そんなことは置いて復習回です。わたくしこちらの据え置き版ウマ娘をやりこんだ猛者と自負しておりますが、まあスペちゃん为上振れといますか、こちらの思っていないレベルまで育ってしまつたような気がいたしますし。個人的にもちやんと見直してチャートを組みなおすことがこれからの育成に役立つと判断したからなんですよね。

ま、面倒な方だったり、ちようどさつきまでこの実況を最初から見直していた、見ていてくださつた方々は飛ばしてくだシャイン！

んじやま！ 早速PART1からPART89（よく見たら今回で

90と区切りヨシですね。とりあえず100まで頑張りましょう)。内容がないよう、な回は飛ばしたりするんでつまみつまみとなりますけどそこらへんはよろしゅうおねげえしますだ。べ、別に私のために今から全部見直してくれてもいいんだからね！

○幼年期、トレセン入学まで

PART1はいわゆるリセマラ回。本動画の目的とか継承とか、その他もろもろを決めた回ですねえ。ちなみに忘れた方用に乗せておくと、スペちゃんの因子はシンボルドルフとディープインパクトから頂いたものになってます。あ、もちろん厳選済みですよ？

んで、目標の方は〈称号：無敵の総大将〉を目指すものとなっております。結構コメントで勘違いしてる方が多かったですけど別に偉大なる始祖に倣ってRTAしてるわけじゃ、ないです。称号目指して最強のスペちゃんを作っちゃおう！ という感じですねえ。

ちな、達成すべき目標は『凱旋門賞を含めた公式レースすべてにおいて敗北しないこと』というモノになっております。一応アプリ版でも存在していた称号、〈称号：日本の総大将〉の獲得条件を満たしたうえで芝の最高峰レース、凱旋門賞を勝つことが目標なんですけどまあ些細なことなんで無視しちゃいますねえ。

そしてここはリセマラの場面。ちようどこここでわたくしが死んだ目しながらリセットを繰り返しているところですねえ……。

277回目

個性：「愛嬌」「練習好き」「鉄人」「大食漢」

ま、この個性にも色々あるんですけどまあ単語だけで色々解るんで説明は省きますね。しかし「大食漢」だけは許しません。スペちゃんのお腹をキョダイマックスにした罪は重い！ 打ち首にしてしまええ！

そんなこんなで色々決まり、実況スタートとなるわけです。ここで

ロリロリしたスペちゃんに脳殺された方も結構いらつしやると思いますが私は尊死で済みました。

小学一年生から始まったわけですけど……、まあ最初の方は睡魔との戦いでしたね。彼女の個性の関係上たくさん食べてしまいますし、今後のことを考えると小さい時から練習するのは必須でした。そのため晩御飯の後ぐらいの時刻になると、疲れて眠いわ、お腹いっぱいでも眠いわの大騒ぎ。まあ騒ぐ前に寝てしまいうんで意味がないんですけど……。この感じは学年が上がるまで続きまして学外での勉強ができないという感じでした。

まあそれも高学年になると体力もつき始め、トレーニングのために始めていたお家のお手伝いで疲れることも少なくなり、勉強がはかどるようになります。そしてありがたいことに学校の先生が参考書をくださりました。これのおかげで勉強道具が教科書だけだったスペちゃんがトレセンの入学試験に受かりやすくなったんですねえ。ほんとウマウマです。

・
・
・

すらすらと言葉が出てくる。誰を楽しませるものでもないのだから音が漏れていく。

解ってるんだ。全部私のせいだったことぐらい。

あの時そもそも私が死ななければスペがおかしくなることなんてなかった。運命に抗っていれば、あの場私だけが生き残っていれば問題にはならなかった。スペがおかしくなることなんてなかったんだ。

……でも私はそれが出来なかった。女神すらどうすることもでき

ない運命に人間が抗ったところでどうにかなるとは思わない。そう
思っただけ全部引き受けてしまった。せめて私以外は生き残れるように、
と。

あの日。私たちが過ごしていた日高のトレセン学園。

たしか寮の電気系統の故障が原因で発火、そこにいた全員が焼死す
るのが定められた運命だった。

それを覚えてしまったのがいけなかったのかもしれない。

運命の強さ、強制力は関係性によって変わるらしい。後に日本を背
負って戦うことになったスぺ。彼女の出生にはドラマがあった。彼
女が生まれてから一週間しか生きられなかった母親。彼女が幼き頃
に火災で死んでしまう姉。それを乗り越えて前に走り続ける。まる
で物語の主人公のような存在。

だからこそ、私があの場合で死ぬという運命は誰よりも強固で、覆す
ことができない決定事項。主人公のドラマを華やかにするための脇
役。

別に、それがどうかしたわけじゃない。スぺのためならなんだって
できる。命なんか惜しくない。私を生んでくれた母がそのすべてを
託した妹なんだ。スぺの物語を彩るために死ぬるのならこれほど素
晴らしいことはない。そう思っていた。

あの時は地方のトレセンで同じ時間を過ごした同じ寮に住む仲間
たちを死なせるのはイヤだったから。私たちの仲で一番死の運命が
濃かったのが私だったから、それを全部引き受けて燃え盛る寮と一緒
に消えるはずだった。

だけど、運命はよほど悲劇がお好きらしい。

私が死んでしまうその瞬間にまだ幼いスペを居合わせるのはさすがにダメだ。そう思っていたはずなのに……、スペは私の肌が『今日だ』と訴える日に来てしまった。

家に私がないのが寂しくて、母に内緒で来てしまったのだ。

母に怒られないかと心配しながらも私に会えたことを喜ぶスペ。あの時私はちゃんと笑いながら彼女の頭を撫でてやれただろうか。引きつっていなかっただろうか。

運命は彼女がそこにいることを望んだ。私がどんな手を使っても、スペを家に帰すことはできなかつた。無理だつた。不可能だつた。自身の手が無力だということにあればどまで憎んだことはないだろう。

自身の不調に気が付いたスペが私を心配して顔を覗き込んだ時、私はうまくごまかせたのだろうか。最後の時間、私はスペに愛をあげることが出来たのだろうか。

時間はもう、巻き戻せない。

夜、同じ布団に入った私とスペ。運命がただそこで焼け死ねと言っているようにあの場にいた全員が金縛りに遭う。しかし、スペだけは違う。こんなところで死ぬべきじゃない。

あの時私が運命に抗えたのか、それともスペが持つ生き残る運命がそうさせたのかは解らない。でも私が金縛りから抜け出したことは確かだつた。

スペを起こさないように片手で抱きかかえ、目が覚めながらも身動きが取れない同室の子をもう片方の腕で抱える。火が徐々に回り始めた校舎を何とか抜け出し、未だ夢の中にいるスペに額にお別れのキ

ス。校舎から抜け出したことがトリガーとなったのか何とか動けるようになった同室に妹を頼み、もう一度校舎へ。

それから、何とか全部の部屋を回り、全員を今にも焼け落ちそうな校舎から運び出すことが出来た。

最後の一人となってしまったあの子の肩を担ぎながらなんとか外へ出る。

……あとはすべてを引き受けて死ぬだけ。

そう、思った時。

スぺと、目が合ってしまった。

引き返し、校舎と共に沈むぐらいはできたはずの体力が掻き消える。鳴り響いていたはずの心臓の音が聞こえなくなる。掠れ、倒れ逝く視界には泣きながら私の元に駆け寄るスぺ。

『ごめんね、スぺ。駄目なお姉ちゃんで。』

本当にごめんね、スぺ。

その後、私の魂は回収され、スぺの守護霊として傍にいたことになる。ややこしいのは私が契約した女神とスぺが契約した女神が違うことだ。

ただスぺが笑って人生を歩めるように願ったのは私、契約したのは技の女神と呼ばれる存在。

おそらく私を生き返らせようと願ったスぺが契約した存在は力の女神と呼ばれるもの。

技が要求したのは彼女が楽しむこと。私が動画を撮るように命じられているのも彼女を楽しませるため。

力が要求したのはただ勝ち続けること。クラシック三冠、春秋シニア計六冠、凱旋門を含めた海外芝レースで二勝。そこに敗北は許されない。そしてもし負けたのなら私の存在は魂ごと消えてなくなる。

私をもっとスぺの心のために話しかけてあげることが出来ればよかったんだけど、力の方の契約のせいでもともに話すことができなかった。同格の技の方との契約のおかげで何とか動画を撮影するという体で会話を図るしかなかった。

ゆえに偏ってしまった。一人にしてしまった。

最初はまだよかった。スぺにとって他人には見えない私の存在を隠しながら生活することは普通だった。それが日常と化していた。

でもレースが始まってしまっただけは違う。一つ一つ勝利を重ねるご

とに現実が見えてくる。勝てたけどまだ勝たないといけない。次も絶対に負けられない。元々取り繕うのがうまかったスペだ。傍から見たらいつも通りだが心にどれだけの負担になっていたのかは考えられない。

最初の内は友人たちを気に掛けることもできた。不調に気が付いてスペの元々の優しさが出ることもあった。でも皐月賞、ダービー、菊花賞。三冠をとってしまったことで心にさらなるおもりが増える。次は何と戦って勝たなければいけないのか。元々心のうちにある負担に加え、周囲からの期待すら押し掛かってくる。私自身同じ立場になったことはない、けれどその重圧は想像に難くない。

壊れそうなはずの心を私にすら隠して、いや私を心配させたくないからこそ隠して前に進む。

何かが崩れる音を耳にしながら。

そこに、ジャパンカップ。

スペは一度敗北を幻視した。ゆえに本来彼女が持つべきではない血まみれの煤けた花、私が持っていた花が、彼女が持つべきではなかった花が咲いてしまう。

私が見せてしまったあの光景。

もう、限界だった。

三女神、といっても私と契約した技の方だが彼女もそう思ったらしい。『力の奴は昔から厳しすぎる、自分たちのせいで壊れるのは見たくない』と無理やり契約を一部変更。

私の体が物に、人に触れられるようになり。たとえスペが負けたとしても私が消えてなくなるのが無くなった。会話に自由が宿った。壊れた心に甘い蜜。それしかなかったとはいえスペにとって劇薬

でしかなかった。

冷たいとはいえ私に触れることができる、自由に話すことができる。私がスぺの目の前で死んでしまったその瞬間からずっとこうしたかったと徐々に瞳の光がなくなっていくスぺの話、私はただそれを受け入れることしかできなかつた。

使うべきではない手を使ったとしてもそれまで最強だった会長に勝ち、これまで渴望していたものの一部が手に入った妹は徐々におかしくなってしまうたのかもしれない。

それまで何とか気に掛けることが出来ていた友の不調に気が付かず、開いた時間はすべて私との交流に。同室のスズカがいないことがそれに拍車をかけてしまった。

かといって、私はスぺを突き放すことはできない。

今のスぺは壊れた心を無理やり固めているだけの状態。もし私が突き放してしまったのならどうなるか解らない。

スぺは現状を望み、私は変化を恐れていた。

だけど、このままじゃ駄目なんだ。

スぺが走り切った後に何も残らない。

私が望むのは妹が立ち止まり、後ろを振り返ったときに誰かがいること。

決して背後に焼け野原は相応しくない。

お母ちゃんにも託された。

スぺの心を元に戻す。

PART 91

「? どうしたのお姉ちゃん。今日は一日お休みにするってこの前言ってた気がするんだけど……?」

「いや、ちよつとやりたいことが出来てね、スぺ。」

昨日、雪が降っていたせいかわり一面の銀世界。二人にとっては見慣れた白の世界。

帰省する時にはこの休みの間はまるつきりお休みにしてゆつくりすると予定していた。

(ほんとには隠れて練習するつもりだったけど……、うん！ お姉ちゃんが見てくれるならそつちの方が何倍もいいや！ えへへ、何をするのかなあ?)

そんなことを思いながら体をほぐすスぺ。雪上用の蹄鉄に履き替え、いつでもトレーニングできるように準備を整えながら姉の次の言葉を待つ。

「まあ今も降ってたらお休みにする予定だったんだけどね？ キレイに晴れてここまでキレイに積もったわけだからそりややるでしょ、つてわけで。」

「なるほど。」

「それに目の前に真っ白なキャンパスがあったら自分色に染め上げたいでしょ？ 昔やってみたみたいに飛び込んだりかまくら作ったりしよう！ ……あ、それとも『雪だるまつくろお?』かい?」

「???

最初の方はニコニコ顔だったスペだったが、姉にネタを振られた時には首をかしげてきよとん顔。自分からそういつたものに手を出していた姉とは違いスペの時間はすべて自己と姉のために使われていた。それを理解しているはずの姉が伝わらない話題を出す。本調子、ではないのだろう。

「ありや、伝わらんか。……ま！ 遊ぶ前にちよつとしたレースでもしようか。」

「レース？」

「そ！ ココからあそこの木まで、タッチして先に帰ってきた方が勝ち。……久しぶりにかけっこしよう。」

そう言いながら踵でスタートの線を引くお姉ちゃん。

……え？ 今レース？ レースって言った!? お姉ちゃんど?!

「ほ！ ほんと！ ほんとにお姉ちゃんと一緒に!?!」

「うむうむ。昔みたいだね。」

「ホントにホント！ ……う、いやったツツ!!!!」

小さいころ一緒に走ったときと同じように！ お姉ちゃんとまた走れるんだ！ あのおつきくてやさしい背中をもう一度追いかけてもいいんだ！ やった！ やった！

「ほらほら、はしやがない。走る前にジャージ汚れるぞ。」

飛び跳ねて幼子のように喜びを顕わにするスぺ、それをたしなめる姉。脳裏に10年近く前の記憶、まだ自分が生きていた時の記憶、まだ小さかったスぺが同じように飛び跳ねていたのを思い出す。

(……解って、くれるだろうか。)

「んじや、待ちきれないみたいだし早速やるか！ あ、もちろん全力勝負だぞ？」

「うん！」

「いいお返事。スタートは……、これでいいか。」

降り積もった雪の中に一つだけ突き出た木の枝。それを根本からぽきんと折る姉。昔ならできなかつたこと、生きていたのならば簡単にできること。それが目の前でしてくれていることが酷くうれしい。

「この木の棒が落ちた時にスタートでいい、スぺ？」

「うん、大丈夫！」

「よし……、じゃあ並んだ並んだ！」

「はーいー！」

喜びのせいか足が軽い、スキップしてるみたいになっちゃう。

いけないいけない。全力勝負、って言われたしちゃんとやらない

と。

顔を振って、やる気を入れなおす。

私のことを見ていたらしい隣のお姉ちゃんから少し笑ったような気配、そしてすぐに空に投げられる棒。アレが地面に接した瞬間がスタートだ。

おちる少し前、ここ。

∨【ゲートの支配者：改】発動。

ゲート全体に与えるプレッシャーを横にいるお姉ちゃんに。その分いつものレースと比べて一人に掛かる重圧は重いけど……、まあ昔私がどれだけ頑張っても追いつけなかったお姉ちゃんだ。この技術を教えてくれたのもお姉ちゃんだしたぶん効かない。枝が落ちた瞬間に全力でとびださないと負けちゃう。

「……………ッ！」

ん？ なにか聞こえた？ でもッ！

枝が地面に落ちた瞬間、思い切り地面を蹴る。

目の前には……………、だれもない。

「え……………」

思わず後ろを振り返る、そこには何故かお姉ちゃんの苦し気な顔。お姉ちゃんが私のプレッシャーになんか負けるはずがない。思わず姉の最期の瞬間が過って今にも地面に倒れそうな体を支えるため引

き返そうと足を……

「……止まるなッ!!」

「で、でもー!」

姉と目が合う、その顔は小さいころよく私の頭をなでながら笑いかけてくれた顔、最後の時に私にやさしく微笑んでくれた顔。そこには私が姉に抱えていたものとは微笑みのイメージと違い、初めて見たかもしれない憤怒の顔があった。

「スペシャルウィークが止まるなッ! お前はレースの途中に止まるのか! 横にいるのが私ってだけでお前は止まるのか! 違うだろッ!」

「……で、でも」

「走れッ!!」

—————

私に怒られたせいか、後ろ髪を引かれるようにこちらを窺いながら走り出すスぺ。

そう、それでいい。

レースにはレースだけのこと。そこに私の復活だとかそういう余計なことは考える必要なんかない。必要なのは走ることへの楽しさ、他出走者との競い合い、そんな簡単なことだけでいい。

レース結果に、スぺの人生に、すでに終わった部外者が関わっていない理由にはならない。

震える足を何とか動かしながら私もやっと歩を進める。

ああ、そうだ。スぺの中で多分昔小さいころに走ったときの結果と、ずっと私が彼女のトレーナー代わりをしていたせいで私自身の存在が変に大きくなっている。私がスぺのプレッシャーに耐えられなくて足が動かなかったのを理解できてない顔をしていたのもそのせい。

本格化が始まるどころかまだかなり幼い当時のスぺと、地方だけど学園に入った当時の私、速いのは勿論私だ。私が生きていたのならどこかのタイミングで追い抜かれていただろうけどそれがなかったせいで、プラスして彼女を導いたせいで、スぺが追い付けないほど私が速いって勘違いしてるんだろう。

私なんか中央に行けたとしても一勝できるか怪しいもんだし、スぺのプレッシャーに耐えられなくてスタートすらまともにできない負け組みたいなもんだ。ただ姉っただけで三冠馬に勝てるなんて、ね。

でも、意地はある。

私でもスペシャルウィークのお姉ちゃんなんだ。

妹のプレッシャーにつぶされて座り込むしかできないとかカッコ悪いことはできない。

私がスぺに今できるのはレースに必要な感情や目的を持ち込まないこと、死んだ私の事なんか気にしなくてもいいこと、彼女が大きいと思っっている私なんか大したことが無いことの三つを教えてあ

げるぐらい。そこから先はスペが自分で気が付いて、友達たちとの関係をどうにかしていくしかない。

そして、最後に……

—————

折り返し地点の木の下まで辿り着く、足は雪の上で走ったという理由だけじゃ収まらないほどに重い。でも走らないといけない。

聞こえる足音はすごく遠い。

心の中には不安で一杯。

小さいころ、あんなに速かったお姉ちゃん。あの時からずっと、それ以前も一緒にいてくれたお姉ちゃん。私が私であり続けることが出来たのも、ここまでこれたのも全部お姉ちゃんのおかげ。

でも、私の中でとっても大きい存在であるお姉ちゃんがなんで、なんで……。

酷く、冷静な私が語り掛ける。

最後に一緒に走ってもらった時からどれだけ時間が経ったと思っ
ている。

あの時まだ自分は本格化どころかまだ未成熟だった。

いくら当時の姉が地方で強かったとしても今の私はなんだ？

三冠馬で、最強だったルドルフ会長にも勝って、これからの頂点を

担う存在だろうか？

昔どれだけ速かったとしてもすでにもう追い越している。

、と。

今だけは姉に褒められた自分の頭が憎らしい。こんなこと思い至るぐらいなら何も知らないバカなままでよかった。

自分自身の存在が、あれだけ大きかった姉の存在を否定しているよ
うで、気が狂いそうになる。

もう、走りたくない。姉と今の自分の差を認めたくなくて足が止ま
りそうになる。

でも、お姉ちゃんは走ることを、最後まで戦い抜くことを求めている。

……やらないといけない。

イヤな考えを振り払うためにはたき落とすように気を叩きつけ、ス
タート地点に向かって走り出す。視線は自然と姉の方向へ。位置は
行きの半分をようやく超えられたぐらい。

あと、もう数秒すればお姉ちゃんとすれ違う。

少し離れたここからわかる程にお姉ちゃんは全力で走ってる。

全力で走ってるけど私より遅い。

イヤだ。

すれ違う瞬間、現実から逃げるために、目を瞑って、下を向いて、何も考えないようにして。

走るために、勝つために。結果を決めなければならぬから、もう一度足を踏み出そうとした時。

足の感触が変わる。

雪上から、芝の感触に。

「え……」

思わず目を開ける、視線は足元。そこにあるのはさつきまでであったはずの雪じゃなくて芝生。それにここは……

『領域』の時の丘……」

レースの時、集中して自分の中に入り込む時。その時に行き着く場所に私はいた。

空を見上げれば真っ暗で、故郷の夜空がそこにある。後ろを振り向けば丘のてっぺんに立つ大きな木。

隣にいたはずのお姉ちゃんはそこにおらず、私だけ真っ黒な世界に一人。

「スぺ。」

「……………お姉ちゃん。」

後ろから声が聞こえて、振り返ればお姉ちゃんがそこにいた。
走れって私を起こったときの顔や苦しそうな顔じゃなくていつも
のお姉ちゃん。微笑んでる顔。

「おいで？」

「……うん。」

姉の手が広げられ、私はそこに収まる。

やさしく背中に手が当てられて、抱きしめてくれた。

「私、弱いでしょう？」

「……ううん。」

「ぼくとは全く強くもないのにスぺにあれこれ言ってたの。失望し
た？」

「……してないよ。」

「……やさしいね。」

「やさしくない……。」

「はは、ワガママさんだなあ……。」

離れてほしくなくて、私もぎゅっと抱き締める。ちよつとだけの静
寂。

「スペにはね？ 何もイヤなこと考えないで走って欲しんだ。死んだ私の事なんか気にしないで、今を生きてる友達とか先輩と一緒に楽しく生きてほしい。スペはあんまり関わりを持たなかったけどこれから後輩もたくさんできるし、頼れる先輩としても生きてほしい。」

「…………やだ。」

「私や、私たちを生んでくれたお母ちゃんも終わった存在。死んじゃった存在。スペはそれを覆そうとしてくれるけど…………、私がそれをホントに望んでるわけじゃないのはわかる？」

「…………うん。」

少し、姉が笑いながら頭をなでてくれる。生まれて物心ついた時には私の生みのお母ちゃんはいなかった。血の繋がった人はお姉ちゃんだけだった。育てのお母ちゃんもとっても良くしてくれたし、私のお母ちゃんだけど、何故か姉に母のぬくもりを求めていた。

「私も生んでくれたお母ちゃんとしっかりお話したわけじゃないからちゃんとしたことは解らないけどたぶん同じこと言うと思うよ？ 私だってズルして一緒にいてるけど乗り越えてほしかったことだった。スペが頑張ってくれたおかげで、こうやって抱きしめてあげることができるようになったけど…………」

「…………うん。」

「もし私が生き返れたとしてもスペの周りに友達も誰もいないとか、スペがずっと独りぼっちだとか、そういうのは駄目なの。」

「………………。」

「私のことを考えてくれるのは嬉しいけど、周りのみんな、心配してくれる人、たくさんいる。みんなスペの事考えてくれてる。……お返しとごめんなさい、しないかね?」

「……うん。」

「いいお返事。……さ!　じゃあ最後にスペにはいらぬもの引き受けないとね!」

お姉ちゃんがそういった瞬間、私の背後に何かが浮き出てくる。

足元を茂っていた芝はすべて血を思いださせるほど真つ赤なサルビアに変わり、空からは灰が落ちている。さっきまで大きな木があったところにはあの時焼け落ちたお姉ちゃんたちが暮らしていた寮がそこにあつた。

「この灰と炎にまみれた世界はスペにはふさわしくない。」

「それに元々サルビアは私のもの。」

「赤い血は相応しくない。」

抱き締められていた腕が離される。

焼け落ちる景色を私に見せないように前に立つお姉ちゃん。

「せっかくいつも一緒に居るんだ。」

「嫌な記憶、嫌な思い、全部私に任せてスペは前を向く。」

あの時、最後にしてくれたみたいに額に唇を合わせて、スペを前に向かせる。背中合わせだ。

「スぺ！ 目標は！」

私を生き返らせることから、もつと前の目標へ。

それは母の最期の願いでもある。

同じように死した人への願いだけでも。

それは私たちの誓い。

故郷を飛び出た時に宣言した誓い。

「日本一の……、ううん！ 世界一のウマ娘になること！」

流れ星が、背後に落ちる。

輝くのは彼女だけでいい。

私はこの景色を、炎を全部引き受けて。

燃える赤いサルビアから、私の愛を込めた白のサルビアへ。

さあ、私を超えていけ。

∨【シューティングスター】Lv. 4 ↓Lv. 5
∨【灰かぶりサルビア】↓【あなたのための白いサルビア】
∨条件を満たしたためスキルが変化します。
∨【シューティングスター】Lv. 5 + 【あなたのための白いサルビア】

∨【Re：流星に捧ぐサルビア】Lv. 6 発動。

いつも感じていた流星の力に、姉が与えてくれたサルビアの花びらが視界一杯に舞い散る。

気が付けば自分の視界は元の世界へと戻り、姉の引いたスタートラインを今まで感じたことのない速度で駆け抜けていた。

「ありがとう、お姉ちゃん、私頑張る。」

Re：PART1 「目標」

「というわけでスペ、これからチャートの組み直し……。もといちやんとした計画を立てていく予定ですが、ユーは何するか解ってる？」

「うん！ 全部勝つ！」

「違います。」

相変わらず、というかやっぱりそういうつもりだったかと思いがらため息一つ。ついでに手をグーにしてスペの頭をぐりぐりしながら『お仕置きー！』もしておく。いくらちゃんと物や人に触れられるようになったとしてもそこまで強く圧力はかけられない。そのせいでお仕置きがお仕置きになっておらず、スペから帰ってきたのは楽しそうな「やめてよくー！」の声。こいつめ……！

「もちろんレースには出るし、勝てるなら勝ちに行く。出走したくせにそこで手を抜くのは最大限の侮辱だからね、そういうのはしない。

……でもそれが目標、つてわけじゃないの。」

「そうなの？」

「そうです。スペ、貴方が為さないといけないことは……。お友達との仲直りよ。」

「……仲直り？」

思い当たる節がないように首をかしげる彼女。まあ解っていたのならあんなことしないよね……。いや、しないというよりもすべきことがあったはず。普通なら気が付くような彼女たちの不調も、彼女にとつては気にするようなものではなかったのかもしれない。

この子、私の大事な妹であるスペシャルウィークは。

圧倒的に他人との関係性が薄い。

この子にとって自分の手の届く範囲は家族だけで、その手の中に友人が入るスペースはほぼなかったといってもいい。表面上は普通にやり取りができていても、楽しそうに会話することができても、傍から見たら友人と言えるような関係性でも、彼女にとってはどこまでいっても他人でしかない。

こうなってしまったのは、私のせい。

スペが幼い時に私が死んでしまって、その光景を目の前で見えしまった彼女の心は砕け散った。そんな彼女の心を元に戻したのは幽霊のような存在となって戻ってきた私。そのタイミングも、小学校に上がる前。

同じような境遇の子は家族や周りの人たち、学友たちとの交友を経ずして少しずつその心を戻していくのだろう。もしくは精神科などに通院してちよつとずつ他人との繋がりを増やししながら回復していくのだろう。……だが、彼女にそれをできる機会は訪れなかった。私がつぶしてしまったといってもいい。

しかも私たちの育ての母である彼女も、私たちの生みの母という親友とその忘れ形見である私を失い精神的にかなり参っていた。なんとか普段通りの生活を送るのに精いっぱい、誰かに頼るという選択肢は思い浮かばなかった。残された自分が頑張らなきゃ、スペのためにも頑張らなきゃ。当時制限が多くスペにすら簡単な意思を伝えることしかできなかつた私は、母のその姿を見ることしかできなかつた。

そんな不安定な状況でずっと下を向いていたスペのところ、やって来たのはあの三女神だ。

大きくなつたらレースにでて、それに全部勝ちなさい。そのためにあなたの姉をトレーナーとして付けてあげる。もし私たちの指定したレースに全て勝利を収めることができたのなら、お前の姉を生き返らせてやろう”。

悪魔のようなささやき飛びついたスペは、戻ってきた私とその声で

無理やり心を固め直し、前へと進み始めた。その様子を見た母は、彼女の姿に励まされ前へと進もうとした。……スぺの世界には、彼女を含め三人しかいなかった。

「でもお姉ちゃん。私、誰ともケンカしてないよ?」

そうやって自身の世界を家族だけで完結させた彼女は、ただ強くなるために走り始める。すべてを犠牲にして。他人との交流も、必要最低限しかしない。スぺ自身、本来の性格が穏やかで、元気で、優しいものであったからそれに疑問を思う人はいなかった。小学生の頃は「ちよつと抜けている子」で通ってしまった。

子供の少ない過疎地域だ、小学校全体でも数は非常に少ない。本来なら遊びを通じて友人関係を構築すべきなのに、ウマ娘が彼女しかいなかったこと、無理な練習の疲れをその時間を睡眠に当てることで回復していたこと、そもそも彼女が友達を作る必要性を感じなかったこと。この理由からスぺは矯正の機会を全て棒に振った。

何か問題があっても、「私」に聞けば全て解決してしまうのだから。

「……確かに、喧嘩はしてないかもね。」

綻びが出始めたのは、トレセン学園に入ってから。

例えば、私も私でどこか安心してしまっていたのかもしれない。死んで魂だけの存在になってからスぺの元に戻るまで、女神の一人に『面白そうだから』という理由で私の存在しない世界の彼女を見た。アニメの、アプリの、画面越しの彼女を。トレセンに入るまでの時点で、私にはどうしようもないほどスぺの世界が完結してしまっていたことは理解していた。でも、あの世界の彼女を見てしまえば、彼女たちを見てしまえば。閉じた世界を広げてくれるだろうと、初めての友人ができるはずだと。

そう、思っていた。

私はスペが不思議に思わない程度に距離を取った、彼女だけの時間。誰かと交友できる時間。外の世界に触れる時間を作るために。そうやって、放置してしまっただが故に。こうなってしまった。

「でもね、スペ。たぶんだけどあなたは……、たくさんの人を傷つけてしまっている。」

強さ故の傲慢。

彼女たちにはそう見えているのだろうか。

「……傷、つけてる。」

スペにとって勝利することは決まっていることだ。だって勝てなければ姉は帰ってこないのだから。この時間も全てなかったことになってしまうのだから。

一着以外は、許されない。許せるわけがない。

傲慢である、という意識は彼女にないだろう。姉である私が教え、鍛えた。故に自分がまけることはありえない。

それが、彼女にとっての常識だったのだろう。

「そうだね……、黄金世代。いつも一緒にいたあの四人のこと。思い出してみて？」

「うん……。」

それが崩れたのが、ジャパンカップ。

あの、シンボリルドルフと対戦した時のことだ。

スペが払ってはいけない代償を払い、勝利はした。結果として私はさらなる自由を得た。

今は、あの血と煤にまみれた『領域』も書き換えることができた。だからこそ、さらにもう一步踏み出そう。

「スぺの記憶の中にある彼女たちの顔は……、笑ってる?」
「……………ううん。」

エルコンドルパサー、グラスワンダー、セイウンスカイ、キングヘイロー。

何かと、一緒に集まっていた彼女たち。……今はもう違うけど。

「今の貴方の世界は、家族だけで完結してる。それじゃダメなの。……私が生き返ったとしても、いつか貴方は一人で生きていけないといけない。それにもう貴方はとても重い物を背負ってしまっている。」

史上二人目の無敗三冠に、同じ無敗三冠であるシンボリルドルフに勝利した。

「スペシャルウィーク」という名前は、とてつもなく重い。

今年の年度代表ウマ娘だつて彼女だ、菊花賞からのジャパンC、有馬記念というローテで崩れた体調を整えるため、という理由で無理やり式典を休ませてもらっている。……言ってしまうえばそういう無理も効くような立場になってしまった。彼女の背中には、それを望もうと望まないとこれからの日本が乗せられる。

……最終的にそれを背負い続けるか、振り落とすかはスぺが決めること。

だからこそ、もし選択を迫られた時に、ちゃんと選べるように。

私は、彼女の世界を広げなければ。

「……………この休暇が終わったら、ちゃんとみんなと向き合いなさい。これまでお世話になった人、仲良くしてもらった人、勝負した人。そのすべてにちゃんと。本当に困ったときは助けてあげる、でもずっと私が傍にいてあげられるわけじゃない。……1人で。」

「……………」

「できそう、スぺ?」

「……頑張ってみる。」

この一年が、最後のチャンスだ。

「まずはエルコンドルパサー、エルちゃん顔と顔を合わせて話しなさい。……そこから、自分が周りにどう思われているのか、これからどうすればいいのか、考えていくのよ。」



「よし！ じゃあ次！」

スぺの了承を得たので次の話題に移る。

メインの目標を定めたから次はサブだ。まあレースのことなんだけど……、レース全般のことをサブ目標にするのもある意味傲慢なのかなあと思ってた。ま、とりあえずやるからには勝ちにいきませんと。

「まず春のレースで大阪杯、天皇賞(春)、宝塚記念の春シニア三冠。その後海外遠征としてKGV I & QES。そこから夏季休養を挟んで、凱旋門賞。そこから秋シニア三冠の天皇賞(秋)、ジャパンカップ、有馬記念。合計8レースにスぺは出走しないといけません。」

「はー。」

この出走目標を定めたのは私やスぺと契約した神々だ。それ以外に出走することもできるが、この8レースに出走しないことは許されない。一年に8レース、ゲームの世界ならよくある予定だが実際にやるとなるとかなりキツイ間隔。これ以上何かに出走することはスぺ

の負担を考えれば却下だ。

「春シニア、凱旋門から秋シニアは期間が短いから本格的な練習をするのは難しい、毎回本気を出すには調整をメインにしていけないといけない。となると冬から春の間と夏、この時期に頑張っていけないかね。」

つまりトレセンに戻ったらすぐに大阪杯に向けて練習し始めないといけない、ってこと。クラシックみたいな同年代だけが相手のレースとは違い、シニアには何年も走り続けている猛者たちがいる。シンボリルドルフ、っていう一番大きな敵は引退したけど彼女に劣らない相手がいてもおかしくない。

「練習メニューとかはいつも通り私が組む、スペはその合間。休息日をうまく使ってさっき言ってたことを進めていくのよ？ 前みたいに私の眼を盗んで練習とかはしちやだめだからね。」

「……うん、解ってる。」

「もうお姉ちゃん覚悟決めたから。沖野トレーナーとかに隠さないからね？ 沖野さんにお願いでそっちでも見てもらおうから。……嘘ついてたら私すつごく怒るよ。」

「わ、解ってるよ。」

もう沖野さんには母経由でメールの方を送っている。スペの性格的にあんまり管理するのはよくないけど、絶対この子私の眼を盗んでやるからね。それで体壊しでもしたら元も子もない。

「ならよし。じゃ、誰が出てきそうなのか、つてのも考えながら行きましようか。」

まずは初戦、大阪杯。スペにある程度交友関係があつて、私も把握しているのは三人。エルコンドルパサー、トウカイテイオー、ミホノ

ブルボンが主なライバルになってくると思う。

エルちゃんは国外レースに向けて準備するだろうからおそらく春はこの一本に絞ってくる。つまりここでスぺに勝って気持ちよく海外遠征に挑もうって寸法だ。ダービーで彼女が負けたときちよつと色々あつたけど、それがあつたおかげで彼女の精神はかなり安定している、いや成長したというべきか。まあだからこそスぺの最初の相手を勝手に任せちゃうわけだけど。

次はトウカイテイオー。私たちウマ娘が馬だった世界線とは違い、菊花賞で骨折し長期休養に入つた彼女。ちよつとネットニュースを見てみたけど、どうやら最近ではメジロの敷地付近で目撃された情報があるみたい。アニメの世界のようにマックイーンとの交友を深めている彼女だ、メジロのバックアップを受けて大きくなって帰ってくるだろう。

最後にミホノブルボン。この子はスぺと直接的な関係はかなり薄い、でも少し調べてみたら解るんだけど明らかにスぺを意識した発言を多くしている。サクラバクシンオーの長期海外遠征に付いて行つた彼女は各地で重賞を含めた多くのレースに参加して、その勝利者インタビューを確認すればすぐに出てきた。今年は国内で勝負するみたいだし、この子も要注意。

「実際に彼女たちを見てみないと詳細なステータス、つてのは解らないけど全員が固有……、『領域』に入っていて、総合力もクラシック期の彼女たちとは比べ物にならないはず。」

「……勝てるよね？」

「もちろん。まあスぺが自主練しなきゃだけど。」

「ううー！ お姉ちゃん酷い！」

これ以上言い過ぎるとスぺが拗ねそうだからもう言わないようにする。まあ口酸っぱく言っておかないとこの子絶対やるからさ、……前にゴルシに止められてなきゃどうなったことやら。

ま、実際。スぺの実力は去年クラシックだったとは思えないほど上

位にある。後は春にどこまで成長できるか、差を維持し続けられるか、つてところか。

【スペシャルウィーク】

▽スピード：A

スタミナ：A

パワー：A+

根性：B+

賢さ：B

▽スキル

【Re：流星に捧ぐサルビア】Lv. 6

【汝、皇帝の神威を見よ】Lv. 4

【空駆ける英雄】Lv. 3

【不沈艦、抜錨オツ！】Lv. 3

【ゲートの支配者：改】

【食いしん坊】

【逢魔時】

【プレッシャー耐性○】

【全身全霊】

【率いるもの】

さ、スペ。心機一転頑張ろうか。

Re：PART2 「怪鳥」

私たちの朝は早い。

早く起きることはそこまで苦手ではないけれども、ずっと日が昇るような時間。今みたいな真っ暗な時間から起きて活動するってのはちよつとキツイなあと思つてしまうこともある。

「ふああ……、おはようです、グラス。」

「ええ、おはようございます。エル。」

同室である彼女が朝の用意をしている物音で目が覚める、最近はずっとそんな感じだ。寮の大半がまだ寝ているような時間に、道場に行こうとする彼女を目を擦りながら見送る。私の、日常が始まった。

「今日も道場に行つてから朝練に合流します、遅れそうになったら連絡しますので。」

「はーい、了解デス。」

傍から見れば今のグラスは異常、いやストイックすぎると言った方が適切か。そんな生活を続ければすぐに体を壊してしまいそうなのに、ずっと続けているせいとか私たちにとって日常となつてしまった。まあ一時期、スペちゃんにとんでもない思いを抱えて全く会話ができない状態だったグラスを見ている私からすると……、会話が成立しているだけでありがたいって感じちゃうんですけど。

彼女の中で煮えたぎるような感情を御すために、力として昇華するために始めたらしい道場での鍛錬。疲れ果てるまで自身の獲物を振るい、後は朝練が始まるまでずっと座禅を組んで瞑想している。一度不安になつて見に行つたことがあつたが、その想いの強さに圧倒されていたことを覚えている。そこまで長い付き合い、というほどではな

いが同室で毎日顔を合わせていればグラスの性格ぐらい解る。対戦者として、ライバルとして自分のことを見てくれないどころか意識してくれないことが彼女にとってどれだけ大きいことなのか、そのレベルまで自身の力を高めることが出来ていないことが彼女にとってどれだけ大きい屈辱なのか。

言ってしまうえば自分も同じ立場だ、その気持ちはよく理解できる。

「まったく、スペちゃんは罪な女デスねえ……。」

そんなことを言いながらのそのそと自分も寝台から抜け出す、折角早く起きたのだからその分みんなよりも早く、多く活動をする。でもまだペットのマンボも寝てるし、隣の部屋の人たちもまだ寝てるだろうから静かに行動しないと。

スペちゃんはなんというか……、不思議な子だ。ただの友人として見るならば、ちよつと天然なところもある普通の優しい雰囲気の子。もう一歩足を進めれば、誰も入れない彼女だけの世界がある子。競技者として見るならば、私の世代の頂点に立つ子で、去年の年度代表ウマ娘。ただの観客として見れたのならこれほど心躍らせるウマ娘はいないんだろうなあってことも解る。

そして、ライバルとして見るのなら……、多分だけど。勝つことしか意識してない子。

レースに関係せず、彼女にとって深入りしてほしくない距離に踏み込まなければ、普通の子だ。ただの友人として楽しく交友を深めることができる。だが、そこにレースが関わると彼女の態度は一変する。スペシャルウィークにとって、敗北は許せないこと。いやむしろ敗北など自身にはありえないと考えているのだろう。

「まあそのせいで色々ところじれちやつてるんデスケド。」

鏡を見ながら、肩をすくめて笑って見せる。一人の走る人間としてその態度に思うことがないと言えば嘘になる。だが、誰にも譲れない

ことがあるのも理解している。自分のキャラではないことは理解しているが……、要は付き合い方だ。

レースで見た勝利にしか興味がなく、どの出走者のことも単なる障害としか見ていないスペシャルウィークも。食堂でみんながあきれるほどに食事をかき込むスペシャルウィークも。会話の歯車が合わずとんでもない勘違いをしていたスペシャルウィークも。私にもう一度ともに走ろうと言ってくれた友人としてのスペシャルウィークも。

全て、彼女だ。

「多分レースとそれ以外の乖離が激しすぎるんですかねエ？ そのせいで普段の行動を勘違いされちゃうって言うか。……まあアレが演技ならもうエルは両手を上げて降参するしかないんですけど。」

競技者としてのスペシャルウィークと、ただのウマ娘としてのスペシャルウィークの性格は驚くほど違う。強烈な二面性がある、と言ってもいいだろう。昔彼女とした会話の中に、『地元では他のウマ娘と触れ合う機会がなかった』という内容があったことを覚えている。他者をあまり自分の内側へと踏み込ませない彼女、小さいころからずっとそんな感じで、他のウマ娘とレースするような経験がないからこそ。そんな風になってしまったのかもしれない。……でもそれじゃあ彼女の強すぎる勝利への思いが何なのかわからないんですケド。

ダービーの後に彼女が私に見せた顔はウマ娘としてのスペちゃん、レースですつと後ろから見ているのが競技者としての彼女。私はそう結論付けたけど……、それを誰かに話すことはできなかった。その強い勝利への思いを説明できないから、もし誰かに話してしまえば私の中にある不安がその子へも移り、より大きなものになってしまうから。

考えれば考えるほどに堕ちていく、幼少期に他のウマ娘がいない、故にレースできるのが楽しい。そう語る彼女の顔に嘘なんか見えなかった。だが何故そんな彼女が異様なまでに勝利への思いを宿すの

か、ウマ娘として持つ『勝ちたい』という欲望よりも強い、『勝つ以外ありえない』という顔をするのは何故か。もしかすると私たちに見せている彼女の顔は全部『作り物』で、ターフにいるあの氷の様な彼女が本来の彼女なのでは、と。傍から、観客席から見れば愛想の良いウマ娘、だけど隣にいるからこそ見えてしまう一瞬の顔。何にも興味を持っていないような、ターフにいるすべてを無価値と思っているような、あのシンボリルドルフと同じレースに出たときも一瞥した後は他と同列として扱うような、暗く冷たい眼。

『いえ、特には。』

と答えた彼女の顔。

「……ッ。目に入っちゃいました。変に考えすぎるのもダメですね。」

顔を洗い、水気をタオルでふき取る。

「そういえば、今日スペちゃんか帰ってくるんですけど。」

正直、この考えが当たっていいようが当たってはいまいが。どうでもいい。

確かに考えすぎであった方がいいし、いつか笑い話にできればそれほど素晴らしいことはないだろう。

でも、どっちみち私がやることは変わらない。そこに彼女の意思が入ることはない。

私は、私だ。

エルコンドルパサーだ。

確かに、クラシックでは一度も勝てなかった。

相手にされなかった。

ただの有象無象と一緒にされた。

そう思ってしまうぐらいに実力差があった。

そこに思うことはない、単に私が弱かっただけ。

「でも、決して手の届かない場所じゃない。」

マスクを顔に当て、強く縛る。

大阪杯、あそこで掲示板に入れば海外挑戦に必要な賞金額は十分足りる。それに、今の実力と残された時間。私の成長量を考えればそこで勝負をかけるのは少し厳しいだろう。もちろんレースだから全力は出す、でもそれが限界ではない、ってだけ。

「楽しみデス、できればエルに負けるまでは誰にも負けてほしくはありませんが……。」

勝負は、海外遠征で。

今から大舞台でスペちゃんを負かすのが楽しみデス。

「……さすがにちよつと性格悪いですかね、マンボ。」

ま、まあ多分大丈夫です。タブン……。



「ふう、こんなもんか。」

送られてきた資料のまとめ直し、所属しているチームメンバーたちの練習メニュー、各種マスコミに向けた対応。正月はさすがに休めと理事長に叩きだされたのはまあちゃんと休めたのでよかったのだが、その分残っていた仕事が雪崩のようにやって来て……、今それがようやく終わった。

「つと、もうこんな時間か。」

時計を見てみればすでに深夜は過ぎ、もう少して朝日が昇りそうなころ。ひと眠り、少しの仮眠ぐらいは取りたいところだが、今寝たら昼過ぎまで起きれなくなりそうだ。テイオーやマツクイーンが朝練するだろうし、いくら最近かなり大人しくなったゴルシが面倒を見て

くれるとしてもトレーナーが現場にいないのはマズい。カップに残っていたコーヒーを流し込み、腕を上に向けて大きく伸びをする。

「……にしても、お姉ちゃん。ねえ。」

先日、というかちようど今日の仕事を始めたくらいにスぺの母親からメールの方を頂いた。

内容はスペシャルウィークの姉、スぺが自身の指導者と言っていた彼女からのメッセージ。

「解らん。」

その内容にまったくおかしなところはない。

季節の挨拶に始まり、これまでちゃんと連絡できていなかったことに対する謝罪やこれからもあまり連絡が取れないことに対する謝罪。そこからこれまでスぺの指導をしてくれたことへの感謝が綴られている。

そして、その後にトレーナー同士がするような業務確認。スぺの今後の指導方針や出走するレースについて、休養日について、また彼女の精神の不安定さについて。姉としての視点と、指導する側からの視点の二つから求められたのであろうデータ、しかも幼少期からのメールが送られる前日までの詳細なものが添付されて、送られてきている。

量が量であるし、緊急でしなくてはいけないこともあったのでそのメールを受け取った時はそこまで詳しく目を通していなかったが見れば見るほどこちゃんとしている。いやちゃんとしすぎているというべきか？

「どうしたもんかねえ?」

それこそ、そのまま中央のトレーナーとしてやっていけそうなレベ

ル。まあもらった資料だけでそれが判別できるわけではないが、これまでスぺの練習はほとんど彼女が定めたものを繰り返し返してやっていたこと、ほとんど俺が名義貸し状態になっていたことを考えればかなり能力は高いのだろう。スぺの成績を見ればそれを否定することはできない。

「……だが、何故最初からそう言わなかった？」

姉から指導を受けているのであれば、最初からそういえばいいはずだ。だがスぺは『昔からお世話になってる人』という言い方をしていた。なぜ隠すような必要があったのか。……あまり地方への文化というかトレーナーのしきたりみたいなのは詳しくないし、もしかしたら北海道では親族がトレーナーとなることはあまり良いことではないのかもしれない。

まあ確かに専属でない限りは個人への入れ込みが強くなってしまうだろうし避けた方がいいのかもしれないが……、まだ中学に上がったばかりの様な子にそれが当てはまるか？ 別に小学生相手の指導だったら家族が行ってもいいはずだ。実際スぺの同世代であるミホノブルボンとかは父親がトレーナーでその指導を受けていたって話だし……。

「家庭環境……。」

何か家庭環境に問題、例えばスぺの母親と姉が絶交していたとしてスぺの姉が隠れてスペシャルウィークを指導していたとする。姉の指導を受けていたと知れば母親が何か言うかもしれないとして俺にも黙っていた。……ありそうな話だが彼女の母親とお話しさせてもらった時にそんな雰囲気は感じなかった。いや確かにそう言った身内の話は初対面の野郎とかにするようなもんじゃないが……。

もしそうだとすれば去年のどこかで復縁して言えるようになった、とかだろうか。

「なんかこう、引つかかるんだよな。」

その上スペからの説明を受けたとき、そこまで疑問に思わなかった。いや疑問を感じることはあったがそこまで気にするようなことではないかとそれまでにしていたような気がする。なにかこう、ずっと頭の中に靄があるような感覚……、言葉にしにくい感覚がずっと自身に付きまといている。

「……さすがに、調べた方がいいよな。」

中央も地方も、免許を取ればURAのホームページやその地方ごとに名前が公表される。スペの母親の名字の方は伺っているし、スペの年齢から逆算して少し調べれば出てくるだろう。あれだけの細かい指示がスペに出せる、つてことは免許取得者かもしくは自分で走っていたかのどちらか。……さすがに調べれば出てくるはずだ。

スペも、その親御さんも「お姉ちゃん」を信用しているみたいだし、渡されたものを見る限りそこに何か悪意があるわけじゃない。むしろスペのことを強く想っているのが解る。だからこそこれは、答え合わせの様なものだ。

「よいしょ、つと。……ふう、なんかすぐく久しぶりな感じ。」

誰もいない部屋に、重い荷物を置く。

スズカさんがアメリカ遠征に出ているせいでこの部屋には私しかない。ちよつと散らかった私のスペースに、ずっと同じスズカさんのスペース。思い出したときに掃除はしてるけどやっぱり生活感と
いうか、暖かさが無い。……お姉ちゃんがいるときはあんまり感じないけど、一人だと昔を思い出してしまいうから長居はしたくない、かな。

「……荷ほどきしないと。」

あつちを早い時間に出たけど結構いい時間だ。お姉ちゃんからは今日は休みでいい、つて言われてるけど練習するな、とは言われていない。軽く走るぐらいならいいって言ってたし……、何より誰かいるべきはずの部屋に誰かがいない。そんな雰囲気があるこの部屋にあんまり一人でいたくない。お姉ちゃんは海外遠征とかのために調べものがあるつて言つて途中で別れちゃったし、それを邪魔したくはない。夕食の時間までちよつとだけ走りにいこう。

……お姉ちゃんからの宿題も、できるかもだし。

そう考えながら普段着からジャージへと着替えているときに、部屋のドアがノックされる。

「あ、はい！ 今開けます！」

誰だろうか、と思いつながら急いで着替え終わり扉の方まで向かう。お姉ちゃんならノックせずそのまま通り抜けて入ってくるだろうし、あんまりこの部屋を訪れる人はいない。となると寮長のフジキセ

キさんとかだろうか。荷物が届いたとか？

「おいつすー、スペちゃん今時間大丈夫？」

「ナイスネイチャさん。」

そこにいたのは、私と同じようにジャージ姿のナイスネイチャさん。カノープスの人。思ってもない人だったので驚きが顔に出てしまふ。

「急にごめんね。あ、今から練習だった？」

「い、いえ。ちよつと晩御飯まで走りに行こうかと。練習とかじゃないです。」

「そう？　ならよかつたんだけど……。実は生徒会長さんから伝言預かっててね。生徒会室まで来てほしいって。」

……ルドルフさんが？

Re : PART 3 「会話」

「よく来たな、スペシャルウィーク。」

「あ、はい。どうも。」

ネイチャさんとちよつとした話、実家に帰っていたということとは彼女も知っていたみたいで。お互いの家の話を少ししながら生徒会室まで歩いて来た。彼女も入るのかな、と思ってたけどそうではないみたいで。『じゃあアタシ他にも用事あるから。』と小走りで走って行っちゃった。

やつぱり、というか一人でここに入るのはちよつと緊張するなあと思いつながら扉を開けると、この部屋の主から声を掛けられる。

「む、もしや練習中だったかな？ それならばすまないことをした。」
「あ、いえ。暇だったのでちよつと走ろうかなあ、って思ってた着替えてただけなので別に大丈夫です。」

「そうか、ならいいが。……こちらが招いたのだ、好きな席に座ってくれ。」

そう言いながら指さされた方のソファへと腰を下ろす。会長はそれを見ながら『あまり自分で淹れたことがないからうまいかどうかわからないが……。』とカップを取り出しお茶を入れてくれる。私にはそれが紅茶、ということしか解らないけど優しい香りが漂ってくる。

「それで、何のぐ用……。」

「すこし、落ち着き給え、スペシャルウィーク。暇なのだろう？ レースではもちろんだが、何事にもタイミングというものがある。急いでは事を仕損じる、という言葉もあるだろう？」

言葉を、遮られる。生徒会長は多忙だから早く終わらせようとした

……、ううん。あんまりここに長居したくない気持ちがちよつと漏れてたのかも。やっぱり負けそうになった相手とお話するのはちよつとしんどい。会長はドリームシリーズに進むみたいだからもう気にしなくてもいいんだけど、やっぱり気にしてしまう。

そんなことを考えていれば、自身の目の前にカップが置かれる。会長の方を見れば、目線で『飲みたまえ』と。

澄んだ水面に私の顔が一瞬移り、それを手に取れば振動ですべてが消える。口に運べば熱が喉を通り抜け、茶葉の香りだけが口と鼻の中で残り続ける。

「紅茶は苦手かい？ 砂糖とミルクならそこにある。好きだけ入れるといい。」

「……ありがとうございます。」

香りは嫌いじゃないけど、それに味が付いてないちよつと苦手かもしれない。これも顔に出てしまったのかすぐに会長に指摘されてしまう、すこし顔が熱くなっているのを自覚しながら砂糖とミルクを追加していく。お姉ちゃんに止められそうな量の半分くらいにしておいたから大丈夫……。あ、びっくりした顔。多かつたみたい。

「ふっ、甘い方が好みか。」

「す、すみません……。」

「ああ、いや。別に非難しているわけではない、ただ君の新しい面を見れたことが嬉しく……。いや面白いというべきかな？」

そう、楽しそうに笑う彼女。『レースでの君、特にジャパンCでの君が頭から離れなくてね。』と言葉を重ねる。確かにあの時はすごく必死だったけどそんなに変だったかなあ？ と思いつつももう一度紅茶を口に運ぶ。……うん、もうちよつと砂糖欲しいけど甘くておいしい。これなら飲めそう。

「……さて、あまり君の時間を奪うのも良くないだろう。本題に入ろう。スペシャルウィーク、突然ですまないが君が今年出走するレース、大まかな予定でも構わないが教えてくれないだろうか。ああもちろん誰にも口外しないと誓おう。」

「は、はい。」

別に、秘密にするようなことではないのでお姉ちゃんが決めたルールをそのまま会長へと伝える。春の三冠と秋の三冠。そして海外遠征として芝の2つのレース。お姉ちゃんが決めたらのならここから増えるかもしれないけど、このレースのどれかを走らないってことはたとえお姉ちゃんが止めたとしても絶対に出る。そうじゃなきゃ私がおここにいない意味がないのだから。

「なるほど……、時にスペシャルウィーク、君が世間からどのように見られているか気にしたことはあるかね？」

「世間……、ですか？ いえ、全く。」

「ふむ、なら質問を付けたそう。テレビやネットで自身の評判を見たことはあるかい？」

「レース映像とかは見ますけど……、それ以外は見ないです。」

自分がどう思われているか、とかはそこまで興味がない。目の前で言われたら何か思うことがあるかもだけど、私の知らないところで何を言われようが特に気にしない。他人は他人だ。あとテレビを見ない、つてことで会長さんちよつと驚いていたけど見た方がいいのかな……？ お姉ちゃんと話す時間が減るのは嫌だけど、見ておいた方が強くなれるとかだったら聞いておかなきゃ。

「そうか。……スペシャルウィーク、話は変わるが君は責任という言葉について深く考えたことはあるかい？」

「……毎日ずっと考えています。」

「それはいい心がけだ、だがあまり思いつめないように、とも言うってお

こう。……すでに理解しているかもしれないが、少々君の立場、というものについて話した方がいいかと思つてね。今日はわざわざ来てもらった、少し面倒な話になるかもしれないが我慢して聞いてくれるとありがたい。」

さつきまでの柔らかい雰囲気を少し変化させながら、会長が言葉を続ける。

「7戦7勝。これまで五人しかいなかった三冠の六人目にして私と同じ無敗三冠、そして私を下したジャパンCに、シニアの強者たちをものともしなかった有馬記念。ホープフルを含めればGI6勝だ、今はまだ私の方がGIの勝利数で勝っているが……、いずれ抜かされるだろう。」

君は最終的に何冠になるのだろうか？ そう私に笑いかけながら彼女はそう問いかける。私はただ、そこに8を足すだけです。その過程に何が起きようと、誰がいようと、私はそれを成すだけ。

「無敗記録の長さ、そしてGI勝利数の多さ、そして実際に相まみえたレース。その全てで君は私に勝った。……これが何を意味するか解るかい？」

「……わかりません。」

「君は、次の私になることを。簡単に言えば頂点に君臨することを望まれている。」

色んな感情を押し込めたようなシンボリドルフが『もちろんすぐの話ではない、君のシニア期が終わってから、それ以降の話になる』と言葉を付けたし、さらに重ねる。

「いわば……、象徴だな。いずれ私は卒業する、そうなれば生徒のみならず世間は、社会は新たな道しるべを望むことだろう。トウインクル

シリーズにおける日本の頂点にして、象徴。それに最も近いのが、君だ。」

「もちろん『生徒会長』という形にこだわらなくてもいい、ソレに求められるのは道を示し続けることだけだ。その役目さえ果たせれば形は何だっていい。私は私の理想である『すべてのウマ娘を幸せにする』という言葉を胸にこの立場を求め、結果を出し、この場所に立っている。」

「力なきものはそこに立つ資格はない、結果を出せぬものは立つことすらできない。しかしながら力を示してしまつたものは君がどう思おうと、ソコは君の場所になってしまう。今はまだ君の場所ではないが……、いずれそうなる可能性が高い。故に今日声を掛けさせてもらつた。」

「あまり良い言い方ではないが、君が積み上げた勝利の責任が君に求められている。決して強制するわけではないが、いずれそうなるかもしれない。故に君自身の意思をあらかじめ聞いておきたくてね。」

「もちろん今すぐ回答を求めているわけではない、時間をおいてもいいし。やりたくないのであればそれで話は終わりだ。ただ、もし君に何かしたいことがあるのなら。どんな小さな事でもいい、もし君が日本のレースを背負うような存在になつたとすればどんな未来を望むのか。それを、聞かせてほしいんだ。」

「問おう、スペシャルウィーク。キミは何を望む？」

皇帝が、私に。

そう、問いかけた。

非常に、急な問いかけであったことは理解している。

だが、これ以上遅らせることができないほど事態はややこしくなっていた。

まだあのジャパnCで私が勝っていればここまでややこしいことにはなっていないかつただろうが……、いや別に彼女が勝ったことが好ましくないというわけではない。確かに敗戦に悔しさを感じることはあるが、それ以上に私を超えるようなウマ娘が現れてくれたこと、そして私が追う立場になったということは非常に好ましい。『皇帝』としても『シンボリルドルフ』としても。

だが、世間はそう簡単には収まらない。

私が負けたことでスペシャルウィークが次の皇帝として見られるような土壌が出来上がってしまった、世代交代、というべきだろうか。シニアに長くいた私がジャパnCを最後にドリームに移籍すること、そろそろ卒業の時が迫っていること、そしてスペシャルウィークより

もGI勝利数が多いのが私だけになってしまったことから、彼女を次の皇帝に、という声が大きくなってしまった。

その気持ちは、痛いほど解る。観客は停滞を望まず、刺激を好む。それは競技者であつても同じ。

次をブライアンやグルーヴに頼もうにも、ブライアンはすでにドリームに移籍。グルーヴはまだシニアながらも少しGI勝利数が足りない。そして二人とも高等部だ。GI勝利数や学年だけでそれを決めるわけではないが、より多く若い方が有利になるのは確か。

そして部外者、つまりファンたちの間だけの話ならばよかつたのだけれど、URA内部でも彼女を次の私にしようとする動きが高まつている。私やシンボリが介入できないほど強く、大きくなつてしまつている。

私が生徒会長になつた時はまだ良かつた、当時のジャパンカップでの敗戦があり今ほど自身が大きく見られていなかつた。それにシービーの様な他の三冠、マルゼンスキーの様な圧倒的な実力を持つウマ娘。私以外にもこの立場に収まる者がいた、幸いその時は彼女たちが譲つてくれたがゆえに問題は起きなかつたが……。

スペシャルウィーク、彼女たちの時代では「彼女以外見当たらない」という事態が起きている。

確かに短距離マイル、そしてティアラ路線で活躍している者たちがいる。ダートで他と隔絶した実力をもつハルウララというウマ娘もいる。だが、日本というこの芝とクラシック距離に重きを置く国において。彼女の姿は大きすぎた。

私では止められないほどに、彼女を次の私に。いやそれ以上の存在として祭り上げようとする動きが起きている。そして彼女の実力と、未だなお衰えないその体のことを考えればシニア級でも勝ち星を重ねるのは目に見えている。勝てば勝つほどにこの動きは大きくなり、

彼女が振り返った時にはもうどうにもならない状態に陥ってしまうだろう。

故に、問いかけた。

もしすでに彼女の中に明確な理想、私の様な理想が宿ってくれているのであればそれを支え、大きくしていけばいい。もしそれがなければ、支えていく方法も、上手く乗り越える方法も、用意していた。まだ形が見えない小さな理想でも、それを育むという準備は、出来ていた。

「何も。」

いつの間にか、私自身も。彼女が次の私に。いやそれ以上の存在になつてくれることを期待してしまつていたのかもしれない。そして、彼女なら受け入れてくれるだろうと、思い込んでしまつていたのだろう。年下の彼女が、自分に勝つたという事実には、いつの間にか飲み込まれていたのかもしれない。

明確に否定の意思が込められた彼女の言葉はひどく冷たく、暗かつた。一瞬にして光が消えてしまった、彼女の瞳のように。

「何も、望みません。その立場には全く、興味がありません。」

「私は誰かの上に立つとか、そういうの嫌いです。強制されるとか、気が付いたらそういうことになつてるとかも、大嫌いです。」

「私は、私のために、私たちのためだけに走ります。レースに出て、勝ちます。そこには私たちだけの想いしかありません。誰かが勝手に想いを乗せるのは構わないですけど、それを勝手に私の想いにはしてほしくありません。」

「誰かのためとか、そういうのが大事なのはわかります。とても大事なことだということも、解ります。……でも、会長のように私は『全てのウマ娘のために』みたいなことはできません。」

「私は、やりたくないです。」

「んふふ、なんかお菓子たくさんもらっちゃった！」

ルドルフ会長に多分『次の生徒会長にならない？』って聞かれて、『いやです！』って答えたならなんかたくさんお菓子貰っちゃった！全然知らないのばかりだけど多分全部高い奴〜！お姉ちゃんが『高い菓子は大体うまい』って昔言ってたし！おいしい奴だ！お姉ちゃんが食べれないのは残念だけど……、ちよつと走るのやめてどこかで食べちやおうかな？

元々今日は走らない、ってお姉ちゃんに言われてたしやり過ぎたら怒られちゃうし。でも貰ったお菓子を食べちやダメ、とは言われてないもんね！お姉ちゃんに見せる分を置いておいて後は全部ここで食べちやう？ いや食べたい。晩御飯前だけどいいや！

そんなことを考えながら学園にある外のベンチに腰掛ける。寮の部屋に戻るのはお姉ちゃんがまだ帰って来ないから嫌だし、カフェテリアを使おうにもまだ閉まっている。まあ一番近くの座れそうな場所がここだったというのが一番大きいけど。

「どれから食べよつかな、クッキーの缶に焼き菓子の箱に。」

「……………ン？ スペちゃん？」

明日ぐらいに襲い掛かってくるカロリーを忘却して頂いたものを物色していると、声が聞こえた。

「あ、エルちゃん！ 練習帰り？」

「そうデース！ スペちゃんは……………、全部買ってきたんですか、ソレ？」

多分だけどターフで走ってきた帰りなのだろう、肩からタオルを掛けたエルコンドルパサーがそこにいた。いやエルちゃん『もしかして全部今からそれ食べる気デスか？』って！ 流石に全部は食べないよ！ ちゃんと2、3個は残して夜お腹空いたときに食べるよ！

「……………どっちみち今日中に食べる気なんですネ。なんというかスペちゃんのお腹のこと忘れてマシタ。」

「それにこれ全部さつき会長さんからもらったの、……………よかつたらエルちゃんも食べる？」

「ケ！ スペちゃんが誰かにあげる!? あ、明日は槍どころかもつとヤバいものが降ってきそうデース！」

もっとヤバいもの、って何!? と突っ込みながら箱を開けていく。さすがに全部食べたらお姉ちゃんに怒られそうだったし、エルちゃんが来てくれてちょうどよかった。確か彼女も食べる方だったし……………、とりあえず全部開けちゃおうか。

そう思いながら紙袋から箱を取り出し封を開けていく彼女、シンボルドルフから詫びの意味を込めて贈られたそのお茶請けの菓子たちは徐々にベンチの隙間を埋め尽くしていく。そしてスペースがなくなっていくほどに『え、スペちゃんこれ今日中に食べるつもりだったんですか？ ヤバくない？』と顔色が悪くなるエルコンドルパサー。

だが、それでも菓子は菓子。うら若き乙女たちの目の前にそれが置かれれば起きることは一つだ。しかもトレセンの生徒会室に送られる、もしくは常備できるレベルの高級品。味は保障されている。二人とも目に付いたものの封を開け、口へ運んでいく。

「ん〜、おいしいデスね！ にしてもなんで会長さんからもらったんデスか？」

「なんか生徒会長にならないか、いや目指さないか？ かな？ そういうお話しだった。」

「……へえ。」

「でもよくわかんないし断ったら『時間取らせたお詫び』ってもらったの。……あ、あと『賞味期限切れそう』って。」

「ああ……、うん。すごく納得しました。」

学園の多くを取り仕切る生徒会であり、そしてそこに参加しているメンバーも強豪ぞろい。そうなれば自然と送られるものも多くなっている、いずれ消費のスピードが追いつかなくなる。これまではオグリキャップが出張して回収していたが、今回は彼女の番だった、というわけだ。

「……ねえ、エルちゃん。」

「ん？ 何ですか。」

「聞きたいことがあるの。」

「……私のことって、どう思ってるの?」



「どう、って……。」

正直、スペちゃんからそういうことを言われるとは思ってなかった。受け入れはするが、一定のラインは超えさせない。自分から関係性を深めるようなことはしないような子だと。

「私さ、解らないんだ。みんなが私のことどう思ってるか。」

普段の彼女じゃない、私が見たことのないスペシャルウィークが顔を見せる。

「私ね、お姉ちゃんがいるの。実家に帰った時に色々話したら怒られちゃってね。『スペは全然他の子のこと解ってないよ。だからちゃんと顔を合わせて話してみなさい。』って。……色々考えたけど、私には解らなかった。」

「だからさ、エルちゃん。……私はどう思われてるの。」

真剣な、顔。レースの時の様なほかを拒絶するような冷たさは感じられない。

「そりゃあとつても強いウマ娘ですけど……、まあそう言うのを求めてるわけじゃないですよね。」

深く、そして強く頷く彼女。初めて、自身の内側へと招き入れようとしているのか。彼女のことは深くは知らない、同期として、友人としてその表層を知っているだけ。踏み込むのは避けていた。でも、今日は違うみたい。多分、いや絶対本音をぶつけた方がいい。

「普段のあなたと、レースの時のあなた。その乖離がとても大きいウマ娘、ですかね。……私は、ダービーの時にスペちゃんにかけてくれた言葉を覚えている。信じている。でも……、他の子は違う。」

「……………レースの時の私は、そんなにおかしいの。」

「おかしいわけじゃないです、けど冷たすぎるというか。……スペちゃんには何か、絶対に勝たなきゃいけない理由があるんですか?」

その瞬間、一瞬にして彼女の雰囲気が変わる。レースの時の彼女だ。何物も寄せ付けず、自分以外の何かを全て障害として扱うかのよくな冷たい雰囲気。最初は気圧されていたが、今なら耐えられる。けどやっぱり顔には出てみたいで、私の顔を見た彼女がすぐにその雰囲気を弛緩させていった。

「うん。私は、負けられない。」

「負けたくない、ではなく?」

「何があっても、私は勝たなくちゃいけない。……この、さっきの、私ですか。」

目の前で私の顔が歪んだことで、ようやく自身の纏う者が誰かを恐

れさせるものだど理解してくれたのだろうか。別にそれを使うな、とは言わない。むしろレースで使ってくれなきや私たちへの侮辱だと思ってしまうだろう。だって私たちは、そんなあなたに背中を見せるためにここにいるのだから。

「普段のぽよぽよしながらお腹膨らませてるスペちゃん、さっきのスペちゃん。みんな後者の方を本当のスペちゃんと思ってるみたいですし、実際私も不安になってたんですけど……。」

動揺している、というべきだろうか。感情が顔に出ている彼女を見れば違っていて欲しいと願ったあの予想は間違っていたと確信できる。そも、目の前の彼女が演技であるのならばわざわざ私にこんな話を振るはずがない。

ああ、ほんと。外れてくれてよかった。もし当たってたら人間不信になりますもん。

「そう、ですか。」

「ま、多分だけどその『勝たなくちゃいけない理由』ってのは聞かない方が良いんですね？ スペちゃんあんま踏み込まれるの嫌いそうですし。」

「嫌い、ってわけじゃないですけど……。確かに聞かないでくれると嬉しいです。……全部終わったら、話せると思いますから。」

「じゃ、楽しみにしておきマス！」

触れてほしくないところには触れない、私にもそれがある。だから自分がされて嫌なことはしない。ま、『全部』が何か気になりますけど話してくれるのなら今は待つことにしましょう。

「ん〜！ 今日長年の疑問も溶けましたし！ トレーニングもうまく行ってますし！ いい一日になりマシタ！」

「そうなの？」

「ええー！ おっと、言うの忘れるところでした！ たとえスペちゃんに負けられない理由があつたとしても……、私たちはそれを気にせず全力であなたを叩き潰しに行きます。ターフではどっちが速いか、それしか関係ありません。だから！ 変なこと考えて手を抜くとか、そういうの絶対やめてくださいネ！ 私はその、冷たくて他の出走者なんてただの石ころにしか見えてないようなスペちゃんをぶち抜くためにやってるんですから！」

「うん、私も全力でやるよ。……あ、あと私そんなに酷い顔してるんですか!？」

してマース！ と言いながら思いっきり立ち上がる。大阪杯で、とか。次走で、とかは言わない。私の目標はもつと先だし、性格が悪いとか言われそうだけど、凱旋門賞とかでスペちゃんを追い抜いたとき彼女の顔がどうなるのか見てみたい気持ちもある。だからこれからの私のことは秘密、現地で会いましょ。スペちゃん。

……ああ、後。これも、言っておかなきゃ。

「それとスペちゃん、グラスには気を付けた方がいいと思いますよ。」
「……グラスちゃん？」

「セイちゃんとかキングには私みたいにちゃんと話せば伝わると思いますが。まあ二人とも今海外ですけどね？ 話すなら電話とかじゃなくてちゃんと顔を合わせてした方がいいんですけど……、多分グラスにそれをやると逆効果になると思います。」

彼女の心は彼女にしか解らない。グラスとスペちゃんの関係は私のよりももつと複雑で、入り込む隙間はない。もし私が手を出してしまつたらもつとひどくなってしまう。そんな気がする。私もずっとあんなグラスを見続けたいわけじゃない、だから手助けはするつもりだけど……。

「さつき言った冷たいスペちゃんのことを本当のスペちゃんだと思っ

てる、つての。多分グラスが一番感じてると思います。……だから今度。グラスが同じレースに出るときは彼女のことをよく見てあげてください、あの子はそれを強く望んでるはずですから。」